鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（32）

新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財報告書

長浜金久遺跡

1985年3月

鹿児島県教育委員会

序　　文

この報告書は，鹿児島県教育委員会が，新奄美空港建設に先だって，昭和57年度から59年度にかけて実施した長浜金久遺跡の発掘調査の記録です。

長浜金久遺跡は，南西諸島に多くみられる砂丘遺跡の一つで，縄文時代，弥生～古墳時代，奈良～平安時代に相当する三つの時代の遺跡がある複合遺跡で，縄文時代の住居跡，弥生時代の人骨，大量の貝殻や貝製品など，地域的特色を示す遺物などが多数発見されました。

本書は，南西諸島の先史・古代史の解明に貴重な手がかりを提供することができると考えます。

本書を，地域の歴史研究や，文化財の保護のために活用していただければ幸いです。

終わりに，この発掘調査に終始御協力くださった県土木部空港対策室，大島支庁・港湾課，笠利町教育委員会並びに地元の皆さんに心から感謝いたします。

昭和60年３月

鹿児島県教育委員会

教育長　山　田　克　穂

例　　言

1．この報告書は新奄美空港建設事業に伴う長浜金久遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は鹿児島県土木部空港対策室の依頼で鹿児島県教育委員会が行った。

3．本書で用いたレベル数値は海抜絶対高である。

4．本遺跡調査においては梅光女学院大学教授国分直一氏，鹿児島県考古学会々長河口貞徳氏の指導助言を得た。

5．放射性炭素測定においては京都産業大学理学部教授山田治氏に依頼した。

6．人骨の取り上げおよび所見については鹿児島大学歯学部教授小片丘彦氏と長崎大学医学部講師松下孝幸氏に依頼した。

7．獣骨の同定および所見については鹿児島大学農学部助教授西中川駿氏に依頼した。

8．魚骨の同定および所見については鹿児島大学水産学部講師四宮明彦氏に依頼した。

9．貝殻の同定については宮之城中学校教諭行田義三氏に依頼した。

10．実測，トレース，挿図・図版作成，写真撮影については弥栄・青崎・牛ノ浜・長野・堂込峯崎が行い，編集は弥栄が行った。執筆分担は次のとおりである。

第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ章・Ⅵ章1）……弥　栄　久　志
第Ⅰ章第2節2－1）……青　崎　和　憲
第Ⅵ章2－1）……小　片　丘　彦　他
2）……分　部　哲　秋
3）……松　下　孝　幸
3　……松　元　光　春　他
4　……四　宮　明　彦
5　……行　田　義　三

目　　次

第Ⅰ章　調査の経過…… 7
第1節　調査に至るまでの経過…… 7
第2節　調査の組織と経過…… 7
1　調査の組織…… 7
2　調査の経過…… 7
3　日誌抄…… 8
第Ⅱ章　遺跡の環境と立地……11
第1節　遺跡の環境と周辺遺跡……11
第2節　遺跡の立地……11
第Ⅲ章　遺跡の概要……14
第1節　長浜金久第Ⅰ遺跡の概要……14
1　遺跡の概要……14
2　人工遺物……18
1）土器……18
2）石器……26
3）貝製品……45
1有孔貝，2貝匙，3円孔貝
4貝製容器，5穿孔貝，
6螺貝利器，7貝札
4）鉄製品……81
第2節　長浜金久第Ⅱ遺跡の概要……88
1　遺跡の概要……88
2　遺構……88
1）住居址……88
2）炉址……88
3）土壙……88
4）集石遺構……88
5）埋葬……95
3　人工遺物……96
1）土器……96
2）貝製品…… 115
1貝輪，2．貝筒状貝製品
3垂飾品，4貝鍬，5螺蓋利器
6貝匙状貝製品，7その他の
貝製品
3）石器…… 128
4）骨角器…… 128
第3節　長浜金久第Ⅲ遺跡の概要…… 130
1　遺跡の概要…… 130
2　遺物…… 130
1）土器…… 130
2）螺蓋利器…… 130
第4節　近代墓の概要…… 130
1　概要…… 130
第Ⅴ章　まとめ…… 137
第Ⅵ章　自然遺物の同定について…… 188
1　放射性炭素測定について…… 188
2　長浜金久第Ⅰ遺跡出土の人骨
3　笠利町長浜金久第Ⅱ遺跡出土の
弥生時代小児骨
4　笠利町長浜金久遺跡出土の人骨
5　長浜金久遺跡出土の動物骨
6　長浜金久遺跡出土魚骨および
甲殻類鉗脚について
7　長浜金久遺跡出土貝類について

挿図目次

第1図　長浜金久遺跡の位置と周辺遺跡……12
第2図　長浜金久遺跡の地形と調査地区……13
第3図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土層図……16
第4図　長浜金久遺跡の遺物出土全体図(1)……付図1
第5図　長浜金久遺跡の遺物出土全体図(2)……付図2
第6図　長浜金久遺跡遺跡の遺物出土全体図(3)…付図3
第7図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(1)…付図4
第8図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(2)…付図5
第9図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(3)…付図6
第10図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(4)…付図7
第11図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(5)…付図8
第12図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(6)…付図9
第13図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(7)…付図10
第14図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(8)…付図11
第15図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(9)…付図12
第16図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(10)…付図13
第17図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(11)…付図14
第18図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(12)…付図15
第19図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(13)…付図16
第20図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(14)…付図17
第21図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(15)…付図18
第22図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(1)……27
第23図　長浜金久第Ⅰ遺跡土出の土器実測図(2)……28
第24図　長浜金久第Ⅰ遺跡土出の土器実測図(3)……29
第25図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(4)……30
第26図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(5)……31
第27図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(6)……32
第28図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(7)……33
第29図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(8)……34
第30図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(9)底部……35
第31図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(10)底部……36
第32図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(11)底部……37
第33図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(12)底部……38
第34図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(13)……39
第35図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(14)……40
第36図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(15)……41
第37図　長浜金久第Ⅰ遺跡の石器実測図(1)……43
第38図　長浜金久第Ⅰ遺跡の石器実測図(2)……44
第39図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(1)有孔貝……48
第40図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(2)有孔貝……49
第41図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(3)有孔貝……50
第42図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(4)有孔貝……51
第43図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(5)有孔貝……52
第44図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(6)有孔貝……53
第45図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(7)有孔貝……54
第46図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(8)有孔貝……55
第47図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(1)……57
第48図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(2)……63
第49図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(3)……64
第50図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(4)……65
第51図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(5)……66
第52図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(6)……67
第53図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(7)……68
第54図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(8)……69
第55図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(9)……70
第56図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(10)……71
第57図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(11)……81
第58図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器(1)……82
第59図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器(2)……83
第60図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器(3)……84
第61図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器(4)……85
第62図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器(5)……86
第63図　長浜金久第Ⅰ遺跡の鉄製品実測図……87
第64図　長浜金久第Ⅱ遺跡のトゞンチ配置と砂丘形成…89
第65図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土層図……90
第66図　長浜金久第Ⅱ遺跡の遺構遺物検出状況図(1)……91
第67図　長浜金久第Ⅱ遺跡の遺構・遺物検出状況図(2)… 93
第68図　長浜金久第Ⅱ遺跡の遺構・遺物検出状況図(3)…付図19

図版目次

第69図　長浜金久第Ⅱ遺跡の住居址・炉址・土壙A検出状況図 …… 94
第70図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土壙B図（新砂丘）…… 92
第71図　長浜金久第Ⅱ遺跡の埋葬状況図 …… 95
第72図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(1) …… 105
第73図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(2) …… 106
第74図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(3) …… 107
第75図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(4) …… 108
第76図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(5) …… 109
第77図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(6) …… 110
第78図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(7) …… 111
第79図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(8) …… 112
第80図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(9) …… 113
第81図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(10)底部 …… 114
第82図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器・土製円盤実測図(11) …… 118
第83図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(1)貝輪 …… 119
第84図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(2)貝輪 …… 120
第85図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(3)貝輪 …… 121
第86図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(4)貝輪 …… 122
第87図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(5)貝輪 …… 123
第88図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(6)貝輪 …… 124
第89図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(7)貝輪 …… 125
第90図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(8)貝輪，垂飾器，貝鍬，螺蓋利器 …… 126
第91図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(9)貝匙状貝製品 …… 127
第92図　長浜金久第Ⅱ遺跡の石器実測図 …… 129
第93図　長浜金久第Ⅱ遺跡の石器，骨格器実測図 …… 130
第94図　長浜金久第Ⅲ遺跡のトレンチ配置図 …… 132
第95図　長浜金久第Ⅲ遺跡の第4・5トレンチ出土状況図 …… 133
第96図　長浜金久第Ⅲ遺跡の出土遺物実測図（土器，貝器） …… 134
第97図　長浜金久近世墓の出土遺物 …… 135
第98図　長浜金久第Ⅰ遺跡近世墓の人骨検出状況図 …… 136
第99図　長浜金久第Ⅰ遺跡の牛骨検出状況　付図20
第100図　長浜金久第Ⅰ遺跡の編年図 …… 141
第101図　長浜金久第Ⅱ遺跡の編年図 …… 142

図版目次

図版1　長浜金久遺跡全影第Ⅰ遺跡近影 …… 143
図版2　長浜金久第Ⅰ遺跡調査風影 …… 144
図版3　長浜金久第Ⅰ遺跡地層断面 …… 145
図版4　長浜金久第Ⅰ遺跡第19層出土状況 …… 146
図版5　長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況（頂上部） …… 147
図版6　長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況 …… 148
図版7　長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況（第19・第13層） …… 149
図版8　長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況（第13，19層・第19層） …… 150
図版9　長浜金久第Ⅰ遺跡の有孔貝・穿孔貝出土状況 …… 151
図版10　長浜金久第Ⅰ遺跡の螺蓋利器出土状況・焼跡 …… 152
図版11　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器出土状況 …… 153
図版12　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器・土師器出土状況 …… 154
図版13　長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況（第13・第19層） …… 155
図版14　長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況（第13層） …… 156
図版15　長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況（第13層） …… 157
図版16　長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況（第13層） …… 158
図版17　長浜金久第Ⅰ遺跡の牛骨出土状況 …… 159
図版18　長浜金久第Ⅰ遺跡の黒色土 …… 160
図版19　長浜金久第Ⅰ遺跡の第Ⅰ・Ⅱ類甕形土器 …… 161
図版20　長浜金久第Ⅰ遺跡の第Ⅱ・Ⅲ類甕形土器 …… 162
図版21　長浜金久第Ⅰ遺跡の第Ⅳ・Ⅴ類甕形土器 …… 163
図版22　長浜金久第Ⅰ遺跡の第Ⅴ類甕形土器・鉢形土器・甕形土器底部 …… 164
図版23　長浜金久第Ⅰ遺跡の甕形土器底部と壺形土器 …… 165
図版24　長浜金久第Ⅰ遺跡の土師器・石器 …… 166
図版25　長浜金久第Ⅰ遺跡の有孔貝 …… 167
図版26　長浜金久第Ⅰ遺跡貝製品 …… 168
図版27　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品 …… 169
図版28　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製器 …… 170

図版29　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器…… 171
図版30　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器と鉄製品…… 172
図版31　長浜金久第Ⅱ遺跡の近影・出土状況…… 173
図版32　長浜金久第Ⅱ遺跡の出土状況…… 174
図版33　長浜金久第Ⅱ遺跡の住居址・集石……175
図版34　長浜金久第Ⅱ遺跡の出土状況・埋葬人骨…… 176
図版35　長浜金久第Ⅱ遺跡の出土状況・出土遺物…… 177
図版36　長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物…… 178
図版37　長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物…… 179
図版38　長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物…… 180
図版39　長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物…… 181
図版40　長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物…… 182
図版41　長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物……183
図版42　長浜金久第Ⅲ遺跡の近影・出土状況…… 184
図版43　長浜金久第Ⅲ遺跡の出土状況・出土遺物…… 185
図版44　近世人骨出土状況(第1号・第2号)…… 186
図版45　近世墓の副葬品…… 187

表　目　次

第1表　第Ⅰ表類甕形土器諸訳……18
第2表　第Ⅱ類甕形土器諸訳類……19
第3表　第Ⅲ類甕形土器諸訳……20
第4表　第Ⅳ類甕形土器諸訳……22
第5表　第Ⅴ類甕形土器諸訳……22
第6表　鉢形土器諸訳……23
第7表　甕形土器底部諸訳……23
第8表　壺形土器諸訳……25
第9表　土師器諸訳……26
第10表　石器諸訳……26
第11表　有孔貝諸訳……45
第12表　貝匙諸訳……56
第13表　貝製容器諸訳……58
第14表　穿孔貝諸訳……72
第15表　螺蓋利器諸訳(Ⅰ類)……75
第16表　鉄製品諸訳……77
第17表　第Ⅰ類土器諸訳…… 77
第18表　第Ⅱ類a土器諸…… 80
第19表　第Ⅱ類b土器諸…… 81
第20表　第Ⅱ類c土器諸…… 96
第21表　第Ⅱ類d土器諸…… 97
第22表　第Ⅲ～Ⅹ類土器諸訳…… 100
第23表　底部諸訳…… 101
第24表　貝輪諸訳…… 101
第25表　研磨器諸訳…… 103
第26表　タタキ石，凹石諸訳…… 104
第27表　土製円盤と外耳土器諸訳……104

第Ⅰ章　調査経過

第1節　調査に至るまでの経過

鹿児島県は大島郡笠利町万屋・和野地区に新奄美空港の建設を計画し，その建設用地内に周知の埋蔵文化財包蔵地が所在することから，県土木部空港対策室からその取り扱いについて県教育委員会文化課に協議があったので試掘調査を行ない2ヶ所の遺跡を確認した。そして空港対策室と再協議し，一部の現状保存と記録保存を行うため本調査にはいった。

第Ⅰ次調査は確認を主として行ない昭和58年1月24日より2月12日まで現場調査を行ない，第Ⅰ遺跡と第Ⅱ遺跡の確認をみる。第Ⅱ次調査は第Ⅰ次調査をうけて全面調査に昭和58年10月12日～58年12月26日まで行なったが遺跡が拡大したので第Ⅲ次調査として残りの全面調査を行なった。第Ⅰ遺跡は全面記録が終了した。なお第Ⅱ遺跡は住居址を含め現状保存が得られ，空港の緑地帯となる計画である。また，今回の調査で第Ⅲ遺跡が確認され調査の必要があることが確認された。

第2節　調査の組織と経過

1．調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会教育庁		山田克穂
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課　長	猿渡侯昭（昭和57年・58年度）
	〃	〃	桑原一廣（昭和59年度）
	〃	課長補佐	本田武郎（昭和57年・58年度）
	〃	〃	坂口　肇（昭和59年度）
	〃	主　幹	中村文夫（昭和59年度）
調査企画	〃	主任文化財研究員	諏訪昭千代（昭和57年・58年～59年9月）
	〃	〃	向山勝貞（昭和59年9月～　　）
調査者	〃	主　事	弥栄久志（2・3次）
	〃	〃	青崎和憲（1次試掘）
	〃	〃	長野真一（2次）
	〃	〃	堂込秀人（1次試掘）
	〃	文化財調査員	峯崎幸清（3次）
事務担当	〃	管理係長	寺園　晃
	〃	〃	安藤幸次（昭和59年9月）
	〃	〃	濱松　巖（昭和57年・58年度）
	〃	主　事	畑　征治（～昭和59年8月13日）
	〃	〃	山下玲子（昭和57年・58年度）
	〃	〃	田中孝子（昭和59年～　　）

2．調査の経過

1．第1次調査……試掘調査

昭和58年１月24日より，昭和58年２月12日まで現場調査を行ない，昭和58年２月14日より，昭和58年３月31日まで整理作業を行う。

日誌抄による経過……現場作業は１週間単位で，整理作業はひとまとめに記す。

昭和58年10月11日（火）～15日（土）

調査開始が11日で長浜金久第Ⅰ遺跡からはじめる。第Ⅱ次調査の開始。

Ａ～Ｇ―17～22区の表土剝ぎを行い，Ａ～Ｇ－９～16区，Ａ～Ｅ－４～８区と進む。Ａ～Ｅ－４～８区には貝殻集中箇所が４ヶ所検出される。Ａ～Ｇ－９～16区には貝製容器や螺蓋利器の他にヤコウガイ・シャコガイ・マガキガイが多量に検出，また土器片も検出，貝殻集中箇所は砂丘の頂上部より海岸へ傾斜して検出される。

10月17日(月)～22日(土)

Ａ～Ｇ－９～16区とＡ～Ｇ―17～22区を行う。貝殻の検出作業と表土剝ぎが主体となる。ユンボで表土剝ぎを行ったが現地表面下約７ｍ下まで掘り下げた。ここは端岸よりの所で旧砂丘がここまであったことが判明した。Ａ～Ｇ―17～22区の清掃作業の後，写真撮影を行う。Ａ～Ｇ－９～16区は$\frac{1}{10}$実測へはいる。また22日に長浜金久第Ⅱ地点の表土剝ぎにかかる。

10月24日(月)～29日(土)

長浜金久第Ⅰ遺跡はＡ～Ｇ－９～16区の$\frac{1}{10}$実測，Ａ～Ｇ―17～22区の実測のための遺物検出作業，Ａ～Ｇ―17～22区，Ａ～Ｅ－４～９区の割り付け作業を行う。長浜金久第Ⅲ遺物は土拡検出後図面：写真撮影し掘り下げを行い，貝塚の一部まで調査を行う，貝殻・獣骨等が検出。

10月30日(月)～11月５日(土)

11月３日(木)は現場作業休止，遺跡が指定以外に拡がるため文化課と空港対策室と協議を始める。長浜金久第Ⅰ遺跡はＡ～Ｇ－９～16区に於いては実測のための遺物検出作業と$\frac{1}{10}$実測他は実測のための遺物検出作業，地形測量を行う。長浜金久第Ⅱ遺跡は第Ⅰ次調査よりも拡張するため伐採作業と拡張区の表土剝ぎを行う。

11月７日(月)～11月12日(土)

長浜金久第Ⅰ遺跡はＡ～Ｇ－９～16区の$\frac{1}{10}$実測，実測のための遺物検出作業。地形測量を，Ａ～Ｇ―18～22区の$\frac{1}{10}$実測，９月と10日にヘラ状鉄製品と鉄製つりばりが出土。長浜金久第Ⅱ遺跡は拡張区の表土剝ぎと遺物検出作業を行う。

11月15日(火)～11月19日(土)

長浜金久第Ⅰ遺跡はＡ～Ｇ－９～16区とＡ～Ｇ―17～22区の$\frac{1}{10}$実測と全区の遺物検出作業。Ａ～Ｅ－４～８区の掘り下げ。長浜金久第Ⅰ遺跡は第１次調査（試掘）で指定範囲された以外に広がるため文化課と空港対策室と協議し，試掘調査した地域の再度トレンチを入れ遺跡の範囲確認作業を行うことを決定。そして範囲の再確認と来年度で完全掘りすることになる。この原因としては試掘時の深掘りが砂丘のため限界があり，５～７ｍまで掘れなかったためである。まず８列に海岸まで幅４ｍのトレンチを入れる。長浜金久第Ⅱ遺跡は写真撮影のための清掃と写真撮影を行う。

11月21日(月)～11月26日(土)

長浜金久第Ⅰ遺跡はA～G－9～22区の$\frac{1}{10}$実測と実測のための遺物検出作業。A～E－4～8区の遺物検出作業。長浜金久第Ⅱ遺跡は土手の作業。

11月28日(月)～12月3日(土)

長浜金久第Ⅰ遺跡はA～G－9～22区の$\frac{1}{10}$実測と実測のための遺物検出作業。A～E－4～8区の遺物検出作業。9列の土手の遺物検出。16列の土手の遺物検出。9・16列の断面図作成。

12月5日(月)～12月10日(土)

全区の$\frac{1}{10}$実測。A～G－9～22区の$\frac{1}{10}$実測。遺物取り上げ。遠影写真撮影。

12月12日(月)～12月16日(金)

長浜金久第Ⅰ遺跡は全区に於いて遺物取り上げを行いA～E－4～8区においては$\frac{1}{10}$の実測を行う。長浜金久第Ⅱ遺跡は実測のための遺物検出と$\frac{1}{10}$実測，地形測量を行う。

12月19日(月)～12月26日(月)

長浜金久第Ⅰ遺跡はA～G－4～16区における$\frac{1}{10}$実測終了後，遺物取り上げを行う。長浜金久第Ⅱ遺跡は$\frac{1}{10}$実測後遺物取り上げ遺構検出を行う。そして土壙と住居址の検出を見る。住居址の写真，実測を行い埋めもどす。土層断面図作成。本年度の現場作業を25日で終了し，26日に帰鹿。

昭和59年1月5日(木)～3月31日(土)

整理作業は文化課の収蔵庫で行う。土器洗い，図面整理を行い概報を作成する。3月31日に概報の印刷製本ができあがる。

長浜金久第Ⅰ・Ⅱ遺跡の第3次調査

昭和59年4月4日(水)～13日(金)まで収蔵庫にて整理作業を行う。

4月16日(月)～4月20日(金)

第Ⅲ次調査の現場調査を4月16日より始める。

F・G－10・11区の表土剝ぎを行う。

4月23日(月)～4月28日(土)

G・H－15～22区の表土剝ぎを行う。3枚の包含層を確認。16列の土層写真のための断面調整，写真撮影。

5月7日(月)～5月12日(土)

H－12～15区の第13層に遺物検出。Ⅰ・J－35～40区の表土剝ぎを行う。第13層に遺物検出。R－49区の人骨検出作業。

5月14日(月)～5月18日(金)

H・Ⅰ－18～25区の表土剝ぎ，遺物検出。J－19区遺物実測。R－49区の人骨処理，鹿児島大学歯学部小片・川路両先生の取り上げ。(人骨実測)

5月21日(月)～5月26日(土)

K・L—19～25区遺物実測。K・L—22～25区の掘り下げ，第Ⅲ遺跡は前年度の包含層土をふるいにかける。骨製品・貝輪14点出土。

5月28日(月)～6月2日(土)

長浜金久第Ⅰ遺跡はJ～M—22～26区の図面作成。J・K—21～28区の掘り下げを行う。長浜金久第Ⅱ遺跡はふるいでの遺物採集。

6月2日(月)～6月8日(金)

J・K—24～26区の掘下げ，遺物多量に出土。G～Ⅰ—17～20区平板図作成。遺物取り上げ。J—18区図面作成。K・L—27～28平板図作成。写真撮影。G・H—13～16区グリッド設定。G・F—12・13区遺物実測。F・G—12～15区遺物取り上げ。H～K—24～26区の遺物検出。E・F—12区の遺物実測。J・K27・28区の土手はずし。遺物検出。J・K—25・26区のグリッド打ち。

6月11日(月)～6月17日(日)

K・L—29～41区の掘り下げ。E—10・11区の実測と遺物取り上げ。L—30区の遺物実測，E・F—10・11区，F—14～19区，G—15～18区，D·E—11区の取り上げ。G・H—9～12区の掘り下げ。F・G—8～10区の掘り下げ。E～G—13区の実測。L—30区の実測。E—18区の地点で第19層より約下に40cmの層で兼久式以外の土器出土。

6月18日(月)～6月23日(土)

Ⅰ—13・15区，L・O—31区，Ⅰ—11～13区，M・O—29～32区，H—9・10区，G・H—12・13区，B—14区の遺物実測，取り上げ。K・L—26～31区，M・O—30～32区の掘り下げ。O—35・36区の写真撮影。河口貞徳氏の指導。

6月25日(月)～6月30日(土)

O・P—39～43区，H—12区，R—45区，L・M—30・31区，J・K—25・26，K—20区の遺物実測，取り上げ……第Ⅰ遺跡。住居址の拡張……第Ⅱ遺跡。第Ⅲ遺跡の確認（1～5のトレンチを入れる)。　国分直一氏の指導

7月2日(月)～7月6日(金)

第Ⅰ遺跡はJ・K—23～30区の遺物実測，取り上げ。第Ⅱ遺跡は住居址拡張区の実測，埋めもどし。第Ⅲ遺跡の図面作成。

7月9日(月)～7月14日(土)

第Ⅰ遺跡はJ・K—24～26・30区の遺物実測，取り上げ。第Ⅱ遺跡は埋めもどし，杭打ち。第Ⅲ遺跡は杭打ち。器材運搬，遺物搬出，14日で現場作業終了。

7月16日(月)～7月31日(火)

文化課の収蔵庫にて遺物・図面を整理し，報告書を作成する。報告書は第1次調査，第Ⅱ次調査，第Ⅲ次調査を合せて作成した。なお報告書のでき上りは60年3月である。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第1節　遺跡の位置と環境

長浜金久遺跡は鹿児島県大島郡笠利町和野長浜金久に所在する。奄美大島は鹿児島の南約400kmの洋上にある島で南西諸島の中の奄美諸島に属する。その奄美諸島は大きく分けて喜界島，奄美大島，徳之島，沖永良部島，与論島からなり，奄美大島はその中で最も大きい島である。奄美大島は北部に平地が多く，南部は山がちで湯湾岳の標高694mの山を最高峰として，標高400m～500m級の山々が連なっている。

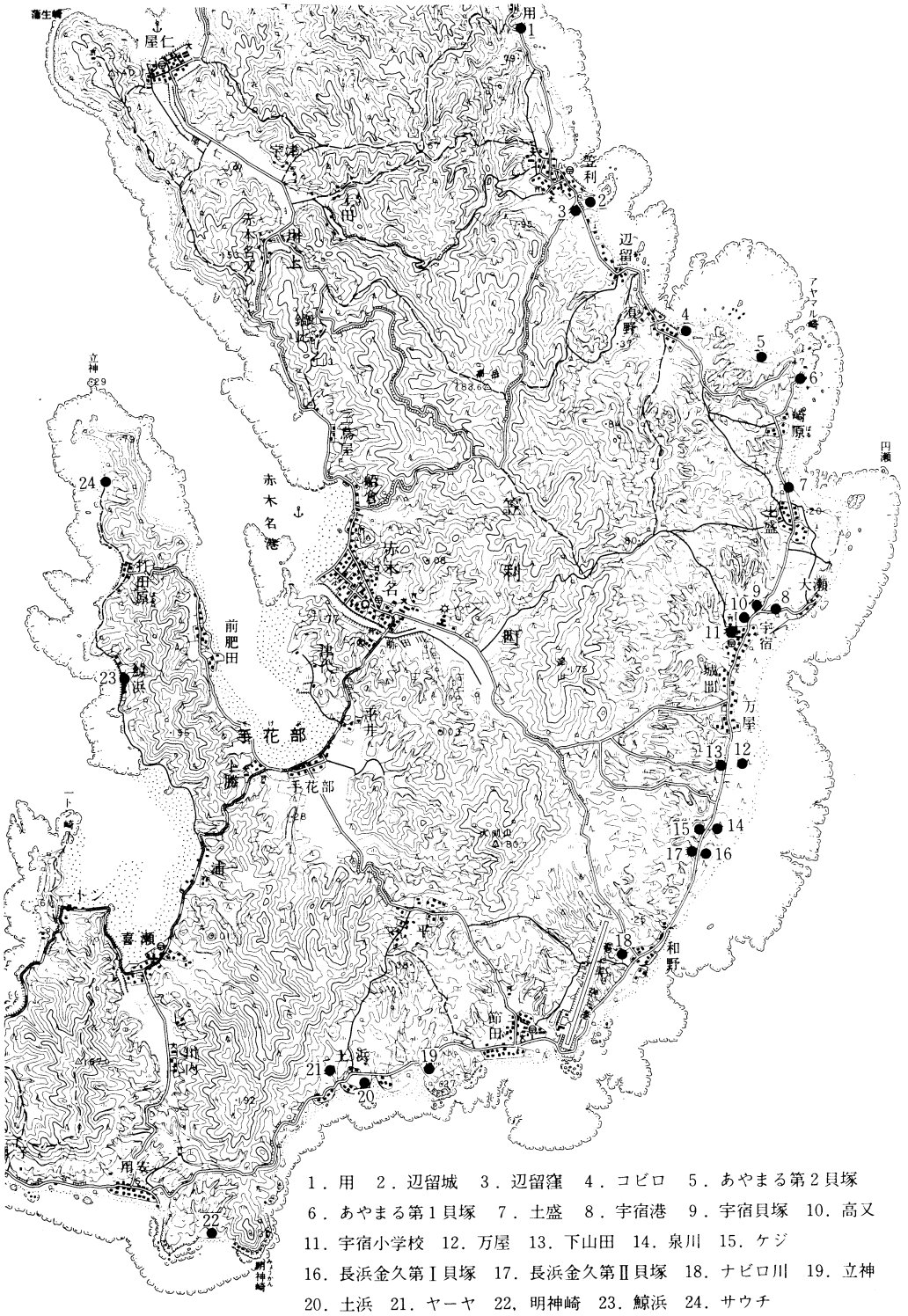
長浜金久遺跡のある笠利町は奄美大島の中では北部に位置し，南北約15km，東西約4.5kmの細長い半島である。そして，この地域の地形を見ると標高約150mの淀山や高岳等が南北に連なり，西側や北側は海岸まで山麓が延びている。この西・北海岸はリアス式海岸の様相を提し，赤木名湾，喜瀬湾等がある。集落としては赤木名をはじめ，喜瀬，屋仁，佐仁等がみられる。

なお，赤木名は藩制時代の奄美の代官所が置かれたところで現在も笠利町の行政の中心地である。

東海岸は大平洋に面し，用，笠利，宇宿，万屋，和野，節田，用安等の集落がみられる，東海岸は砂丘が発達し，とくに宇宿，城間，万屋，和野の間は発達が大きい。また，この地域は後に平地をかえ，遺跡も多く宇宿貝塚，宇宿港遺跡，万屋下山田遺跡，ケジ遺跡等が知られている。長浜金久遺跡は万屋と和野の間の砂丘上にある。

第2節　遺跡の立地

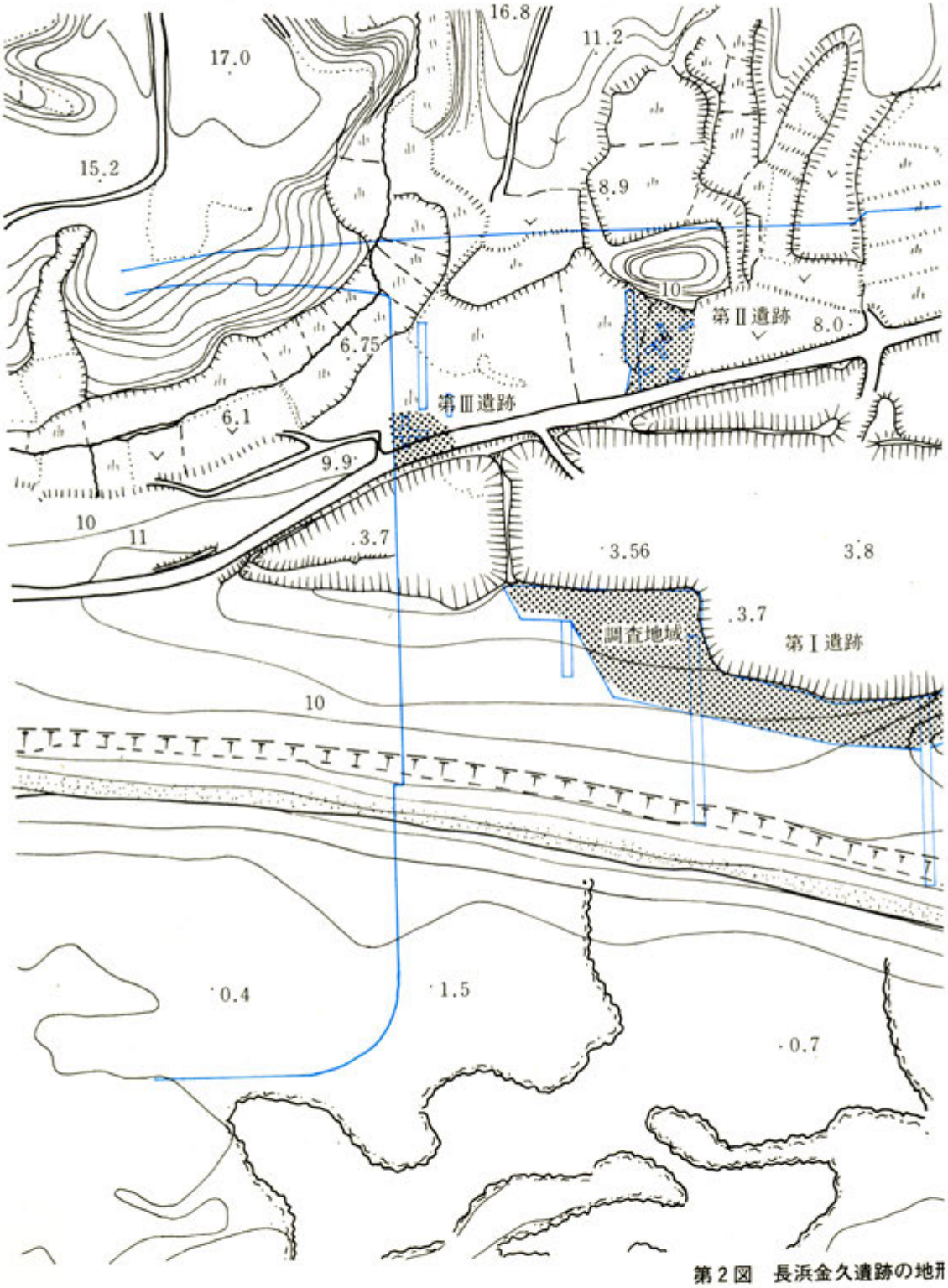
長浜金久遺跡の地形は後背地標高15m～50mの丘陵の前面に砂丘が発達し，海に約250m進んでいる状態である。万屋と和野の間には5本の小河川が流れ，その中でも長浜金久と泉川の間を流れる小河川が形成した砂丘に遺跡が立地している。この砂丘は堆積岩が風化した赤土の上に旧砂丘が形成され，一部にはクール（砂が固ったもので地元の名称）もみられる。地形上からみると（第2図参照）砂丘の形成は第1段階が，海岸線が現在の県道位までで，川は逆L字状に曲がり海へ注ぐ，対岸の砂丘（北側）も形成され現在の県道よりも若干東側（海より）にあたると考えられる。その砂丘の発達は約30m位であろう。第2段階は大半が砂取りでなくなっているが南側に若干残ている。それから判断すると，県道から海岸へ約70m位の幅の砂丘が考えられる。次の第3段階は砂丘が若干北へ延び海岸へ約150m発達し川はL字に曲り砂丘の頭をおさえるように海へ流れこんでいる。次の第4段階は大きく，砂丘が北へ延び川はL字になり，北へ約150m発達して，頭がおさえられるように曲って海へ流れる。ここでは別の北側の川も合流し，現在の河口となっている。対岸の砂丘も同じように発達し，南側へ進んでいるが比較的新しい時期に形成されたものとみられる。第1段階の砂丘上には縄文後期相当の遺跡が数ヶ所みられる。長浜金久第Ⅱ遺跡やケジ遺跡，万屋遺跡，下山田遺跡，宇宿貝塚等がこの線上に並び，長浜金久第Ⅲ遺跡も含まれる。第3段階としては長浜金久第Ⅰ遺跡，泉川遺跡等がある。この第4段階の遺跡は現在のところ見あたらない。



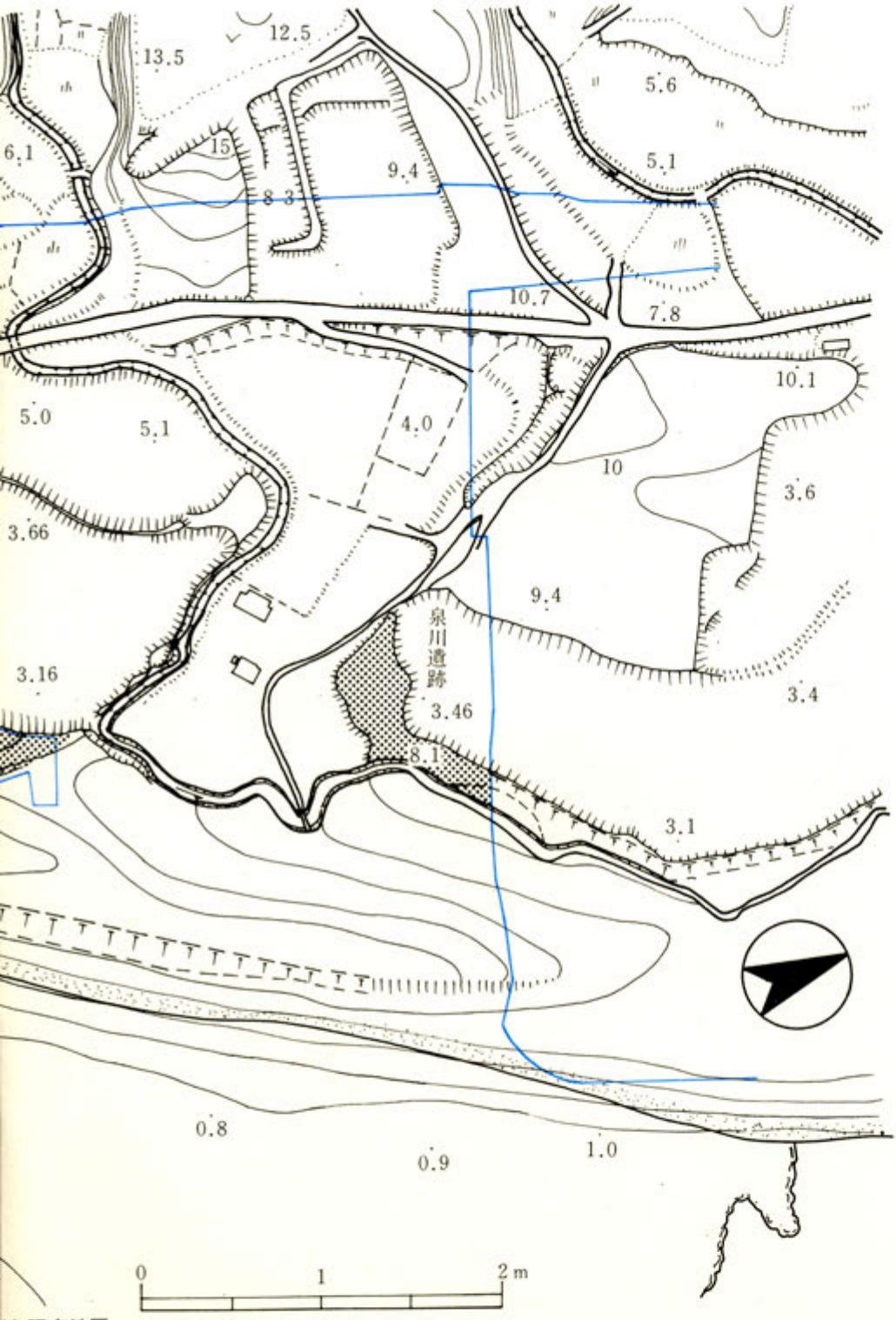
1．用　2．辺留城　3．辺留窪　4．コビロ　5．あやまる第2貝塚
6．あやまる第1貝塚　7．土盛　8．宇宿港　9．宇宿貝塚　10．高又
11．宇宿小学校　12．万屋　13．下山田　14．泉川　15．ケジ
16．長浜金久第Ⅰ貝塚　17．長浜金久第Ⅱ貝塚　18．ナビロ川　19．立神
20．土浜　21．ヤーヤ　22，明神崎　23．鯨浜　24．サウチ

1000m　0　1000　2000　3000

第1図　長浜金久遺跡と周辺遺跡



第２図　長浜金久遺跡の地形


12.5
13.5
5.6
6.1
15
9.4
5.1
8.3
10.7
7.8
10.1
5.0
5.1
4.0
10
3.6
3.66
9.4
泉川遺跡
3.16
3.46
3.4
8.1
3.1
0.8
0.9
1.0
0
1
2 m

形と調査地区

第Ⅲ章 遺 跡 の 概 要

第１節　長浜金久第Ⅰ遺跡の概要

１．遺跡の概要

本遺跡は，砂丘に形成された貝塚を伴った遺跡である。

貝塚が残存する砂丘は海岸線と平行してほぼ南北に形成され，その距離は約１kmに達している。この砂丘は大きく２分され，南側は標高13m で高く，中央部の小川が急に北へ曲る部分で低くなっている。そしてその北側は砂丘が舌状に北へ延び標高は８ｍラインが頂上附近を走っている。（第２図参照）　これは砂丘の形成が大きく２回みられたと考えられ，南側の砂丘から北側の砂丘へ延びたことを示している。

遺跡は南側の砂丘に立地し，砂丘の山手側の大半は砂取事業で剝られ，頂上附近より海側の部分が残存していた。

調査方法は４ｍ×４ｍのグリッドで東西方向へＡ・Ｂ・Ｃ……，南北へ１・２・３……とし49区まで設定した。また遺物の取り上げは４ｍ×４ｍ各グリッドをさらに１ｍ四方に16細分し，Ａ－４区－１，Ｂ－15区－16として註記した。また貴重品と思われるものについては，通し番号で取り上げ，土器・石（石器）・貝殻等は出土面を$\frac{1}{10}$で実測した。

調査面積は約3,600㎡で試掘も含め３回の調査を行った。最も浅い頂上部は現地表面より約30cmで最も深いところは約７ｍで遺物の出土をみた。

古代の遺物の出土する地域はＡ－５区・Ｂ－４区より，Ｑ－39区まであった。またＲ－49区には近世の墓が２基あった。

この遺跡はクール（砂丘が石灰化したもので硬い砂丘＝地域の名称）の上に黄白色の砂層が１～３ｍあり，その上に砂の腐植化した黒色砂層と腐植化していない黄白色砂層が10～50cmの各層が互層となり現地表面までは20枚数えられた。遺物は第19層と第13層と第７層にみられた。これは頂上附近では分層されておらず海側によって確認された。この３層は放射性炭素測定の結果第19層が1,120±20Ｂ，Ｐ，絶対年代換算ではＡＤ830 ～ 890年，第13層が930 ±20Ｂ，Ｐ，絶対年代換算ではＡＤ1,020 ～ 1,050年，第７層が 690±20Ｂ，Ｐ，絶対年代換算ではＡＤ1,240 ～ 1,290年の数値が出た。第19層には土器・石器・貝器・鉄器・貝殻が出土し，第13層には土器が数点（器形不明）・石器・貝器・貝殻が出土し，第７層には貝殻が出土した。これは第１次，第２次調査では明確に検出されなかったが第３次調査の結果から判明した。

第４・５・６図（付図1・2・3)は出土状況とレベル数値によって作成した検出状況図で第２次調査では頂上附近が調査範囲であったため概報では同一面として取り上げた。分けられなかった理由としては３文化層が頂上附近で，約30～50cmの中の腐植土層中に包含されているためであった。よってＡ～Ｄ－11～16区や，Ｂ～Ｆ－19～21区は３文化層が重なっていることも考えられる。一応第19・13・７層の３文化層で判明できたものは第3・4図に上げている。また概報では長浜金久第１貝塚と称したがここでは長浜金久遺跡と変更した。

第７層の文化層はＪ・Ｋ—18・19区に検出された約140点の貝殻でマガキガイだけであった。出土状況は貝殻が２ヶ所に集中しており，炭粉もあり，これは貝を採集してこの場で料理したことがうかがえられる。なお時代を示す遺物は出土していないが放射性炭素測定値からみればＡＤ1240～1290年の13世紀のものと考えられる。

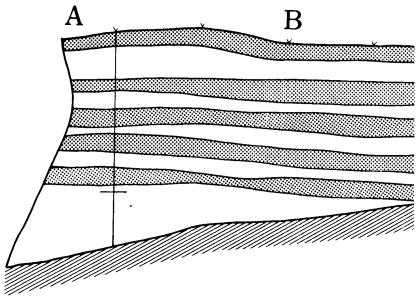
第13層の文化層はＣ～Ｄ—５～９区に５ヶ所，Ｇ～Ｉ—７～15区に10ヶ所，Ｄ～Ｆ—13・14 5～６ヶ所，Ｆ—17・18区に１ヶ所，Ｋ～Ｒ—26～39区に14～15ヶ所の小規模の貝殻集中（概報では“貝だまり”と称した）がみられ，Ａ～Ｅ—11～16にも数ヶ所みられるが層位的に不明確であった。

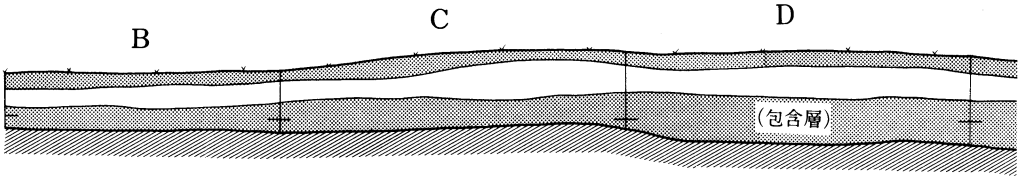
この貝殻集中箇所は35以上あり，ともに炭粉と伴っている。これらは第７層文化の貝殻集中箇所と同じで貝を採集し，火を入れ，中身を取り出し，貝殻を棄てた跡と考えられる。貝殻はマガキガイが大半であり，一部オニノツノガイ等も含まれている。時代を示すものとしては土器片がＨ—12に２点出土しているが細片で時代の判断が困難であった。しかし，この貝殻集中箇所の貝殻を放射性炭素測定した結果ＡＤ1020～1050年の11世紀の数値がえられた。

第19層の貝殻は第13層の貝殻集中箇所と比較して規模が大きく，貝殻もヤコウガイ・シャコガイ等大形貝が混入している。貝殻としてはニシキウズ・チュセンサザエ・サラサバテイ・クモガイ・ホラガイ・ホシダカラ・オオベッコウガサ・イソハマグリ・ツキガイ・サメザラ・マガキガイ・オニコブシ・オニノツノ等が出土している。

出土地域としては４列から26列までみられ，土器・石器・金属器の人工遺物と，石・サンゴ貝殻の自然遺物が出土した。

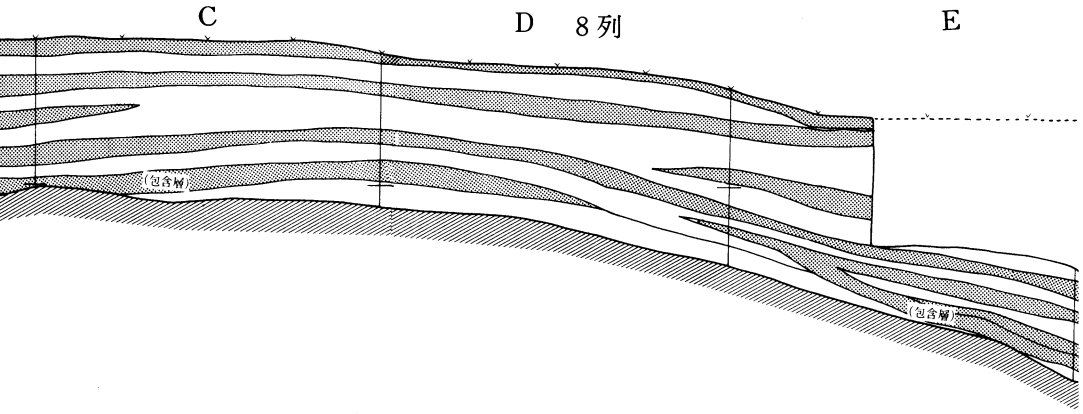
出土状況は第７～21図にみられるように，４列から26列まで検出され，Ａ～Ｃ—４～10の地区はヤコウガイ・ジャコガイ・クモガイ・サララバティの大形貝類とマガキガイ・イトマキボラ・オニゴブシ等の小形の貝類が頂上部に検出されている。レベル的にも10m 50cm～12m 50cmの尾根部にあたるところに分布している。なかでもＢ—６，Ｃ—８区は密度が濃い，11列から16列までの分布状況は部分的に第13層の文化と同様な小規模の貝殻集中箇所がＤ—10，Ｃ・Ｄ—13，Ｃ・Ｄ—13・14，Ｂ・Ｃ—14，Ｂ・Ｃ—Ｂ・Ｃ—15，Ｃ—15区の７ヶ所にみられる。またＣ—12・13区には50×30cmの台石がありその囲りにはマガキガイ・アマオブネ等の小形貝の破片が土のう袋３袋分の貝殻が検出されている。他は部分的には貝殻の集中があるが大形貝も混り，貝殻集中箇所がみられない形態である。なお貝殻集中箇所は全体として上部に検出された状況でとくにＣ—15区は顕著にみられた。Ｄ～Ｆ・10～12区は傾斜地で大形貝と小形貝の混在で集中箇所がみられないところである。16列から23列は頂上部より海岸側へ傾斜するところで，Ａ～Ｆ—16～20区とＢ～Ｈ—20～22区の２つが舌状にみられる。Ｆ—20区とＦ—16・17区に貝殻集中箇所がみられ，貝殻はマガキガイを主にオニノツノ・イトマキボラ・ヤコウガイ・シャコガイ等がみられる。この地区ではＢ～Ｄ—21区に出土遺物の空間地帯がみられる。Ｉ～Ｍ—20～26区においては海岸側の傾斜地で標高9.5m～7mに出土している。Ｌ・Ｍ—20～24区には第13層にみられるような貝殻集中箇所が４ヶ所みられ，ここは若干なだらかな部分であり，Ｉ～Ｌ—



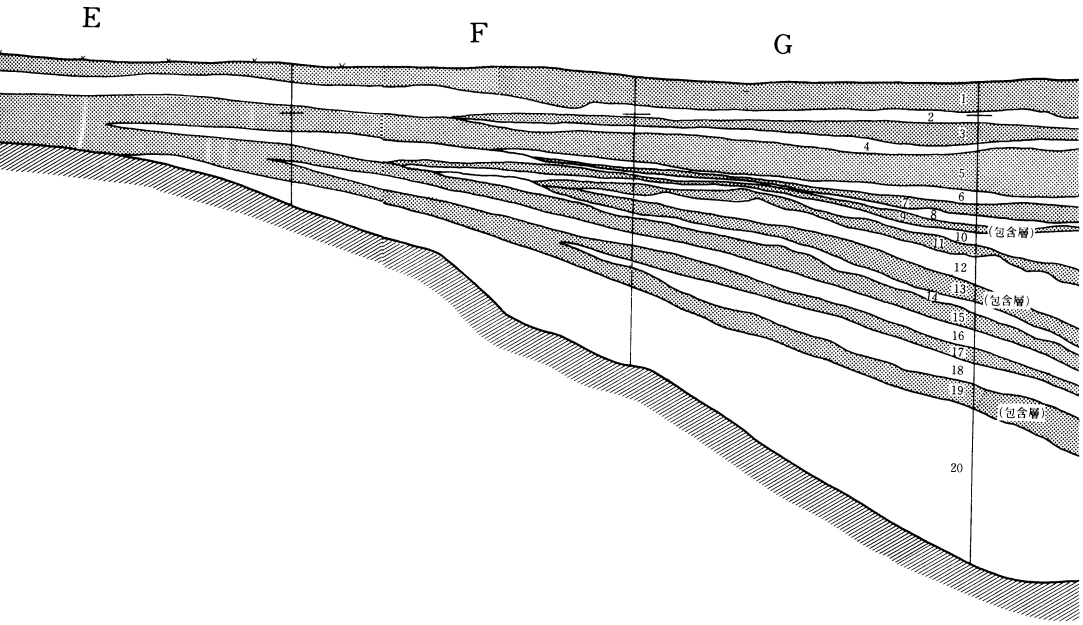


非腐植土層　　腐植土層

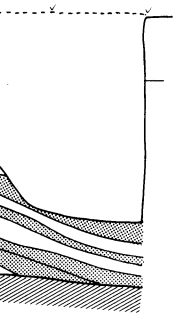
第3図　長浜金久第1

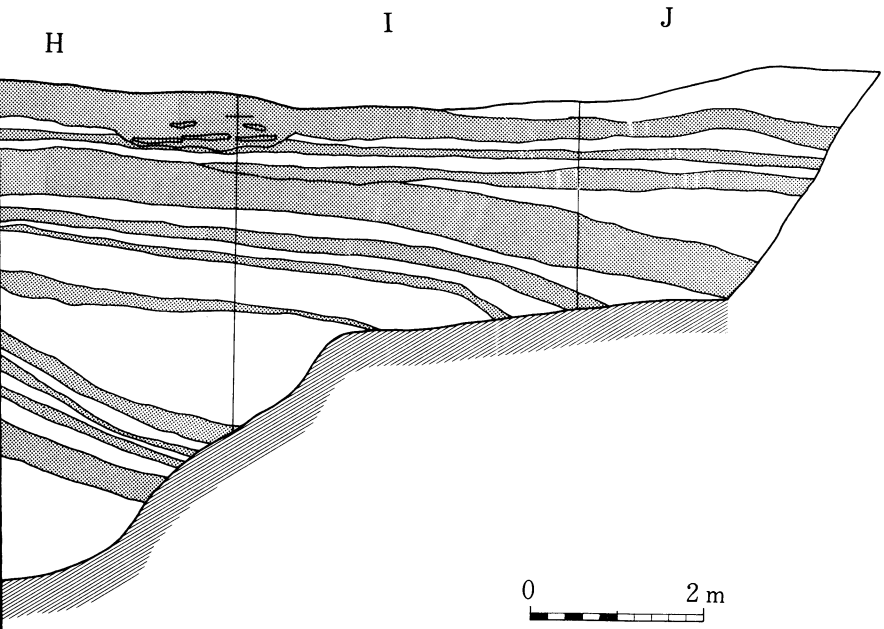

C
D
8列
E
(包含層)
(包含層)

16列


E
F
G
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
(包含層)
(包含層)
(包含層)

遺跡の土層図




H
I
J
0
2 m

22～26区においては部分的に集中がみられ，あまりまとまりはない。貝殻はマキキガイを主にシャコガイ・イトマキボラ・ヤコウガイ等であった。とくにJ—23・24区はシャコガイが主にみられた。またK—22区ではカメの焼骨（甲羅）があり，カメの料理をした跡がうかがえられる。またこの地区には土師器の甕形土器がみられた。

以上が4列から22列までの出土状況である。前にも述べたが，砂丘の頂上部は第13層と19層の遺物が混在している状態で不透明であるが，海岸側の傾斜の第19層と第13層では間層があり，出土状況も異にしている現象が伺えられる。すなわち，第13層はブロック状に検出し，貝殻が集中する貝殻集中箇所をみることができる。これらは粉炭がみられることからその場で火熱し，その場に棄てた跡と考えられる。この傾向より考えると，A～E—12～16区における貝殻集中箇所は第13層文化と考えて良いと考えられる。そしてこれらは貝が小形のマガキガイやオニノツノが中心である。第19層の遺物は大形貝のヤコウガイ・シャコガイ等が多く混在し，火熱されたヤコウガイやシャコガイは頂上部より傾斜地に投棄された状況と頂上部に於いてはまとまりのない放棄状況であり，第13層と異にしていることが注目される。しかし，第19層にもマガキガイの貝殻集中箇所もかなりあり，2種の貝殻投棄跡があることは確認された。

遺跡の土層は第3図に上げたが砂丘の基盤となるクールを除き確認されたのが22層であった。第1層は表層で現草木の樹根がみられる層でその下に黄白色の砂層，その下に黒褐色の腐植砂層と2つの砂層が互層となり砂丘を形成している。この層はF・G区より東側が顕著にみられI・J区では腐植砂層が10枚，黄白色砂層が10枚確認された。またA～E区は砂丘の頂上部であるため，表層以下の腐植土層が1枚となっている。（この層序は16列に限り，8列では頂上部において腐植砂層が3枚みられた。）

この土層からみると，砂丘の形成後，砂丘の堆積は頂上部よりも海側に拡がり，幅広くなっていることがわかる。

なおC・D—19～22区においては第20層の下に一枚腐植土層がみられ，第21層とした。その下に砂丘があり，基盤はクールになっていた。

層の傾斜としては，第17層が4～16区において，海岸側で急に傾斜し，17～23区においてはややなだらかになっていた。第13層は4～16区に於いては急傾斜がみられ，下位のレベルにあり，23区より北側は平担面に近い傾斜で上位のレベルに検出した。そして23区以北は第19層の遺物は出土しなかった。このことは砂丘の形成が南側から北側へ延びる発達を示していることがうかがえられる。

2．人工遺物

1）土器

甕形土器

Ⅰ類　（1・2・97）

第Ⅰ類の土器は沈線を施している。

1の土器はD－18区に出土した土器で第Ⅱ類の包含層より約30cm下の黒褐色腐植土砂層より出土した土器である。口縁部は外反し，頸部は若干締りぎみに内向し，肩部は緩やかな「く」字形をなし，胴部から底部近くまでふくらみの少い直線的な傾をもつ器形の土器である。

文様は肩部に一条の横行する沈線と，その沈線と組み合せた台形枠を沈線で描き，中を沈線で埋め，頸部には斜行する平行沈線の中を沈線で埋める施文をくりかえしている。また胴部には文様がみあたらない。器面調整は篦ナデ調整で胎土は長石・石英・細石等が混入し，焼成も良い。色調は暗茶褐色を呈している。なお口径は29cmである。

2の土器はB－7区に出土した土器である。口唇部は平坦な断面をもち，口縁部から肩部にかけて緩やかな「く」字形を呈し，胴部は若干ふくらみをもつ器形である。

文様は頸部に一条の沈線を廻らし下向に沈線で台形枠を施している。器面調整は篦ナデ調整で肩部より上部は横ナデで，下部は縦ナデを行っている。胎土は長石・石英を含み，焼成は良い。色調は茶褐色を呈している。なお口径は23cmである。97は外反する土器で肩部に横位の沈線があり，頸部と口縁部にも縦と横の沈線がある。

第1表　第Ⅰ類甕形土器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
1	D－18	21	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	97	一般	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
2	B－7	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良						

Ⅱ類（3～25）

この類の土器は沈線と刻目突帯を組み合せた土器である。

3は頸部が締り，口縁部が外反し，胴部から沈線を施している。4～7は破片の小さい口縁部の沈線施文の部分だけである。Ⅰ類の施文と異なり，Ⅱ類の施文と類似しているのでⅡ類に含めた。4は鋸歯状の施文と思われる。8は口縁が内向し，頸部に刻目間隔の広い断面三角形の突帯を廻らし，肩部に沈線を施している。9は口縁部が外反し，肩部に刻目の間隔の広い断面三角突帯を付けた口縁から肩部にかけての土器である。文様は沈線を頸部から肩部にかけて縦位に施している。10は口縁部が若干外反し，間隔の広い刻目で断面三角突帯をつけ，肩部に波状の沈線を施している。また厚味のある土器である。11は口縁部が外反し，肩部に断面三角刻目突帯を付け口頸部に沈線施文がみられる。12は間隔の広い刻目を施した断面三角突帯を肩部に付け，口縁部は縦位に沈線を施す土器である。13は突帯が一部剝げているか突帯のげ上に沈線を施こした文様で直行する口縁部である。14は直行する口縁部で肩部に大きな突帯を施し，口縁部に縦2条と横位に1条の組み合せの沈線文を施こしている。突帯の刻目は大き

い。15は完形土器で口径が12cm，底径が65cm，器高14.5cmの法量をもつ。口縁部は若干外反し，胴部はふくらみをもち，底部は平底で肩部に刻目突帯をもつ器形である。器面にはハケ目調整痕がみられ，口縁部と胴部に曲線を描いている。底部は木葉痕が付いている。また，この土器は他と比べ小型の土器である。16は口縁部が内向，口縁端部で外曲し，胴部は孤状にふくらむ器形をもつ土器である。頸部には刻目突帯を付け，突帯の上位には鋸歯文，下位には鋸歯文のくずれも施している。口径は27cmでやや本遺跡では大きい方である。18は刻目突帯の下に2条の沈線を施す土器で突帯は高さが高い。19は刻目の大きい突帯で胴部に沈線がみられる。17は直行する口縁部で太い刻目突帯で口縁部に沈線を施している。器面にはハケ目調整痕があるが荒い器面の土器で2個の補修孔がみられる。口径は24cmである。20は太めの刻目で突帯の下に沈線を鋸歯状に施している。21は頸部に刻目突帯のある胴部は丸味をもち，突帯の下に鋸歯文を施し，器面は篦調整痕がみられる。22～25は刻目突帯の上に沈線がみられる土器の頸肩部である。

第2表　第Ⅱ類甕形土器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
3	A・B・C—15	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石	良	15	E — 15	19	茶褐色	サンゴ・細石	良
4	B — 14 15	〃	暗茶褐色	サンゴ・細石	良	16	E — 15	(19)	茶褐色	サンゴ・細石	良
5	G — 24	〃	暗茶褐色	サンゴ・細石	粗	17	E — 18 A・B・C—15	〃	黒茶褐色	サンゴ・細礫	良
6	C — 12	〃	暗茶褐色	サンゴ・細石	良	18	A～D—9～16	〃	燈茶褐色	サンゴ・細石	良
7	C — 15	〃	茶褐色	サンゴ・細石	良	19	B — 8	〃	燈茶褐色	サンゴ・細石	良
8	E — 22	〃	暗茶褐色	サンゴ・細石	良	20	B — 15	〃	茶褐色	サンゴ・細石	良
9	C — 14	〃	茶褐色	サンゴ・細石	良	21	C — 13	〃	茶褐色	サンゴ・細石	良
10	D — 16	〃	暗茶・茶褐色	サンゴ・細石	良	22	D — 13	〃	茶褐色	サンゴ・細石	良
11	G — 15	〃	茶褐色	サンゴ・細石	良	23	B — 15	〃	暗茶褐色	サンゴ・細石	良
12	C — 11	〃	暗茶褐色	サンゴ・細石	良	24	B — 15	〃	暗茶褐色	サンゴ・細石	良
13	D — 18	〃	暗茶褐色	サンゴ・細石	良	25	C — 14	〃	暗茶褐色	サンゴ・細礫	粗
14	J — 24	〃	燈茶褐色	サンゴ・細石	良						

Ⅲ類（26～69）

この類は刻目突帯を付ける土器である。

26は直線的に外反する器形で間隔の広い刻目を施した口径が25cmの土器である。口縁部では厚味がみられ，内側に粘土の一部が凹みとなっている部分もある。27は頸肩部で間隔の広い刻目突帯がみられる。28は口径が13.5cmで若干外反する器形で突帯には一部分刻目がある。器面はハケ目調整痕が薄くある。29～31は口縁部で間隔の広い刻目突帯が頸部にある土器である。32は刻目突帯が頸部にあり，胴部は若干丸味をもち，ハケ目調整痕が器面に縦走している。33は刻目が一部にある突帯が付いた頸部から胴部にかけての土器で器面にはハケ目がある。34も刻目が一部にある突帯が付く土器である。35は刻目の施文が胴部の一部にも付いている土器で

口径が15cmで直線的に外向している器形である。36は口径が14cmで直行した口縁部に胴部が若干丸味をもつ器形の土器である。刻目突帯は頸部より若干下に付き，やや太い刻目突帯である。37は口径23cmで直行した口縁部に間隔の広い刻目突帯を付けた土器で器面は篦状施文具で荒く調整している。突帯の大きさは太目で低い。38・39は直行した口縁部で突帯で刻目は竹管で付けている。40は口径12.5cm，直行した口縁部に刻目突帯を付けた土器である。器面調整は横位に行なっている。41はやや外反した口縁部で刻目突帯を付け，器面調整は縦位に行っている。42は口径28cmで直線的に外反した口縁部にやや太目の刻目突帯をもつ土器で，器面は横走するハケ目調整痕がある。43はやや外反する口縁部で頸部に刻目突帯がみられる。44はやや口縁端部で外反するが直線的な口縁部で，やや太目の刻目突帯を付けている土器である。器面は縦走するハケ目調整痕がみられる。45～47は直線的な口縁部で背の低いやや太目の突帯に細長い刻目を施したものである。器面調整は横位に行なっている。48～50は間隔の広い刻目突帯を頸部に付け，口縁部はやや外反するが直線的に傾きを示す土器で器面調整は横位に行なっている。51は直行する口縁部に太目の刻目突帯を付けた土器で横走するハケ目調整痕がある。52・53はやや太目の背の低い刻目突帯を付けた土器である。52は突帯が切れた部分で横位の調整痕があり，53は縦走するハケ目調整痕と補修孔がみられる。54は口径11cmの直行した口縁から胴部で，部分的に刻目を付けた土器である。胴部では厚味がある。55は太目の刻目突帯であり縦位のハケ目調整痕がある。56は刻目の太さが大きい突帯で横位の器面調整がみられる。57は口径31cmで口縁部は若干外反するが胴部まで直線的な傾をもつ土器で太目の断面三角突帯に幅の広い刻目を付けている。器面調整は縦走するハケ目調整痕があり，58～60は刻目突帯の部分で58は口縁部に向って内行する土器である。61は内湾ぎみに直行土器で断面三角突帯に一部の太目の刻目がある土器である。62は口径27cmで61と同形の口縁部であり，断面三角突帯に部分的な刻目が付く土器で縦走するハケ目調整痕がある。63は外反する口縁部で断面三角突帯に刻目が一部付けられている土器で，横位に調整がなされている。64は太目の突帯で63と同形である。65は口径23cmで頸部が締り，口縁部が外反し，胴部が丸味をもつ土器で肩部に背の低い突帯を付け部分的に指圧痕の刻を入れている。器面調整は横位に行なっている。66は口径24cmで65よりも頸部の締りが浅い。器形は65と同形で突帯は細味で指圧痕で刻んでいる。67～69は刻目突帯の部分である。

第3表　第Ⅲ類甕形土器諸訳　(1)

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
26	F—15	13	茶褐色	サンゴ・細石	良	32	C—18	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石	良
27	F—11	19	茶褐色	サンゴ・細石	良	33	C—11	(19)	茶褐色	サンゴ・細石	粗
28	H—17	(19)	茶褐色	サンゴ・細石	良	34	G—4	(19)	茶褐色	サンゴ・細石	粗
29	G—5	(19)	黒茶褐色	サンゴ・細石	良	35	C—18	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石	良
30	B—14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石	良	36	C—14	(19)	明茶褐色	サンゴ・細石	良
31	C—13	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石	粗	37	G—15 C—13 E—19	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石	良

第3表　第Ⅲ類甕形土器諸訳 (2)

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
38	G－5	(19)	明茶褐色	細砂・雲母	良	54	J－23	(19)	黒茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
39		表	明茶褐色	細砂・雲母	良	55	E－16	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
40	F－18	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	56	A・B・C－15	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
41	G－1	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	57	B－12	(19)	黒茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
42	G－5	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	58	G－30	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
43	B－15	(19)	茶褐色	細石・雲母	良	59	C－7	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
44	F－18	(19)	茶褐色	サンゾ・細礫・雲母	良	60	A－14・15	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
45	G－5	(19)	茶褐色	サンゴ・細礫・雲母	良	61	C－21	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
46	B－15	(19)	黒茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	62	C－22	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
47	D－16	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細礫・雲母	良	63	G－50	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
48	D－13	(19)	茶褐色	サンゴ・細礫・雲母	良	64	B－17	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
49	B－15	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	65	F－14	19	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
50	C－15	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	66	J－23	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
51	D－17	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	67	D－16	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	粗
52		(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	68	D－18	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	粗
53	C－15	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	69	B－17	(19)	黒茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良

Ⅳ類 (70～86)

この類は横位の突帯に縦位の突帯を組み合せたものや，横位の突帯が変化したものがある土器である。

70は口径32cmの土器で口縁部が外湾し，肩部から胴部は直線的に外反する器形である。肩部に横位の突帯を付け頸部に逆U字の突帯を付けている。器面調整は荒く縦位に調整痕がみられる。71は縦位に刻目突帯が付けてある土器である。72・73は直行する口縁部で内面から外面まで突帯をまわしている。74は直線的に外反する口縁部で逆U字の突帯を貼り付けている。75は直行する口縁部で縦位に2本の突帯を貼り付けている。76は外湾する口縁部で口縁端部に小さな逆U字の突帯を貼り付けている。77は内湾する口縁部で縦位に突帯を貼り付け中央には孔を設けている。78は若干外反する口縁部で1本の縦位の突帯がある。突帯の半分の部分が割れている。79は直行する口縁に縦位の突帯を貼り付けている。80は横位の突帯に小円の突帯を下に貼り付けている。81は弧状に突帯を貼り付けている。82は横位の突帯の上に小円の突帯を貼り付けている。83は縦位の突帯を貼り付けている。84は若干内湾する口縁部に縦位と横位を組み合せた突帯を貼り付けている。この土器は桃褐色で粒子の荒い胎土であるため他の地域からの移入土器としての性格が強い。85は口径18.5cmで口縁部が直行し，若干肩部が張り，胴部は丸味をもつ土器である。突帯は弧状をなし，4本で1周すると思われる。86は85の形の2本が離れている部分である。

第4表　第Ⅳ類甕形土器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
70	D—22	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	79		表	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
71	C—14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	80	F—15	19	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
72	C—14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	81	D—18	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
73		(19)	黒茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	82	D—15	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
74	I—23	19	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	83	E—22	(19)	明茶褐色	細砂・雲母	良
75	E—21	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	84	C—12	(19)	桃茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
76	G—16	19	暗茶褐色	細砂・サンゴ・雲母	良	85	E—12	19	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
77	B—16	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	86	C—15	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
78	K—23	19	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良						

Ⅴ類（87～96・98～112）

この類は無文土器の土器である。

87は如意状の口縁部で口径19.5cmの土器である。88は口径13.5cmの口縁部から胴部までの土器で頸部が締まり口縁部はやや外反する。胴部は若干丸味をもつ。89は頸部が締まりやや外反する口縁部で口径は17cmである。90は頸部がやや締まり口縁部で器面調整は横位に調整している。91は口縁部がやや外反する口径18cmの土器で，胴部は丸味をもつ，器面調整は横ナデである。92はやや外湾する口縁部である。93は口径16cmで口縁端部が外反し，頸部が締まり，胴部は丸味をもつ土器で器面調整は横ナデのハケ目痕がある。94は口径16.5cmで頸部がやや締まり，胴部は若干丸味をもつ土器である。95は93と同形の口縁部であるが胴の丸味が少ない。口径は20cmで，器面は縦走のハケ目調整痕がある。96はやや外反する口縁部である。98は口径20cmで口縁部がやや外反する土器で胴部は若干丸味をもつ。器面調整は内外面とも縦走のハケ目痕がみられる。99は口径13cmで直行する口縁部で胴部は若干丸味をもつ，器面調整は横位である。100は口径16cmで頸部がやや締まり，口縁部はやや外反，胴部はやや丸味をもつ，器面調整は下位に縦走のハケ目痕がある。102は口径14cmの口縁部で頸部がやや締まり，縦走の器面調整痕がみられる。103・104は直行する口縁部である。105は口径17cmで頸部が若干締まり，口縁部がやや外反するが全体的に直行する土器である。器面調整は縦位である。106・107は直線的な口縁部で107は口唇部が平坦で器面調整は横位のハケ目調整痕がある。108は口径13.5cmで105と同形である。器面調整は横位である。109は口径20cmで直行する口縁部で口唇部は平坦である。110はやや外向する土器で縦走の調整痕がある。111は口径12cmで直行した器形で頸部が締っている土器である。112は口径11.5cmで頸部が締り，口縁部は外反する土器である。

第5表　第Ⅴ類甕形土器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
87	C—21	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	89	C—15	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
88	J—23	19	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	90	G—4	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良

第5表　第Ⅴ類甕形土器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
91	B—14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	103	D—13	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
92	B—15	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	104	B—5	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
93	F—17	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	105	J—23	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
94	F—11	19	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	106	F—C—14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
95	C—12	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	107	J—24	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
96	B—15 土手	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	108	D—17	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
98	B—4	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	109	C—15	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
99	B—14	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	110	C—11	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
100	C—15	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	111	J—23	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
101	F—12	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	112	E—21	(19)	黒茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
102	D—17	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良						良

鉢形土器（113・114・160）

114は口縁部が外行する土器で口径は16cmである。115は口径20cmで肩部で「く」字形に外反するもので，内面にハケ目調整痕が横位にみられる。160は鉢形土器の底部と思われる。底径は55cmで薄手の土器である。

第6表　鉢形土器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
113	C—14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	160	C—15	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
114	C—15	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良						

甕形土器底部（115～161）

底部の底面は葉痕が付く。厚手の底部は 121・127・130・131・133・134・141・144・147・153・157・158・159が上げられ，他は薄手のものである。全体的に底部の縁が張り出した形で，157は2方に角張った底部である。しかし，155・156・158・159・161は丸味をもつ底部である。厚味のある土器は2～2.5cmの厚さで底部をつくっている。

第7表　甕形土器底部諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
115	G—17	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	122	G—16	13	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
116	G—38	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	123	B—17	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
117	G—38	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	124	F—22	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
118	C—15・14 B—15	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	125	D—17	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
119	B—14	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	126	C—14	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
120	C—14	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	127	G—54	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
121	B—6	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	128	G—38	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
129	C—11	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	146	K—24	19	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
130	F—21	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	147	一般	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
131	G—38	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	147	G—50	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
132	B—15	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	149	14 C—15	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
133	C—14	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	150	C— 7	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
134	G—50 B— 8	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	151	J—23	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
135	C—14	(19)	茶褐色	サンゴ・砂石・雲母	良	152	C—14	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
136	一般	(19)	茶褐色	サンゴ・砂砂・雲母	良	153	E—10	19	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
137	一般	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	154	C—13	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
138	F—10	19	暗茶褐色	サンゴ・砂砂・雲母	粗	155	E—12	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
139	一般	表	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	156	B—15	(19)	黒茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
140	G— 6	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	157	G—51	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
141	J—25	19	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	158	B—15	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
142	B—14	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	159	D—13	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
143	G—56	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	160	C—15	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
144	D—17	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	161	B— 7	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
145	C—14	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良				茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良

壺形土器

Ⅰ類（162）

162は口縁が締まり，口径が6cmである。頸部に2本の平行沈線文を付けている。

Ⅱ類（163）

この類は突帯文と沈線文を組み合せた土器で163があたる，口径が7.5cmで直行する口縁部で頸部に断面三角突帯を付け口縁部の文様と突帯部の刻目を連結している。器形としては肩部が張る土器である。

Ⅲ類（164・166～175）

この類は刻目突帯を付けた土器を示す。164は口縁部が比較的長く，背の低い刻目突帯を付けている。口径は6.5cmである。166は口縁部が比較的短く，間隔の狭い刻目突帯を頸部に付けている。口径は5.5cmである。肩は強く張らない。167は内行した口縁に刻目突帯を付けている土器である。168は直行する口縁部で頸部より屈曲している。169～175は頸部に刻目突帯が貼り付けられたナデ肩の肩部をもつ土器である。175は頸部から胴部にかけての土器で球状の胴部である。

Ⅵ類（181・165）

この類は突帯文のある土器である。口径は11.5cmで広口である。突帯は背が低く，めり張り

がない。壺形土器Ⅴ類に入れたが，165は頸部に段があり突帯に近い形をしているので，この類に近いと思われる。

Ⅴ類（176～180，182・183）

この類は無文土器である。

165は口径4cmでナデ肩の土器である。器形は，Ⅰ・Ⅱ類の土器と同じく，口径が比較的小さい。167は口径が10.5cmで口縁端部は外反している。177は口径11cmで，176より口縁部は短く肩は張るタイプと思われる。178は口径9cmで口縁部は直行し，短い肩張りの土器と思われる。179は口径12.5cmで，口縁部は短く外曲している。180は口径6.5cmで小壺で，ナデ肩である。182は口縁部が大きく外曲する土器である。183は口径7cmでナデ肩の土器と思われる。

壺形土器の胴部ないし底部（184～194）

194はナデ肩の土器で頸部から胴部にかけての土器である。185・186は胴部である。187は胴部から底部近くまである土器で胴部に穿孔がある。器面調整は表が横位で，裏は上部が縦位・中部が横位・下部が縦位である。イカリ肩の器形である。188はナデ肩の壺の肩部，胴部である。肩が張らない丸味のある胴部の器面調整は横位である。189・190は肩部でイカリ肩の器形である。横調整と縦調整で器面が整っている。191～194は底部である。191は若干上げ底気味の平底で，底径が9.5cmである。192は平底で底径が6.5cmある。193は小形の壺の底部で底径が4.2cmの平底である。194は丸底気味の平底で底径が6.5cmある。立ち上りは急である。

第8表　壺形土器諸訳（1）

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
162	K－24	19	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	178	F－17	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
163	G－50	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	179	F－21	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
164	D－13	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	180	G－21	19	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
165	E－15	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	181	J－23	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
166	C－11	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	182	C－19	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
167	C－11	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	183	G－26	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
168	C－14	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	184	C－7	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
169	A・B・C-15	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	185	C－7	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
170	・般	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	186	B－6	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
171	B－14	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	187	C－15	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
172	B－13	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	188	B－5	(19)	黒茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
173	B－16	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	189	F－15	19	暗茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
174	G－50	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	190	G－18	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
175	C－22	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	191	G－18	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
176	D－22	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	192	B－8	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
177	・般	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	193	B－8	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良

第8表　壺形土器諸訳 (2)

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
194	G－4	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良

土師器 (195～209)

195～205はは土師器の甕形土器，206は黒色土器の坏である。207～209は布目痕のある土器である。195は口径22.6cmで厚味のある口縁が,「く」字に曲り内面はヘラケズリがみられる。196は口径18cmで厚味のある口縁が「く」字に折れ内面はヘラケズリがみられる。197は口径14cmで「L」字に近い口縁部である。内面はヘラケズリ調整している。この土器は 175・196 より胴部は直行する，198～205 は「く」字状の口縁部で内面は，ヘラケズリ調整がある土器である。206 は口径16.5cmで口縁部が丸味をおびた若干外反する坏である。胎土も黒色で器面も黒色である。207～209は内面に布目痕がみられる土器で硬質の土器である。器形は不明。

第9表　土師器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
195	L－23	19	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母		203	C－14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
196		(19)	黒茶褐色	サンゴ・細石・雲母		204	C－14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
197	B－6	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母		205	G－26	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
198	C－14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母		206	C－14	(19)	黒色	サンゴ・細砂・	硬質
199	C－14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母		207	C－14	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	硬質
200	D－11	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母		208	C－14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	硬質
201	・般	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母		209	C－14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	硬質
202	G－38	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母							

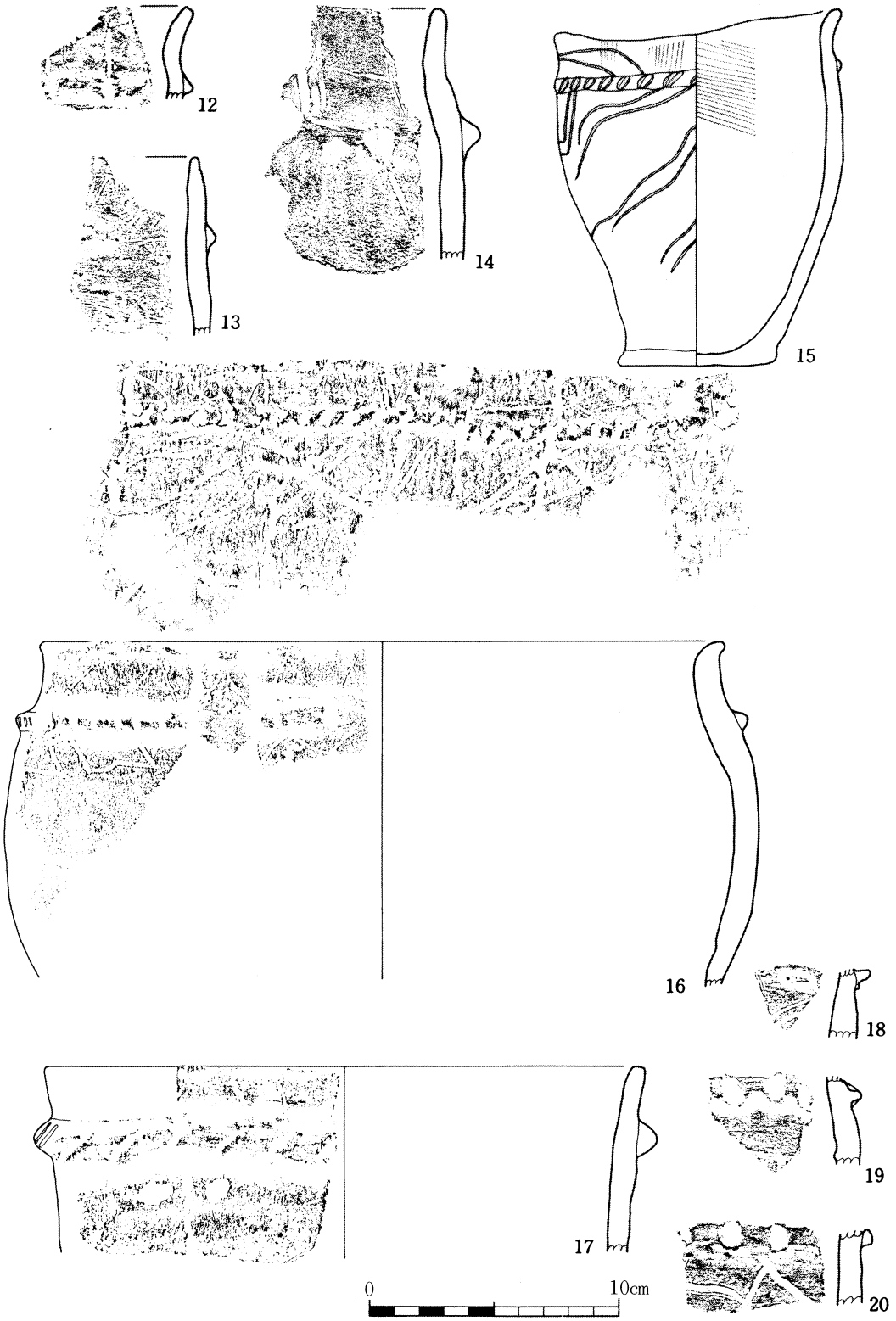
2）石器 (210～221)

石器は,36点出土した。主にタタキ石・凹石・スリ石の類であった。210は球状の石器である。211 ～ 221はタタキ石と凹石の二つの用途が行なわれている。また216 ～ 218・221は,スリ石の類でクガニイシと呼ばれている石器である。

第10表　石器諸訳 (1)

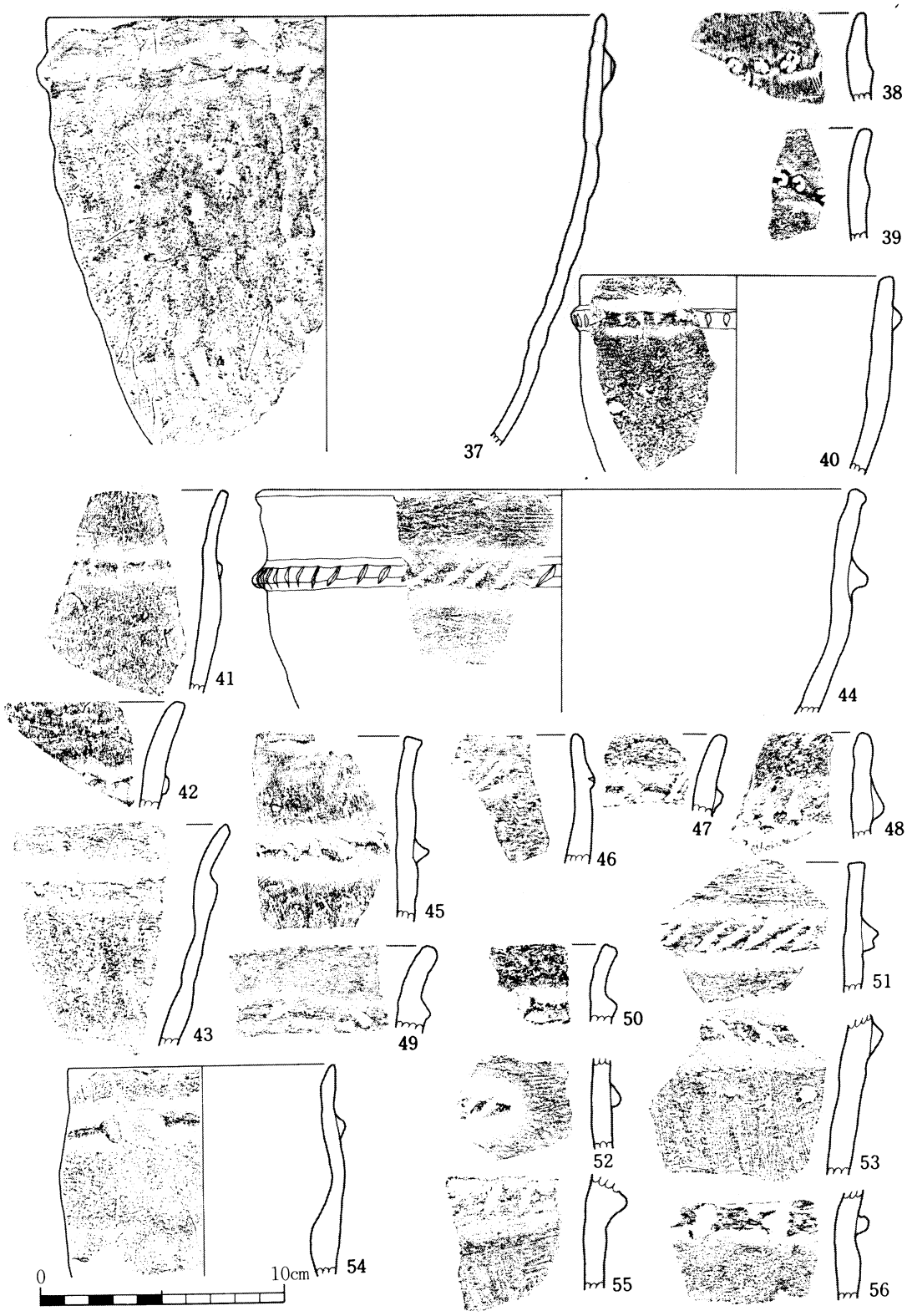
番号	挿図番号	出土区	層位	法量(cm)	重量(g)	石材	用途
1	210	J－24		7.1×6.9×6.0	440	泥岩	敲石
2	211	F－11		15.3×7.3×5.7	965	砂岩	凹石・敲石
3	212	L－30		20.4×12.0×8.1	2,850	砂岩	凹石
4	213	E－21		12.1×8.6×6.3	1,000	石英班岩	凹石・敲石
5	214	B－15		9.3×5.6×2.9	275	砂岩	凹石・敲石
6	215	J－24		14.0×9.7×4.9	1,150	安山岩	敲石

第22図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(1)　甕第Ⅰ類・第Ⅱ類

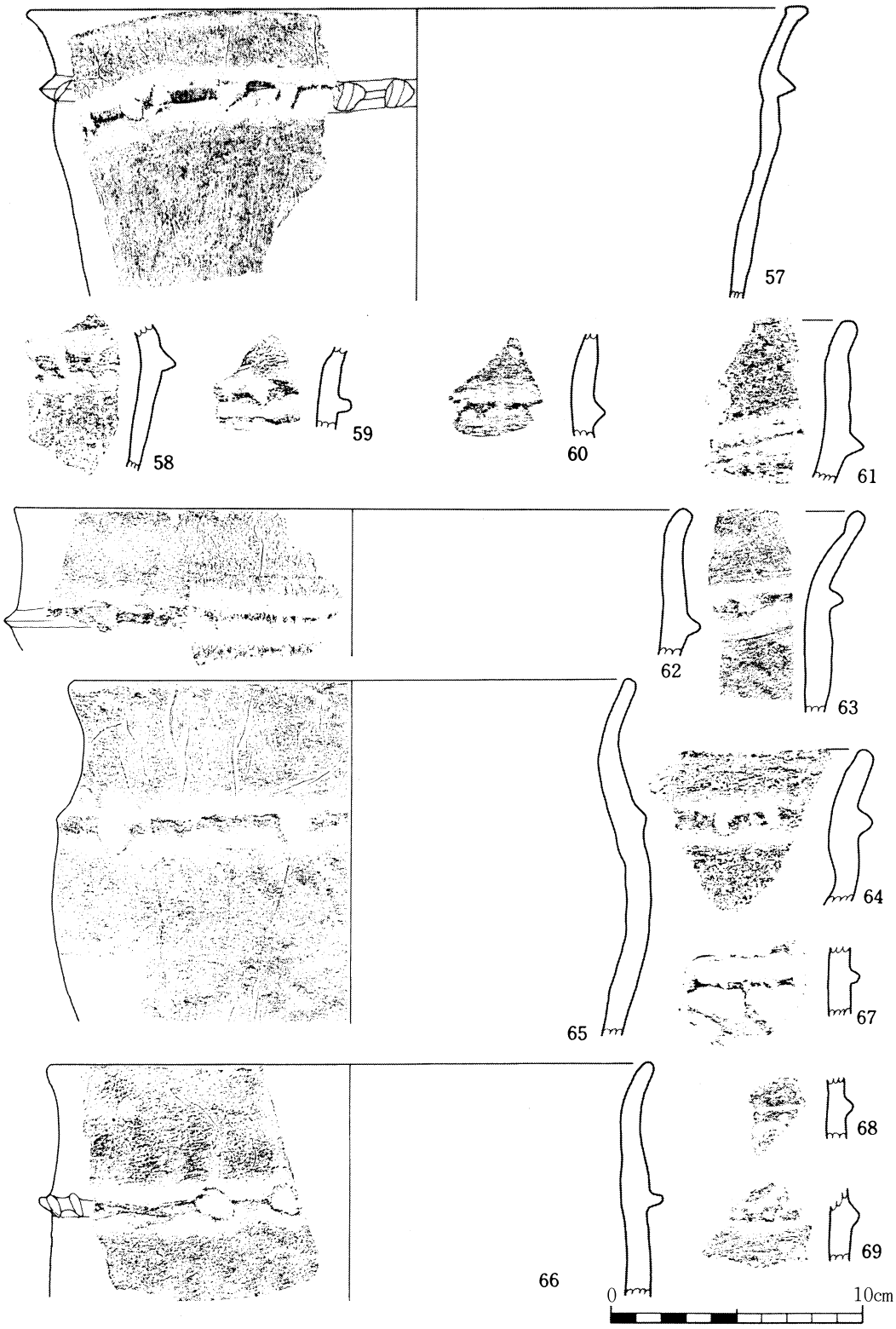


第23図　長浜金久第Ⅰ遺跡出土の土器実測図(2)　甕第Ⅱ類

第24図　長浜金久第Ⅰ遺物の土器実測図(3) 甕第Ⅱ類・第Ⅲ類

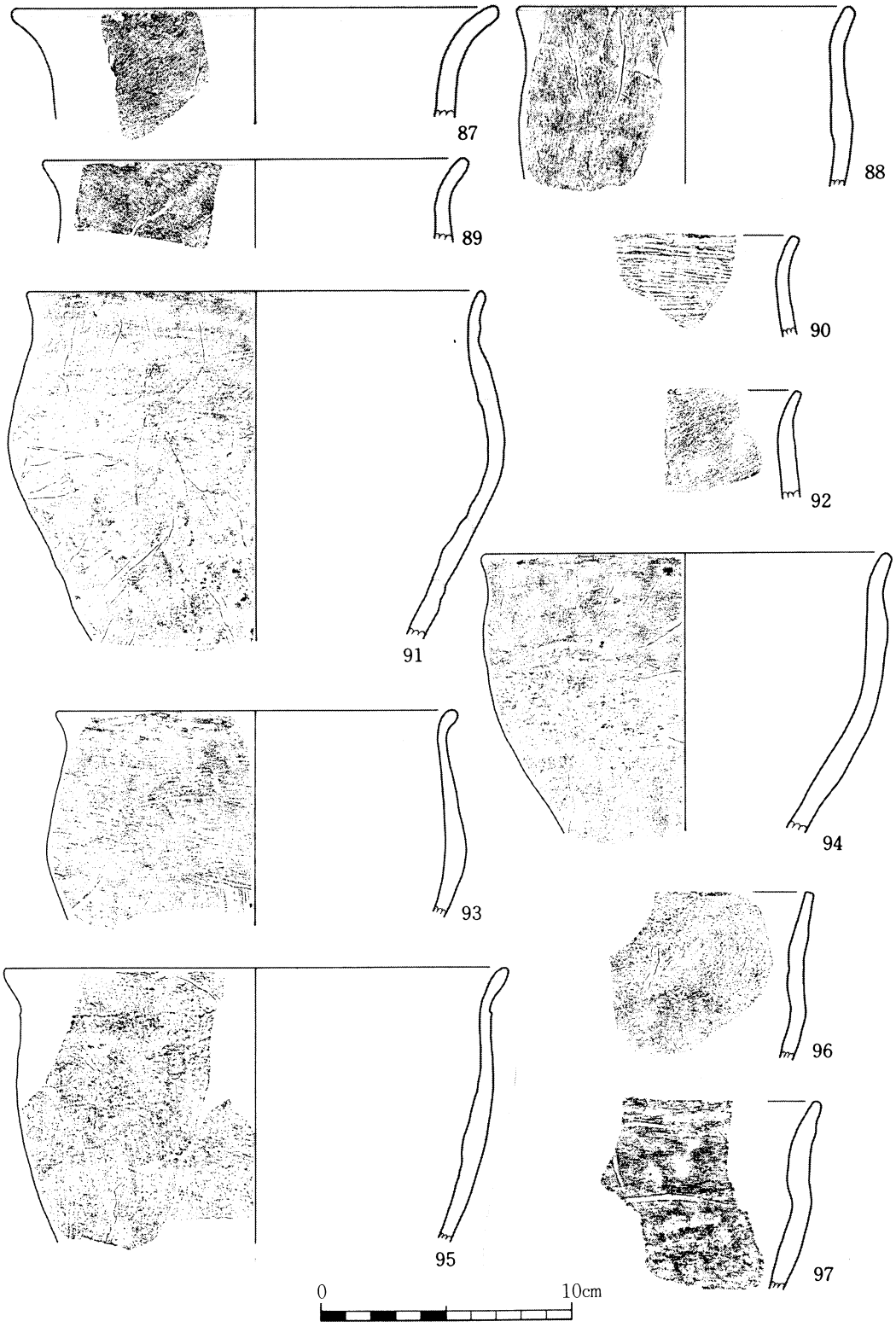


第25図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(4)　甕第Ⅲ類

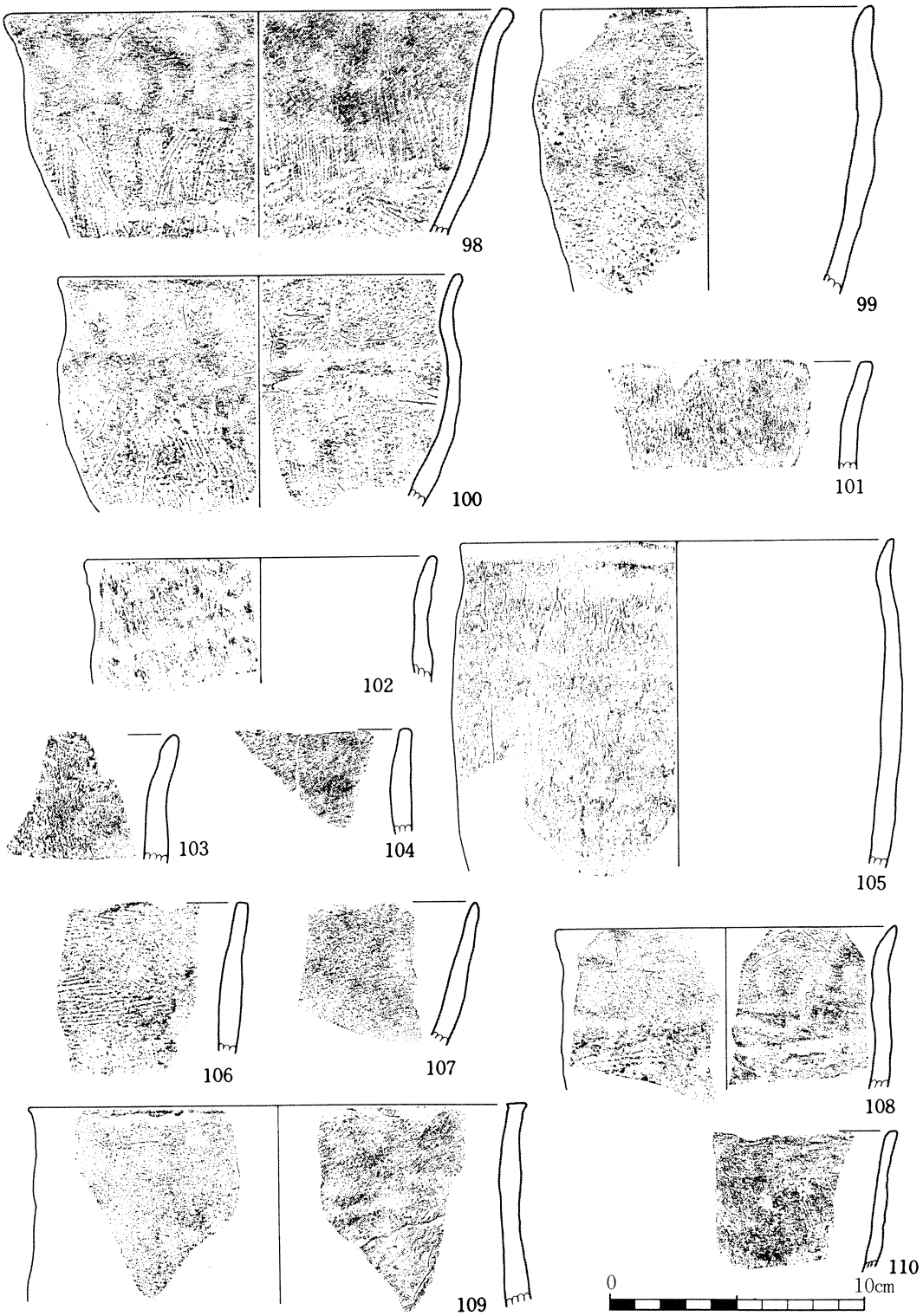


第26図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(5)　甕第Ⅲ類

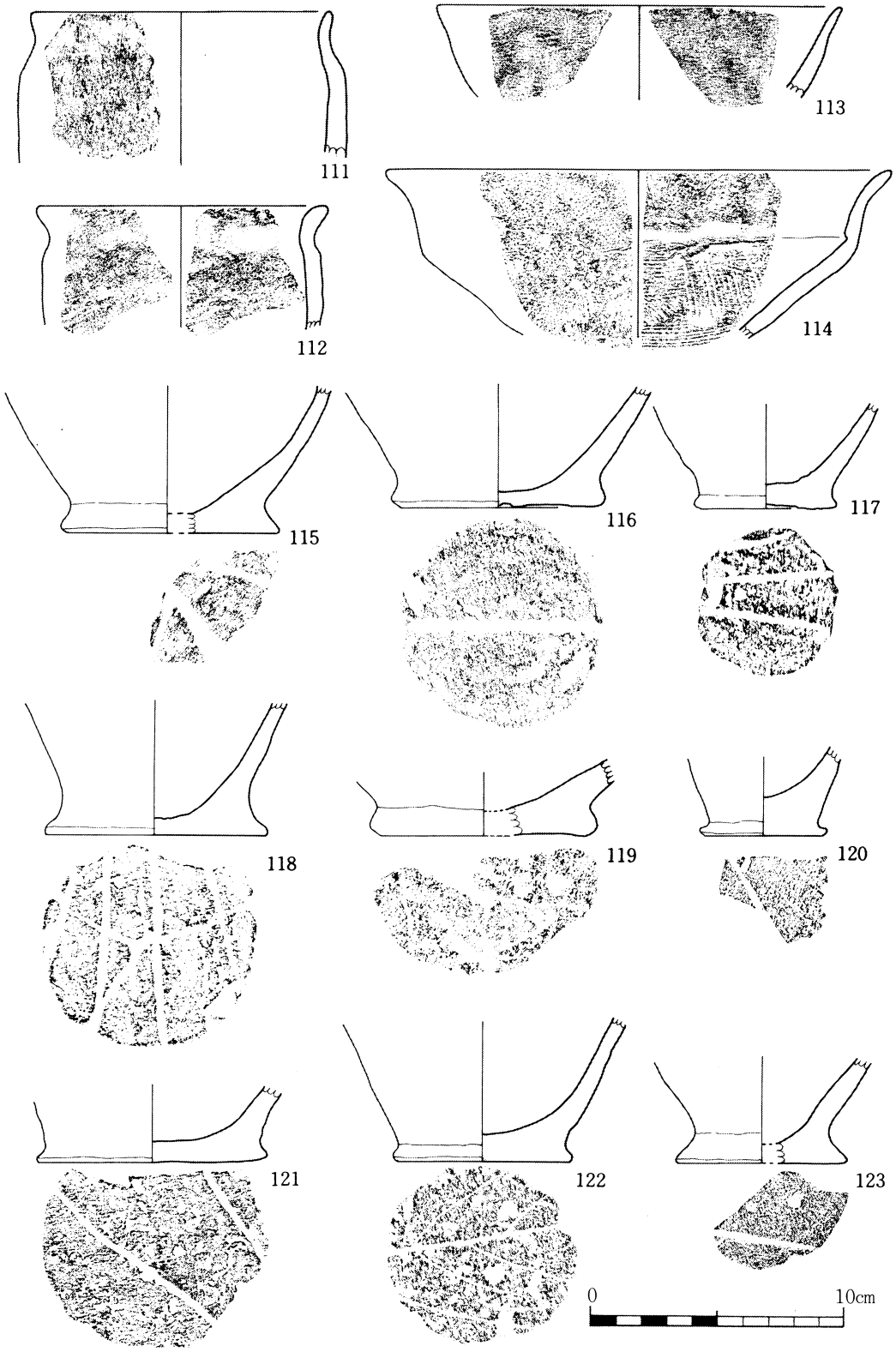
第27図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(6)　甕第Ⅳ類



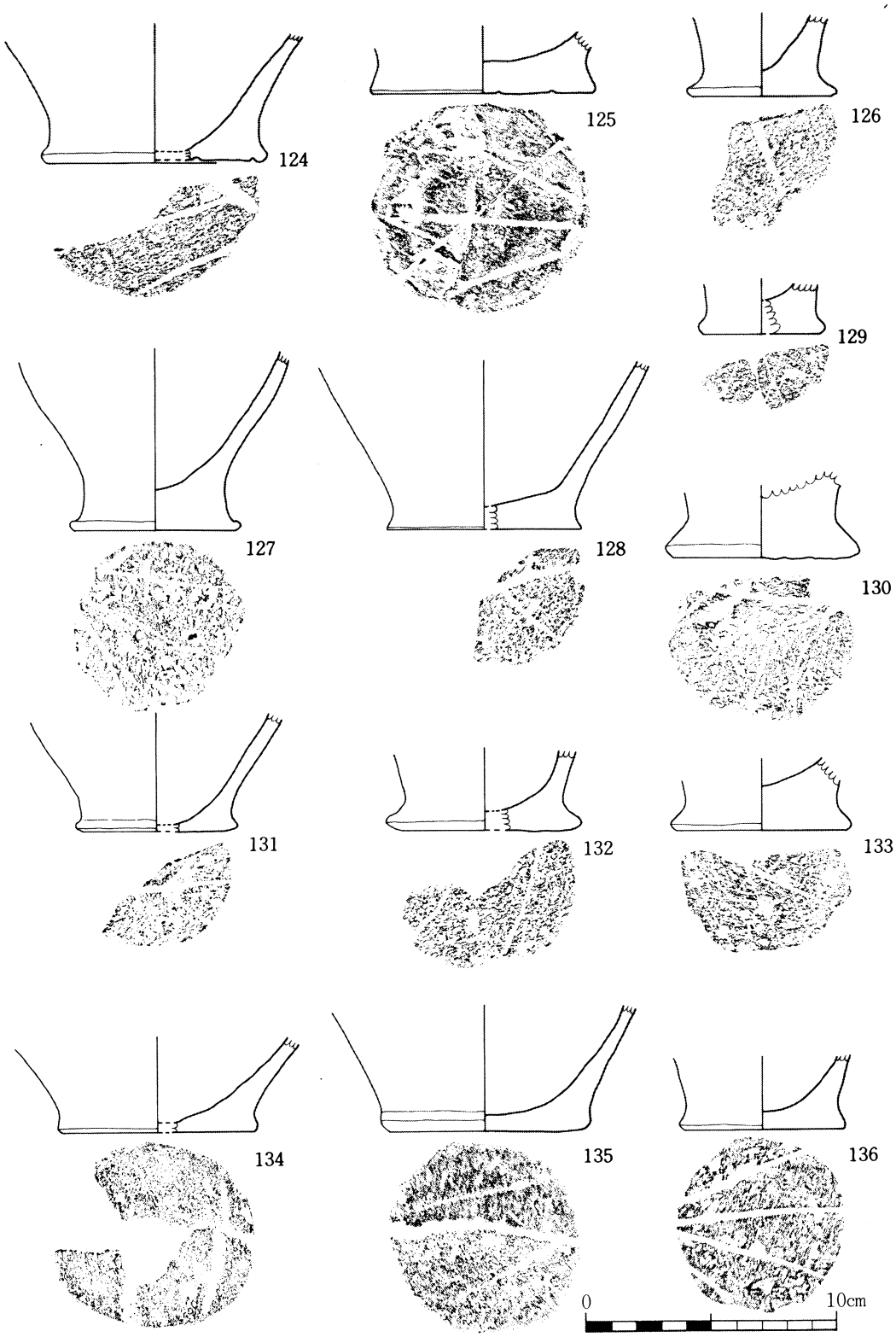
第28図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(7)　甕第Ⅴ類



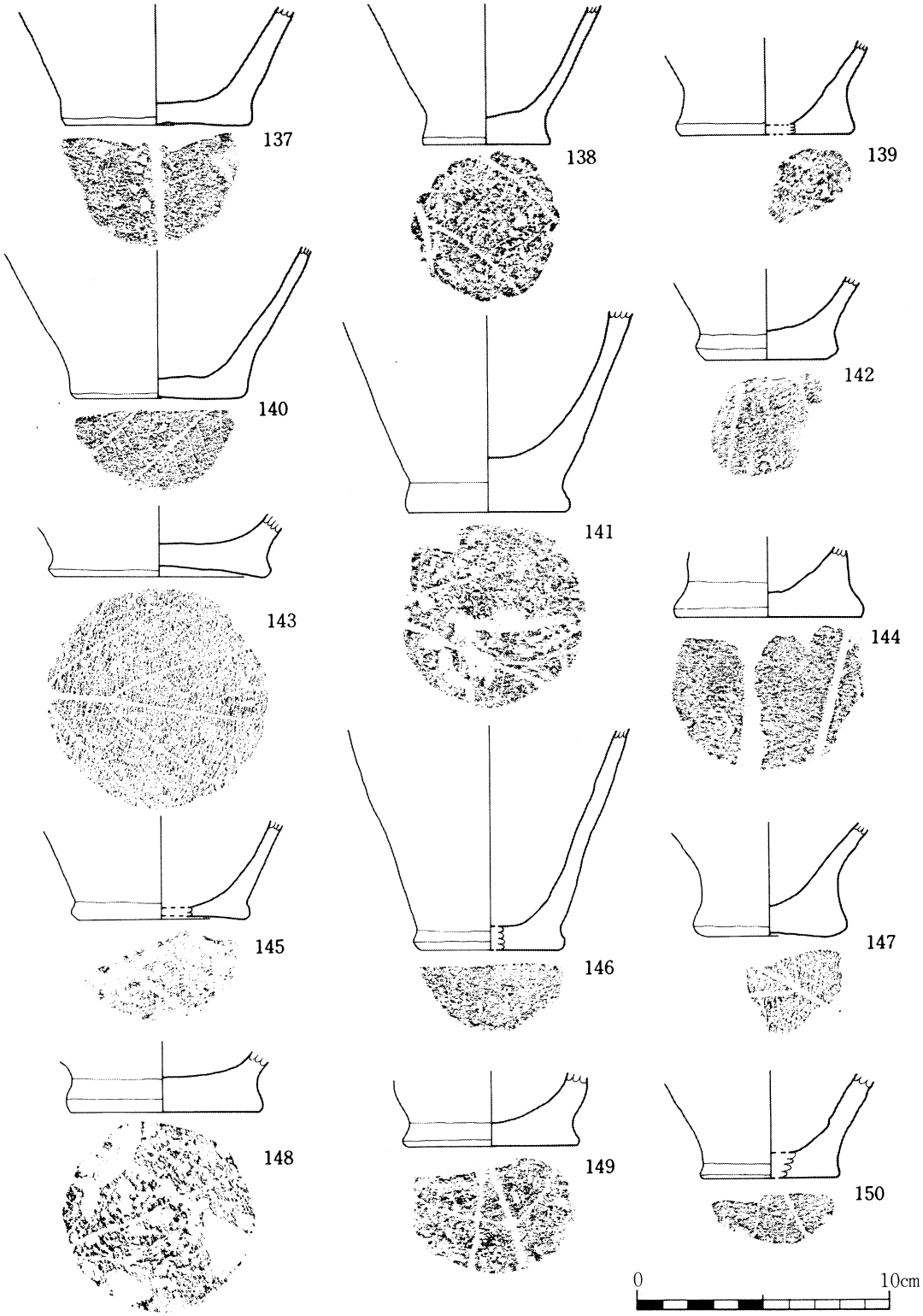
第29図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(8)　甕第Ⅴ類



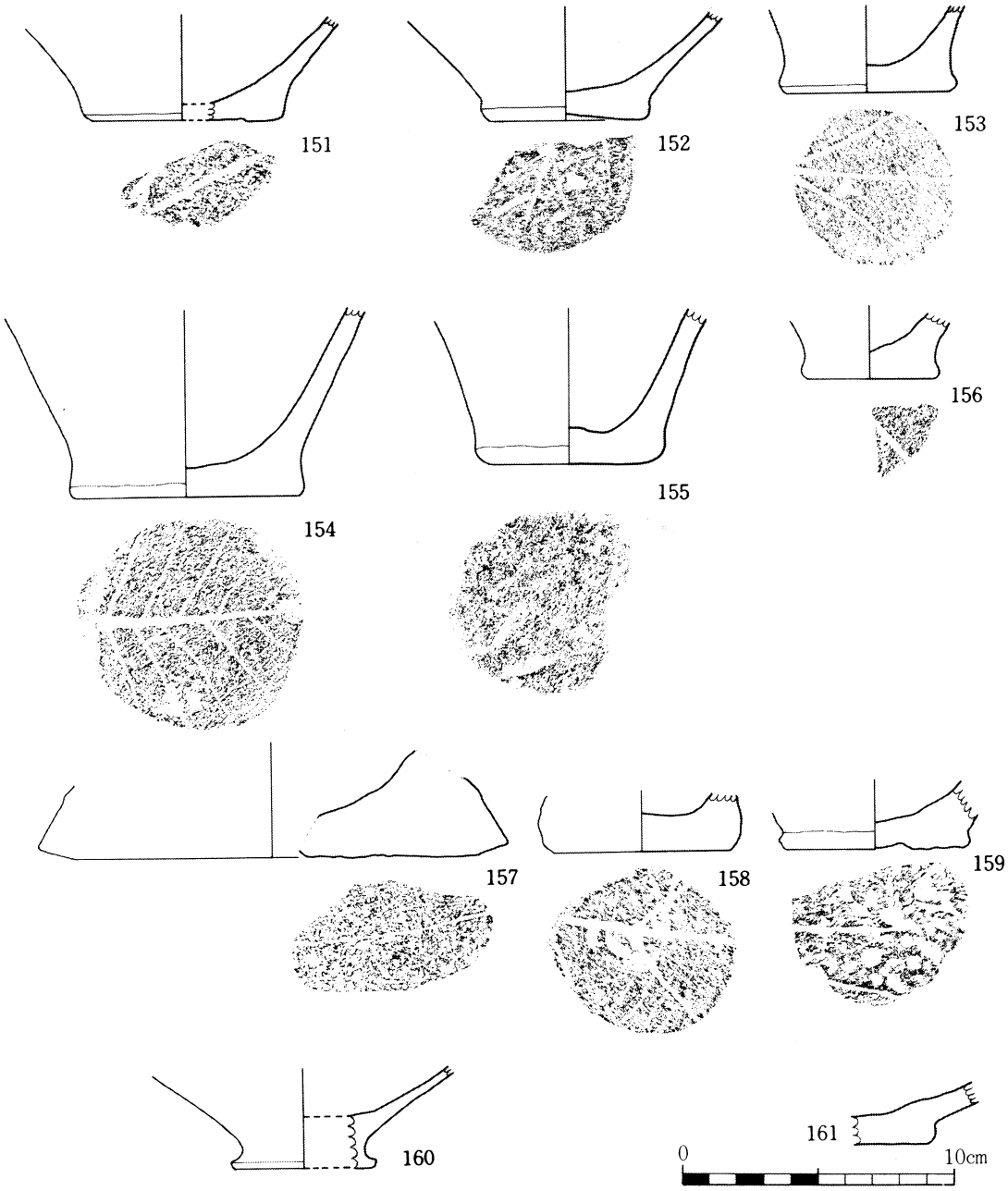
第30図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(9)　甕底部



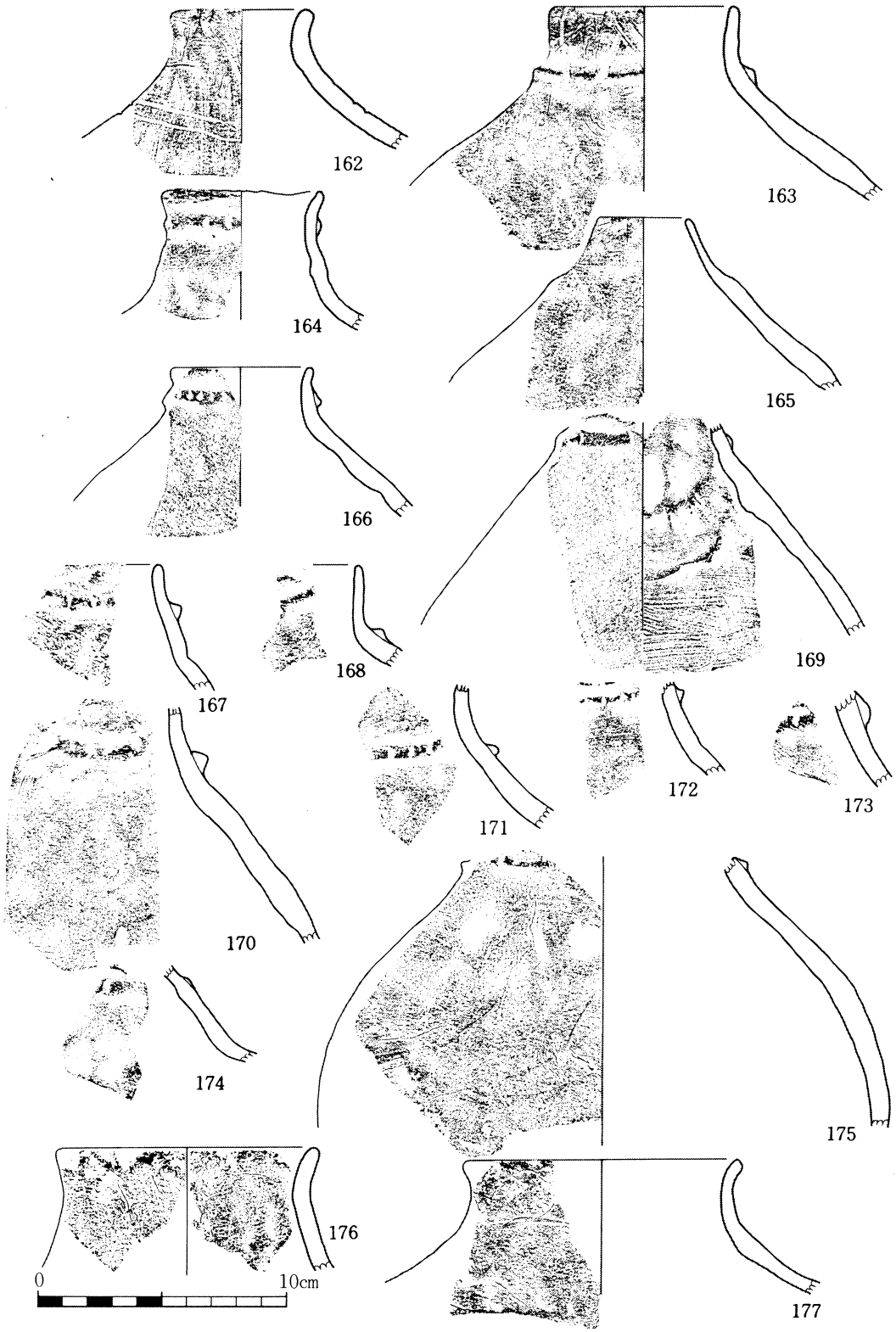
第31図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(10)　甕底部



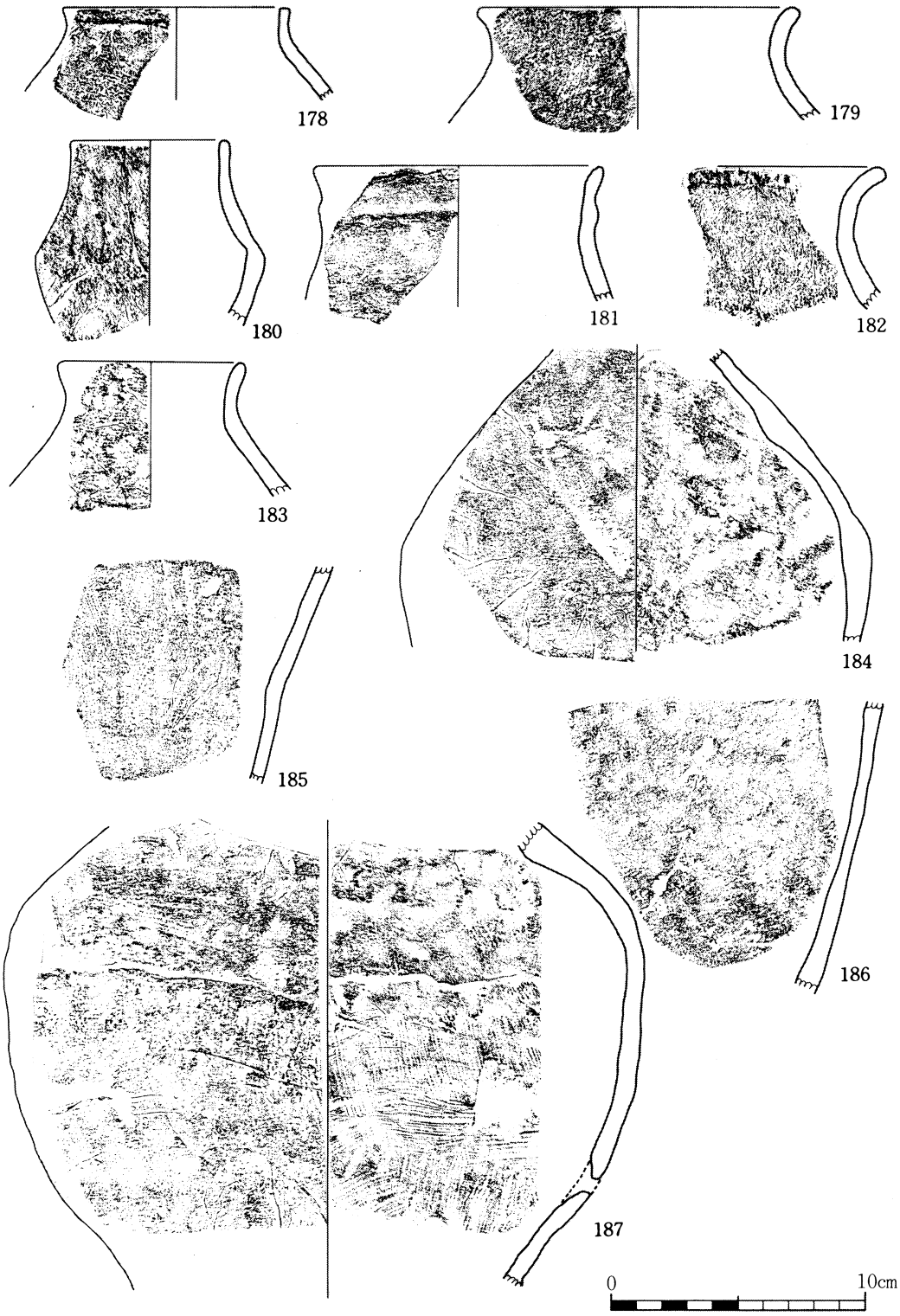
第32図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物実測図(11)　甕底部



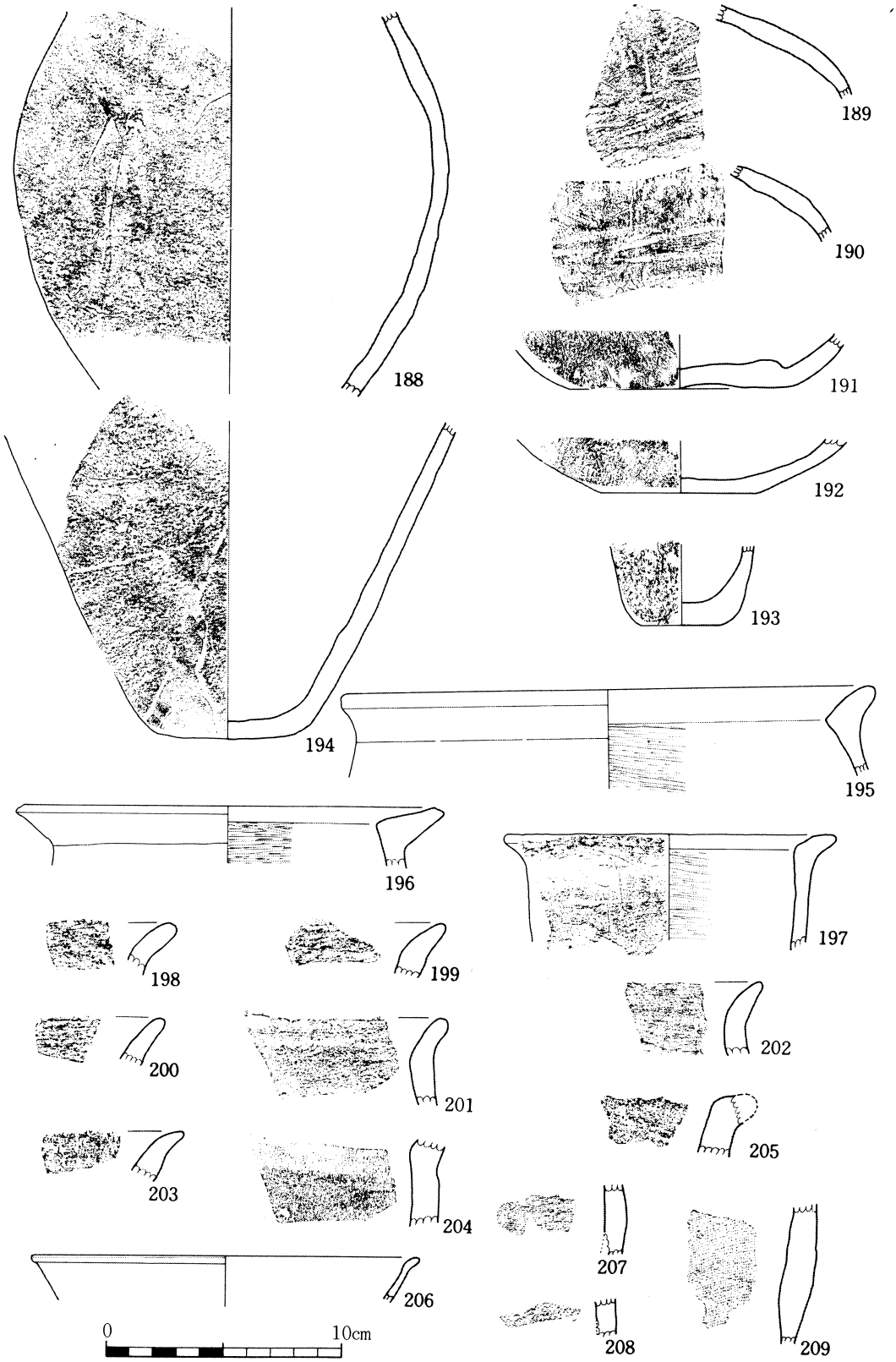
第33図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(12)　甕底部



第34図　長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況図(13)　壺Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類



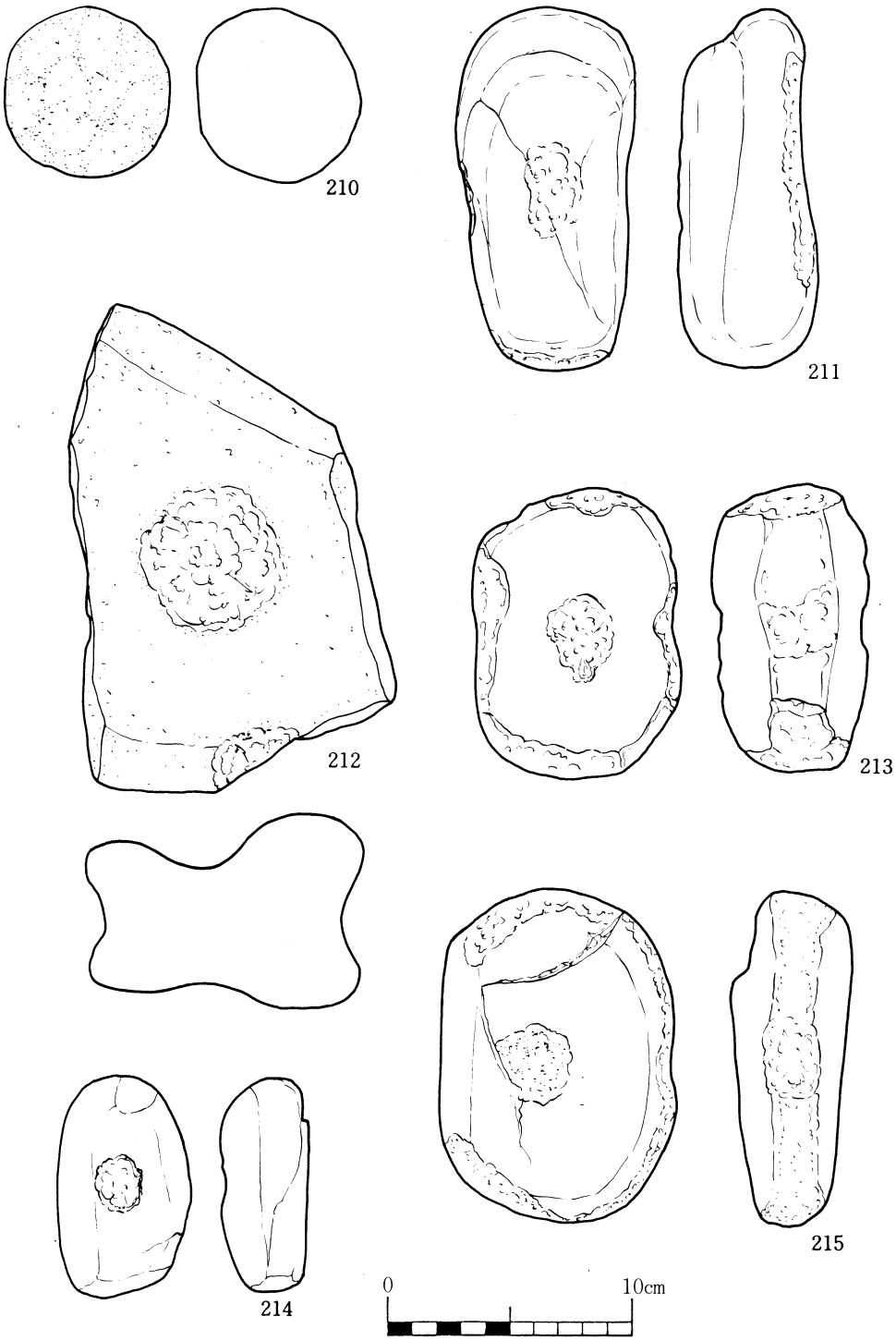
第35図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(14)　壺Ⅴ類・胴部



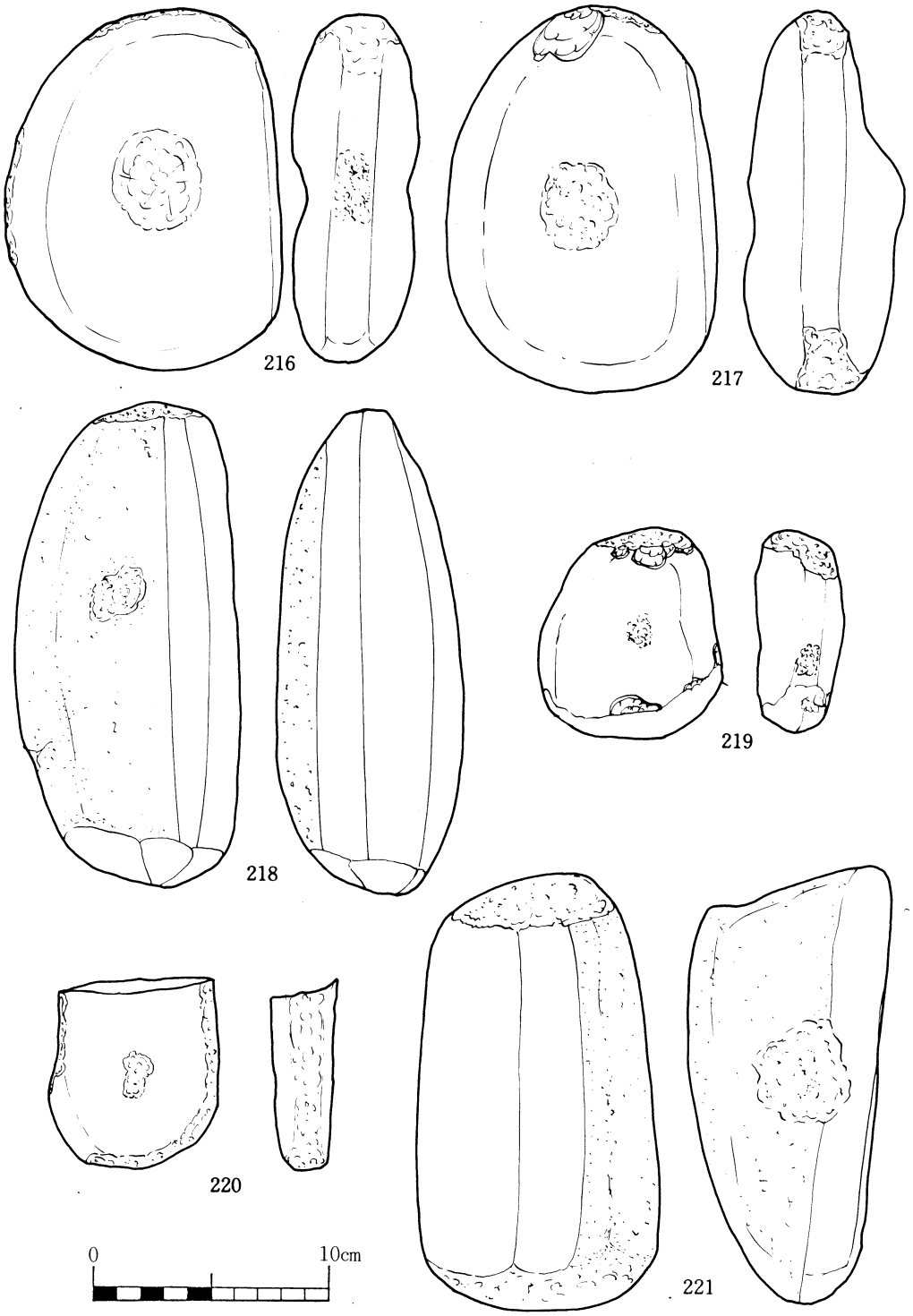
第36図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(15)　壺ー肩・胴・底部・土師器・布目圧痕土器

第10表　石器諸訳 (2)

番号	挿図番号	出土区	層	法量(cm)	重量(g)	石材	用途
7	216	D — 15	(19)	15.6×11.9×4.5	1,750	ひん岩	凹石
8	217	G — 8	(19)	16.9×11.4×6.7	1,800	安山岩	凹石
9	218	G — 50	(19)	21.0×9.7×5.9	2,280	粗粒砂岩	クガニイシ
10	219	C — 15	(19)	9.1×7.9×3.6	405	砂岩	凹石敲石・
11	220	K — 24	(19)	8.1×7.3×2.6	280	砂岩	凹石・敲石
12	221	G — 50	(19)	18.8×10.3×7.6	2,500	粗粒砂岩	クガニイシ
13		D — 11	(19)		610	砂岩	凹石
14		C — 15	(19)		160	砂岩	敲石
15		G — 5	(19)		321	砂岩	敲石
16		G — 44	(19)		354	泥岩	敲石
17		C — 13	(19)		272	石灰質泥岩	敲石
18		B — 17	(19)		239	砂岩	敲石
19		C — 14	(19)		423	砂岩	敲石
20		C — 15	(19)		321	砂岩	敲石
21		D — 17	(19)		360	砂岩	凹石
22		一般	(19)		76	軽石	敲石
23		D — 13	(19)		96	粗粒砂岩	敲石
24		E-16-9	(19)		1,370	粗粒砂岩	敲石
25		B — 11	(19)		240	砂岩	敲石
26		一般	(19)		28	軽石	敲石
27		B — 48	(19)		313	粗粒砂岩	敲石
28		G — 11	(19)		474	礫質砂岩	敲石
29		一般	(19)		268	砂岩	敲石
30		D — 11	(19)		530	花崗閃緑岩	敲石
31		C — 30	(19)		980	砂岩	凹石
32		M — 29/30	(19)		374	粗粒砂岩	凹石
33		M — 29/30	(19)		232	砂岩	敲石
34		L — 30	(19)		240	砂岩	敲石
35		K — 23	19		147	砂岩	敲石
36		F — 12	19		1,040	砂岩	敲石



第37図　長浜金久第Ⅰ遺跡の石器実測図(1)



第38図　長浜金久第Ⅰ遺跡の石器実測図(2)

3）貝製品

1．有孔貝

この貝製品は93点出土している。文化層が重なった場所に多く出土し，層が分かれた所では第19層が3点，第13層が1点であった。本遺跡ではB－9区に一括して紐を通した状態で37点が出土した。大きさは 6.4×5.0cm のメンガイ類が一番大きく，他は4～2cm位のメンガイ類が33点，他の貝が4点出土している。一括貝以外ではメンガイが37点，カワラガイが9点，ツキガイが1点，ヒメジャコが1点，イボアナゴが1点，アラスジケマンが1点，ウチワガイが3点，ソメワケグリが5点出土している。用途としては紐を孔に通して使用したと思われる。

第11表　有孔貝指訳 (1)

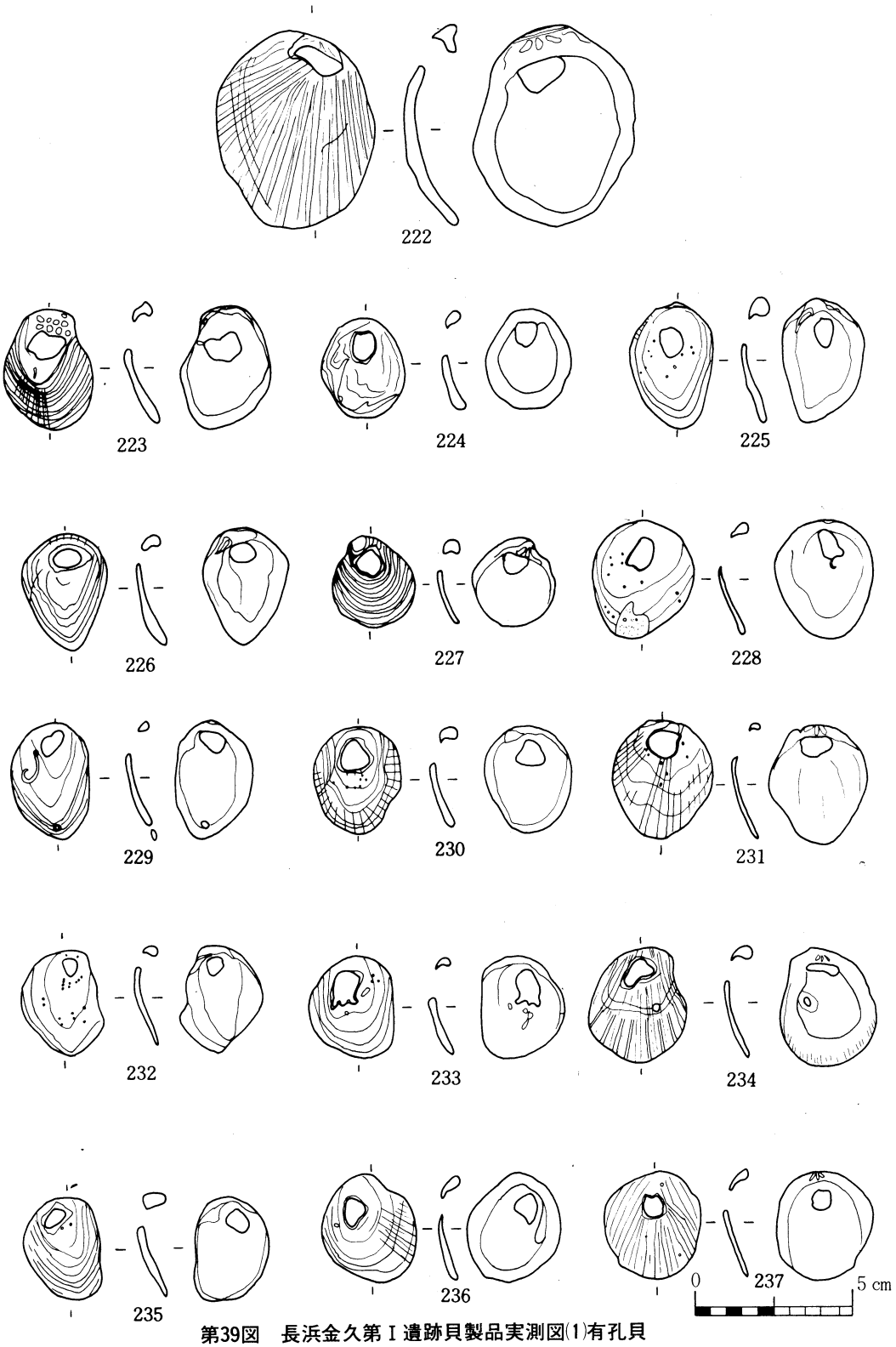
No.	遺物番号	挿図番号	出土区	層	大きさ(cm)	厚味(cm)	重量(g)	孔　径	貝の種類
1	56	222	B－9	(19)	6.4×5.0	0.35	26.5	1.3×1.5	ミヒカリメンガイ
2	36	223	〃	(19)	3.8×2.8	0.2	6.5	0.9×1.2	〃
3	21	224	〃	(19)	3.3×2.6	0.25	3.9	0.8×0.8	〃
4	20	225	〃	(19)	4.0×2.1	0.2	4.7	0.9×0.7	〃
5	37	226	〃	(19)	3.7×2.7	0.2	5.6	0.7×0.9	〃
6	29	227	〃	(19)	2.9×2.1	0.2	2.5	0.8×0.8	オイノカガミ
7	22	228	〃	(19)	3.8×3.2	0.1	5.5	1.0×0.7	ミヒカリメンガイ
8	38	229	〃	(19)	3.7×2.5	0.2	2.8	1.0×0.8	〃
9	30	230	〃	(19)	3.4×2.8	0.2	4.5	1.0×1.0	〃
10	24	231	〃	(19)	3.8×3.1	0.15	3.0	1.1×1.0	〃
11	39	232	〃	(19)	3.4×2.5	0.16	3.2	0.7×0.5	〃
12	31	233	〃	(19)	3.2×2.7	0.2	3.2	1.2×0.9	〃
13	23	234	〃	(19)	3.6×3.1	0.18	3.6	0.7×0.8	〃
14	40	235	〃	(19)	3.2×2.4	0.25	3.7	0.7×0.7	〃
15	32	236	〃	(19)	3.4×3.0	0.1	3.5	1.0×0.7	〃
16	25	237	〃	(19)	3.4×3.0	0.15	2.7	0.6×0.7	〃
17	26	238	〃	(19)	3.4×3.1	0.2	4.2	1.1×0.8	〃
18	27	239	〃	(19)	3.2×2.9	0.17	4.0	0.9×1.1	〃
19	33	240	〃	(19)	3.9×2.7	0.18	5.5	1.2×1.0	〃
20	28	241	〃	(19)	3.2×3.0	0.2	3.1	1.6×1.1	〃
21	41	242	〃	(19)	3.0×2.6	0.25	2.7	0.7×0.7	キクザル
22	34	243	〃	(19)	3.4×2.9	0.1	4.2	1.7×0　7	メンガイ
23	35	244	〃	(19)	4.4×3.1	0.3	13.0	1.1×0.7	ソメアケガシラ
24	42	245	〃	(19)	3.9×3.4	0.2	8.1	0.9×0.8	ミヒカリメンガイ

第11表　有孔貝諸訳 (2)

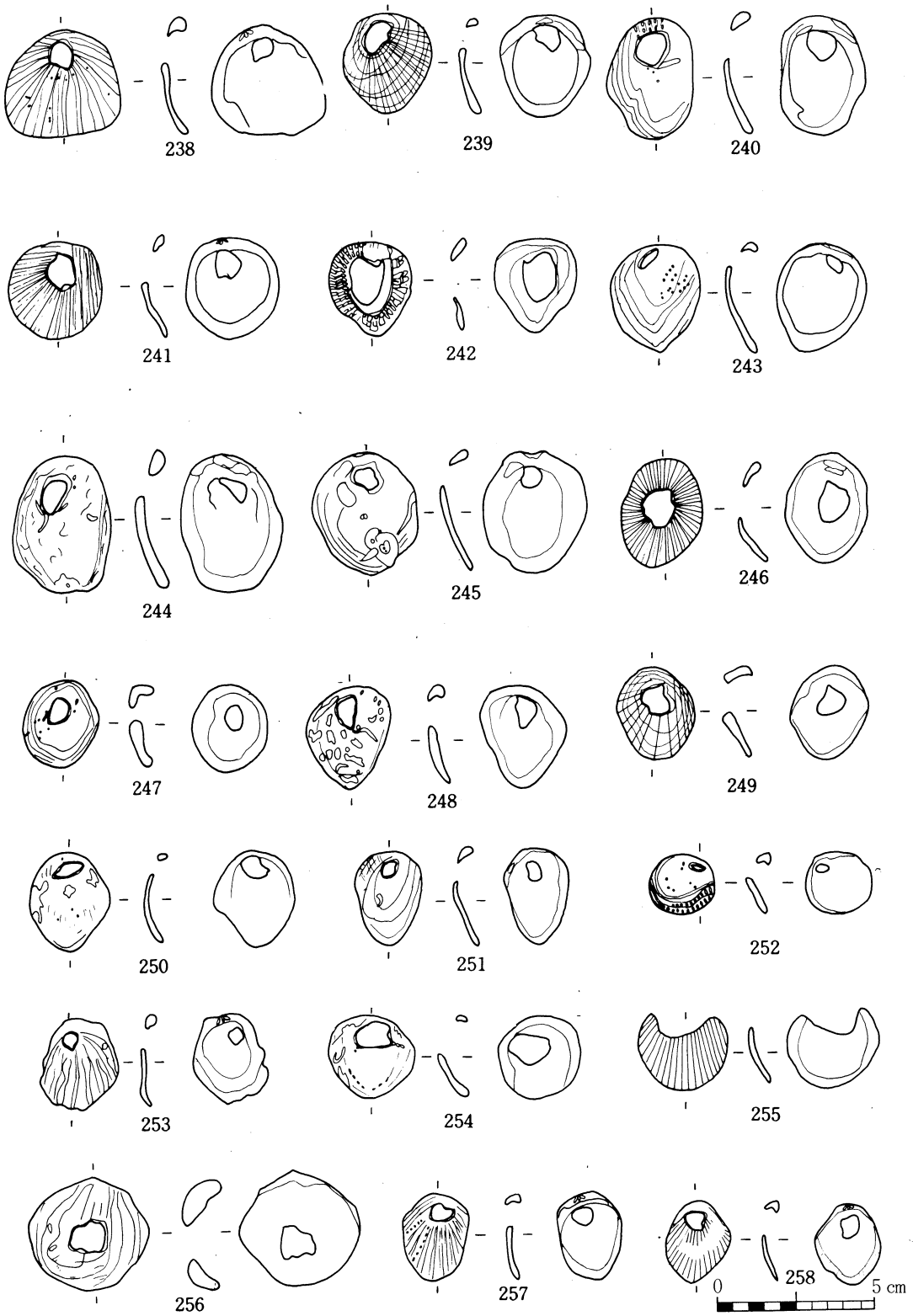
No.	遺物番号	挿図番号	出土区	層	大きさ(cm)	厚味(cm)	重量(g)	孔　径(cm)	貝の種類
25	45	246	B－9	(19)	3.4×2.6	0.2	3.1	1.3×1.1	オオツタノハ
26	43	247	〃	(19)	2.8×2.4	0.4	5.2	0.8×0.6	ミヒカリメンガイ
27	44	248	〃	(19)	3.3×2.2	0.25	3.9	1.0×0.6	〃
28	48	249	〃	(19)	3.0×2.5	0.35	3.8	0.9×0.9	〃
29	46	250	〃	(19)	3.1×2.6	0.1	2.9	0.6×0.6	〃
30	47	251	〃	(19)	3.0×1.9	0.15	1.9	0.6×0.4	〃
31	51	252	〃	(19)	1.9×2.1	0.2	1.7	0.4×0.4	〃
32	49	253	〃	(19)	2.8×2.4	0.15	1.9	0.5×0.5	〃
33	50	254	〃	(19)	2.7×2.7	0.2	3.5	1.3×1.0	〃
34	54	255	〃	(19)	1.7×2.7	0.2	1.5		〃
35	55	256	〃	(19)	3.6×3.9	0.7	9.7	1.1×1.1	〃
36	52	257	〃	(19)	2.9×2.0	0.15	1.7	0.6×0.7	〃
37	53	258	〃	(19)	2.6×2.11	0.1	0.9	0.7×0.5	〃
38	33	259	F—12	19	9.0×10.4	0.45	82	2.7×1.3	ツキガイ
39	26	260	K—23	19	5.0×7.2	0.3	59.9	0.9×1.4	ヒメジャコ
40	27	261	一　般	(19)	5.2×3.6	0.35	8.7	0.9×1.0	イボアナゴ
41	74	262	一　般	(19)	2.2×2.3	0.3	2.5	0.7×0.6	ウチワガイ
42	73	263	G－7	(19)	2.9×2.6	0.3	2.9	1.7×0.8	〃
43	29	264	D—16	(19)	1.8×2.2	0.25	1.7	0.5×0.7	〃
44	30	265	C—15	(19)	2.9×3.5	0.15	4.4	0.9×1.0	アラスジケマン
45	72	266	B－5	(19)	22．8×3.2	0.3	3.8	0.8×0.7	ソメワケグリ
46	22	267	一　般	一般	2.9×3.0	0.3	3.0	0.8×0.1	〃
47	28	268	C—15	(19)	3.5×3.6	0.3	6.2	1.1×0.9	〃
48	25	269	B－7	(19)	2.8×3.3	0.3	5.1	0.6×0 5	〃
49	23	270	一　般	一般	3.1×3.2	0.15	4.0	0.4×1.6	〃
50	37	271	G—25	(19)	5.0×4.5	0.25	16.9	0.3×0.9	カワラガイ
51	31	271	G—31	(19)	5.0×4.4	0.3	13.6	0.6×0.6	〃
52	1	273	G—31	(19)	5.0×4.2	0.2	14.7	1.6×0.9	〃
53	34	274	C—18	(19)	5.3×4.2	0.3	16.1	1.0×0.8	〃
54	36	275	G—12	19	4.6×4.0	0.2	12.0	1.3×0.8	〃
55	3	276	G—31	(19)	4.5×4.0	0.2	9.9	1.5×0.9	〃
56	35	277	H—11	13	4.1×5.5	0.3	8.7	0.3×0.7	〃
57	2	278	B－7	(19)	4.6×4.0	0.15	9.7	0.8×1.0	〃
58	19	279	一　般	一般	4.4×3.7	0.15	4.0	1.0×1.0	ミヒカリメンガイ

第11表　有孔貝諸訳 (3)

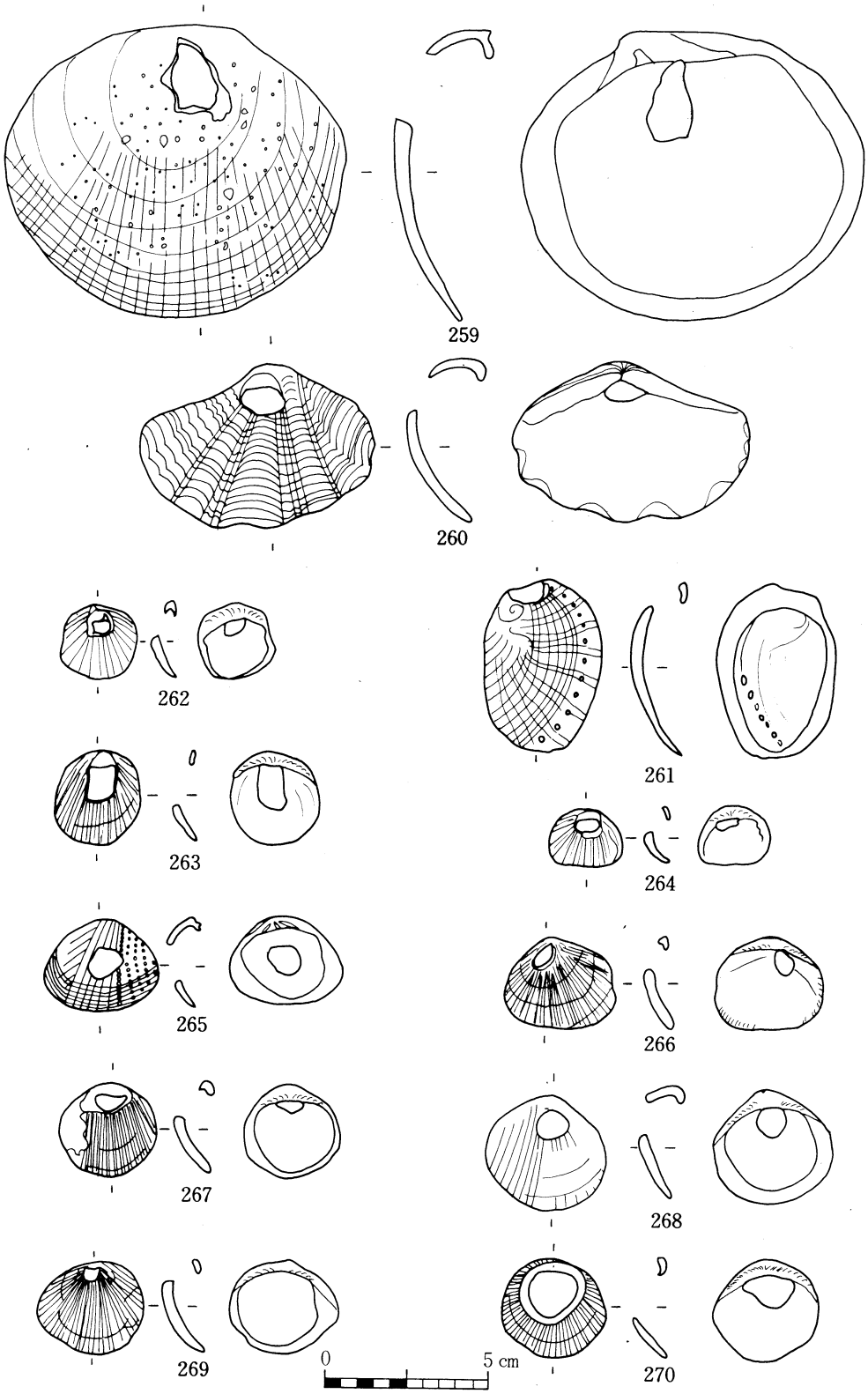
No.	遺物番号	挿図番号	出土区	層	大きさ(cm)	厚味(cm)	重量(g)	孔　径(cm)	貝の種類
59	5	280	D—12	(19)	5.1×4.5	0.2	13.0	1.6×1.0	カワラガイ
60	9	281	一　般	一般	3.7×3.7	0.3	6.2	0.9×1.0	ミヒカリメンガイ
61	8	282	一　般	一般	5.9×4.9	0.25	14.6	1.3×1.8	〃
62	7	283	C—11	(19)	8.4×7.7	0.9	69	2.1×2.3	〃
63	6	284	B— 5	(19)	7.9×6.7	0.7	64	1.7×2.2	〃
64	4	285	D—16	(19)	7.8×7.5	0.7	65	3.6×3.5	〃
65	11	286	一　般	一般	5.1×5.0	0.25	11.7	1.1×1.1	〃
66	10	287	〃	(19)	4.7×4.2	0.2	10.2	1.0×0.7	〃
67	12	288	〃	(19)	5.2×4.7	0.25	11.6	0.8×0.7	〃
68	13	289	〃	(19)	4.3×4.1	0.1	5.2	0.9×0.7	〃
69	6	290	B— 6	(19)	7.1×5.1	0.25	21.5	2.8×2.4	〃
70	70	291	一　般	一般	3.7×2.5	0.15	5.7	1.1×0.7	〃
71	18	292	〃	〃	3.7×3.3	0.15	3.0	0.5×0.6	〃
72	7	293	〃	〃	6.6×5.9	0.3	26.5	1.4×1.8	〃
73	16	294	〃	〃	5.1×5.3	0.25	16.6	1.0×0.9	〃
74	11	295	〃	〃	6.5×5.3	0.35	23.7	1.7×1.7	〃
75	9	296	〃	〃	4.1×3.4	0.2	5.0	1.1×1.2	〃
76	17	297	〃	〃	5.8×6.0	0.5	29.7	2.8×3.0	〃
77	17	298	〃	〃	3.0×2.3	0.2	1.7	0.6×0.5	〃
78	8	299	〃	〃	6.5×5.5	0.2	15.6	2.7×2.8	〃
79	19	300	〃	〃	5.9×5.2	0.2	13.1	1.2×1.7	〃
80	1	301	〃	〃	7.3×6.0	0.4	38.2	1.0×1.0	〃
81	15	302	〃	〃	3.1×2.1	0.3	4.6	0.7×0.8	〃
82	15	303	〃	〃	4.1×3.5	0.2	5.0	1.0×0.9	〃
83	2	304	〃	〃	7.0×6.1	0.5	41.0	1.0×1.1	〃
84	14	305	〃	〃	4.3×3.6	0.3	12.6	1.0×0.6	〃
85	16	306	〃	〃	4.0×4.3	0.3	7.0	0.6×0.7	〃
86	3	307	〃	〃	6.4×6.2	0.3	24.7	1.2×1.6	〃
87	71	308	G— 7	(19)	3.4×3.2	0.2	4.1	1.3×1.4	〃
88	14	309	一　般	一般	3.8×3.0	0.2	9.4	0.8×0.7	〃
89	4	310	一　般	一般	6.9×6.4	0.3	36.6	. × .	〃
90	32	311	C—19	(19)	6.6×7.1	0.4		1.0×1.5	〃
91	13	312	B— 6	(19)	6.7×6.0	0.4		1.2×1.1	〃
92	5	313	一　般	一般	7.3×6.2	0.3		1.6×1.1	〃
93	12	314	G—50	(19)	6.0×6.0	0.5		1.8×2.1	〃



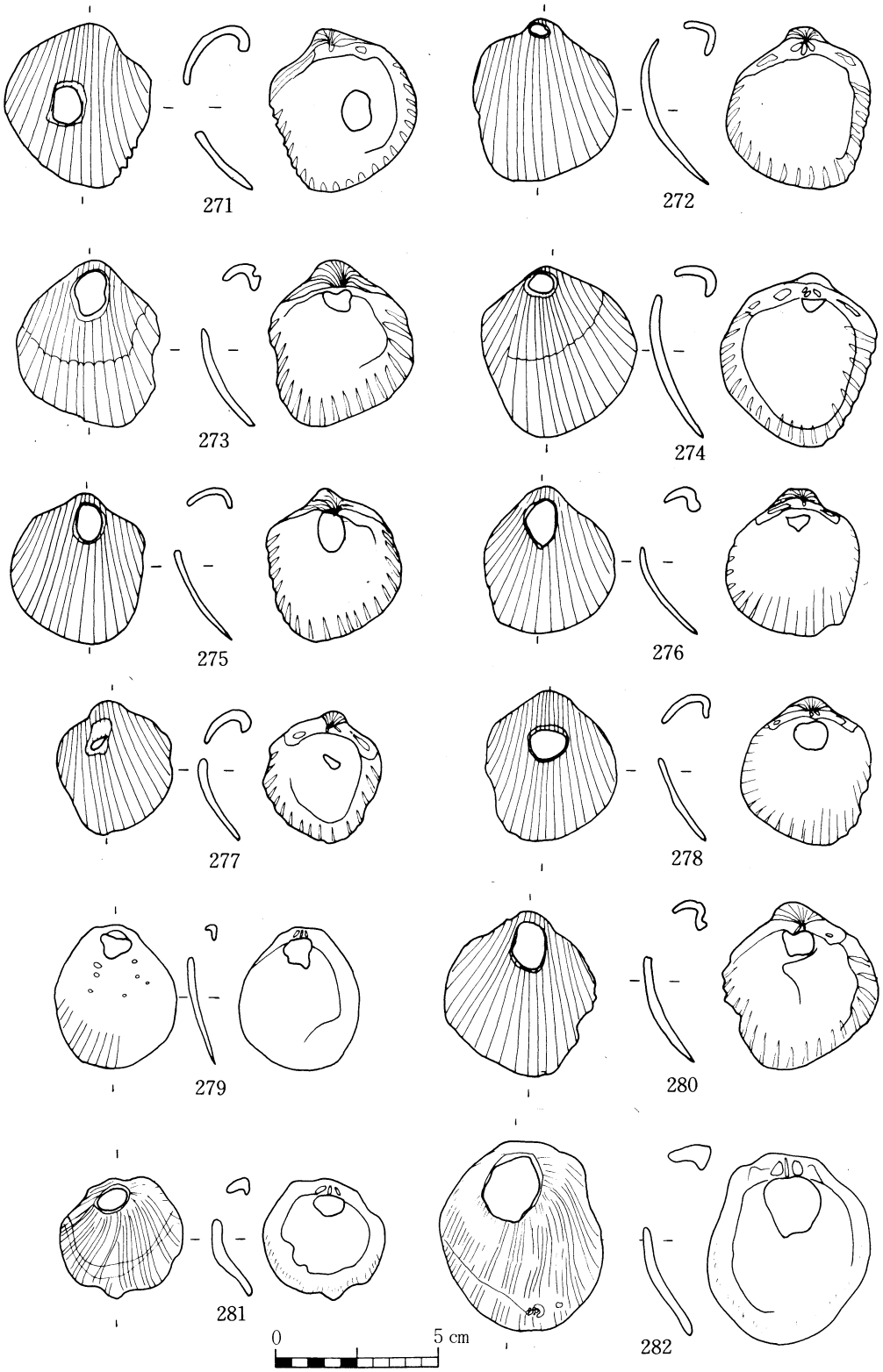
第39図　長浜金久第Ⅰ遺跡貝製品実測図(1)有孔貝



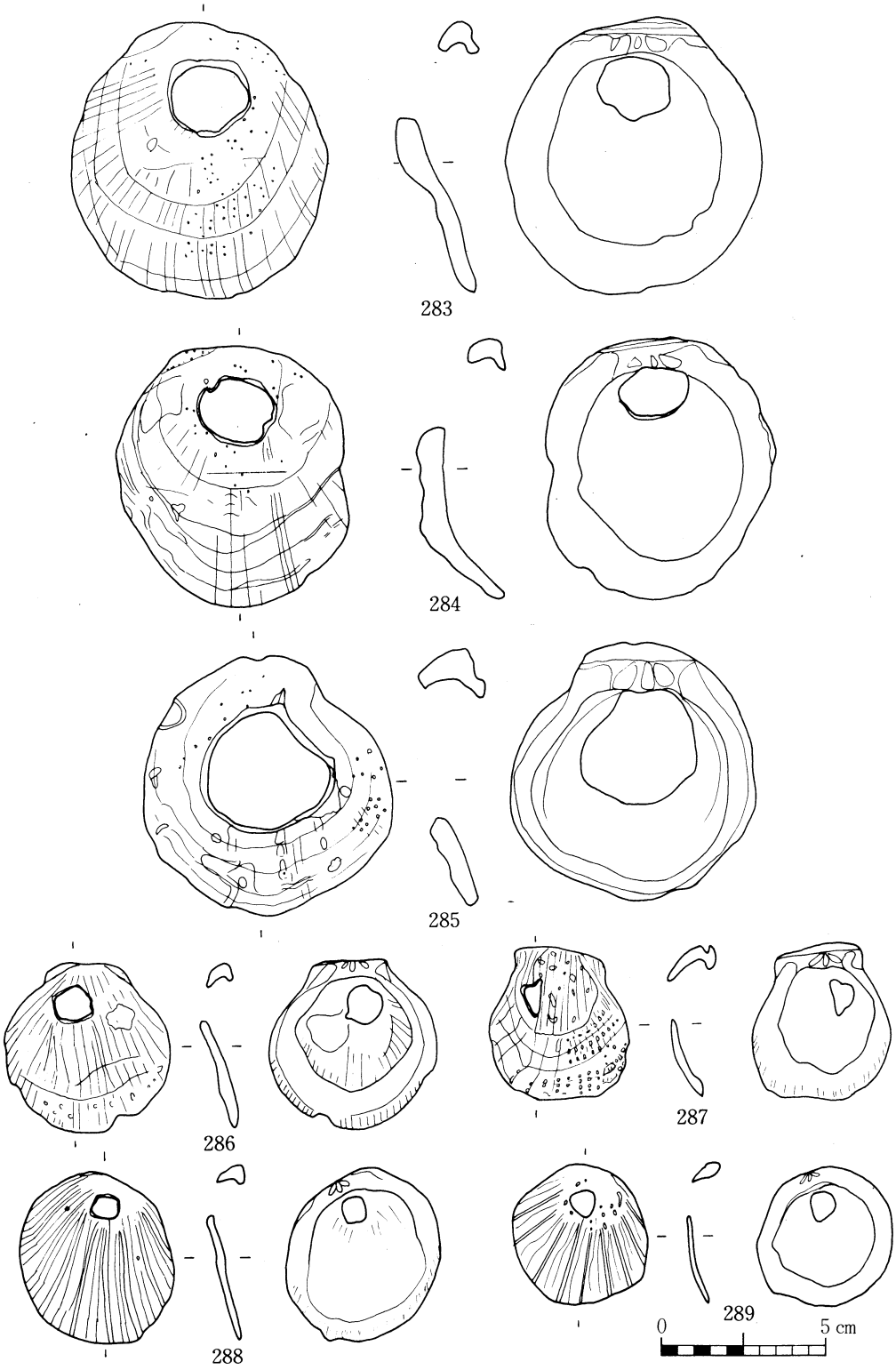
第40図　長浜金久第Ⅰ遺跡貝製品実測図(2)有孔貝



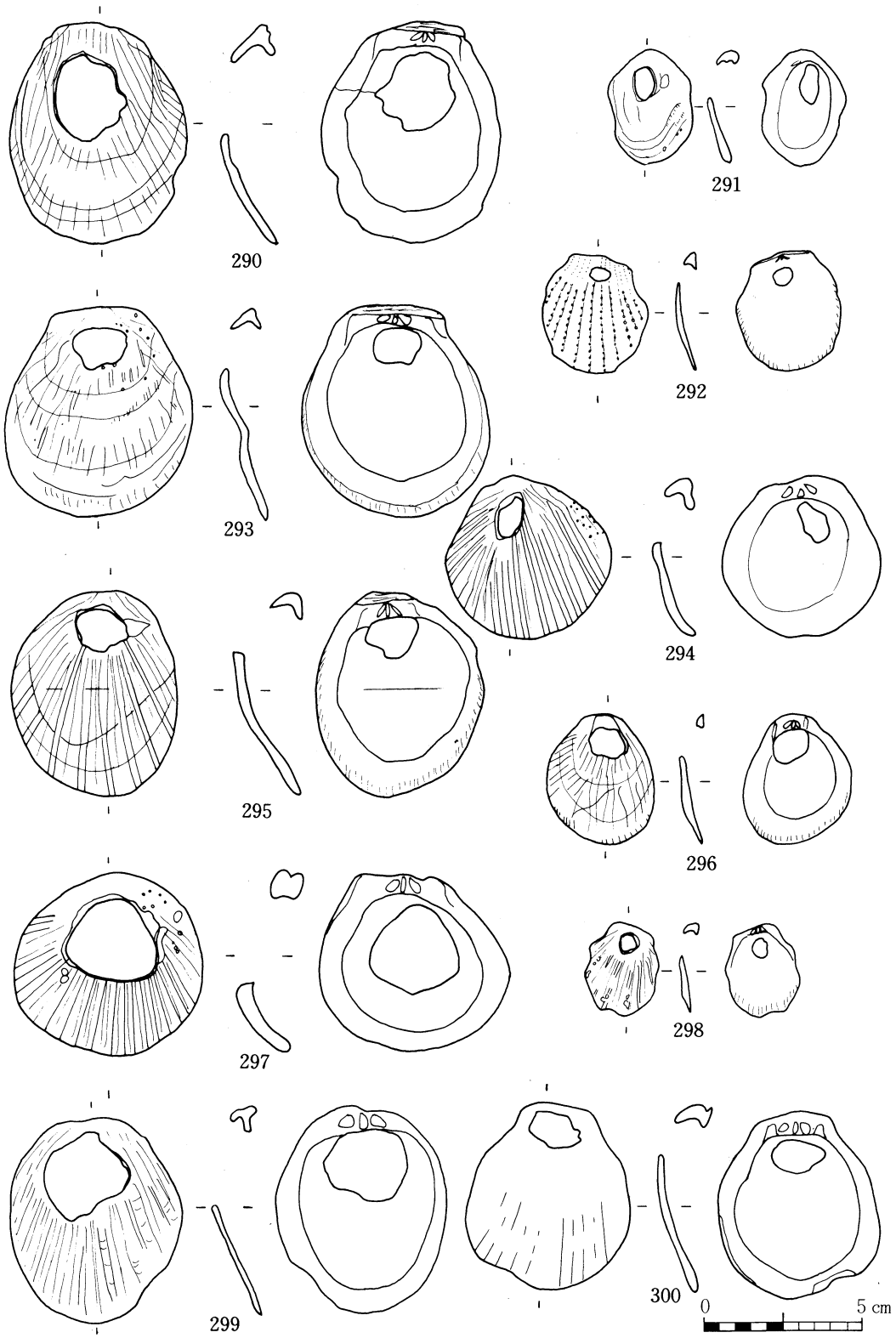
第41図　長浜金久第Ⅰ遺跡貝製品実測図(3)有孔貝



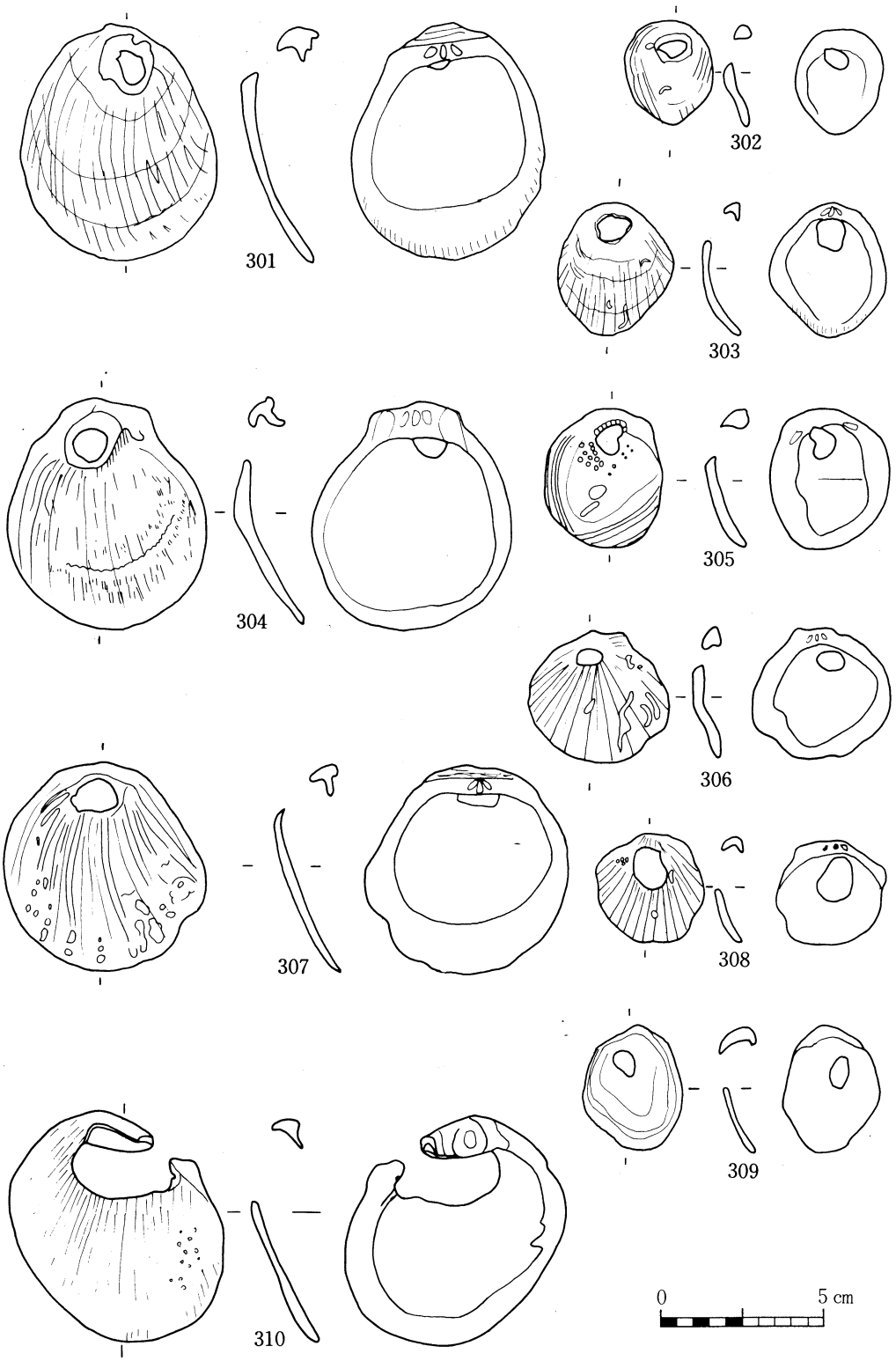
第42図　長浜金久第Ⅰ遺跡貝製品実測図(4)有孔貝



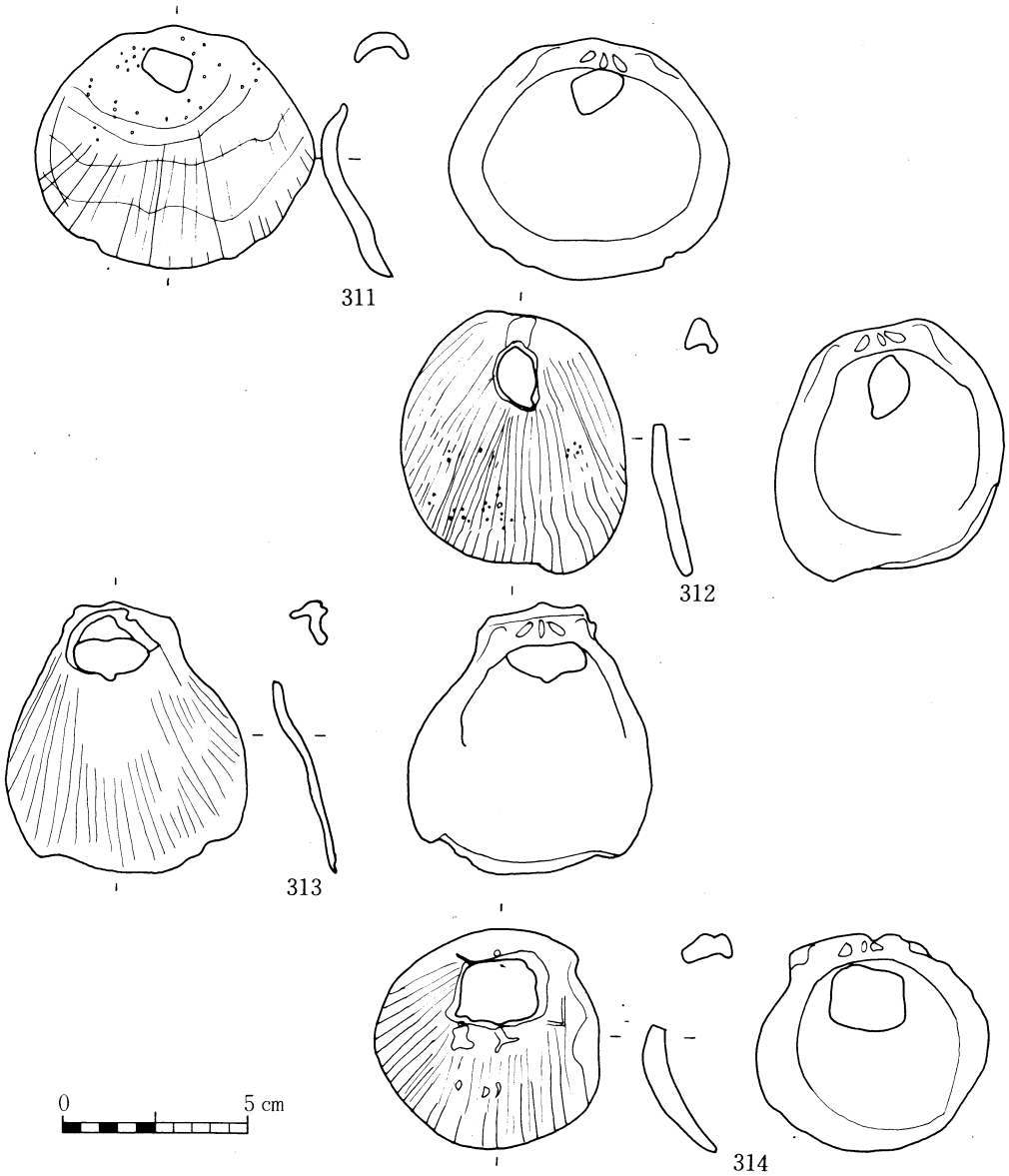
第43図　長浜金久第Ⅰ遺跡貝製品実測図(5)有孔貝



第44図　長浜金久第Ⅰ遺跡貝製品実測図(6)有孔貝



第45図　長浜金久第Ⅰ遺跡貝製品実測図(7)有孔貝



第46図　長浜金久第Ⅰ遺跡貝製品実測図(8)有孔貝

2．貝匙（ヤコウガイ製品）（315～320）

この貝製品は，ヤコウガイ製品で匙の形態をし，穿孔のあるものと無いものがある。315 は穿孔があり，柄部が狭くなっている。外皮は残っているが部分的に剝げている。316は穿孔が上部にあり隋円形の形態である。外皮は残り一部欠損している。317は柄部は欠損し，器部である。外皮は残っているが結節は剝ぎとられている。これは内側にヤコウガイの真珠層を露出させ，火に焼けた暗紫色を呈している。縁どりの調整は研摩している。318は柄部の一部は欠損しているが若干狭い柄部になっている。器部は隋円形を呈し，先端部が一部欠け落ちている内側は真珠層が露出し，外皮は剝がされてない。火を受け暗紫色を呈している。319は隔丸に近い隋円形で器部が大半を占める形態で柄部は短い。内側は真珠層が見え，外側は外皮があるが結節部は剝ぎ取られている。火を受け暗紫色を呈す。320 は柄部の先が締まり，器部は隋円を呈す。縁どりは悪く打ち欠け部が多く残っている。外皮はあり，結節部は残っている。白色を呈す。

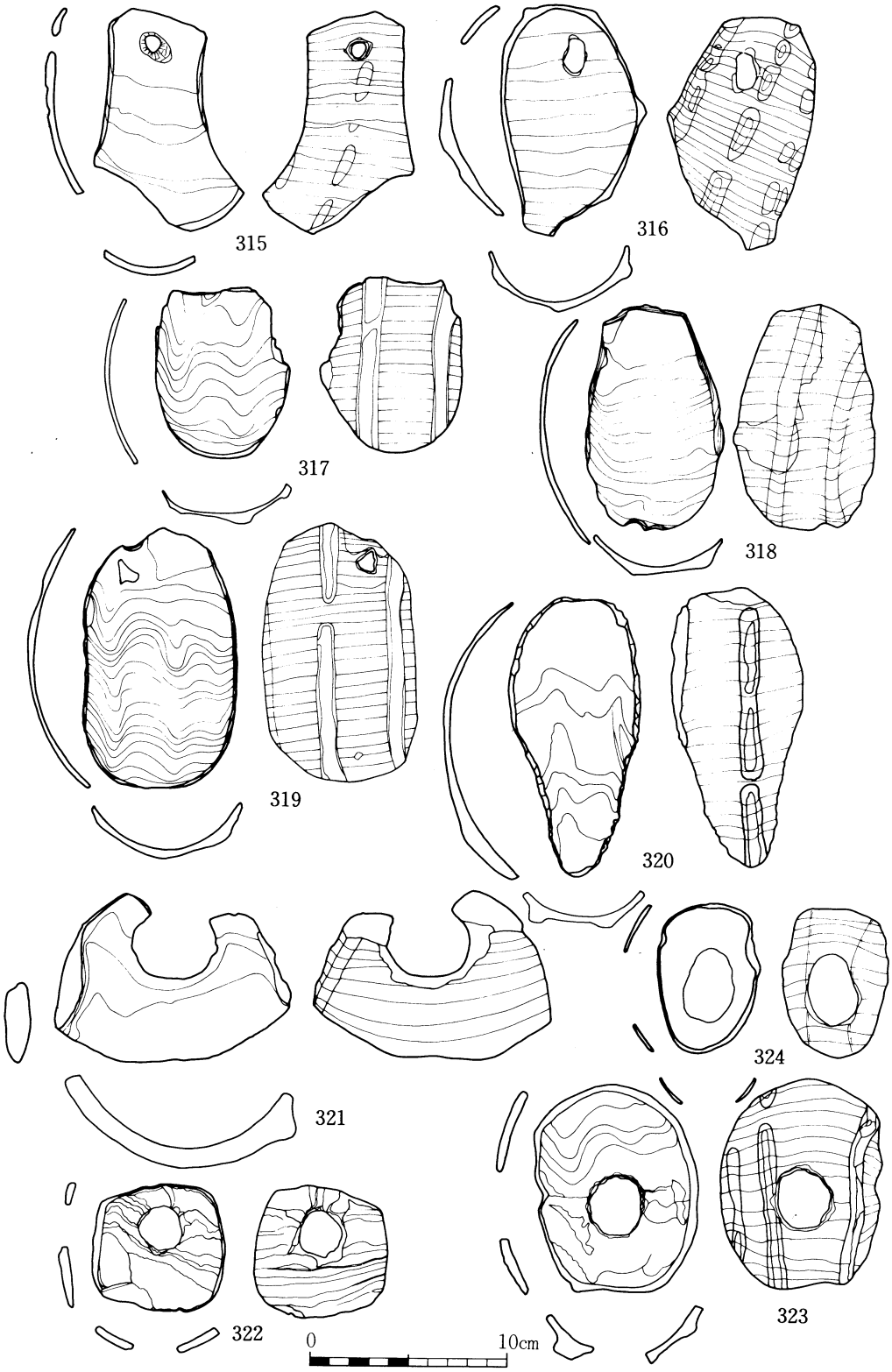
第12表　　貝匙諸訳

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	最身・最幅・深さcm	厚味cm	重量g	孔　径cm	備　考
1	12		315	一　般	(19)	10.5×5.2×0.8	0.4	57	0.9×0 8	ヤコウガイ
2	7		316	D—13	(19)	11.9×7.3×2.3	0.5	75	2.2×1.0	〃
3	5	451	317	B—16	(19)	8.5×6 8×1 9	0.2	46		〃
4	3		318	C—15	(19)	11.5×7.0×1.8	0.2	69		〃
5	1		319	一　般	(19)	13.2×7.6×2.3	0.2	87		〃
6	9	1,105	320	F—10	19	14.2×6.6×1.6	0.3	89		〃
7	11		321	一　般	(19)	8.5×11.8	1.2	168		〃
8	6	1,172	322	J—23	(19)	6.4×6.8	0.5	35	2.3×2.0	〃
9	8		323	一　般	19	10.5×8.0×2.4	0.4	109	3.0×2.4	〃
10	4	1,001	324	G—12	19	7.6×5.1	0.2	22	3.7×2.5	〃

3．円孔貝製品（321～324）

この貝製品はヤコウガイの体層部の一部を切り取り，中央部付近に円形ないし，隋円形の孔をあけたものである。321は上部が欠損しているが，ヤコウガイの口の付近を剝ぎとり，上位に径 4.3cmの円孔が施してある。幅は10.3cm，厚味は1.3cmである。322は5.7cm×6.5cm，厚さ0.4cmの方形に近い形をしたヤコウガイの体層部に径3.1cmの円孔を施したもので，その円孔は若干上位にある。323は10.5cm×8.3cmの隋円形をしたヤコウガイの体層部に径2.5cmの円孔を中央部に施している。324は5 ×7.7cmのヤコウガイの体層部に 3.7×2.5cmの円孔を施し外皮を剝ぎ真珠層を露呈している。なお全体としてヤコウガイの内面は真珠層を露呈している。

なおこの貝製品の使用法は有孔貝とは異なり，調整が良く，呪術的な用途が考えられる。



第47図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(9)

4．貝製容器（貝匙）

これはヤコウガイの殻を切断して器をつくったもので，137点出土している。

出土層位は第19層に79点，第13層に９点出土し，他は両層区別できない砂丘頂上部の腐植土層に出土している。

出土状況はC—14区にみられるようなヤコウガイの殻や蓋と接近して検出する所や，　—区のような小形貝のマガキガイ等の近くに検出する場所もある。そしてその中には　—　区—　区等のように貝殻集中箇所の脇にあるところもある。また，そのようなところには　—区にみられるようにシヤコガイも検出している。

この貝殻集中箇所は，第13層に於いて著しくみられ，炭粉や焼貝も中心部にみられるため，貝を採集し，その場所で火を入れ，調理した所というみかたが考えられる。そして，その脇にヤコウガイ製品や，シャコガイの殻がおかれている状況を考えると，貝に火を入れ，その中味を取り出し，いくつかの容器に入れて持ち帰る器としての役目が考えられ，このヤコウガイ製品やシャコガイの殻は器としての用途が強い。

この貝製品は，貝匙の名称で呼ばれていたが，最近，貝製容器・貝容器(面縄遺跡)の名称が見られる。貝匙は器形がスプーン状になっているためこの名称がつけられているが，説明では貝匙と名称を上げ匙の用途としては考えられない所見が行なわれており，食器（サウチ遺跡）としての利用を考えている。また，貝容器として上げた面縄第Ⅰ・第Ⅱ貝塚では貝容器の所見は説明されていないが名称に容器を使用している。貝製容器として上げた貝製容器小考で匙状貝製容器・ヒシャク状貝製容器・皿状貝製容器に分類して，容器の用途を考えている。

本遺跡で出土したこの貝製品は，出土状況からみると，食器としての貝容器と考えられ，ヤコウガイの体層部を利用しているため貝製容器として上げた。

この貝製容器は 325～351・353にみられるように，ヤコウガイの口縁部まで利用していないものと，口縁部まで含めたものとに分けられる。(351・352 ～ 365)。 前項の最身は平均12.57cmで，幅は平均9.2～15.8cmで，深さは平均2.59cmで，厚味は1.0～3.5cmのものがみられる。後項の最身は平均13.14cmで，幅は平均10.2～17.8cmで，深さは平均2.67cmで，厚味は1.3～4.6cmのものがある。なおこの数字は完形およびそれに近いものだけの結果である。

製作方法としては螺蓋利器を使用し，後でのべるヤコウガイの殻より切断して作るもので366は，前項の貝製容器を取ったものである。また図版第　図は後項を取ったあとである。

全体的にこの貝製容器は，縁を調整しているが切り取った状態で荒い縁をしているものもある。355・358～364は縁取りが荒く，未完成のものとも考えられる。とくに後項は全体的に縁取りが悪い。そして，この貝製品は外皮の調整はなく，内側の調整と内側の白質部もない。

第13表　　貝製容器諸訳（1）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	最身・最幅・深さcm	厚味cm	重量g	孔　径	備　考
1	60	1,025	325	F—12	19	10.4×7.8×1.8	0.4	83		
2	32	222	326	G—16	13	11.6×7.9×1.8	0.55	85		

第13表　　貝製容器諸訳（2）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	最身・最幅・深さcm	厚味cm	重量g	孔径cm	備　考
3	51	1,074	327	F—11	19	13.9×8.8×2.5	0.3	178		
4	57	1,187	328	J—23	(19)	11.0×6.8×2.3	0.5	96		
5	72	1,040	329	F—12	19	12.0×8.1×1.1	0.5	141		
6	55		330	E— 4	19	10.6×7.4×2.0	0.55	110		
7	28		331	G—18	(19)	12.4×8.8×1.6	0.4	119		
8	30	1,127	332	I—14	13	12.9×8.3×3.0	0.6	144		
9	59	96	333	J—24	13	15.3× 7.0×4.1	0.5	220		
10	36	1,293	334	K—25	19	10.7×7.7×2.0	0.45	125		
11	56		335	G—16	(19)	15.8×8.3×3.8	0.5	177		
12	58	1,208	336	J—24	(19)	11.9×8.0×2.6	0.5	127		
13	41		337	K—23	19	12.1×7.3×2.9	0.4	118		
14	49	1,253	338	E—11	19	10.9×7.8×1.8	0.3	127		
15	62		339	G—17	(19)	13.0×9.9×2.1	0.3	108		
16	45	1,189	340	J—23	(19)	12.0×7.4×2.7	0.4	82		
17	53	1,058	341	F—12	(19)	12.6×7.4×3.1	0.3	111		
18	54	1,042	342	F—12	(19)	12.9×8.2×2.1	0.5	127		
19	63	1,068	343	F—11	19	15.6×7.7×3.5	0.4	154		
20	44	1,118	344	E—10	19	12.1×8.1×3.1	0.4	131		
21	33	1,243	345	K—22	19	15.6×9.1×3.5	0.6	188		
22	52	2,314	346	I—23	19	13.7×9.2×2.6	0.55	170		
23	61	1,013	347	G—11	19	12.5×8.0×2.7	0.4	112		
24	27			G—18	(19)	14.1×8.2×3.5	0.4	130		
25	29	1,217		J—24	19	10.6×7.8×1.7	0.5	132		
26	34	1,109		E—10	19	11.9×7.9×1.9	0.3	115		
27	35	1,113		E—10	19	11.8×8.8×1.6	0.5	131		
28	37	1,023		F—12	19	11.3×8.3×1.7	0.3	107		
29	38	1,005		G—12	19	9.4×8.6×1.1	0.3	105		
30	39	1,171		J—23	(19)	11.9×8.7×2.0	0.3	121		
31	40	1,004		G—12	19	9.2×9.0×1.5	0.5	105		
32	50			E— 9	19	12.4×7.7×2.8	0.5	83		
33	46	1,078	348	F—11	19	12.7×8.1×3.1	0.45	173		
34	31	95	349	J—24	13	13.5×8.9×3.4	0.6	187		
35	10	1,147	350	B—14	19	9.2×7.8×2.3	0.4	84		

第13表　　貝製容器諸訳（3）

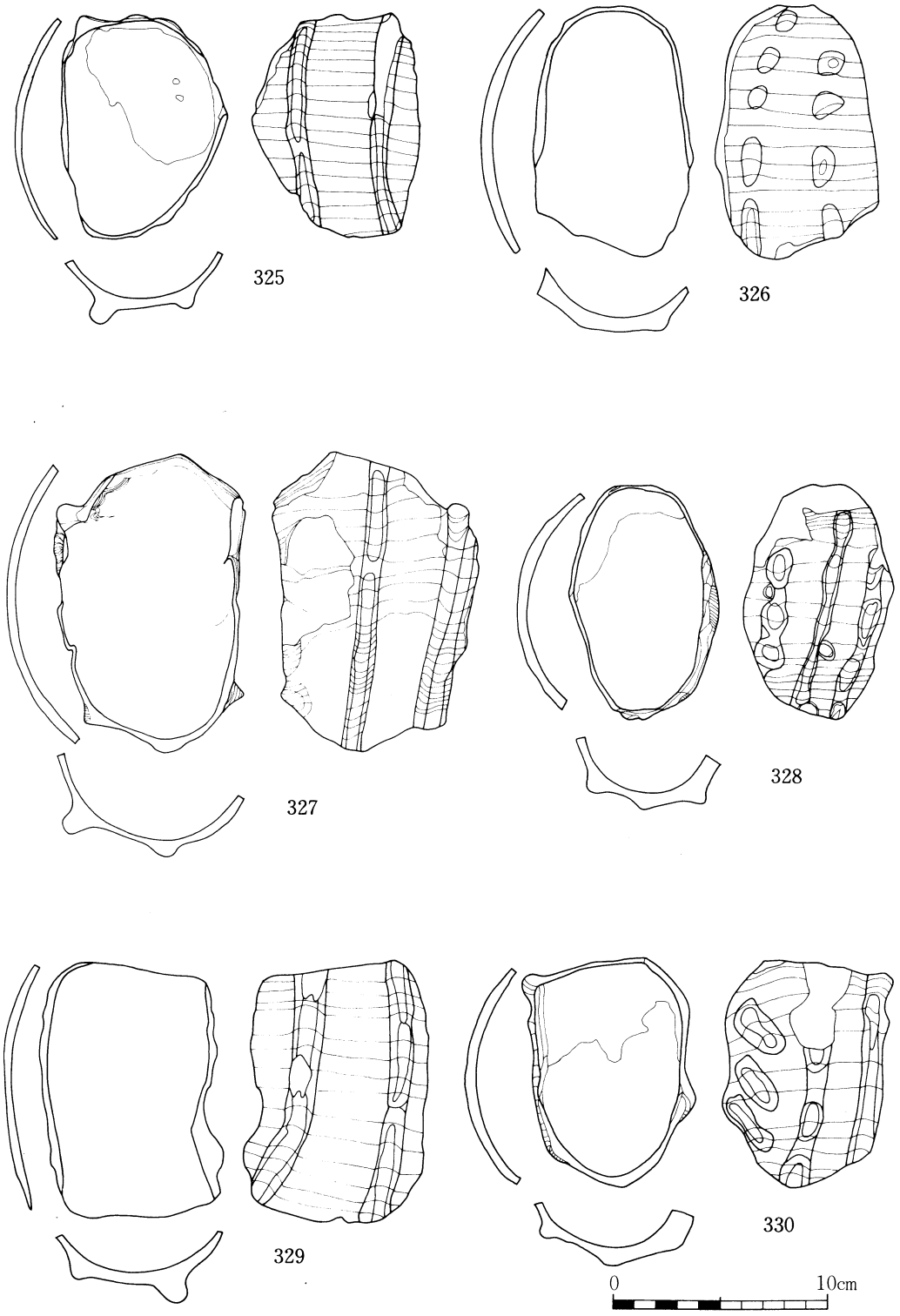
No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	最身・最幅・深さcm	厚味cm	重量g	孔径cm	備　考
36	71		351		(19)		0.3	163		
37	17	1,096	352	F—10	19	12.7×8.7×3.1	0.4	144		
38	2		353		(19)	10.3×7.4×1.8	0.3	65		
39	66	1,063	354	F—11	19	13.2×9.4×1.5	0.4	152		
40	16	1,188	355	J—23	(19)	12.2×7.4×1.5	0.4	124		
41	69	1,211	356	J—24	(19)	12.1×9.9×1.3	0.5	157		
42	73	1,047	357	F—12	19	13.7×9.3×2.1	0.4	185		
43	65	1,083	358	E—12	19	16.6×10.7×3.3	0.5	230		
44	47	1,336	359	K—23	19	18.0×10.9×4.3	0.6	287		
45	43	1,055	360	F—12	19	15.9×9.4×4.5	0.75	246		
46	68	1,207	361	J—24	(19)	15.9×9.5×2.1	0.5	180		
47	42	265	362	F—14	(19)	17.8×9.0×4.6	0.6	251		
48	14	1,120	363	E—10	19	12.4×8.9×3.2	0.3	144		
49	70	1,016	364	F—12	(19)	16.2×10.8×2.6	0.6	205		
50	74	1,167	365	J—25	(19)	12.3×10.6×1.6	0.5	155		
51	15	308		G—14	13	17.1×7.2×3.7	0.35	300		
52	18			G—17	(19)	9.5×8.1×2.2	0.4	85		
53	19	1,073		F—11	19	9.6×8.5×3.3	0.35	118		
54	20	238		G—15	(19)	10.6×6.0×1.9	0.25	76		
55	21				(19)	13.4×10.3×2.8	0.4	162		
56	22			G—17	(19)	8.7×7.5×1.9	0.3	66		
57	23	1,112		E—10	19	13.6×7.2×1.0	0.5	154		
58	24	1,113		E—10	19	12.1×8.1×1.9	0.4	165		
59	25	1,110		E—10	19	9.9×7.6×1.6	0.7	127		
60	26	1,108		F—10	19	11.4×9.3×3.1	0.3	142		
61	48	1,092			19	18.3×8.7×3.5	0.4	216		
62	64	1,057		F—12	19	13.2×8.1×2.7	0.4	138		
63	67	1,218		J—24	19	11.7×11.0×1.5	0.4	141		
64	135	1,209		J—24	(19)	16.1×7.4×2.3	0.5	292		
65	146			K—24	(19)	13.5×15.6×4.9	0.5	433		
66	147	1,337		K—23	(19)	18.3×13.0×5.0	0.6	565		
68	148	285		F—14	13	19.7×13.4×5.0	0.3	505		
69	149	1,121		E—10	(19)	14.7×9.5×3.1	0.4	283		

第13表　貝製容器諸訳 (4)

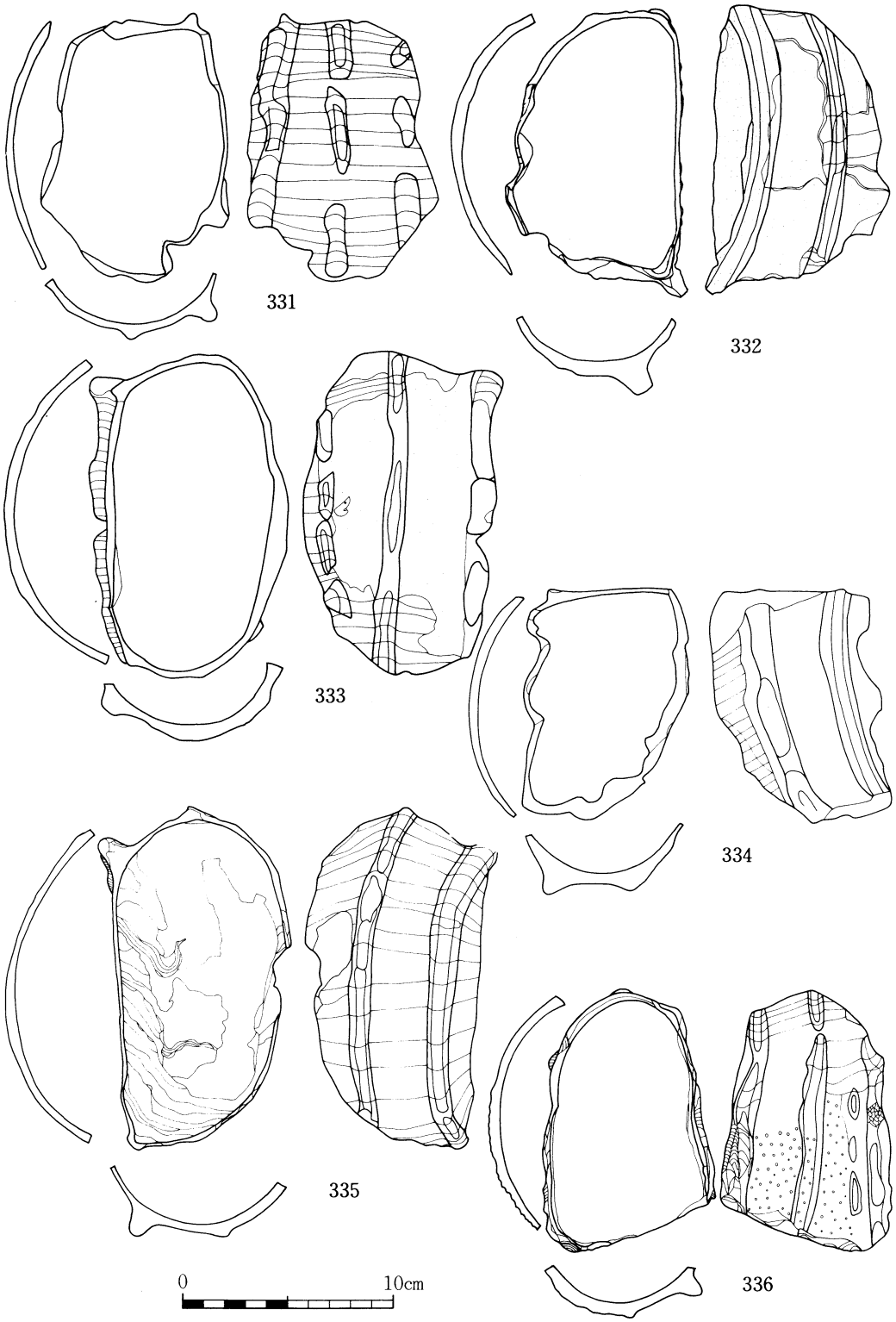
No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	最身・最幅・深さcm	厚味cm	重量g	孔径cm	備　考
70	150	1,015		G—11	13	15.1×13.5×6.0	0.8	495		
71	151	307		G—14	13	17.7×12.7×4.3	0.5	515		
72	152	306		G—14	13	14.0×9.8×3.0	0 5	425		
73	153			C—15	(19)	18.2×12.1×4.8	0.4	475		
74	154	1,048		F—12	19	17.8×13.0×4.7	0.5	450		
75	127			E— 9	19	9.0×7.3×2.1	0.4	80		
76	128	1,046		F—12	19	10.3×6.2×1.9	0.6	85		
77	129	1,382		I—23	19	9.3×5.7×2.1	0.3	70		
78	130			E— 9	19	10.3×8.9×3.0	0.3	125		
79	131	1,012		G—11	19	14.7×7.7×2.4	0.4	200		
80	132			F— 9	19	10.9×5.5×0.9	0.4	92		
81	133	1,036		F—12	(19)	15.1×7.1×1.6	0.4	162		
82	134	1,201		J—24	(19)	13.3×6.7×1.7	0.4	139		
83	136			G—15	(19)	8.5×7.0×2.5	0.5	97		
84	137	1,197		J—24	(19)	10.5×8.0×2.7	0.35	98		
85	138	1,206		J—24	(19)	9.0×8.1×2.8	0.3	68		
86	142			J—24	19	9.6×9.0×2.6	0.4	119		
87	80			J—24	(19)	10.2×8.5×1.8	0.4	85		
88	81	1,213		I—23	19	13.7×6.6×1.2	0.5	120		
89	82	1,064		F—11	19	11.3×5.6×0.6	0.3	69		
90	83	1,062		F—11	19	7.8×5.8×1.1	0.3	27		
91	84	1,017		F—12	19	8.6×7.8×1.6	0.3	60		
92	85	1,224		J—23	19	7.0×5.4×0.7	0.3	42		
93	86	1,039		F—12	19	5.9×3.9×0.6	0.4	24		
94	88			E— 9	19	10.0×6.2×0.9	0.4	60		
95	89	〃		E— 9	19	8.0×5.7×2.6	0.25	36		
96	90	1,221		J—24	19	5.9×4.0×0.7	0.3	21		
97	91	〃		E— 9	19	7.0×7.6×1.3	0.5	43		
98	92	1,026		F—12	19	11.4×8.8×3.9	0.25	100		
99	94	1,045		F—12	19	15.5×8.3×2.0	0.35	157		
100	95	1,224		J—23	19	9.0×5.0×1.3	0.6	59		
101	97	1,043		F—12	(19)	8.6×6.5×2.1	0.3	59		
102	98			G—15	(19)	12.8×8.5×2.2	0.3	99		

第13表　　貝製容器諸訳　(5)

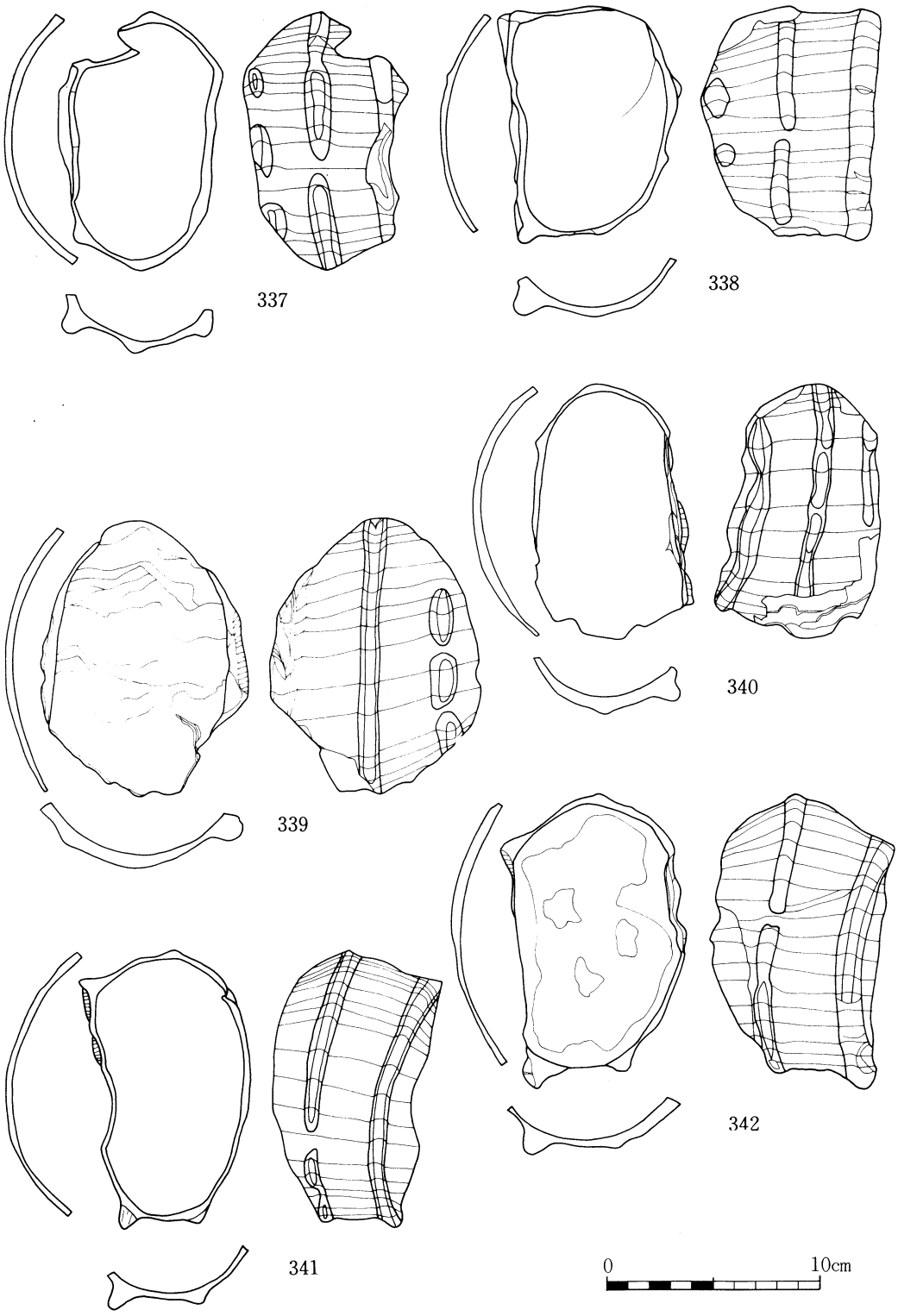
No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	最身・最幅・深さcm	厚味cm	重量g	孔径cm	備　考
103	101	1,192		J—23	(19)	13.0×6.1×1.2	0.45	95		
104	102			J—24	(19)	9.8×5.8×0.6	0.45	79		
105	103	1,007		G—12	19	8.5×5.3×0.6	0.3	39		
106	104	56		J—25	(19)	7.5×5.5×0.6	0.4	58		
107	105	1,355		K—24	19	9.8×6.1×0.7	0.3	82		
108	106			J—23	(19)	10.5×7.0×2.4	0.5	110		
109	111	1,024		F—12	19	10.5×8.3×2.9	0.3	100		
110	113	1,014		G—11	19	9.5×10.7×3.0	0.3	82		
111	114	1,111		E—10	19	10.7×7.3×1.7	0.5	93		
112	115			E—11	(19)	10.0×8.0×2.6	0.4	101		
113	116			E— 9	19	12.0×7.8×2.5	0.3	62		
114	117	1,102		F—10	19	11.4×7.7×2.7	0.4	85		
115	118			D—16	(19)	6.8×5.7×1.4	0.2	23		
116	119	1,172		J—23	(19)	7.5×5.7×1.2	0.3	36		
117	120	1,045		F—12	(19)	5.7×9.0×1.8	0.25	25		
118	121			C—12	(19)	6.4×6.3×1.4	0.3	36		
119	122			E— 9	19	4.8×4.2×0.4	0.3	14		
120	123			E— 9	19	5.9×4.6×0.5	0.5	18		
121	124			E— 9	19	8.9×5.0×1.1	0.5	38		
122	125	1,069		F—11	19	10.5×7.1×1.6	0.4	62		
123	126	1,189		J—23	(19)	3.7×6.6×1.8	0.2	75		
124	87	1,038		F—12	19	7.5×8.9×1.3	0.6	79		
125	93	1,218		J—24	19	8.1×9.4×1.8	0.8	114		
126	96	1,261		K—23	19	16.3×9.0×0.1	1.2	401		
127	99	1,020		F—12	19	17.2×10.5×2.3	1.7	358		
128	100	1,103		F—10	19	14.3×4.4×0.6	0.5	100		
129	108	1,087		E—12	19	15.7×7.2×0.4	1.0	204		
130	109	1,171		J—23	(19)	8.0×9.4×2.4	0.5	84		
131	110	1,100		F—10	19	17.5×9.0×0.6	0.5	337		
132	112	1,191		J—23	(19)	13.5×9.0×4.7	0.8	203		
133	139	1,035		F—12	19	12.6×11.5×4.7	0.6	168		
134	140	1,060		F—12	19	8.6×8.5×2.3	0.4	82		
135	141	1,281		K—24	19	8.9×11.7×4.1	0.3	120		



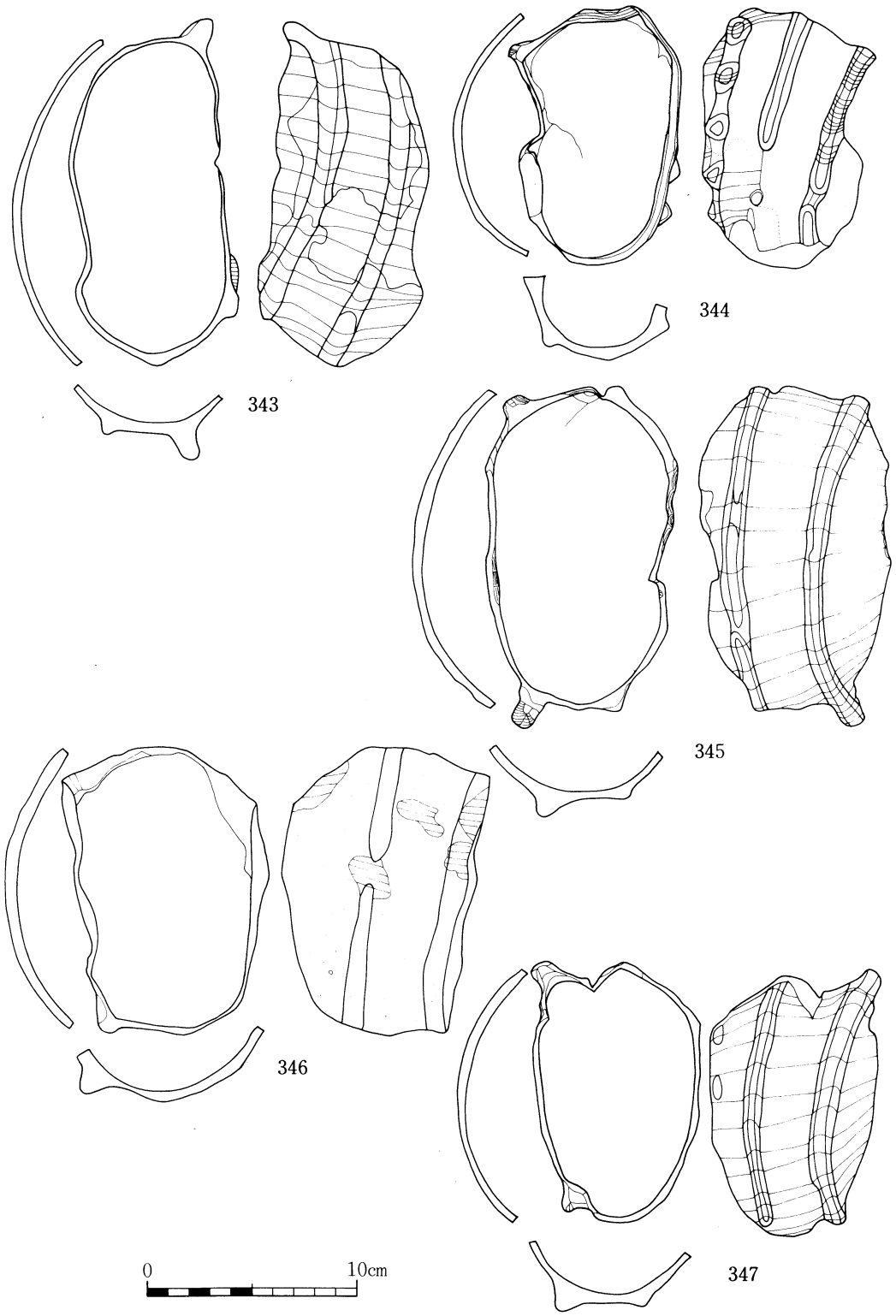
第48図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(10)



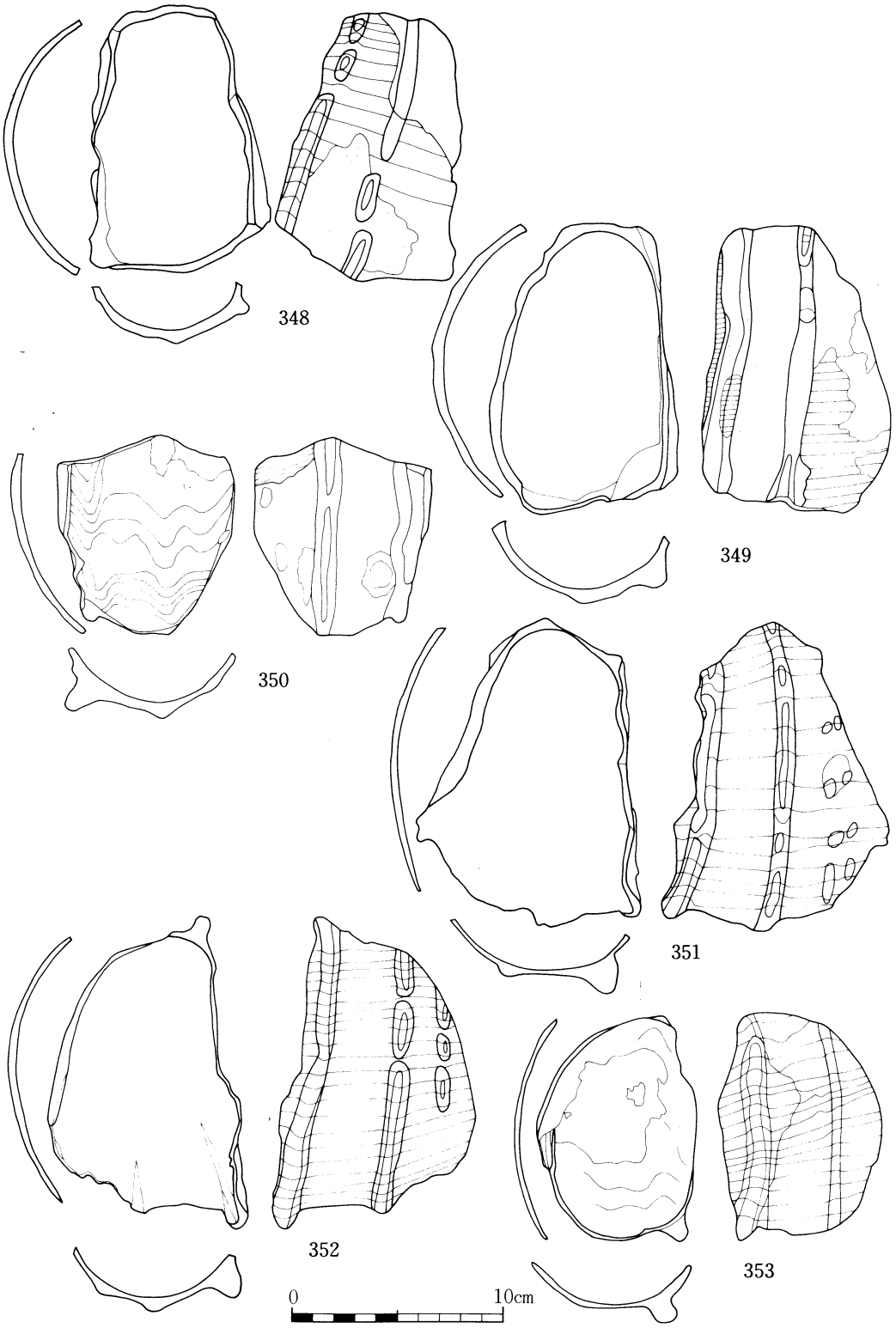
第49図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(11)



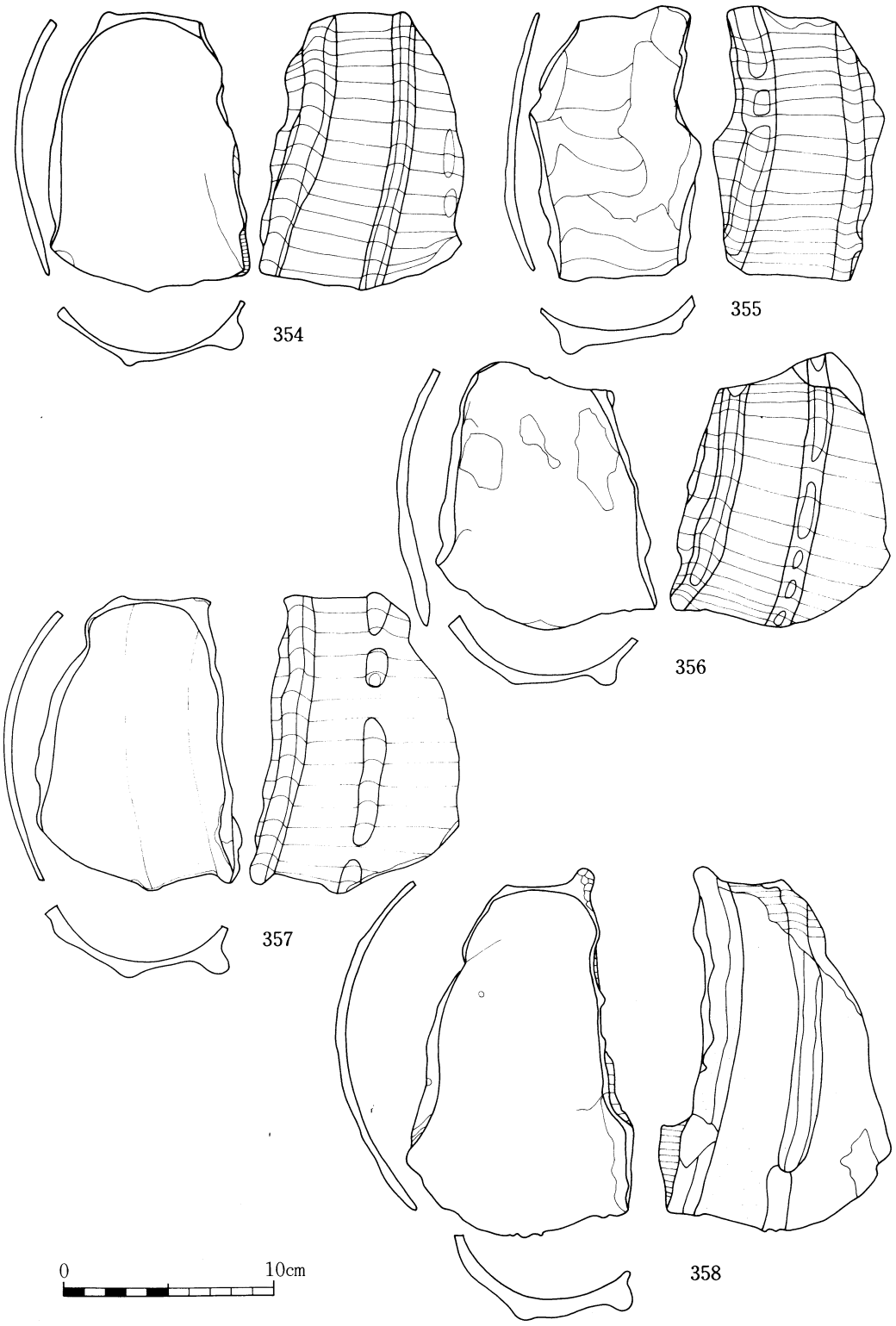
第50図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(12)



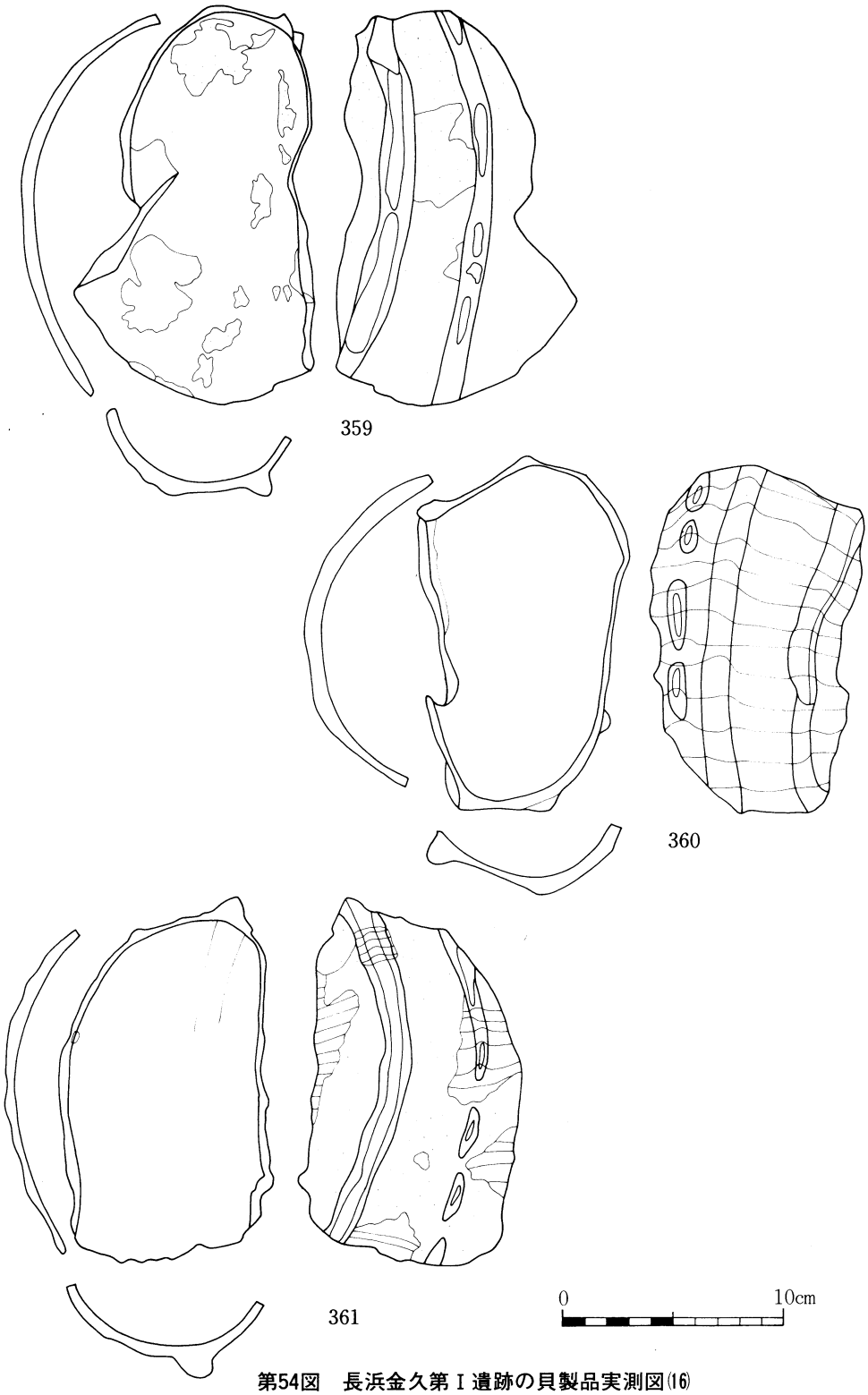
第51図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(13)



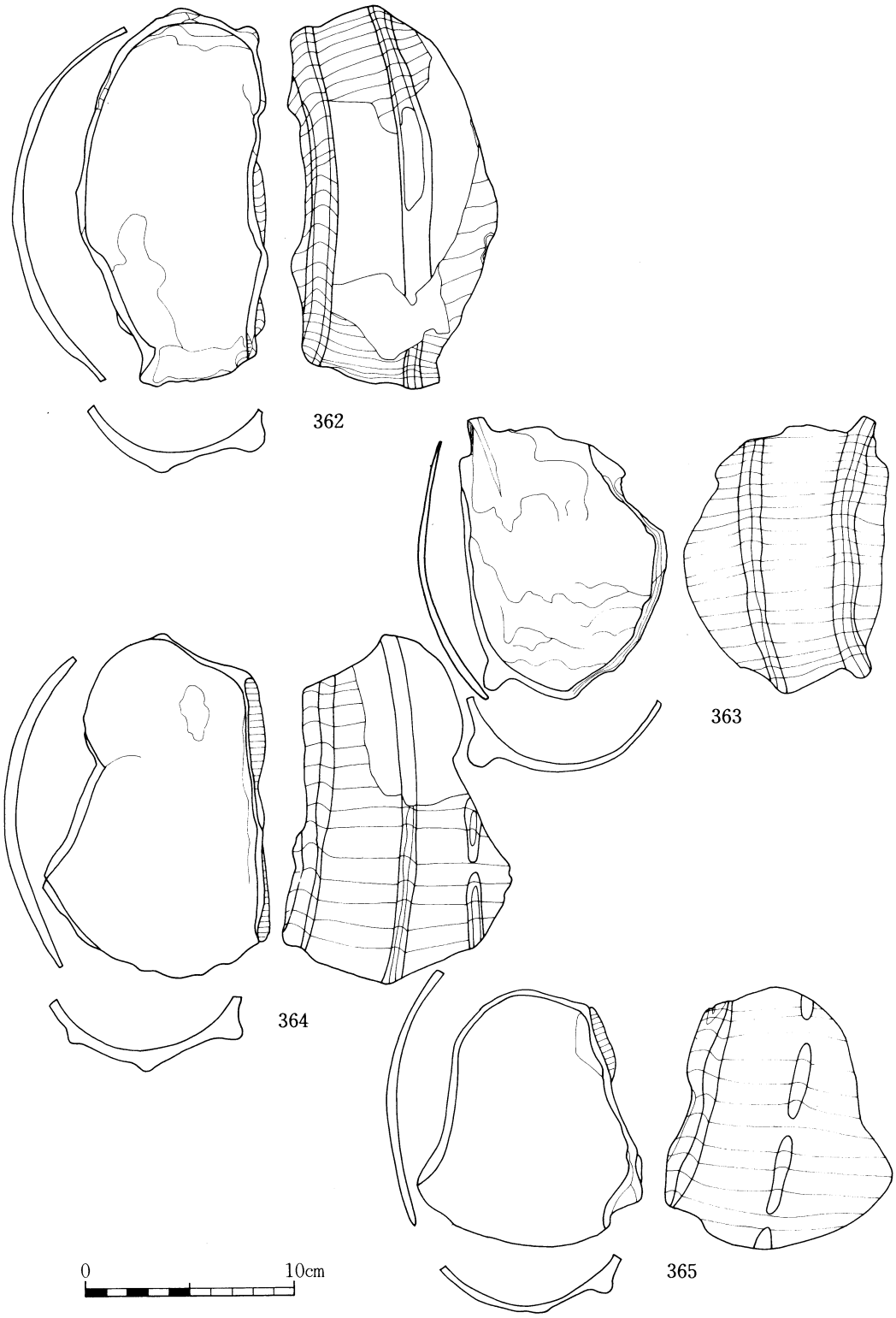
第52図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(14)



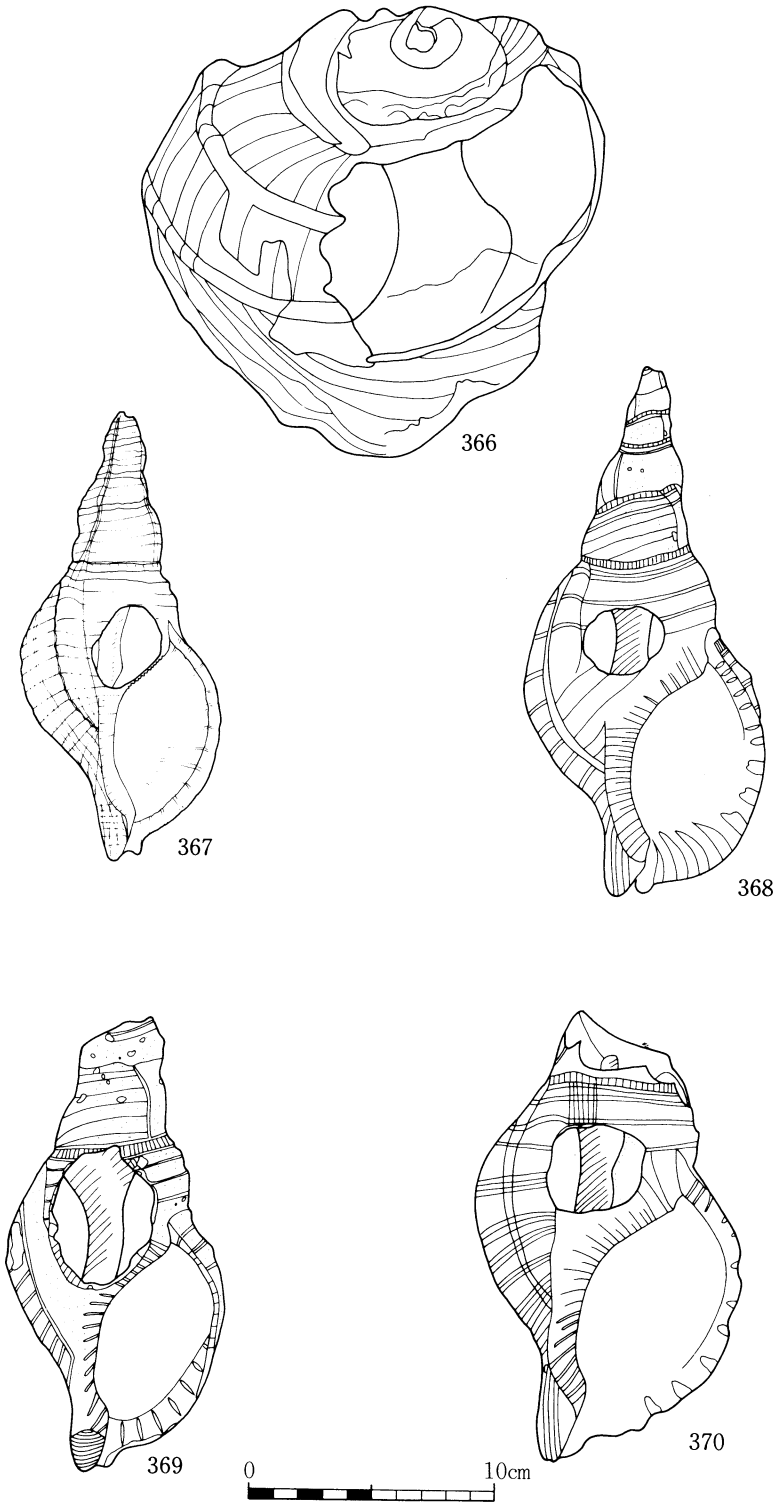
第53図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(15)



第54図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(16)



第55図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(17)



第56図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(18)

第13表　貝製容器諸訳 (6)

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土口	層	最身・最幅・深さcm	厚味cm	重量g	孔径cm	備　考
136	143	1,044		F—12	19	15.1×10.0×3.0	0.4	152		
137	144	1,175		J—23	(19)	9.0×6.3×1.3	0.3	44		

5．穿孔のある貝 (367～370)　(図版28)

この貝製品はホラガイとヤコウガイにみられる。貝殻本体に一部円孔を施すもので，367～370はホラガイ，図版28はヤコウガイである。全体的に貝殻の口部近くに孔をあけている。367 は径3.7cmの円孔で，368は径4.2×3.7cm，370は4.0×4.5cmの円で1ケ所に孔を設けている。370は4.7×5.5cmの円孔と径20cmの円孔で2ヶ所に設けている。図版28はヤコウガイの口近くに2ヶ所の円孔を設けている。円孔の大きさは径2cm前後である。またヤコウガイは他に2点出土している。この貝はホラガイとヤコウガイでは，用途の面に於いて異なる要素をもっていると考えられる。使用は不明であるが民俗例としてホラガイは煮沸器として使用していると聞いている。

第14表　穿孔貝諸訳

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	最身・最幅・深さcm	厚味cm	重量g	孔　径cm	備　考
1		97	367	J—24	13	18.2×7.8×5.3	0.2	123	3.3×3.1	ホラガイ
2			368	E—16	(19)	21.5×9.2×6.8	0.2	254	2.5×3.3	ホラガイ
3		1,205	369	J—24	(19)	18.1×8.5	0.15	190	2.1×2.6 5.3×4.0	ホラガイ
4			370	B— 5	(19)	10.1×18.3	0.15	220	3.5×3.8	ホラガイ

6．螺蓋利器

この貝器はいままで貝斧・貝刃・螺蓋製貝斧等の名称で呼ばれていたものである。この螺蓋利器の新名称をつけた理由は本遺跡の資料を上げて説明をすることにする。

この螺蓋利器は，ヤコウガイの蓋を利用しているのが特徴である。ヤコウガイの蓋は外面が半球状になり，上部がより球状に近い。内面は向って右側に中心のヘソ部があり，そこを中心に渦文を形成している。形としては左右に長く，上下に短い。厚さは上部が厚く，下部は薄い。また，左右に長いため，上下部より左右部が弧状の角度は小さく鋭角である。貝殻としての重量は大きさに比べ重く，手に持ちやすい。そして，表皮は質が濃やかで硬度が強く，内部の構成をみると前表皮・旧表皮の間は筋質が多くみられ，その筋質は比較的小さく剝がれやすい，これらから本遺跡で出土したヤコウガイの剝がれた部分を基本として分類した結果，Ⅰ～Ⅴ類に分けられた。なお本遺跡では 180点検出した。

Ⅰ類 (371～385)

この類は右縁，左縁のどちらかが剝がれ欠損しているもので，右縁欠損が371～380。左縁欠損が381～385である。またこの類は欠損部の長さが短く，1ないし2・3回の剝離痕がみられる。とくに375・382は剝離面が少ない。この類は　個出土している。

Ⅱ類 (386～400)

この類は右縁と左縁の両方とも剝がれ欠損しているものである。この中では 386～393 にみられる

剝離痕が少ないものと 394～400 のように，剝離痕が多く欠損部が大きいものとがある。また 394 は表部に剝離欠損しているものもある，なおこの類は22個出土している。

Ⅲ類（挿図番号 401～415）

この類は下縁部ないし，右縁部，左縁部が長く剝離欠損しているもので4・5回以上の剝離欠損がみられる。401・403・404・407の右下縁部まで剝離欠損し，422・405・406・408～411が下縁部の剝離欠損がみられるものである。また，412は左下縁，413～415 は右縁が剝離欠損。

Ⅳ類（挿図番号 416～430）

この類はⅠ・Ⅱ・Ⅲ類より，剝がれた部分が増えたり，拡ったりしたものである。416・417は右縁と下縁に剝がれた部分がある。418・419は右縁と下縁に2ヶ所剝がれた部分がある。420・421は右縁・左縁および下縁が幅広く剝がれている。422～426・428 は左・右・下縁の3ヶ所が幅広く剝がれている。427 は左右上下縁に剝がれている。429・430は右縁が著しく欠損して，上下・左右の縁が幅広く剝がれている。この類の特徴は2ヶ所以上剝がれていない部分が残っている。

Ⅴ類（挿図番号 431～455）

この類は剝がれた部分が全周の½以上で左・右・下縁に主に剝がれた部分があり，その部分は連続している。またこの類は，貝斧とか螺蓋製貝斧といった名称に合致するもので貝刃とかある。この中での 431 および 439は，Ⅳ類の形態であるが左・右・下縁に連続した部分があるためにこの類に入れた。また，434・438・442・443は各剝離面が大きく荒い欠損部分がみられ，直線的に剝離部があるのが特徴である。

次に各類の最大径と重量の分析を行ってみた。径は1cmごとに，重量は50g ごとに分析してみた。

Ⅰ類　46点

最大径 cm 未=未満							重量量 g 未=未満						
4～5未	5～6未	6～7未	7～8未	8～9未	9～10未	平均	50未	5～150未	100～150未	150～200未	200～250未	250～300未	平均
1	3	1	5	31	5	8.1cm	1	3	3	22	14	3	183.3g

Ⅱ類　22点

最大径 cm 未=未満							重量 g 未=未満						
4～5未	5～6未	6～7未	7～8未	8～9未	9～10未	平均	50未	50～100未	100～150未	150～200未	200～250未	250～300未	平均
0	2	0	4	12	4	8.2cm	0	2	2	7	11	0	183.8g

Ⅲ類　37点

最大径 cm 未=未満							重量 g 未=未満						
4～5未	5～6未	6～7未	7～8未	8～9未	9～10未	平均	50未	50～100未	100～150未	150～200未	200～250未	250～300未	平均
0	3	5	9	14	6	7.8cm	0	7	7	9	11	3	165.5g

Ⅳ類　48点

最大径 cm 未=未満							重量 g 未=未満						
4~5未	5~6未	6~7未	7~8未	8~9未	9~10未	平均	50未	50~100未	100~150未	150~200未	200~250未	250~300未	平均
0	1	3	1	38	5	8.3cm	0	3	2	21	21	1	187.8g

Ⅴ類　27点

最大径 cm 未=未満							重量 g 未=未満						
4~5未	5~6未	6~7未	7~8未	8~9未	9~10未	平均	50未	50~100未	100~150未	150~200未	200~250未	250~300未	平均
0	0	1	1	17	8	8.5cm	0	1	2	12	9	3	198.0g

全体　180点

最大径 cm 未=未満							重量 g 未=未満						
4~5未	5~6未	6~7未	7~8未	8~9未	9~10未	平均	50未	50~100未	100~150未	150~200未	200~250未	250~300未	平均
1	9	10	20	112	28	8.2cm	1	16	16	71	66	10	182.85g

これからみると，Ⅰ類は46点あり，最大径が８～９cm未満が最も多く，31点出土し，平均も8.1 cmになっている。 重量は 150～200g 未満が最も多く22点出土し，平均重量は183.3g になっている。

Ⅱ類は22点あり，最大径が８～９cm未満が最も多く12点出土し，平均径も8.2cmになっている。重量は200～250g 未満が最も多く11点出土し，平均重量も183.8g になっている。

Ⅲ類は37点あり，最大径が８～９cm未満が最も多く14点出土し，平均径も 7.8cmになっている。重量は，200～250g 未満が最も多く出土しているが，平均重量は165.5g である。

Ⅳ類は48点あり，最大径は８～９cm未満が最も多く，38点出土し，平均径は 8.3cmである。重量は 150～200g 未満と 200～250g 未満が共に，21点で平均重量は 186.8g になっている。

Ⅴ類は27点出土し，最大径が８～９cm未満が最も多く，17点出土し，平均径は8.5cmである。重量は 150～200g 未満が最も多く，12点出土している。平均重量は 198.0g である。

全体としては，180点のうち最大径が８～９cm未満が112点で，ずばぬけて最も多く，平均径は 8.2cmである。重量は 150～200g 未満が最も多く，71点出土しているが 200～250g 未満も66点で接近している。平均重量は 182.85g になっている。

こうしてみると，この貝器の現状に於いては，７cm～10cm未満の，ヤコウガイの蓋を最も多く利用している。しかし，欠損部の径も含めると，主に８cm～10cmのヤコウガイの蓋を利用していることが考えられる。重量としては，150～250g のものが現状では検出されているが，これも欠損部を考慮すると 200g ～300g のものも利用していることが考えられる。

次に欠けた部分や剝離の分析をすると，Ⅰ類は左・右縁１ヶ所に剝離欠損部がみられ，Ⅱ類は左・右縁の両縁に剝離欠損部がみられる。Ⅲ類は下縁部に長く剝離欠損部がみられるものである。この３つの類を比較すると，Ⅰ類とⅡ類は連続性があり，Ⅲ類とはそれがないと考えられる。Ⅳ類はⅠ・Ⅱ・Ⅲ類が各部にみられるもので，各部に欠損されていない部分があり，剝離欠損部がまちまちである。Ⅴ類は下縁および左・右縁が連続して，剝離欠損されている。

これらの類の特徴ではⅣ類がバラエテイに富んで，剝離欠損部が統一性に欠け，出土量も48点で全体の 26.66％におよんでいる。このことは計画的に剝離したのではない見方が考えられる。すなわちⅠ・Ⅱ類は蓋の鋭角部であるため剝離欠損部が狭い。Ⅲ類は蓋の純角部であるため剝離欠損部が広い。そして，Ⅳ類の一部をのぞき，Ⅳ・Ⅴ類の形が作られると考えられる。これは最終目的のために剝離するのではなく，使用してⅣ類（一部をのぞき）Ⅴ類ができあがることが考えられる。

この貝器は前にも述べたように，貝斧・貝刃・螺蓋製貝斧といった名称があるが，本遺跡での分析では，貝斧・貝刃といった製品的なものではなく，無欠損の螺蓋そのものが，利器で使用される過程で，いろいろな形になり，あたかも人工的に刃を付けた貝器に見えるのではないかと思われる。そして，使用螺蓋は最大径８cm～10cmで 150g ～250g のものが多く，手に握り易く，重量もあるものが選ばれており，敲打して使用する利器としての用途が妥当であろう。

では何に使用したかを考察すると，本遺跡では，貝製容器が多く出土している。この貝製容器はヤコウガイの殻を利用して 137点出土している。また他に，容器として考えられない貝匙等や割られた殻で製品になっていないもとも多量に出土している。このヤコウガイの殻や，製品を取ったヤコウガイの体部をみると，割り取った後がみられる。この割り取るための利器として，このヤコウガイの蓋を使用したと考えられる。そして，使用しすぎて直線的になっているものや，大きく欠損しているのもある。

第15表　　螺蓋利器諸訳（Ⅰ類）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	大きさcm	厚味cm	重量 g	欠損部分	欠損部の長さ　cm
1	2		383	一　般	(19)	7.8×8.8	2.4	232	左　　縁	3.7
2	10			G－３	(19)	8.0×8.9	2.5	228	右　　〃	2.2
3	15		372	G－20	(19)	7.9×8.8	2.2	212	右　　〃	3.6
4	20			G－30	(19)	8.5×9.4	2.6	286	下　　〃	3.7
5	23		376	G－30	(19)	7.9×8.9	2.4	236	右　　〃	2.7
6	34		381	D－13	(19)	7.1×8.0	2.1	162	左　　〃	2.0
7	45			B－15	(19)	7.3×8.1	2.2	181	右下　〃	1.6
8	46			G－37	(19)	7.1×7.7	2.1	156	右　　〃	2.2
9	50			C－11	(19)	7.9×8.8	2.3	220	下　　〃	3.8
10	56			G－38	(19)	7.4×8.3	2.2	176	左下　〃	3.7
11	57			一　般	表	7.1×8.0	2.1	166	右　　〃	3.1
12	65			G－38	(19)	8.1×9.0	2.3	235	下　　〃	2.0
13	70			D－13	(19)	4.9×5.4	1.4	56	右下・下縁	2.0・ 0.6
14	75			一　般	(19)	7.5×8.2	2.0	181	右下　縁	1.7
15	77	141	385	F－21	(19)	8.0×8.7	2.0	190	左　　〃	3.6
16	82			C－15	(19)	7.7×8.5	2.2	196	左　　〃	2.4

第15表　螺蓋利器諸訳（Ⅰ類２）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	大きさ cm	厚味 cm	重量 g	欠損部分	欠損部分の長さ cm
17	87		373	B—12	(19)	7.6×8.5	2.1	190	右　縁	2.7
18	93			C—14	(19)	8.0×8.9	2.4	234	左下　〃	1.6
19	94			C—13	(19)	8.0×8.9	2.0	211	右　〃	3.2
20	102			G—26	(19)	4.0×4.3	1.2	31	左下　〃	0.5
21	104			D—13	(19)	7.7×8.5	2.4	215	右下　〃	2.7
22	110			B—15	(19)	4.8×5.2	1.4	50	右　〃	3.0
23	112			一　般	(19)	7.4×8.1	2.1	168	左上　〃	2.7
24	114			B—15	(19)	7.4×8.2	2.1	180	左　〃	1.0
25	116		379	G—30	(19)	7.3×8.1	2.3	192	上　〃	2.4
26	122			D—15	(19)	7.8×8.7	2.1	192	下　〃	1.1
27	131	1093		F—10	19	8.1×8.9	2.5	242	右下　〃	3.1
28	132	1354		K—24	19	7.4×8.0	2.2	178	左　〃	3.0
29	133	1369		J—24	19	7.3×7.8	2.0	158	右　〃	2.5
30	134	1199		J—23	(19)	6.8×7.5	1.8	132	右下　〃	3.1
31	135	1301	384	L—24	19	7.0×7.6	2.0	154	左　〃	1.9
32	136			C— 7	(19)	6.1×6.3	1.8	104	右　〃	0.8
33	137		382	E— 9	19	7.2×8.3	1.9	165	左　〃	1.7
34	138			G—15	(19)	6.8×7.5	2.0	143	下　〃	2.8
35	139			E— 9	19	4.9×5.4	1.5	55	右　〃	2.7
36	140			E— 9	19	7.6×8.5	2.5	218	右下　〃	0.9
37	141			E— 9	19	7.5×8.2	2.1	177	下　〃	2.1
38	142	1239	378	K—23	19	7.6×8.2	2.1	187	右　〃	2.4
39	143		371	E— 9	19	8.2×9.0	2.6	255	右　〃	2.1
40	144		380	K—26	(19)	7.4×8.2	2.2	184	右　〃	3.0
41	145	1323		K—24	19	8.1×9.0	2.6	242	右　〃	1.7
42	146		375	E— 9	19	7.6×8.6	2.1	189	右　〃	2.1
43	147	1251	374	K—23	19	7.7×8.6	2.2	212	右　〃	3.1
44	148	1070	377	F—11	19	7.6×8.4	2.1	182	右　〃	2.4
45	149	251		G—15	13	7.8×8.6	2.3	222	左　〃	2.7
46	150	1215		I—23	19	8.4×9.2	2.1	258	下　〃	2.7

第16表　螺蓋利器諸訳（Ⅱ類）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	大きさcm	厚味cm	重量 g	欠損部分	欠損部分の長さ cm
47	8		394	G－ 4	(19)	7.8×8.0	2.0	190	左・右縁	3.7・2.8 計 6.5
48	12			A－15	(19)	8.4×9.0	2.2	228	左・右〃	2.8・3.4 計 6.2
49	13		395	G－ 4	(19)	7.7×8.7	2.2	205	左・右〃	2.4・5.6 計 8.0
50	16		386	G－ 4	(19)	7.8×8.1	2.2	203	左・右〃	2.7・3.0 計 5.7
51	17		390	G－ 4	(19)	7.7×8.6	2.2	190	左・右〃	1.7・4.0 計 5.7
52	36		396	B－ 8	(19)	8.1×8.9	2.2	219	左下・右縁	1.7・5.2 計 6.9
53	52			G－ 6	(19)	8.1×9.0	2.3	210	左・右縁	1.3・6.8 計 8.1
54	66		400	一　般	(19)	7.7×8.3	2.2	200	左下・右下～右上縁	3.4・7.0 計10.4
55	69			B－15	(19)	5.3×5.9	1.5	63	左下・右縁	3.7・4.5 計 8.3
56	88			B－13	(19)	8.1×9.0	2.4	234	下縁	3.6　計 3.6
57	96			C－15	(19)	5.0×5.5	1.5	58	左・右上縁	0.5・2.7 計 3.2
58	97			D－13	(19)	6.8×7.4	1.8	136	左・右縁	2.0・3.8 計 5.8
59	98		389	C－17	(19)	7.1×7.9	2.0	153	左・右〃	2.2・0.8 計 3.0
60	108		399	G－20	(19)	7.2×8.4	2.3	204	左・右〃	3.4・4.7 計 8.1
61	109		388	D－16	(19)	7.4×7.8	2.0	174	左・右〃	2.4・2.5 計 4.9
62	113		392	E－15	(19)	7.7×8.2	2.0	186	左・右〃	3.4・2.8 計 6.2
63	152	1289	398	K－25	(19)	8.2×8.9	2.3	232	左・右〃	4.4・3.8 計 8.2
64	153	1320	393	K－24	(19)	7.7×8.6	2.1	189	左・右〃	2.6・3.3 計 5.9
65	154	1080	397	F－11	19	7.9×8.6	2.2	210	左・右〃	3.8・4.4 計 8.2
66	155	1325		K－24	19	6.7×7.5	1.9	128	左・右〃	2.0・3.4 計 5.4
67	156	1066		F－11	19	8.1×9.0	2.6	250	左・右〃	2.7・1.7 計 4.4
68	157	1081	387	F－11	19	7.6×8.2	2.1	181	左・右〃	3.0・1.7 計 4.7

第17表　螺蓋利器諸訳（Ⅲ類１）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	大きさcm	厚味cm	重量 g	欠損部分	欠損部分の長さ cm
69	7		412	A－15	(19)	6.7×7.5	2.0	142	左下　縁	3.7
70	11			G－ 3	(19)	7.7×8.6	2.3	206	右下　〃	6.2
71	22			G－ 4	(19)	8.7×9.5	2.4	252	右下　〃	4.7
72	28		401		(19)	8.0×8.9	2.4	228	下～右下縁	4.8
73	29				表	7.1×7.9	1.9	155	右縁	4.4
74	39				(19)	8.0×8.6	2.2	210	左～左下縁	6.9
75	40		406	B－ 5	(19)	6.8×8.3	2.2	177	左下～下～右下縁	7.1
76	44			B－11	(19)	6.3×7.0	2.0	119	左上～左～左下縁	6.0
77	49		415		(19)	8.4×8.8	2.3	238	右縁	5.5

第17表　螺蓋利器諸訳（Ⅲ類２）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	大きさ cm	厚味 cm	重量 g	欠損部分	欠損部分の長さ cm
78	59			一　般	(19)	8.6×7.9	2.1	189	右縁	4.7
79	64			一　般	(19)	4,9×5.1	1.4	60	下～右縁	5.7
80	68		410	D—13	(19)	6.7×5.9	1.8	92	下縁	5.8
81	67			G— 6	(19)	6.4×7.0	1.9	106	右下～右縁	5.8
82	78			B— 6	(19)	8.5×9.4	2.2	224	下～右～上縁	14.3
83	83		413	B—12	(19)	8.6×9.0	2.3	254	右下～右縁	5.8
84	85			C—15	(19)	7.2×6.6	1.9	118	左下～下～右下縁	8.3
85	99			C—14	(19)	6.4×5.7	1.6	79	下縁	3.8
86	100			C—15	(19)	5.7×6.6	1.7	87	下〃	5.8
87	101			C—15	(19)	6.0×6.6	1.6	87	下〃	4.8
88	111		408	D—13	(19)	7.2×7.9	1.9	136	下〃	7.1
89	117		414	G—15	(19)	8.4×9.1	2.7	278	右下・右縁	6.0
90	158	1202		J—24	(19)	6.7×7.9	2.1	150	下縁	5.8
91	160			J—24	(19)	7.8×8.6	2.0	185	右〃	5.2
92	161	1099	404	F—10	(19)	8.0×8.1	2.3	208	下～右縁	7.3
93	162	1319		K—24	19	7.4×8.3	2.2	165	左下縁	3.8
94	163	1322	402	K—24	19	7.3×8.2	2.1	172	下縁	4.9
95	164			E— 9	19	5.5×6.2	1.7	77	下縁	3.1
96	167	1380		I—23	19	7.7×8.6	2.0	216	下～右縁	10.5
97	168	1032		F—12	19	6.0×7.0	1.8	108	下～右下縁	6.0
98	170		405	E— 9	19	7.0×8.6	2.0	187	下～右下〃	7.7
99	171			J—24	(19)	5.8×6.1	1.6	83	左～左下〃	7.0
100	173	1119	411	E—10	19	7.6×8.3	2.2	186	下～右下〃	11.0
101	174			B—13	(19)	6.3×7.2	1.8	103	下縁	4.2
102	176			C—15	(19)	8.1×8.0	1.9	184	右上～右～右下縁	6.3
103	177	287	407	F—14	(19)	7.7×8.0	2.3	209	下～右下縁	9.0
104	178	1041	409	F—12	19	8.5×9.3	2.2	225	下～右下〃	7.2
105	179	1008	403	G—12	19	7.6×9.0	2.4	228	下縁	6.8

第17表　螺蓋利器諸訳（Ⅳ類１）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	大きさ cm	厚味 cm	重量 g	欠損部分	欠損部分の長さ cm
106	9		G—21	G—21	(19)	8.5×9.4	2.5	268	下・右縁	2.7・4　計 6.7
107	14			G— 3	(19)	7.8×8.9	2.1	206	左・右縁	6・3.8　計 9.8
108	18			G— 4	(19)	7.5×8.4	2.0	170	左・左下・右縁	2.4・1.0・6.3　計 9.7

第17表　螺蓋利器諸訳（Ⅳ類２）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	大きさ cm	厚味 cm	重量 g	欠損部分	欠損部分の長さ cm
109	21			一　般	(19)	7.5×8.3	2.2	184	下・右下縁	1.8・2.8 計 4.6
110	25		421	一　般	(19)	7.8×8.7	2.3	208	左・下　〃	5.7・6.0 計11.7
111	26			D—13	(19)	7.4×8.0	2.3	175	左・下・右〃	2.5・4.4・3.2計10.1
112	27			B—15	(19)	7.6×8.7	2.1	190	上・下・右縁	3.8・4.8・0.9 計 9.5
113	30	181		C—20	(19)	7.7×8.6	2.1	192	左下・下〃	1.3・3.7 計 5.0
114	32			B— 5	(19)	7.7×8.6	2.3	210	下・右　〃	2.8・2.2 計 5.0
115	33		416	C— 7	(19)	8.1×8.9	2.0	212	下・右下〃	2.8・1.8 計 3.8
116	35			G—50	(19)	8.0×8.9	2.3	216	下・右～上縁	5.2・4.3 計 9.5
117	37			D—13	(19)	7.4×8.0	1.9	163	左・下・右縁	5.8・0.7・3.5 計10
118	38		417	G—38	(19)	8.0×8.8	2.1	204	下・右　〃	1.1・4.3 計 5.4
119	41			D—16	(19)	7.4×8.4	2.0	164	左下・右〃	3.8・3.4 計 7.2
120	42			D—16	(16)	7.3×8.8	2.3	192	左・右　〃	5.1・6.7 計11.8
121	48		420	G—27	(19)	7.9×8.6	2.2	220	左下・右下縁	4.0・6.2 計10.2
122	51			A・B・C—15	(19)	7.7×8.4	2.1	180	左・下～右下縁	2.6・7.1 計 9.7
123	53			C—14	(19)	8.2×9.1	2.3	224	上・右上縁	6.2・2.7 計 9.9
124	58			B—14	(19)	7.4×8.7	2.2	201	左下・下縁	0.9・8.9 計 9.8
125	60		422	G—27	(19)	7.9×8.5	2.3	208	左・左下・右下　縁	2.8・3.8・4 計 9.8
126	61		427		表	7.7×9.0	2.2	186	左・左下・右下～上縁	3.2・0.6・0.7・10.5　計15
127	62		419		(19)	7.4×8.1	2.2	174	下・右　縁	4.1・3.8 計 7.9
128	63			G—31	(19)	7.5×8.0	2.0	178	左・下・右～上　縁	1.8・3.5・4.8・2.2 計12.3
129	71			D—13	(19)	5.5×6.0	1.6	73	左下～右下・右　縁	6.4・1.7 計 8.1
130	72		424		(19)	6.3×6.9	1.9	112	左下・右下・右　縁	4.2・2.6・2.8 計10.6
131	74			G—33	(19)	4.8×5.3	1.6	50	左上・左下～下　縁	3.0・5.1 計 8.1
132	79			G—47	(19)	7.3×8.1	2.1	170	左・下・右縁	2.1・4.3・5.3 計10.7
133	80			C—14	(19)	7.9×8.7	2.3	209	左・下　〃	0.8・1.4 計 5.2
134	81			C—15	(19)	7.4×8.2	2.2	181	下・右　縁	2.9・1.3 計 4.2
135	86	452		B—16	(19)	7.5×8.7	2.2	208	右下・右上縁	2.5・1.8 計 4.3
136	90			B—12	(19)	8.0×8.3	2.4	226	左・下・右縁	3.3・4.6・2 計 9.9
137	91	408		C—17	(19)	8.2×9.3	2.2	223	下・右　〃	6.8・2.8 計10.6
138	92	334	426	F—18	(19)	7.4×8.1	2.2	200	左・下～右下縁	2.8・9.4 計12.2
139	103				(19)	6.0×6.7	1.5	93	右下～右上縁	5.2　計 5.2
140	105			E—15	(19)	7.6×8.5	2.3	197	上・右上縁	2.8・1.5 計 4.3
141	106		423	B—15	(19)	7.5×8.7	2.2	203	左上・下～右　縁	1.4・11.6計13.0

第17表　　螺蓋利器諸訳（Ⅳ類３）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	大きさ cm	厚味 cm	重量 g	欠損部分	欠損部分の長さ　cm
142	107		429	G—26	(19)	8.0×8.8	2.3	206	左～下・上～左上　縁	8.4・11.2計19.6
143	115			G—20	(19)	8.0×9.0	2.3	214	下・右縁	5.8・0.8 計 6.6
144	151	1077		F—11	19	7.8×8.7	2.3	207	左・右下縁	2.8・3.8 計 6.6
145	159			一　般	(19)	8.0×9.0	2.4	238	下・右　縁	4.7・1.0 計 5.7
146	165			F—11	19	7.8×8.1	2.1	220	左・右　縁	4.5・3.2 計 5.7
147	172			E— 9	19	7.3×8.5	2.0	166	左下・右〃	5.4・2.5 計 7.9
148	175		418	E— 9	19	7.5×8.4	2.0	181	左下～右下・右　縁	9.5・3.1 計12.6
149	195	317		E—14	(19)	7.4×8.3	2.0	187	左・下・右縁	1.7・1.8・0.9・2.0 計 4.6
150	196		430	F—19	(19)	6.9×7.0	2.0	131	左下～右下縁	21.2　　計21.2
151	197	1317	428	K—24	(19)	7.3×8.0	2.1	168	左上～左・下～右　縁	4.5・11　計15.5
152	198	1037		F—12	19	7.4×8.4	2.2	180	左～下・右縁	9.7・2.4 計12.1
153	199	1086	425	E—12	19	8.2×8.8	1.9	200	左・下～右下　縁	3.5・7.8 計11.3

第18表　　螺蓋利器（Ⅴ類１）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	大きさ cm	厚味 cm	重量 g	欠損部分	欠損部分の長さ　cm
154	3		434	G— 1	(19)	8.3×9 3	2.6	242	左～下～右縁	13.2
155	4		432	C—11	(19)	7.7×8.7	2.2	197	左～下～右縁	16.7
156	5		431	D—18	(19)	7.5×8.9	2.2	196	上・左・右下縁	1.6・2.2・13計16.8
157	31		436	C—11	(19)	8.3×9.2	2.3	234	左～下～右縁	16.2
158	54		442	G— 1	(19)	8.0×8.9	2.4	206	左～下～右縁	17.8
159	55		433	一　般	表	7.7×8.5	2.3	178	左～下　縁	12.5
160	73	433	441	B—17	(19)	7.7×8.7	2.2	200	左下～下〃	10.3
161	76			C—11	(19)	7.4×8.4	2.1	177	左下～下～右縁	13.2
162	84	151	444	G—22	(19)	8.3×9.5	2.3	250	左～下～右下縁	13.8
163	89	321		D—18	(19)	7.3×8.2	2.2	178	左下～下～右縁	11.3
164	166			F—12	(19)	6.2×7.1	1.9	119	左～下～右下縁	9.2
165	169	1049		F—12	(19)	7.5×8.2	2.2	184	左～下～右下縁	10.6
166	180		440	E— 9	19	7.4×8.3	2.2	186	左～下～右縁	13.7
167	181		435	E— 9	19	7.3×8.1	2.2	172	左～下～右縁	14.0
168	182	1257	443	K—23	19	7.9×9.1	2.3	224	左～下～右縁	16.4
169	183		445	J—24	(19)	6.5×9.3	2.4	225	左～下～右縁	12.8
170	184			G—16	(19)	8.4×9.0	2.7	252	左下～下～右縁	10.8
171	185			E—15	(19)	7.3×8.2	2.0	169	左下～下～右下縁	11.2
172	186			E—11	(19)	7.6×8.3	2.0	180	下・右縁	7.8・1.7 計 9.5

第18表　螺蓋利器諸訳（Ⅴ類２）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	大きさ cm	厚味 cm	重量 g	欠損部分	欠損部分の長さ　cm
173	187	1324		K－24	19	7.3×8.9	2.4	228	左～下～右縁	13.8
174	188	1241		K－23	19	7.1×8.5	2.0	172	左～下～右縁	13.2
175	189	1170		J－23	(19)	5.5×6.0	1.5	74	左～下～右縁	11.8
176	190	1202	438	J－24	(19)	8.6×9.4	2.4	259	左下～下～右縁	15.2
177	191	1085		E－12	19	7.4×8.4	2.2	191	左～下～右上縁	19.4
178	192	1098		F－10	(19)	8.1×8.9	2.1	214	左下～下～右下縁	10.2
179	193	99	439	J－25	13	7.8×8.9	2.2	194	左～下～右～上縁	23.8
180	194	1200	437	J－24	(19)	8.5×9.0	2.3	245	左下～下～右縁	17.5

貝札（446）

この貝製品は上辺 1.3cm，下辺 2.3cm，高さ１cmの台形に近い形をしている。中央部には台形の細刻を行ないその中に三角文を彫り込んでいる文様を施している。貝殻はイモガイの可能性が高い。

貝殻品

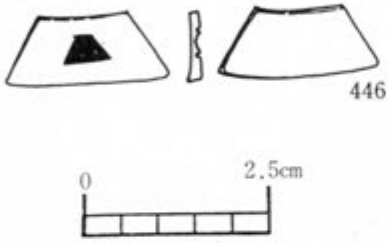
概報では貝小玉を６点上げた。これらは現在の海岸で簡単に採集されるため，今回は貝殻品として簡単に報告する。イモガイ類のもので 0.5cm～1.5cmの大きさである。

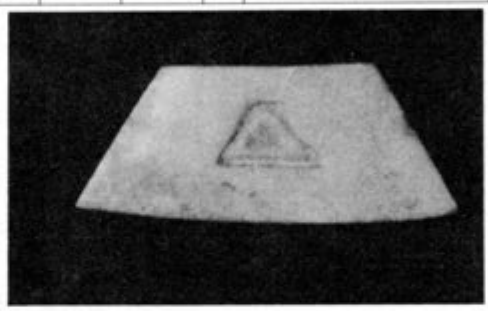
４）鉄製品（447～451）

鉄製品は10点出土した。鉄製品の中には完形品が２点出土している。447はヘラ状鉄製品で長さ10.0cm，幅５cm，厚さ 0.7cmのものである。柄の取り付け部が長さ 1.8cm，幅 1.5cmであり，繊維痕が残っている。先端部は90度の尖具合で厚さは薄くなっている。器種としては奄美地方に多いヘラが考えられるが，今後の調査で類例の検討が必要である。448はつりばりである。長さ 2.8cm，厚味は 0.4cmで，かえりは付いていない。他の製品は形態不明である。

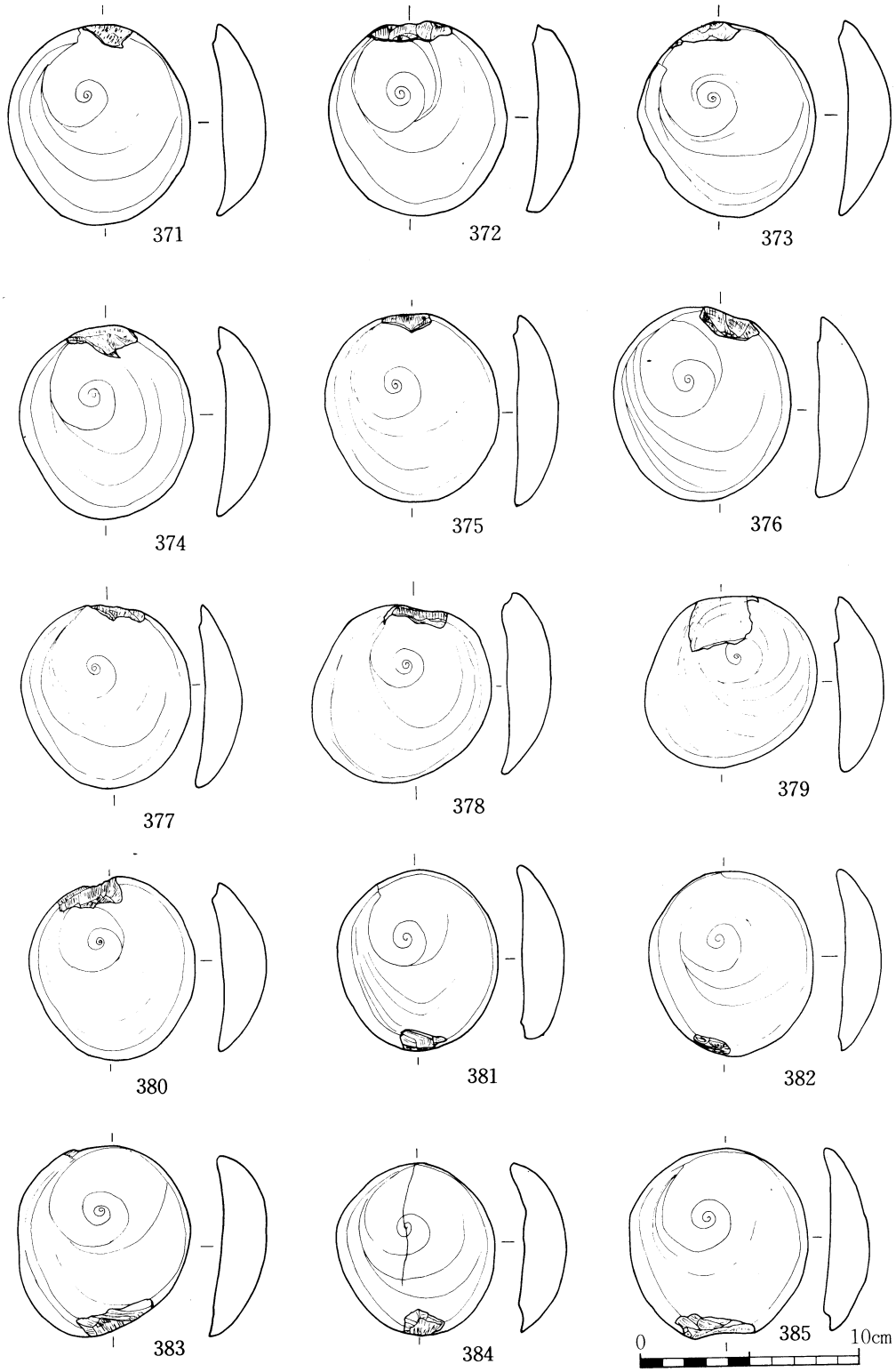
第19表　鉄製品諸訳

番号	挿図番号	出土区	層	特　　徴	番号	挿図番号	出土区	層	特　　徴
447	447	F－20	19	ヘラ状鉄器	450	450	K－23	19	L状に屈接・断面が方形
448	448	C－15	(19)	つりばり	451	451	G－ 9	13	断面が円形
449	449	B－13	(19)	扁平状					

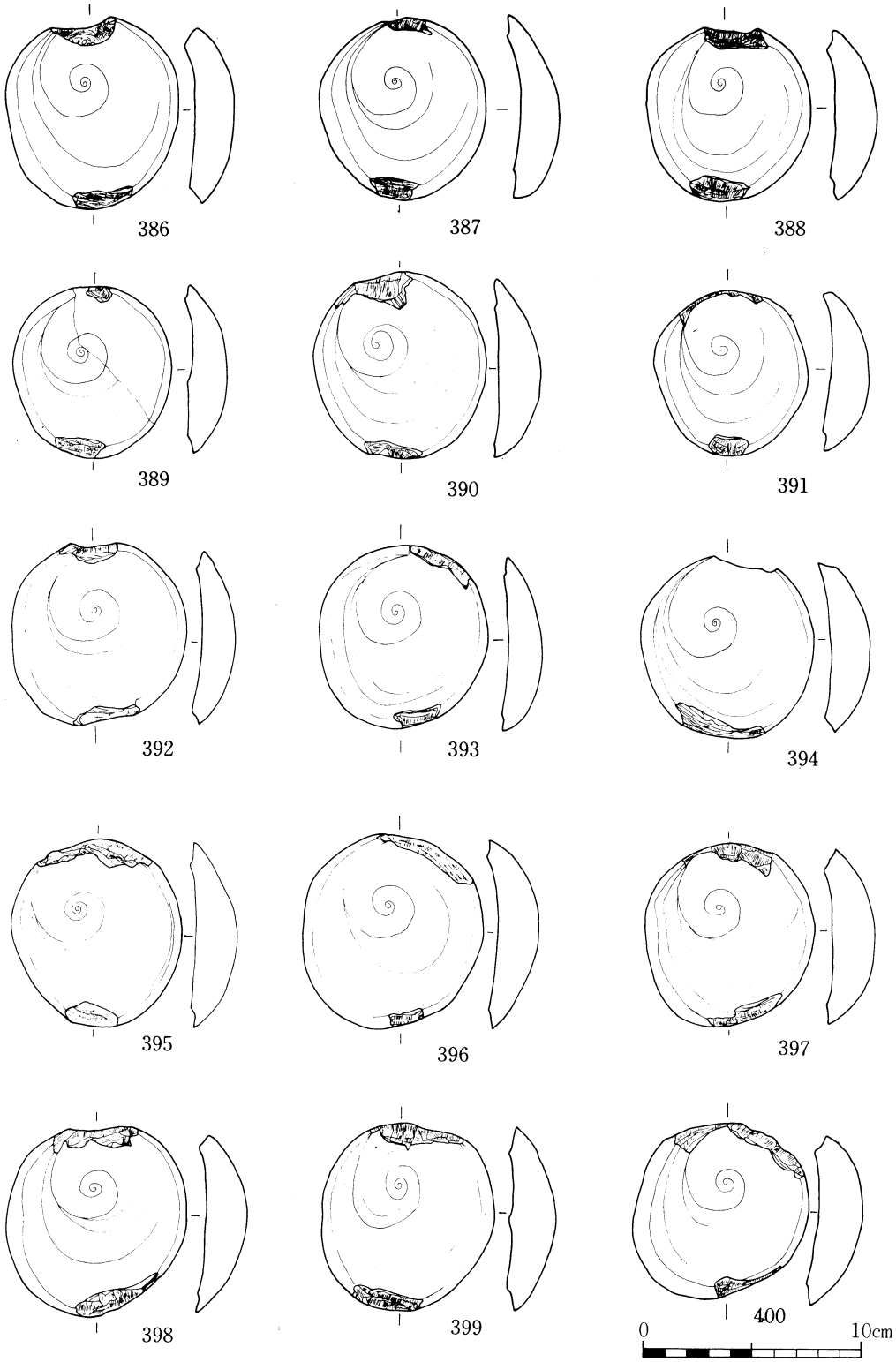




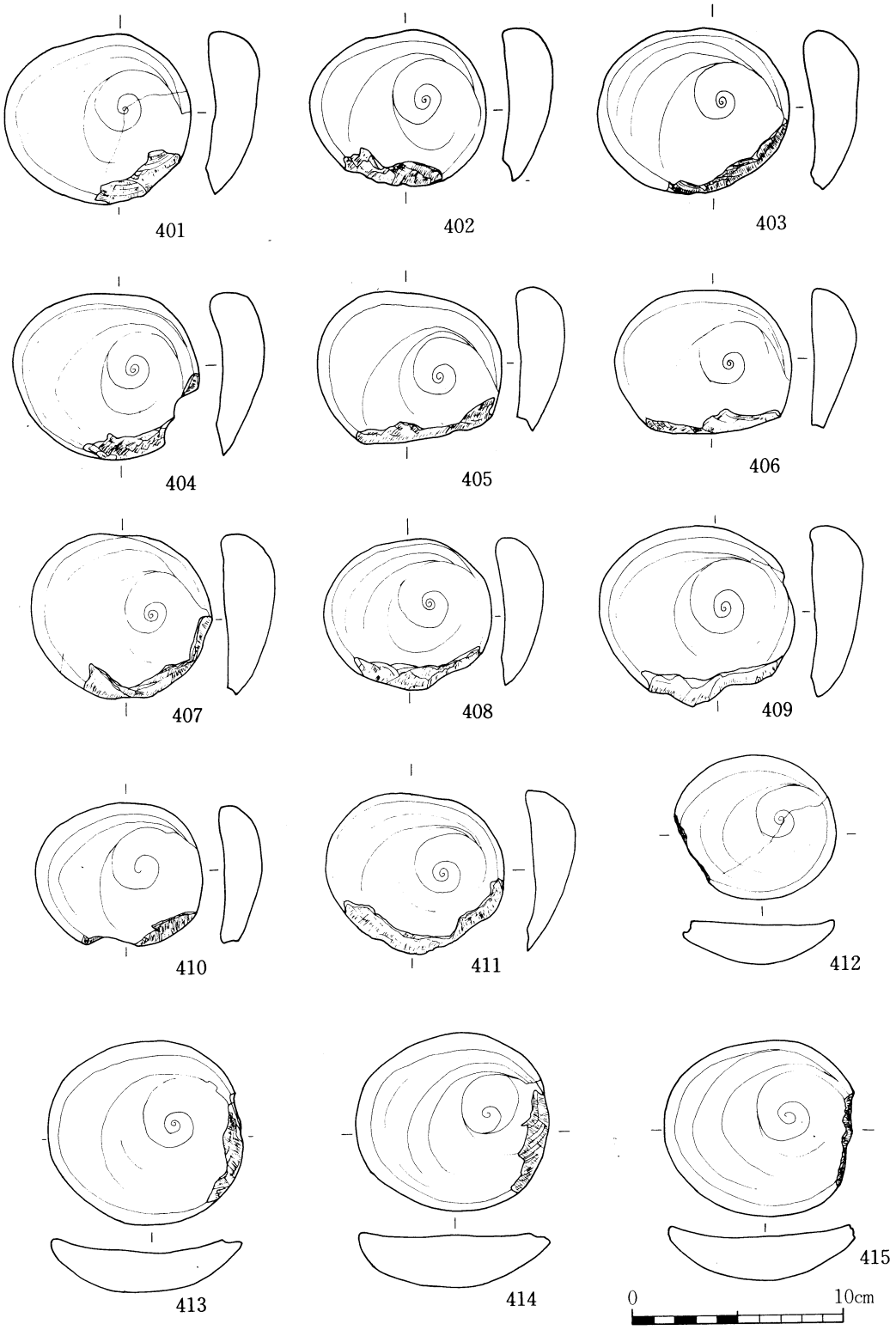
第57図　長浜金久第Ⅰ遺跡貝製品実測図(19)



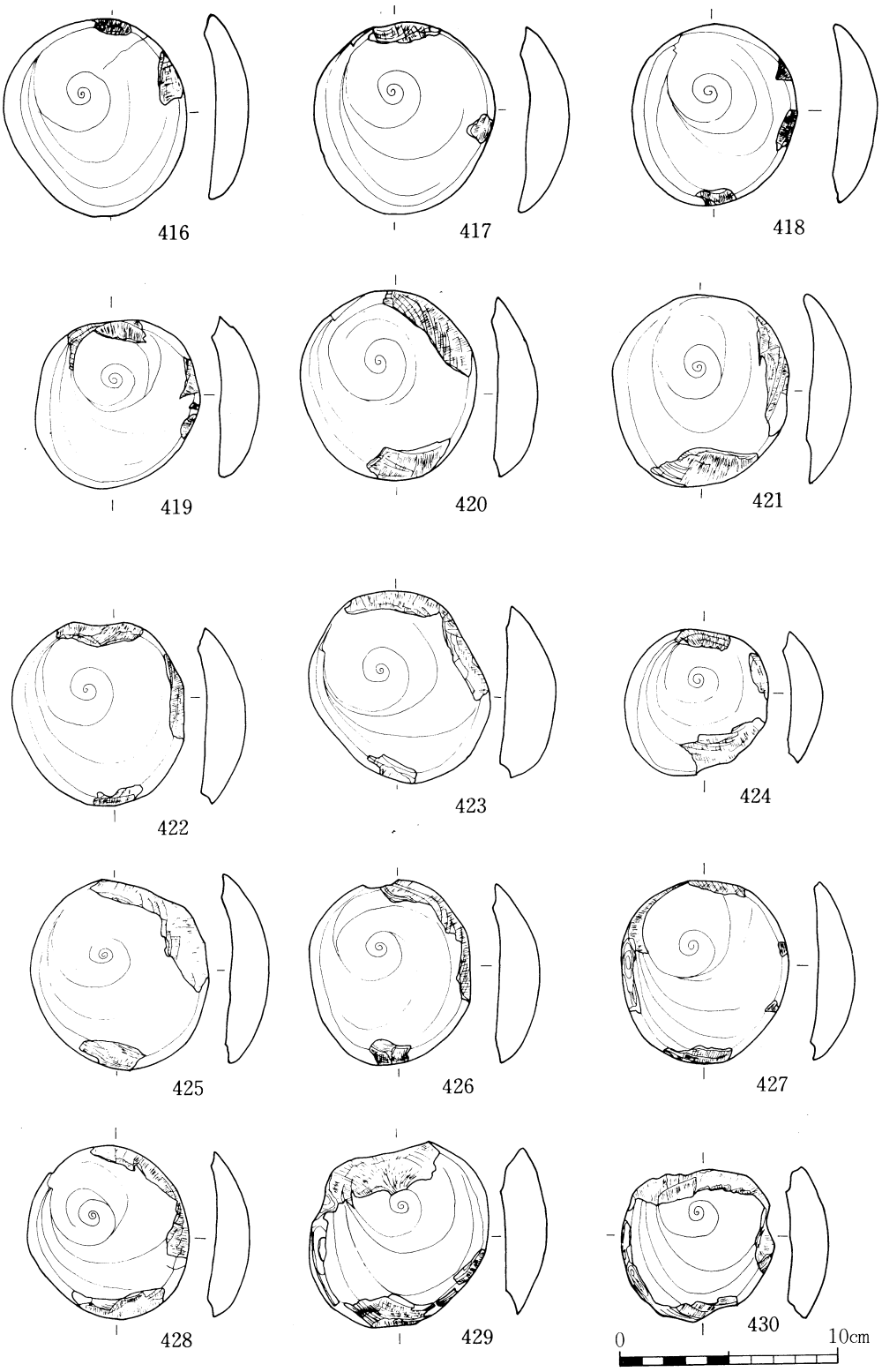
第58図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器(1)　　Ⅰ類



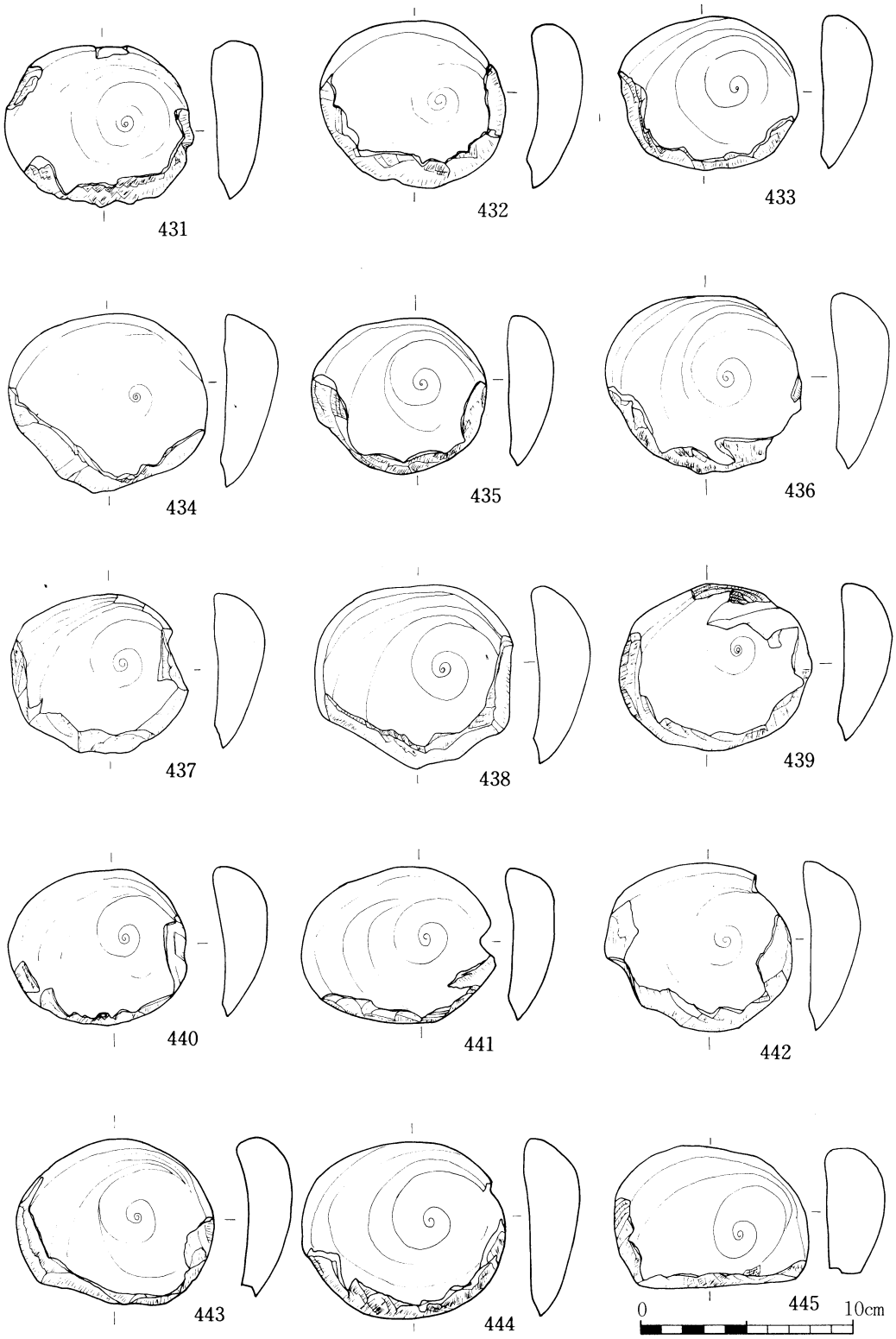
第59図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器(2)　Ⅱ類



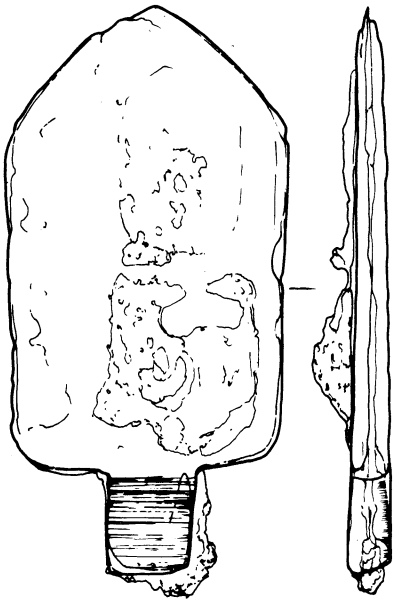
第60図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器(3)　　Ⅲ類

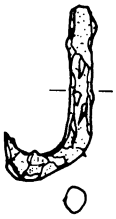


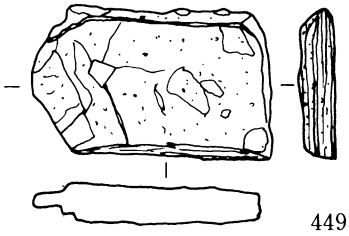
第61図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器(4)　Ⅳ類

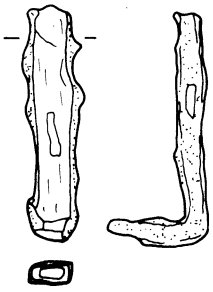


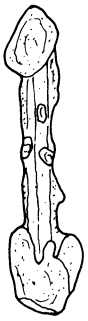
第62図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器(5)　　Ⅴ類

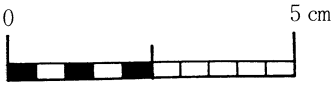












第63図　長浜金久第Ⅰ遺跡の鉄製品実測図

第２節　長浜金久第Ⅱ遺跡の概要

１．遺跡の概要

長浜金久第Ⅱ遺跡は第Ⅰ遺跡の海岸側に対して山手側の貝塚遺跡である。第Ⅱ遺跡は第１次調査で発見された第Ⅱ地点の遺跡である。

第１次調査では９ヶ所のトレンチを入れ，集石遺構と人骨及び包含層を確認した。第２次調査で土層断面を検討した結果，人骨は砂丘形成の状況から，本遺跡とは異なる時期のものと判断できた。（人骨は新砂丘内に検出）

第２次調査の調査面積は約 160㎡で遺跡を約４ｍ幅で東西に縦断する形になった。第３次調査では住居跡の部分を拡張し住居跡全体を確認した。西側は山手で住居跡，炉跡，土壙が検出され東側の海岸側に貝塚が形成されている。この遺跡は旧砂丘上にできたと考えられ遺跡の生活面が海岸側では２～３ｍ急傾斜し，旧海岸線と思われるところは表面が摩耗した貝殻やサンゴが多く出土した。この旧砂丘は幅が約30ｍで山手に向って薄くなっている。また住居跡や土壙のあるところは若干凹地になっている。（第14図参照）

包含層の標高は約 8.8ｍあり，厚さは約30～20cm，奥行は約８ｍ位で，部分的には貝の種類が異なるがマガキガイ，アマオブネ，スイジガイ，クモガイ等がみられ，とくにイソハマグリは９ヶ所貝殻集中箇所がみられ大きなものは３ｍにもおよぶ箇所もあった。また，貝塚の中に炭や灰が５ヶ所で認められ，50～70cmの円形状を呈していた。（第68図）

２．遺構

住居跡（第69図）

住居跡はＡ－５区で検出した。表面からの深さは約 1.5ｍで，旧砂丘を掘り込んであり，住居跡の規模は2.3×２ｍの角丸方形で深さ約20～30cmの竪穴住居跡で東側の壁と西側の壁には石が組み置かれている。この石は砂丘であるため壁の崩壊を防ぐためと考えられる。遺物は長浜金久タイプ（嘉徳Ib式も含む）の土器や骨角器が出土している。

炉跡（第69図）

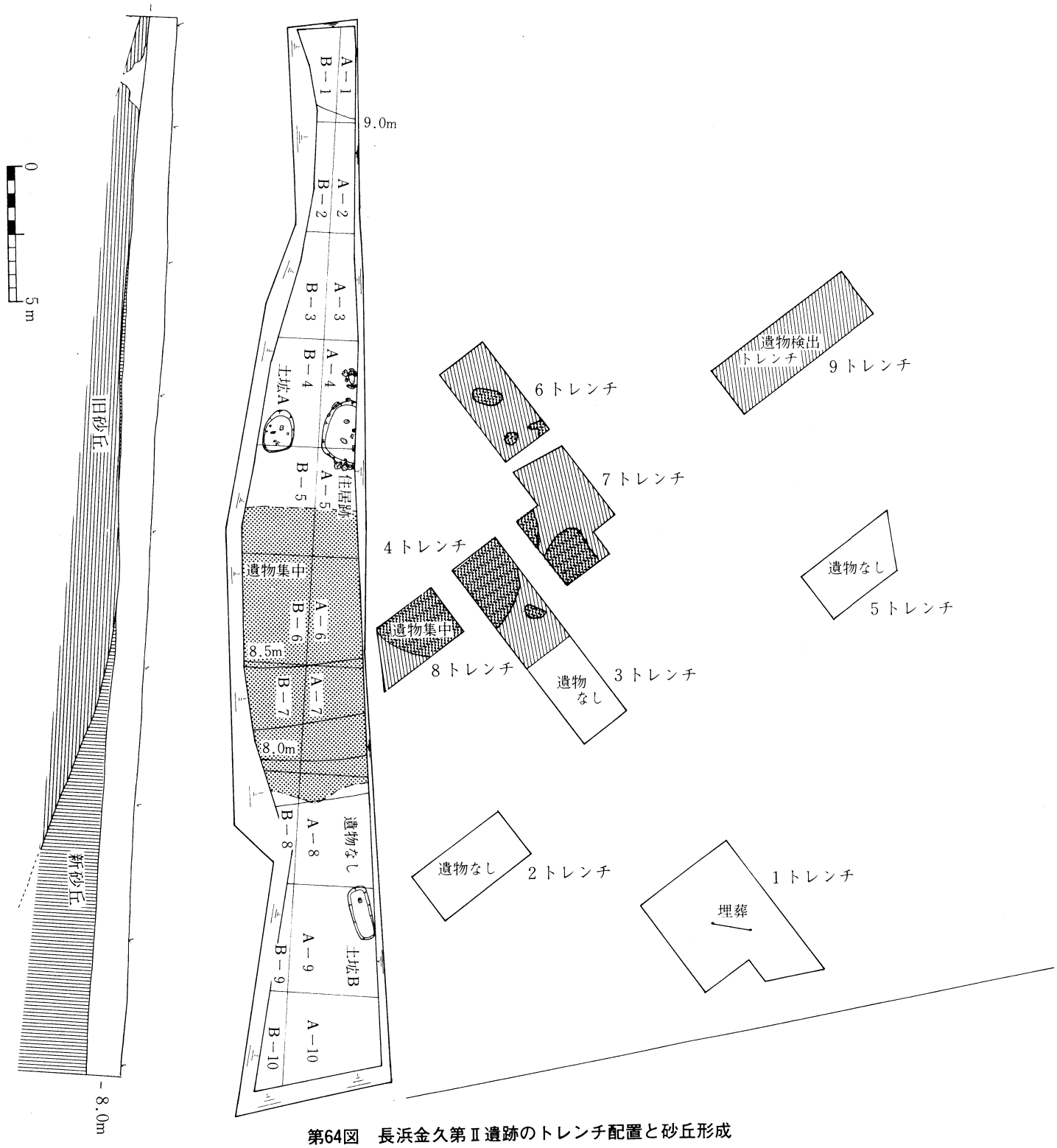
Ａ－４区で検出した。住居跡の西側で表面から深さ約 1.5ｍ下で発見した。20～30cmの石を敷いたもので中央は若干くぼんでいる。中には灰・炭が多くみられ，その上に40ｍ位の平たい石をかぶせた状態（破棄した石）で検出した。規模は直径80ｍの円形状である。

土壙Ａ・Ｂ（第69・70図）

Ａは径 1.4ｍ，深さ約18cmの円形で若干ゆがんだ形をしている。中には石や貝製品の壊われたもの，貝輪製作時に出る貝殻の破片や貝殻等が出土した。検出位置はＢ－５区で住居跡の南側にあたる。性格は不明である。ＢはＡ－８区に検出したもので縦約 2.1ｍ，横約 0.6ｍ，深さ約30cmで長方形をした土壙である。表面からの深さは約１ｍ位で新砂丘内に検出した。土壙の中央は黒褐色を呈する。土壙内に遺物はなく，土壙上面に石が検出した。性格は不明である。

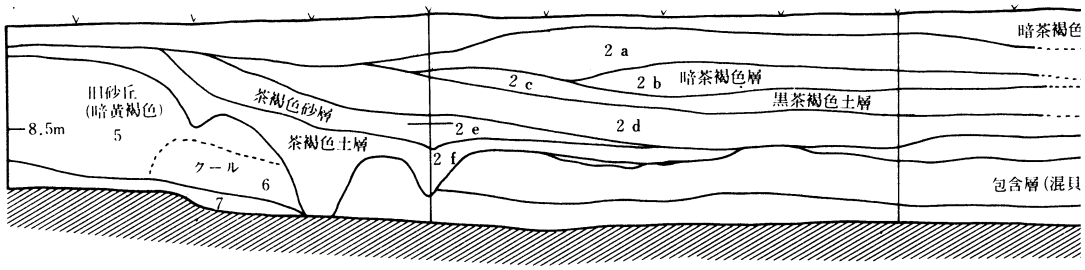
４）集石・遺構（第66図）

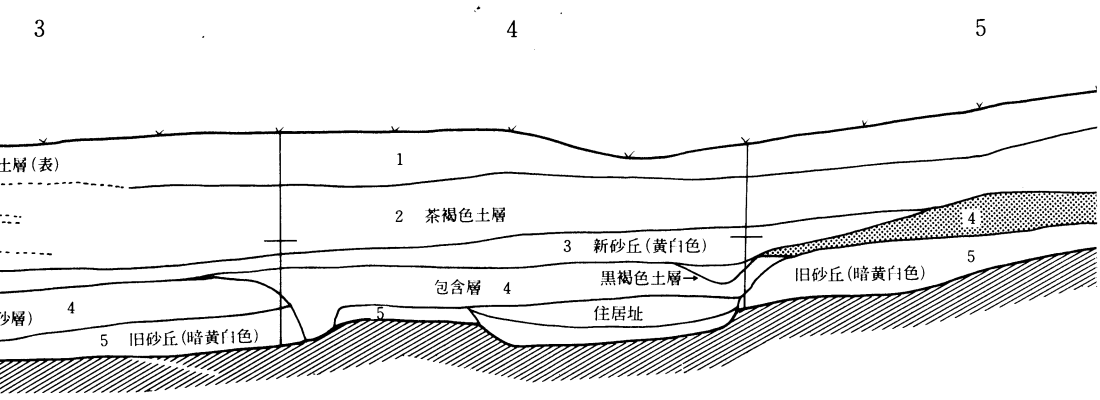
第８トレンチより第Ⅲ層に検出した。20cmの位の石を積み上げたもので，径は60cmであった。



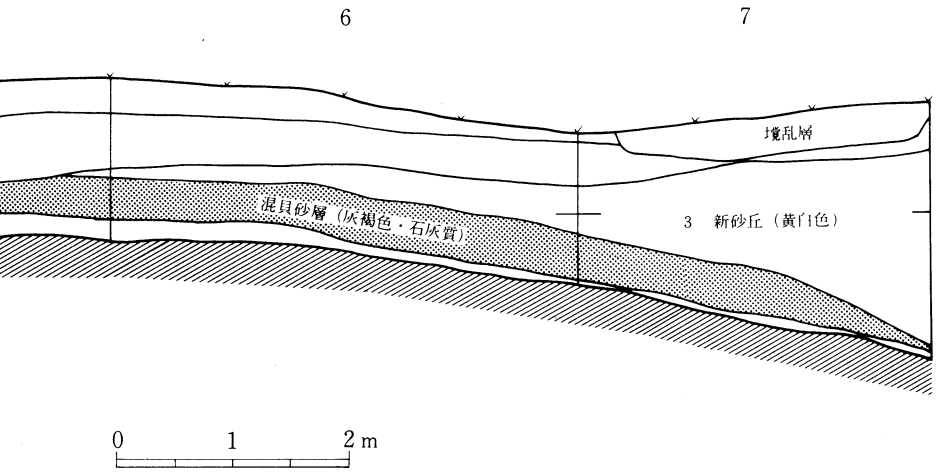
第64図　長浜金久第Ⅱ遺跡のトレンチ配置と砂丘形成

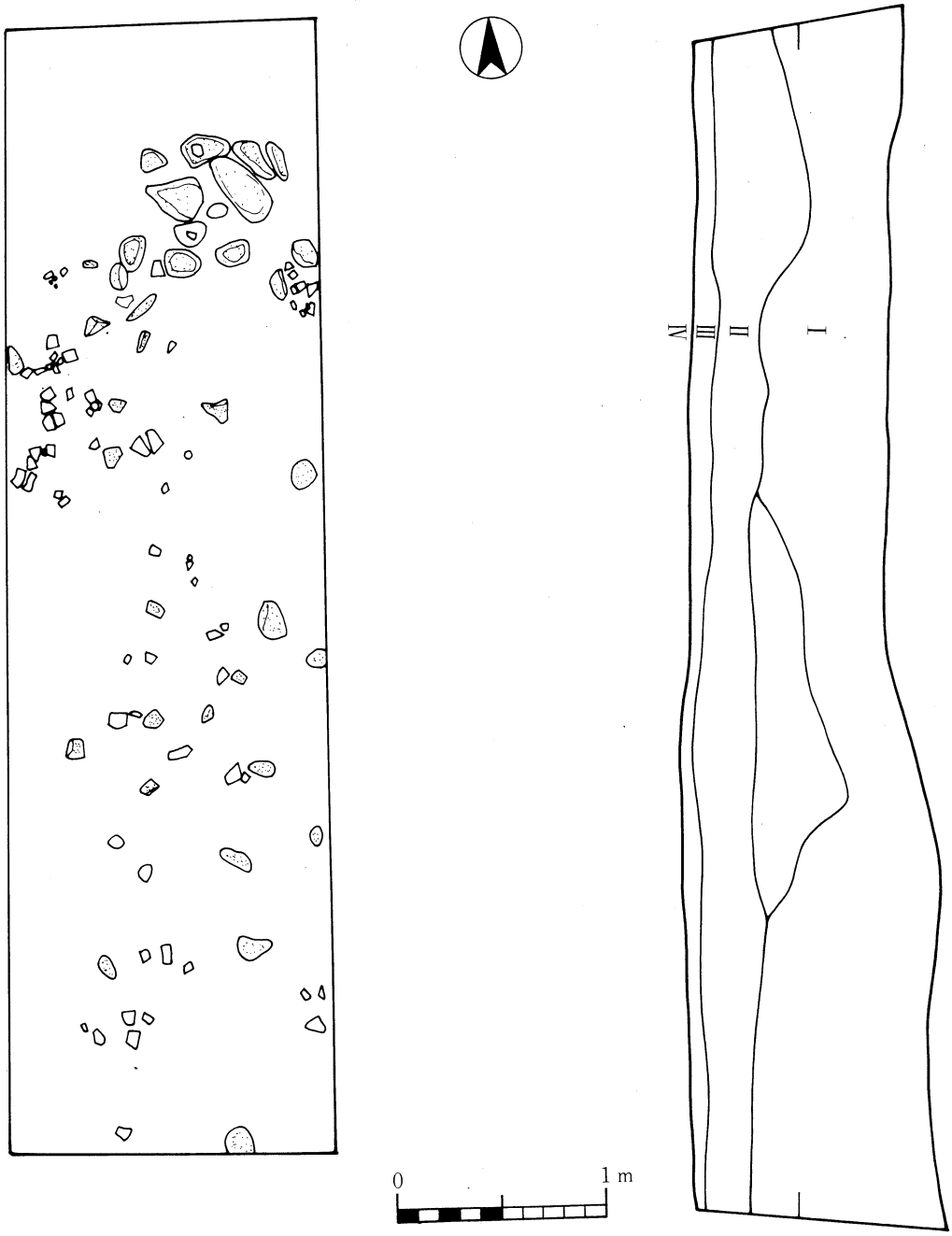
1　　2


暗茶褐色
2 a
2 c
2 b
暗茶褐色層
黒茶褐色土層
旧砂丘
(暗黄褐色)
5
8.5m
茶褐色砂層
茶褐色土層
2 e
2 d
2 f
クール
6
7
包含層(混貝

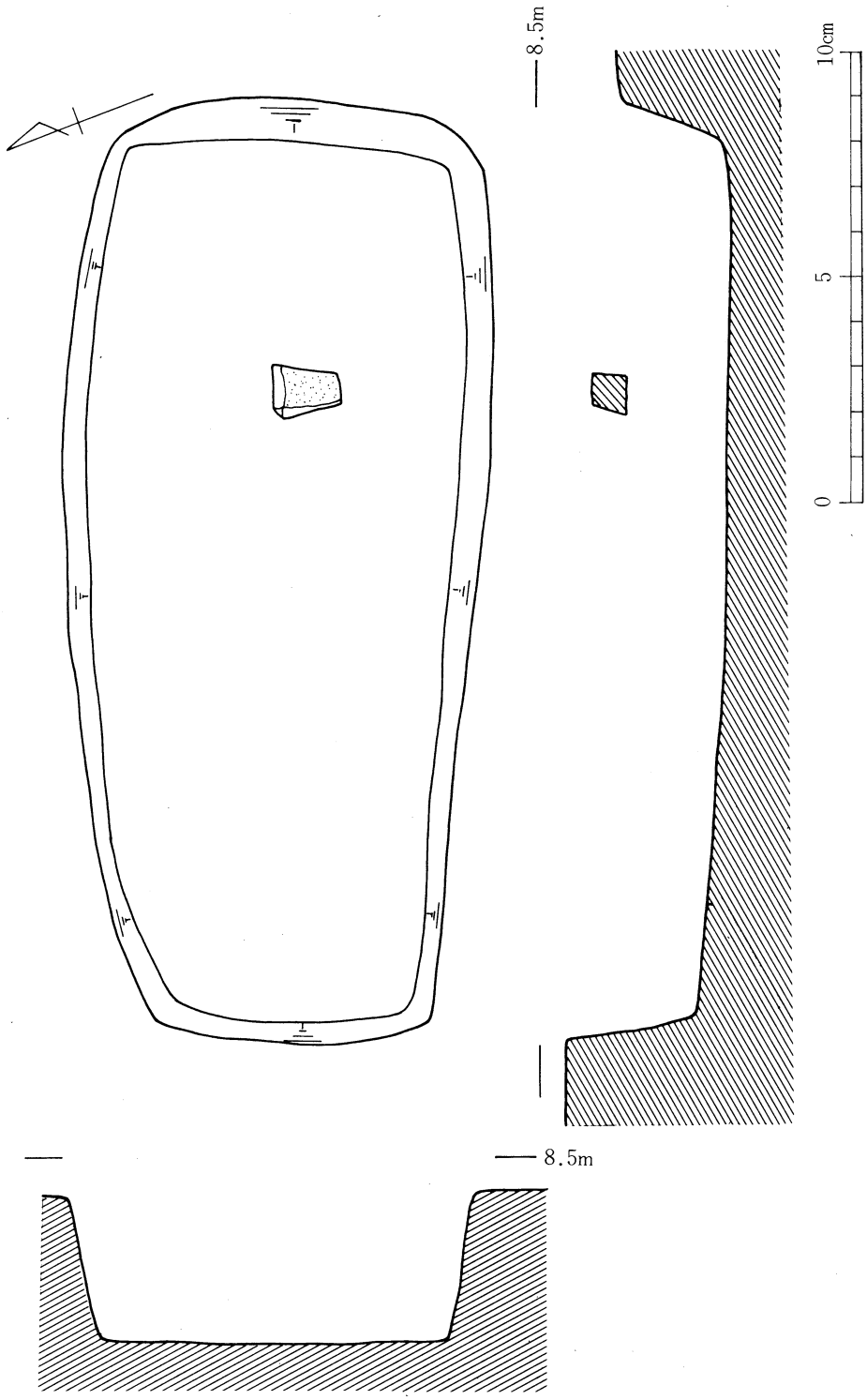


第65図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土層図

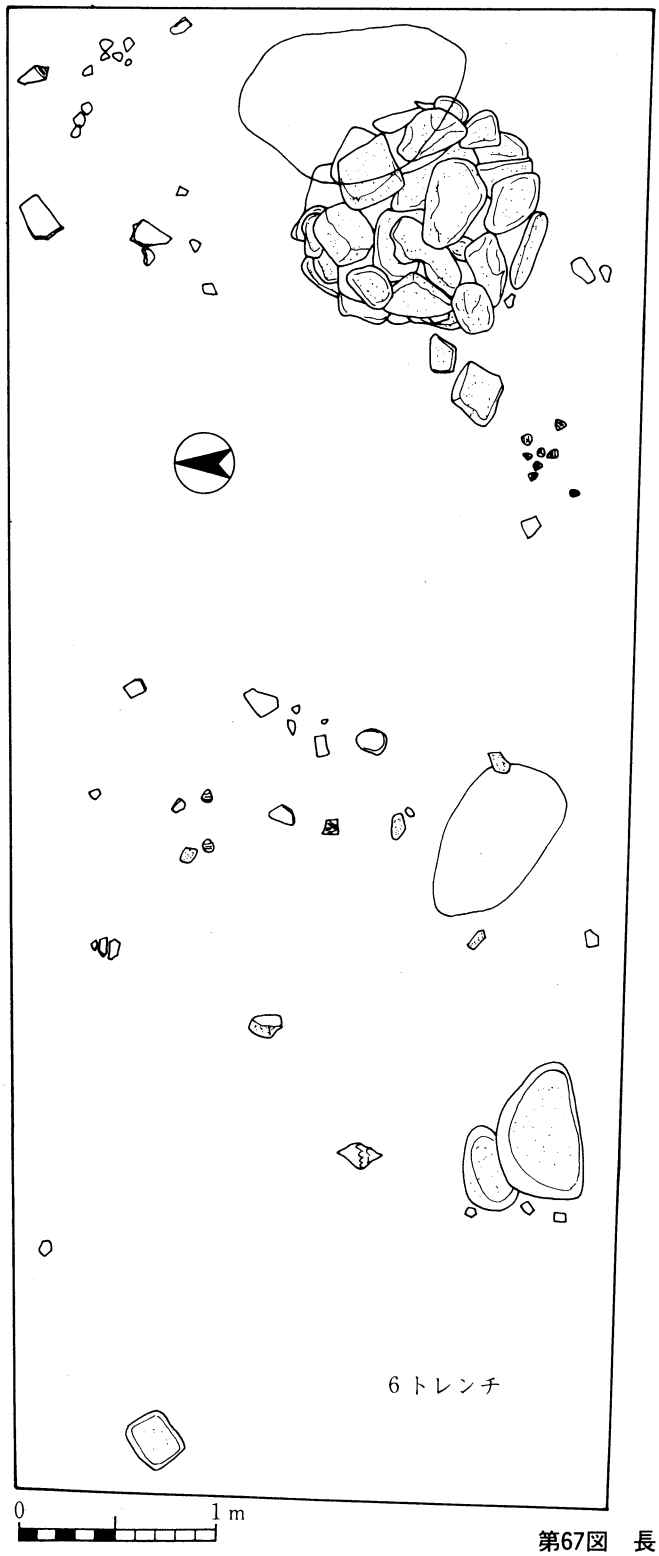

6
7
攪乱層
混貝砂層（灰褐色・石灰質）
3　新砂丘（黄白色）
0
1
2 m

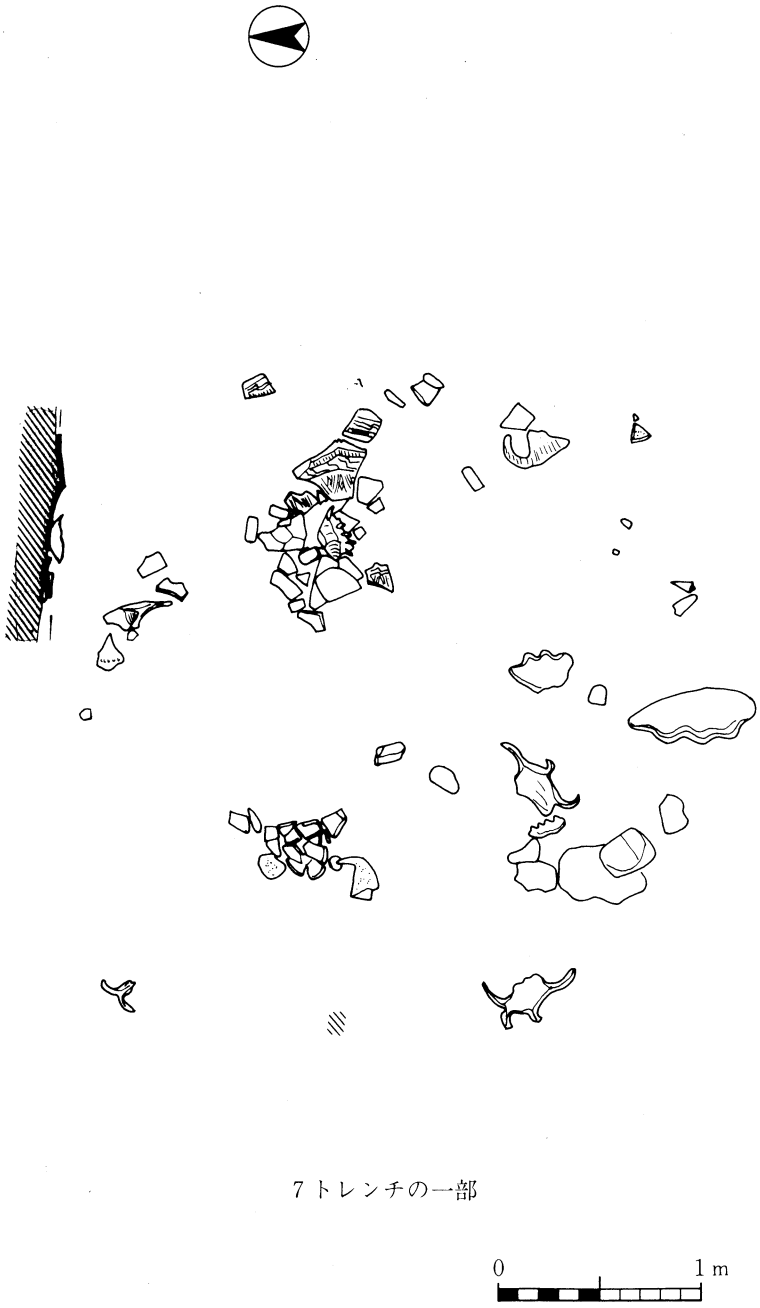


第66図　長浜金久第Ⅱ遺跡の遺構・遺物検出状況図(1)　9トレンチ

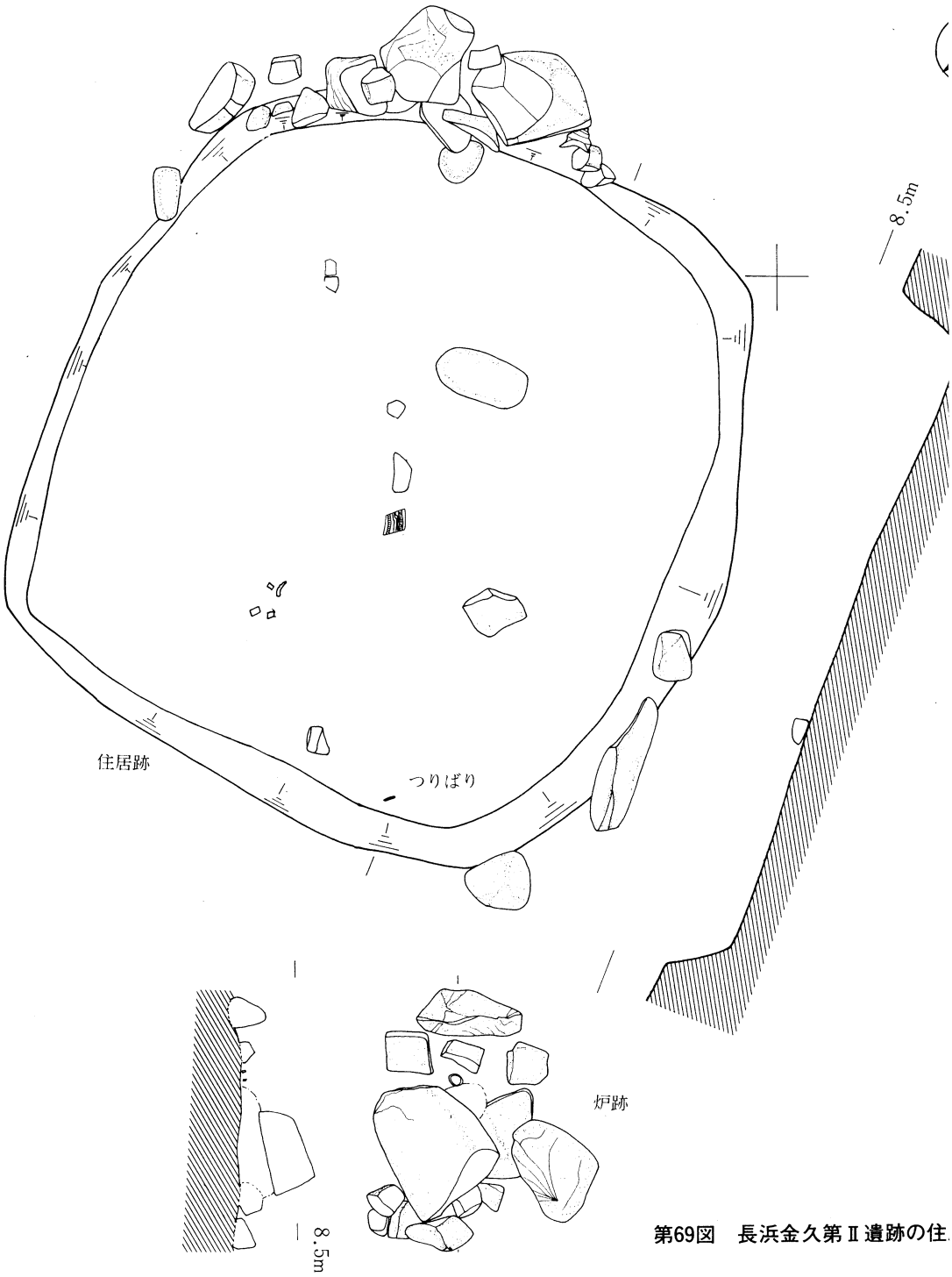


第70図　長浜金久第Ⅱ遺跡土坑Ｂ図（新砂丘）

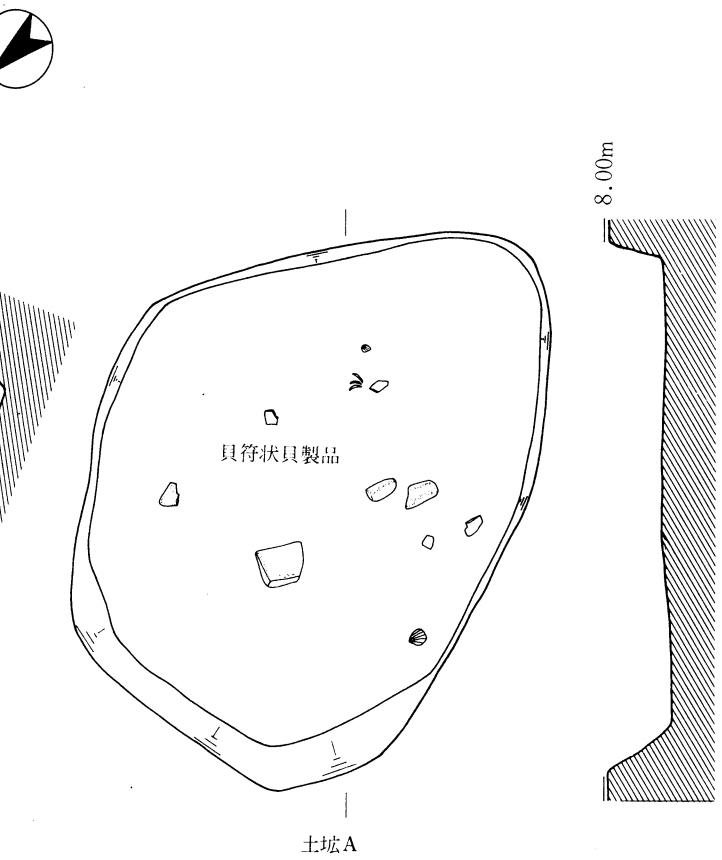


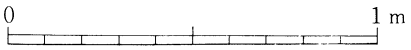


第67図　長浜金久第Ⅱ遺跡の遺構・遺物検出状況図(2)



第69図　長浜金久第Ⅱ遺跡の住





居跡・炉跡・土坑A検出状況図

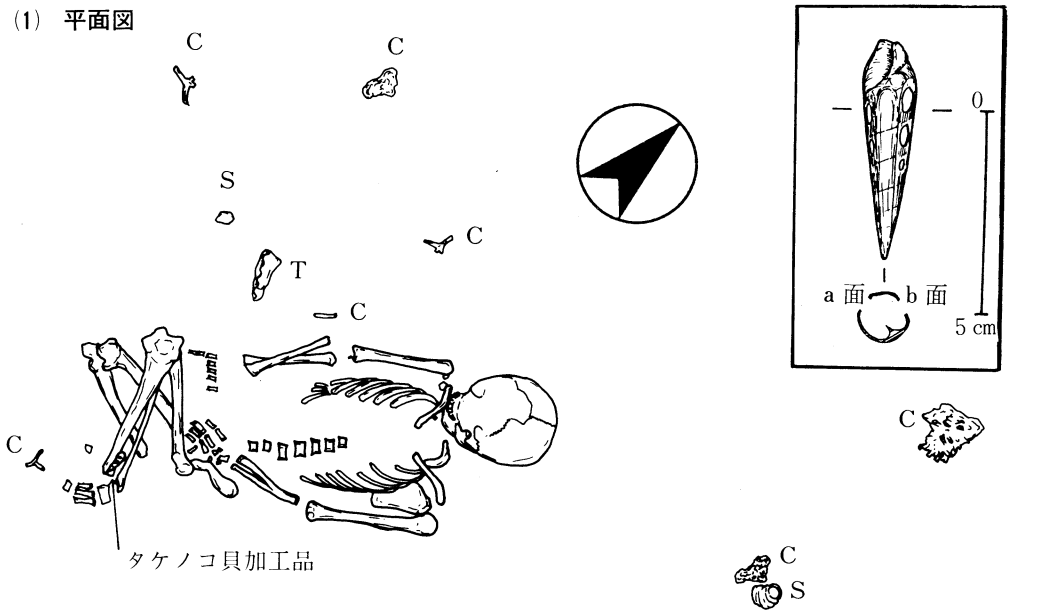
5）埋　葬（第54図，第61図）

1トレンチの南側壁面に深さ約 160cmの砂層中より頭蓋が発見されたのでトレンチを拡張して人骨全体の検出を行った。人骨の主軸方位はN—44°—E。脚は膝を強く折り曲げ，下腿を立てた状態にし，右膝の位置は左膝より若干高く，両膝は中心線より右側寄りに位置する。両足首は左側にそろえてある。椎骨はほぼ水平に近い。頭蓋はわずかに右側に傾斜しているが全体的にほぼ仰臥となる。腕は左右とも伸ばし，骨盤あたりに置く，埋葬形態は仰臥屈葬（下肢）となる。

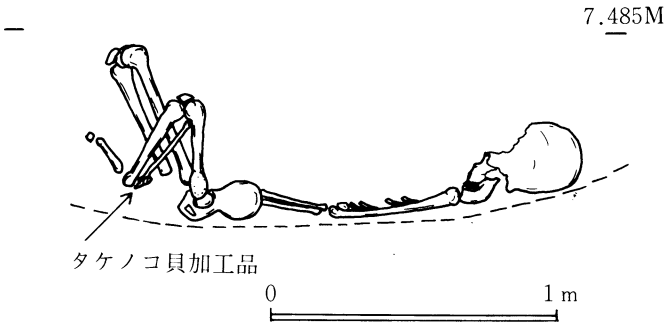
タケノコ貝製加工品（第61図）人骨の左側踝の下位から出土した。全長 5.4cm。「a」，「b」面をていねいに研磨し水平な面を作り，3対の穴6個が穿かれている。貝の径が大きい部分は必然的に穴も大きくなり，上位から下位へと穴も小さい。

この層より出土した遺物は外耳土器と丸底の小形土器が出土している。

(1)　**平面図**



(2)断面図



C　：サンゴ
S.H：イカのコウラ
T　：シャコ貝
S　：貝

第71図　長浜金久第Ⅱ遺跡埋葬状況図

3．人工遺物

1）土器

本遺跡で出土した土器を文様・器形・形態に分類した。452 ～ 456をⅠ類，457 ～ 465をⅡ類a，466 ～ 516をⅡ類b，517 ～ 521をⅡ類c，522 ～ 535をⅡ類d，536 ～ 543をⅡ類e，544 ～ 547をⅢ類，548をⅣ類，549 ～ 562をⅤ類，563 ～ 569をⅥ類，570 ～ 571をⅧ類，572・573をⅧ類，574をⅨ類，575をⅩ類，512をⅪ類とした。そして，底部は 576～607，土製円盤は 608～611 に示した。なお鹿児島県埋蔵文化財報告書31で分類したのは23・24・27がⅠ類にあたり前回報告書のⅠ類とⅡ類の一部になっている。Ⅱ類のaは25・26でⅡ類のbは28～36，Ⅱ類のcは42で前回と同じである。Ⅱ類dは43・52で前回のd・eを同じであり，Ⅱ類eは47・48・52で前回の分類と同じでⅡ類eと全体を変更した。なおⅡ類～Ⅹ類もそれぞれ変更した。

第Ⅰ類（452～456）

この土器は口縁部が直行ないし，やや外反する器形で文様は押し引きと，雷文にみられる折れ線と折れ線で区画しその中を押し引きする類である。452 はやや外反する口縁部で口唇部は平坦面をなしている。文線と上から6条は平行押し引き文を横走させて，8条目は折れ線に沿って押し引き文を折れ線状に施こしている。口唇部にも押し引き文を1条施している。453 はやや外反する口縁部で口唇部は平坦面をなし，器面には三角形の押し引き文と折れ線区画文の組み合せの文様を施している。454 は直行する口縁部で口唇部に突起を付けている。文様の最上段は横走の三角形押し引き文を付け，その下は折れ線区画文を横位に並べその区画文にそって折れ線状に押し引き文を施している。455 は直行する口縁部で押し引き文と折れ線で文様をつけ，口唇部にも押し引き文を付けている。456 は口縁部近くの土器で折れ線と押し引き文を施している。

第20表　第Ⅰ類土器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
452	B－6 B－7	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	454	A－6	4	黒茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
453	A－6	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	455	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
454	B－6	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良						

第Ⅱ類a（457～466）

この土器類は折れ線区画文と縦長の施文具による刺突（細長刺突連線文）の組み合せで文様を施している。また胴部には鋸歯文を数条で重ね描く（重鋸歯文）文様を付けている。457 は直行する口縁部で最上段には縦長刺突文を横走させ，その下には折れ線区画文を横位に連続させている。胴部近くには鋸歯文の一部がみられる。458 は口縁近くで下に細長刺突連続文を横走させ，その間は折れ線区画文の中に縦長刺突連続文を施している。459 は直行する口縁部で上位は沈線で挟む細長刺突連続文を付け，下位は折れ線で区画細長刺突連続文を施している。胴部の一部には鋸歯文がみられる。460 は口縁下部から胴部にかけての土器である。口縁部は

細長刺突連続文を沈線で挟み横走させ，下位は折れ線区画にそって刺突している。胴部は5条の重鋸歯文を施こしている。461も460と同じ文様帯を付けている。462は底部が欠けている土器であるが器形が良くわかり，高さ18.5cmの土器である。口縁部は口径16.8cmでやや外反する山形口縁で見込みは四角形になっている。山形部の口唇部には2本の刻みを入れ，3つの凸部をつくっている。口縁部の文様は上位に沈線で挟む細長刺突連続文を横走させ，下位は折れ線区画による構成をつくり，区画内も区画に沿って細長刺突連続文を施している。この文様帯は山形口縁に沿って付けている。胴部はややふくらみのある器形で，　文様は3条の重鋸歯文帯を廻らし，その鋸歯の間にも3条の鋸歯を上下につけ，あたかも重鋸歯文を2重に施した様にみせた構成をしている。なおこの文様帯の上辺に1本の沈線を山形口縁に沿って付けている。底部は平底しか出土しておらず，平底の器形と思われる。器面調整はヘラ調整によるハケ目文が上下にみられる。463は直行する口縁部で口唇部はややふくらみがある。文様は折れ線区画でなく，長方形の区画を施こし，中に区画に沿った細長い刺突連続文を縦位に施こしている。胴部は 462と同じ重鋸歯文を付けている。464は口縁部の一部で縦位と横位の細長い刺突連続文を施こしている。465は口縁部の一部で折れ線区画内に沿って細長刺突文を連続させている。466は口径27cmの若干口縁部が外反し，口唇部には4箇所に台形突起を付け胴部はやや丸味をもつ器形で高さ26cmの完形に近い土器である。文様は口縁部に2段の折れ線区画を付け，その中に長方形の刺突連続文を施している。胴部は3条の沈線による重鋸歯文を廻らし，鋸歯と鋸歯の間の下位に2条の鋸歯を施している。器面調整は篦調整によるハケ目文が胴上部に横走し，胴下部は縦走している。底部の底は接合しなかったが平底しか出土していないので平底の底部と思われる。

第21表　　第Ⅱ類a土器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
457	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	462	A・B-6.7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
458	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	463	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
459	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	464	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
460	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	465	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
461	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	466	A-6.7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良

Ⅱ類b（467～516）

この土器類は口縁部に沈線で挟まれた細長刺突連続文を上下に施し，その間は折れ線区画を付けるグループで，胴部の文様は重鋸歯文を施すものが主体である。

467は口径25cmの外反する山形口縁をもち，頸部で若干締まり，胴部は丸味をもつ高さ25cmの土器である。見込は四角形で山形口縁は4ヶ所ある。山形口縁の口唇部は2ヶ所刻みを入れている。口縁部の文様は上下に沈線で挟んだ細長刺突連続文を付け，その間は折れ線区画を沈線で施している。その折れ線の横線は2本平行である。胴部は3本沈線による重鋸歯文を付け，鋸歯部の反対側にも3本組の鋸歯を施し，あたかも2つの重鋸歯文を組み合わせた様な文様構

成をしている。468 は山形口縁部の部分で，口唇部には 2 つの刻みを入れ，やや外反する土器である。山形口縁の口唇部には 2 つの刻みを入れ，文様は上下に細長刺突連続文を付け，間には折れ線区画文を沈線で山形状に施している。胴部の文様は 3 条の重鋸歯文を付け，鋸歯の上部間に鋸歯を入れている。469 は 468 と同じ構成をしているが，口唇部の刻みは浅く，上位は細長刺突連続文を沈線で挟んでいる。器形は 467 と同じと考えられる。470 は細長刺突連続文を沈線で挟み上位に 2 段施し，下位に折れ線区画文がみられる。器形は467と同じと考えられる。471 は山形口縁の口唇部の刻みは浅く，細長刺突連続文は押し引き状に施している。器形は，467 と同じで文様構成は 469 と同じである。472 は山形口縁部で器形は 467 と同じと思われる。文様構成も 469 と同じである。口唇部は平坦で幅が広い。473 は口縁部から胴部にかけての土器でやや外反する山形口縁の器形である。文様は山形に沿った形で付けられ，上・下に沈線で挟まれた細長刺突連続文を付け，その間を折れ線区画の沈線で施している。その折れ線の横線は三本平行になっている。なおこの土器は胴部に重鋸歯文が施されていない。474 は 467 と 文様構成は同じであるが器形は口縁部の外反が少ない。475 は器形が 467 と同じ器形で口縁部が外反し，文様は 470 と同じで口縁部の細長刺突連続文は 2 段あり，刺突具は半截竹管状の施文具である。なお口唇部の刻みは 1 つで浅い。476 は器形は直行する口縁でコーナーの部分である。文様は 467 と同じ構成で上・下の細長刺突連続文を沈線で挟みその間には折れ線区画を施している。その折れ線の区画は 2 本平行になっている。胴部は重鋸歯文を施している。477 は薄手の土器で山形口縁をもつ外向する器形である。文様は 476 と同じ口縁の文様であり，胴部の文様はない。なお文様は山形口縁に沿って付けてある。478 は直行する口縁部で上位に細長刺突連続文を沈線で挟み，下位は折れ線状に細長刺突連続文を施し，中位は折れ線区画を横位に施している。479 は直行する山形口縁で文様は上位に細長刺突連続文を下位に沈線で挟んだ細長刺突連続文を付け、中部に 2 段の折れ線区画文を横位に施している。胴部には重鋸歯文の一部がみられる。480 は直行する口縁部で平坦な口唇部である。上・下位に細長刺突連続文を沈線で挟み施し，中位に折れ線区画を横位に施している。481 は直行する山形口縁部で上位に細長刺突連続文を付け，その下に 2 段の折れ線区画文を施している。482 は直行する山形口縁で細長刺突連続文を交互に施している。483 は直行する山形口縁部から胴部にかけての土器である。口唇部は平坦で幅が広い。文様は口縁部に沈線で挟まれた細長刺突連続文を上・中・下と三段に付け，その間に長さの長い折れ線区画を施している。胴部は 476 と同じ重鋸歯文を施している。484 はやや外反する山形口縁の土器で口縁部には上位に細長刺突連続文を施し，中部には 2 段の折れ線区画文を横位に，下位に沈線で挟まれた細長刺突連続文を付けている。胴部は重鋸歯文が施されている。485 は直行する口縁部で上位に細長刺突連続文を付け，その下に折れ線区画文がみられる土器である。486 は細長刺突連続文と折れ線区画文を施した土器である。487 は直行する口縁部をもち沈線で挟んだ弧状細長刺突連続文と折れ線区画を施した土器で，細長刺突連続文は若干曲形をしている。488 は細長刺突連続文と折れ線区画文と重鋸歯文があるが折れ線区画文と重鋸歯文とは接し，492 と同じ構成と思われる。489 は 2 段の折れ

線区画文の下に沈線で挟んだ細長刺突連続文を施し，その下に重鋸歯文がみられる。490 は直口する口縁をもち，口唇部には台形突起を付けた土器で，口縁部には沈線挟みの弧状細長刺突連続文を上・下位に，中位に折れ線区画文を施している。胴部の文様は箱形のＸ文をつけている。491 は弧状細長刺突連続文を折れ線区画文の下位に重鋸歯文がみられる。492 は山形口縁で口唇部に小さな突起をつけたやや内行する口縁部である。文様は口縁部に折れ線区画を上・下位に，中位に半截竹管状の連続刺突文を施している。胴部は重鋸歯文を施している。493 は山形口縁をもつ土器でやや外反する口縁部である。文様は沈線挟みの刺突連続文を上・中・下位にその間に折れ線区画文を施している。この文様は山形口縁に沿って付けている。胴部は重鋸歯文を施している。なお山形部は縦に稜線部がみられ，見込は四角形と思われる。494 は口縁に折れ線区画文，その下に刺突連続文をつけ，胴部に重鋸歯文を施している。495 は直口する口縁部で，刺突連続文と折れ線区画の組み合せの文様を施している。496 は外反する口縁で細長刺突連続文と折れ線区画がみられる。497 は直行する口縁部で細長刺突連続文と２段の折れ線区画文がみられる。498 は直行する口縁部で沈線挟みの細長刺突連続文と，折れ線区画文の組み合わせである。円形の補修孔もある。499 は小形の土器で直行する口縁で胴部は中側に曲っている。文様は口縁部に刺突連続文と折れ線区画の組み合わせを行ない，胴部は重鋸歯文を施している。500 は外反する口縁部で弧状の細長刺突連続文と折れ線区画文の組み合わせで，折れ線の横線は２本平行である。501・502 は 503 と同じ文様であるが外反が少ない。503 は口縁部が欠けているが 500～502 と同じ文様・器形と思われる。505 は直行する口縁部で細長刺突連続文と折れ線区画の組み合わせで，折れ線の横線は３本平行線になっている。 424 は住居址から出土した土器で直行する口縁である。上位２段に半截竹管状の刺突連読文がみられ，その下位に横線が２本平行になる折れ線区画を施し，その下に半截竹管状の刺突連読文を施し，その下にも折れ線区画の一部がみられる。506 は外反する山形口縁で口唇部に小さな突起が山形を挟んで２ヶ所に付けてある。文様は上位に２列の刺突連続文を施し，下位に折れ線区画の一部がみられる。507・508は直行する口縁部で細長刺突連続文と，折れ線で文様を構成している胴部には重鋸歯文がみられる。509 は刺突連続文と折れ線区画文の一部がみられる。口縁上位では外反する。510 は直行する口縁部で沈線で挟まれた細長刺突連続文と，重鋸歯文と組み合わせた文様である。511 は外反する山形口縁で沈線で挟まれた細長刺突連続文を上・下位に，中位には重鋸歯文をつけ，胴部にも重鋸歯文の１部がみられる。コーナーの部分であるため縦に稜がみられる，512 は直行する口縁部で上位２条の細長刺突連続文があり，その下に重鋸歯文が施されている。513 は 512 と同じ文様の下に２条の沈線で挟まれた細長刺究連続文がみられる。514 は直行する口縁部で沈線挟みの細長刺突連続文が２条みやれる。435 は若干外反する口縁部で沈線挟みの弧状の細長刺突連続文と，２～３本で構成されたＸ文の組み合わせの文様を施している。515 は 514 と同じ文様構成であるが器面に横走する条痕がみられる。

第22表　第Ⅱ類ｂ土器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
467	7トレンチ	2(4)	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	492	A－6	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
468	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	493	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
469	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	494	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
470	B－5	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	495	A－2	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
471	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	496	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
472	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	497	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
473	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	498	B－3	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
474	B－7	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	499	A－6	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
475	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	500	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
476	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	501	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
477	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	502	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
478	7トレンチ	表	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	503	A－5	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
479	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	504	7トレンチ	表	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
480	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	505	住居址内		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
481	4トレンチ	3(4)	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	506	7トレンチ	2(4)	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
482	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	507	A－5	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
483	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	508	B－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
484	4トレンチ	3	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	509	A－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
485	B－6	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	510	B－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
486	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	511	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
487	7トレンチ	表	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	512	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
488	B－5	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	513	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
489	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	514	7トレンチ	表	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
490	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	515	7トレンチ	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
491	B－5	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	516	B－5	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良

Ⅱ類ｃ（517～521）

この類は数条の連点文と重鋸歯を組み合わせた文様をもつ土器である。

517は山形口縁をもつ外反した土器である。山形の口唇部には3ケ所に刻みを入れ装飾している。口縁部には2条の連点文を山形口縁に沿って施し，胴部には3条と2条の重鋸歯文がみられる。518は直行する口縁部で文様は4条の連点文を施し，3条の重鋸歯文が胴部についている。519は3条の連点文を施す口縁部で直行する。520は519と同じである。440は胴部で連点文と重鋸歯文の組み合わせである。

第23表　第Ⅱ類c土器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
517	A－6 B－3	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	520	A－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
518	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	521	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
519	A－3	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良						

Ⅱ類d（522～543）

この類は口縁部に細長刺突連続文と連点文を沈線で挟み，胴部は重鋸歯文またはそれに類した文様を施す土器群をさす。

522は直行する口縁部で3条の細長刺突連続文を沈線で挟み，その下には三角区画の細長刺突連続文を施している。524はやや外反した山形口縁部で3条の細長刺突連続文を沈線で上下に挟んでいる。525は直行した口縁部で文様は524と同じ構成をしている。526は山形口縁でコーナーの部分である。文様構成は522と同じである。527は直口した口縁部で文様構成は，525と同じである。528は直行した口縁部で文様構成は525と同じである。529は山形口縁で山形部のコーナーには縦線を入れ細長刺突連続文の上下には2本の沈線で挟んであり，胴部の重鋸歯文は6本で構成している。530は外向する山形口縁部で文様構成は523と同じである。531は直口する山形口縁でコーナー部に縦位の連点文と横位の連点文を沈線で挟み，胴部は重鋸歯文を施している。532・533は直行する口縁で1条の連点文を沈線で挟み重鋸歯文を施している。534は外反する山形口縁をもち口径は22cmで高さ15cmの底部だけない土器である。胴部は若干丸味をもつ。文様は口縁部に2条の連点文を沈線で挟み，頸部に角を2重にし，胴部に4列の棒線を横位に並べている。535はやや外反する口縁でこの類では口縁部の沈線が最上段にない。536は535と同じ構成で3段の細長刺突連続文をつけ，最上段は沈線で挟ない。胴部は重鋸歯文を施している。口径は17cm，高さは15cmで底部がない。口縁はやや外反し，山形口縁である。456は外反する山形口縁で3段の連点文を施し，下位2段は沈線で挟み，その下は斜線で沈線内を埋めている。胴部も重鋸歯文である。537は直行する口縁部で3段の連点文があり，下位2段が沈線で挟まれている。539は538と同じで459も同一形態である。541はやや外反する口縁部で文様構成は537と同じで，頸部の沈線内を斜線で埋める文様が2段になっている。542は口径20.5cm，高さ15.5cmの土器で口唇部には4ヶ所に2つの突起を装飾している。器形は全体的に外向し，口縁部で若干外反する。文様は口縁部に2列の三角連点文を上・下に沈線で挟み，胴部には重鋸歯文を2重に施している。器面調整は箆によるハケ目調整痕がある。543は口径9cm，高さ7.2cmの小形土器である。全体的にやや外向し，平坦口縁である。文様は2段の連点文を口縁部に施しているが下段だけ沈線で挟んである。胴部は4条の重鋸歯文を施している，薄手の土器である。

第24表　第Ⅱ類d土器諸訳（1）

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
522	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	523	A－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良

第24表　第Ⅱ類ｄ類土器諸訳　(2)

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
524	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	534	A－7	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
525	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	535	B－4	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
526	B－7	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	536	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
527	A－2	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	537	A－5	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
528	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	538	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
529	A－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	539	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
530	A－2	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	540	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
531	A－7	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	541	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
532	B－7	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	542	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
533	B－5	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	543	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良

Ⅲ類（544～547）

この土器は口縁部が肥厚する土器で文様は沈線を鋸歯文状に施している。口唇部には押し引き文と沈線文がある。

544は山形口縁をもち，口縁部に肥厚があり，その肥厚帯に上・下の連点と3条の鋸歯文を施している。545は山形口縁で上下に沈線を入れ，その中に4条の重鋸歯文を施している。546は小さな段と重鋸歯文を施している。547は肥厚帯に重鋸歯文を施している。

Ⅳ類（548）

この土器は1点出土している。548は山形口縁で外反する器形である。文様は重鋸歯文を2重に施している。

Ⅴ類（549～562）

この土器は細い沈線で数条の文様帯で，縦・斜・横に組み合せる文様を施す類である。

549はやや頸部が締まった口頸部で平坦口縁である。文様は口縁端部に6条の横縁を入れ，縦にクサビ状の沈線を重ね，頸部から胴部にかけて6ないし9本の斜行する沈線帯を，上位より下位に施している。550はやや頸部が締まった口頸部で文様，斜線がみられる。551は口縁が外反する器形で文様は縦線と斜線で組み合わせている。552も551と同様である。553は横線と斜線がみられる。554は横線がみられる。555は縦線，横線がみられる。556は横線と斜線がみられる。557は縦線，横線，斜線がみられる。558は斜線がみられる。559は横線と斜線がみられる。560は横線と斜線がみられる。561は太い沈線の中に細い沈線が斜状に施している。562は横線と斜線がみられる。なお549～552は口縁部で553～562は胴部である。

Ⅵ類（563～569）

この土器は口縁に突帯を付け，口頸部に荒い沈線を縦・横・斜に施文する土器である。563は口縁部に突帯を貼り付け，口唇部は連点を施し，1本の縦と横の沈線に斜の線を入れている。564～566は口縁部で突帯を貼り付け，縦，横，斜の沈線を施している。なお565は口唇部に連点がある。567は568は頸胴部で荒い沈線を縦・横・斜に施している。

Ⅶ類（570・571）

この土器類は縦，横，斜の沈線をていねいし，短く，規則的に施している土器で，570 は縦と斜に，571 は横と斜に沈線を施している。

Ⅷ類（572・573）

この土器類は沈線文と下位に刻目突帯文を施す土器である。572 は頸部で口縁部に籠目文を曲線で描き斜の刻目突帯を横位に貼り付けている。583 は頸肩部で，肩部に刻目突帯を貼り付け，頸部に数本で籠目文を直線に描いている。胴部には文様がない。

Ⅸ類（574）

1 点出土している。縦と横の沈線を連点で文様を構成し，Ⅲ類の口縁肥厚の器形である。

Ⅹ類（575）

この土器は無文の土器である。

575は山形口縁で，口唇部には装飾された山形部が突起状にみられる。器形は直行する口縁である。

第25表　第Ⅲ～Ⅹ類土器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
544	7トレンチ	2(4)	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	560	B－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
545	A－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	561	4トレンチ	3(4)	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
546	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	562	B－4	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
547	A－2	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	563	9トレンチ	3(4)	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
548	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	564	B－5	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
549	7トレンチ	3(4)	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	565	9トレンチ上	3(4)	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
550	4トレンチ	3(4)	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	566	9トレンチ	表	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
551	B－4		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	粗	567	9トレンチ	3(4)	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
552	B－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	568	9トレンチ	3(4)	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
553	B－3	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	569	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
554	B－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	粗	570	B－7	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
555	B－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	571	B－5	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
556	9トレンチ	3(4)	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	572	A－2	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
557	B－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	573	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
558	B－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	574	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
559	A－4	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	575	A－3	3(4)	明茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良

底部（576～607）

深鉢の底部のみである。576 ～ 580・588 ～591・602 ～ 599・601・602 は底部の縁が丸味気味のものと，やや角味をもつもので，581～587・590 ～ 600・603 ～ 607 は角味ないし，張り出しのあるものである。581・590は底部の底面にイボ状突起を付けている。（590 は，5 ヶ所に

みられる。）また590と592・593・598は若干上げ底気味である。

第26表　底部諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
576	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	592	7トレンチ	2(4)	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
577	B－3	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	593	A－5 B－3・7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
578	7トレンチ	2(4)	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	594	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
579	A－5	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	595	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
580	A－2	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	596	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
581	B－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	597	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
582	B－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	598	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
583	B－7	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	599	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
584	B－3	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	600	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
585	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	601	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
586	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	602	7トレンチ	2(4)	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
587	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	603	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
588	A－6	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	604	A－5	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
589	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	605	B－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
590	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	606	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
591	A－7	4	暗褐色	サンゴ・長石・雲母	良	607	一般		茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良

土製円盤（608～611）

4点出土している。608は7.3×6.4cmで隅丸方形を呈している。609は3.4×2.7cm，610は3.2×3.0cm，611は2×2.4cmの大きさである。

Ⅺ類の土器（612・613）

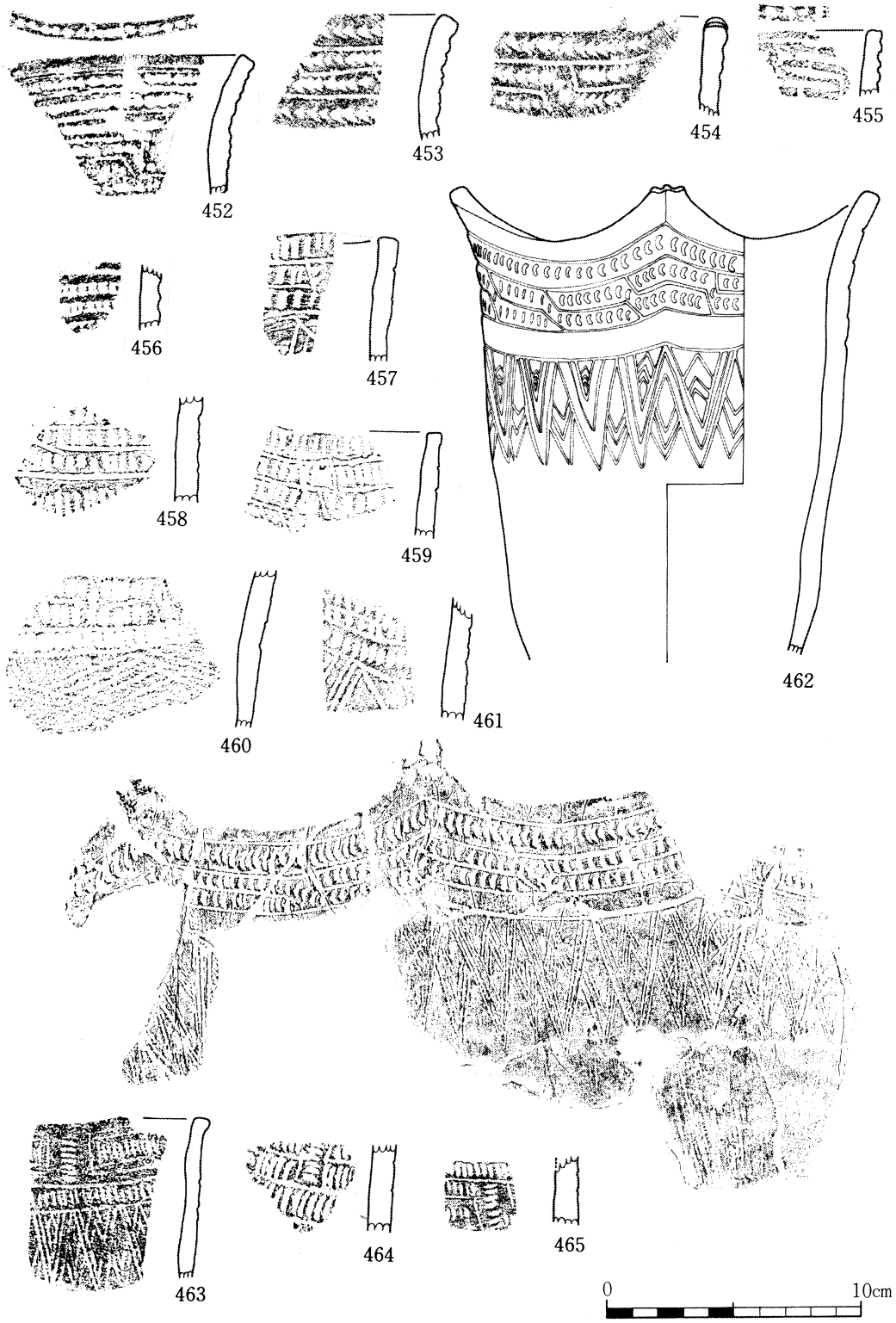
この土器は新砂丘出土の土器である。612は丸底の小形土器である。器面調整は良くない。色調は明茶褐色を呈す。613は耳付き土器で壺である。肩部に幅7mm，高さ5mmの紐状の短帯を施している。器面調整はていねいで色調は明茶褐色を呈する。

これらの土器は新砂丘から出土しているため，同じ砂丘から出土した人骨と関連があると考えられる。

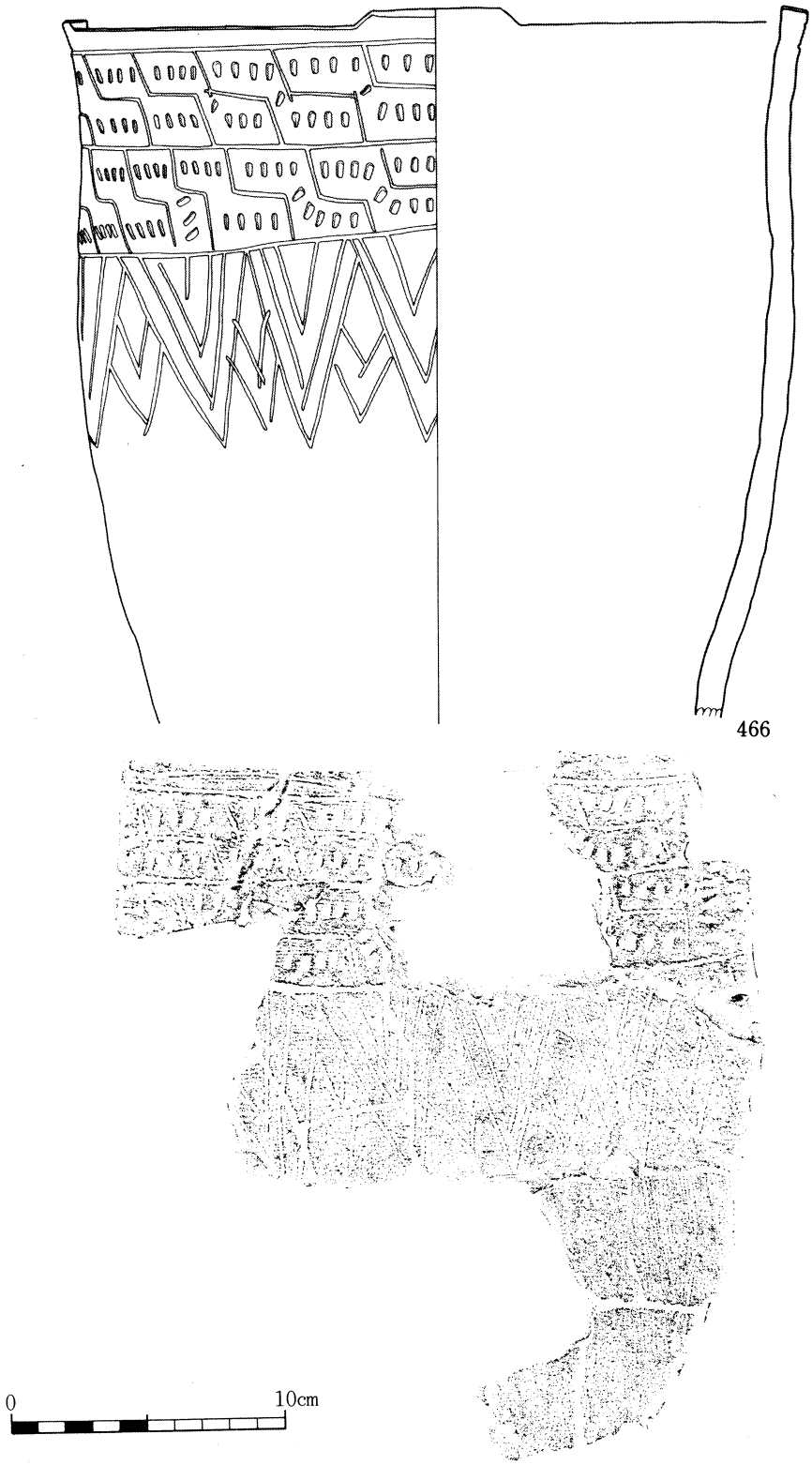
この耳付き土器は焼成，胎土から弥生期と思われる。同町のサウチ遺跡では耳付き土器の甕形土器が出土している。

第27表　土製円盤と外耳土器諸訳

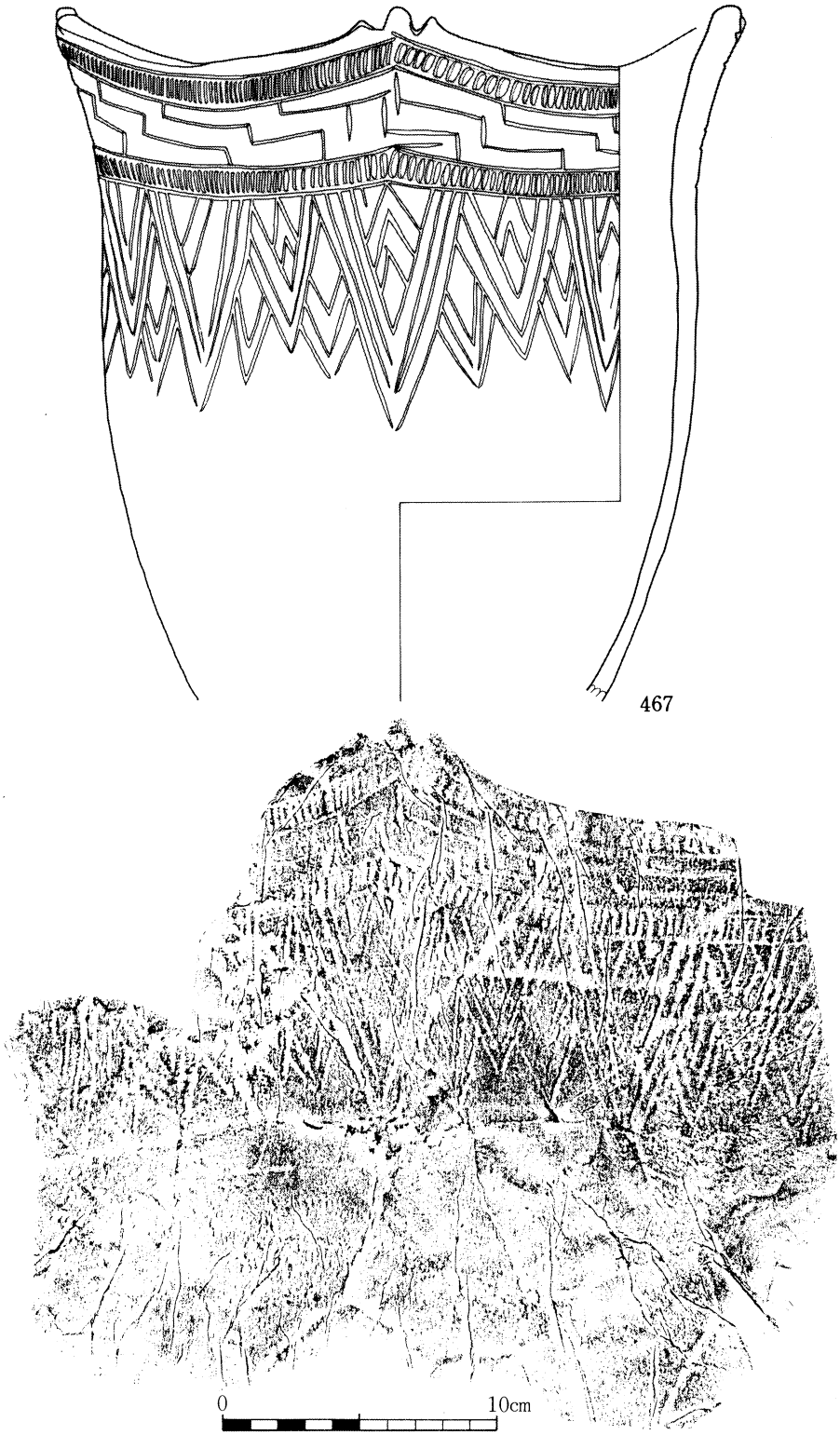
番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
608	B－6	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	611	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
609	B－7	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	612	A－8	新砂丘	明茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
610	一般	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	613	A－8	新砂丘	明茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良



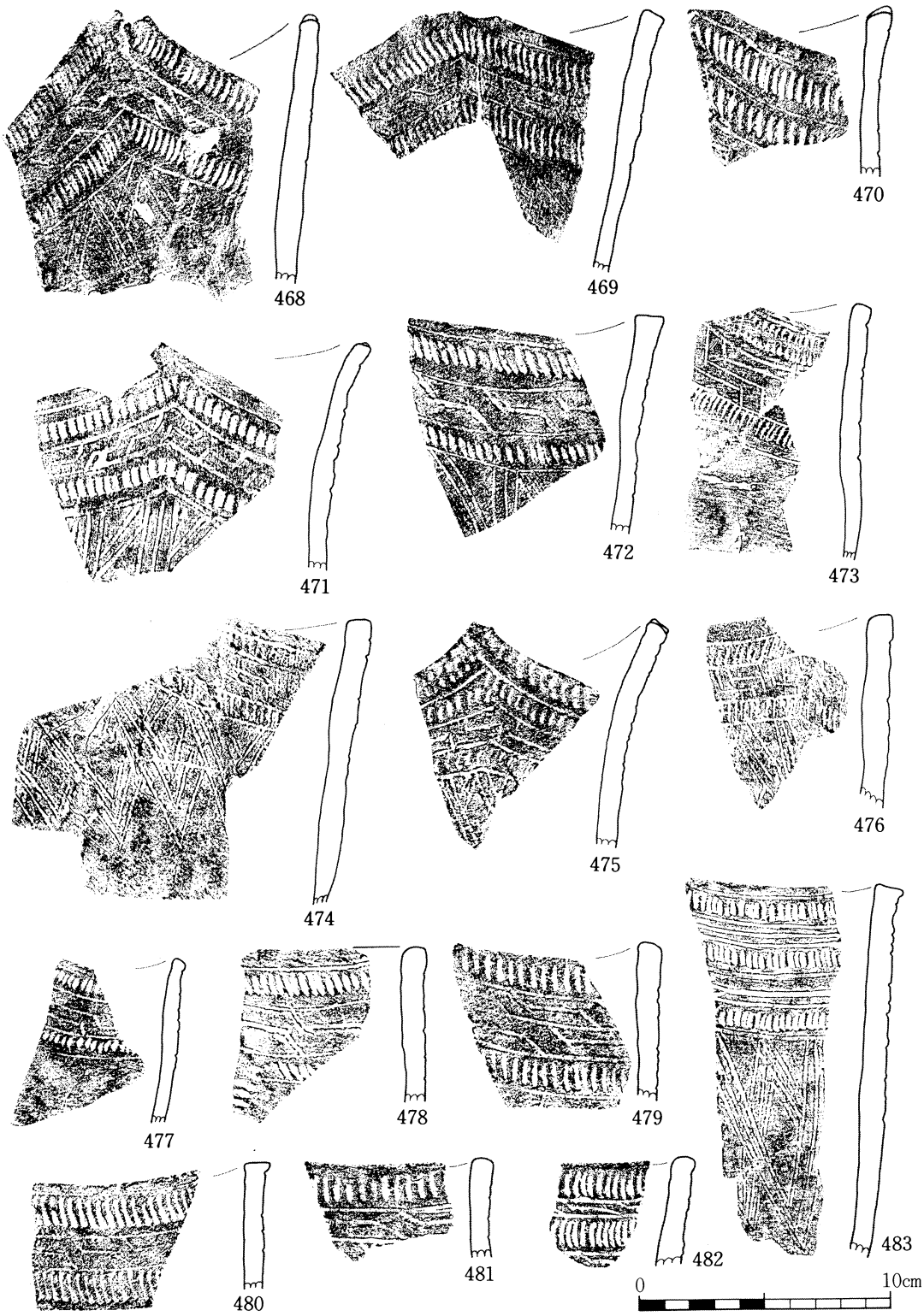
第72図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(1)　Ⅰ類(452～456)　Ⅱ類a(457～465)



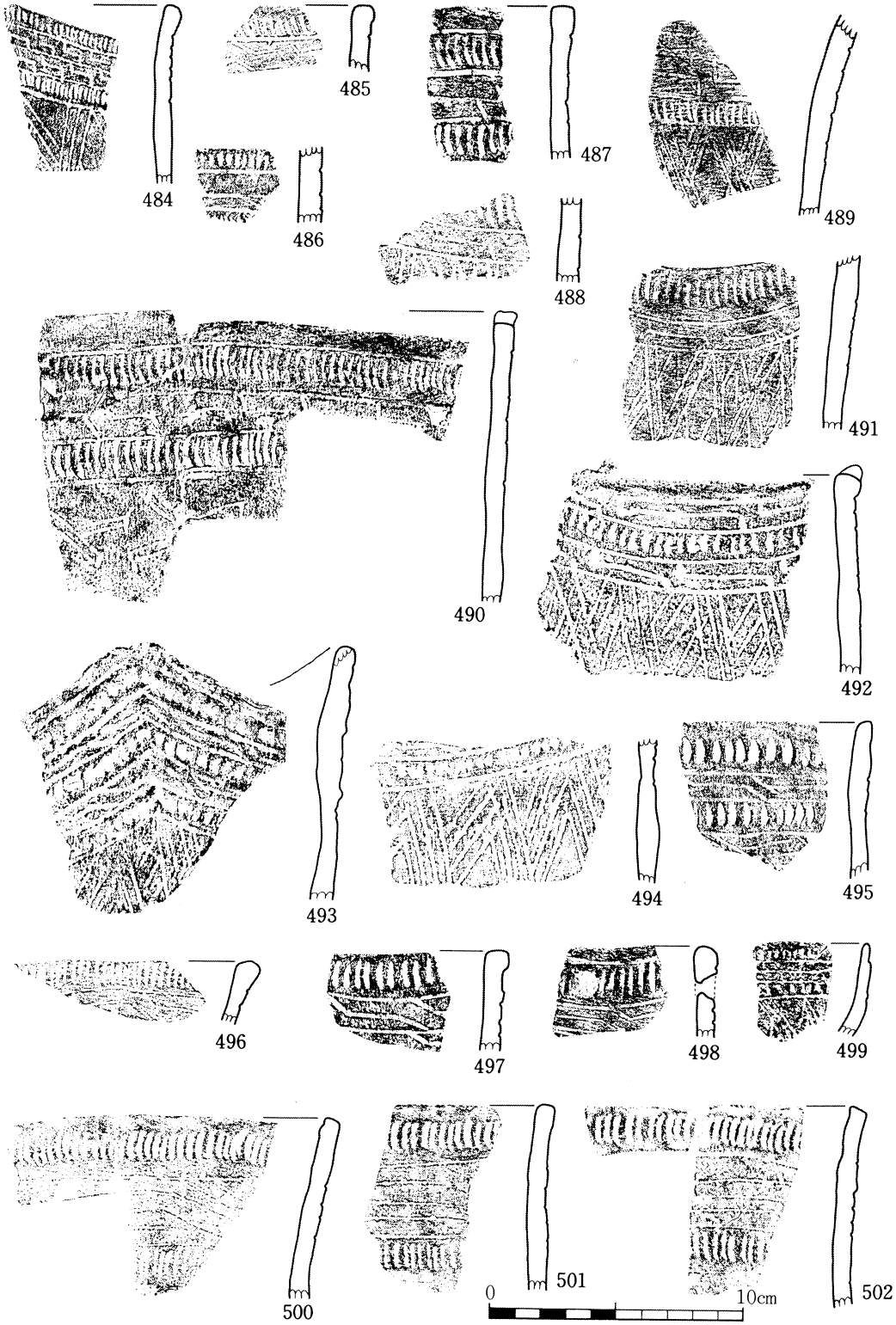
第73図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(2)　Ⅱ類 a (466)



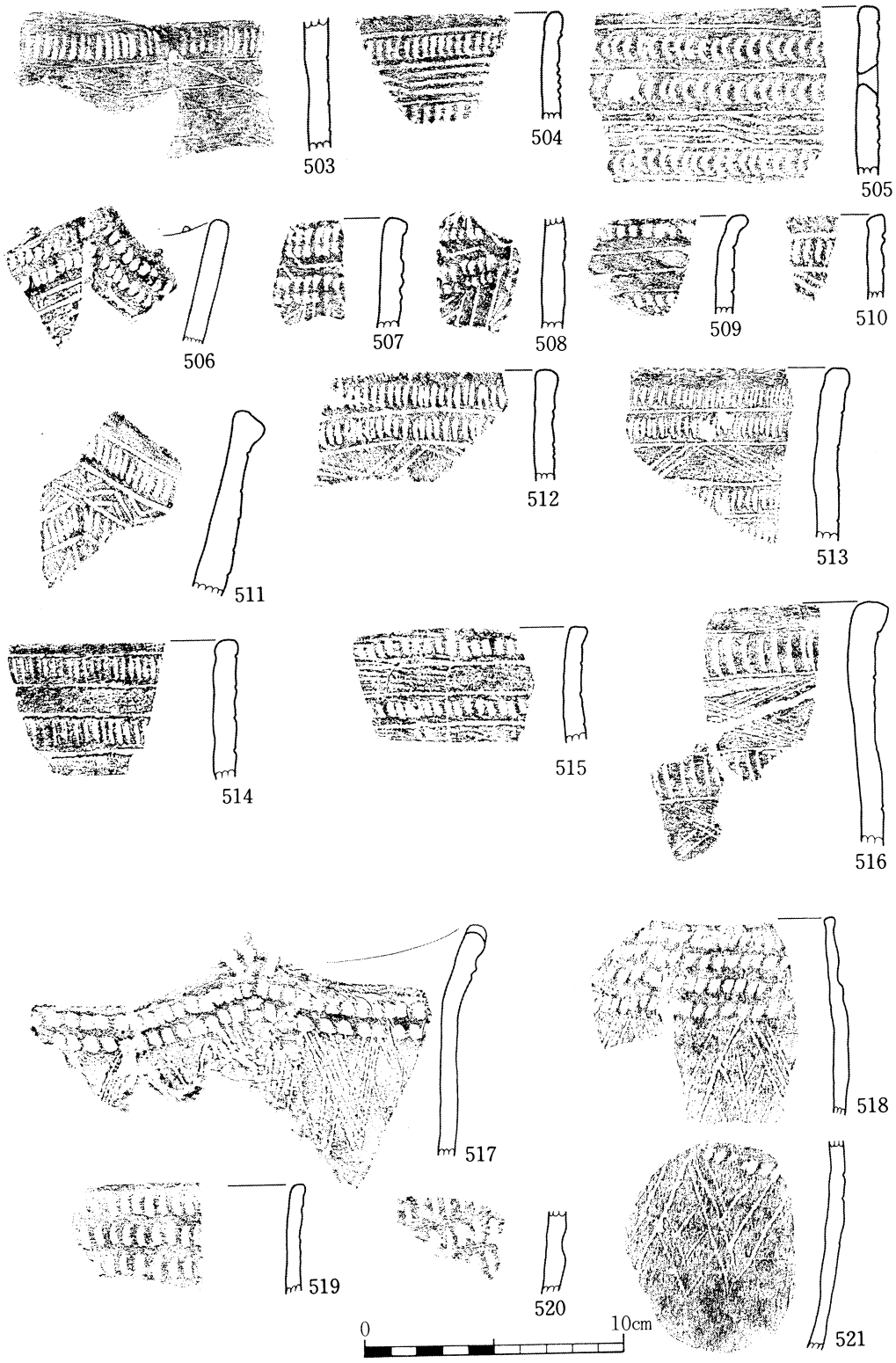
第74図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(3)　Ⅱ類ｂ（467）



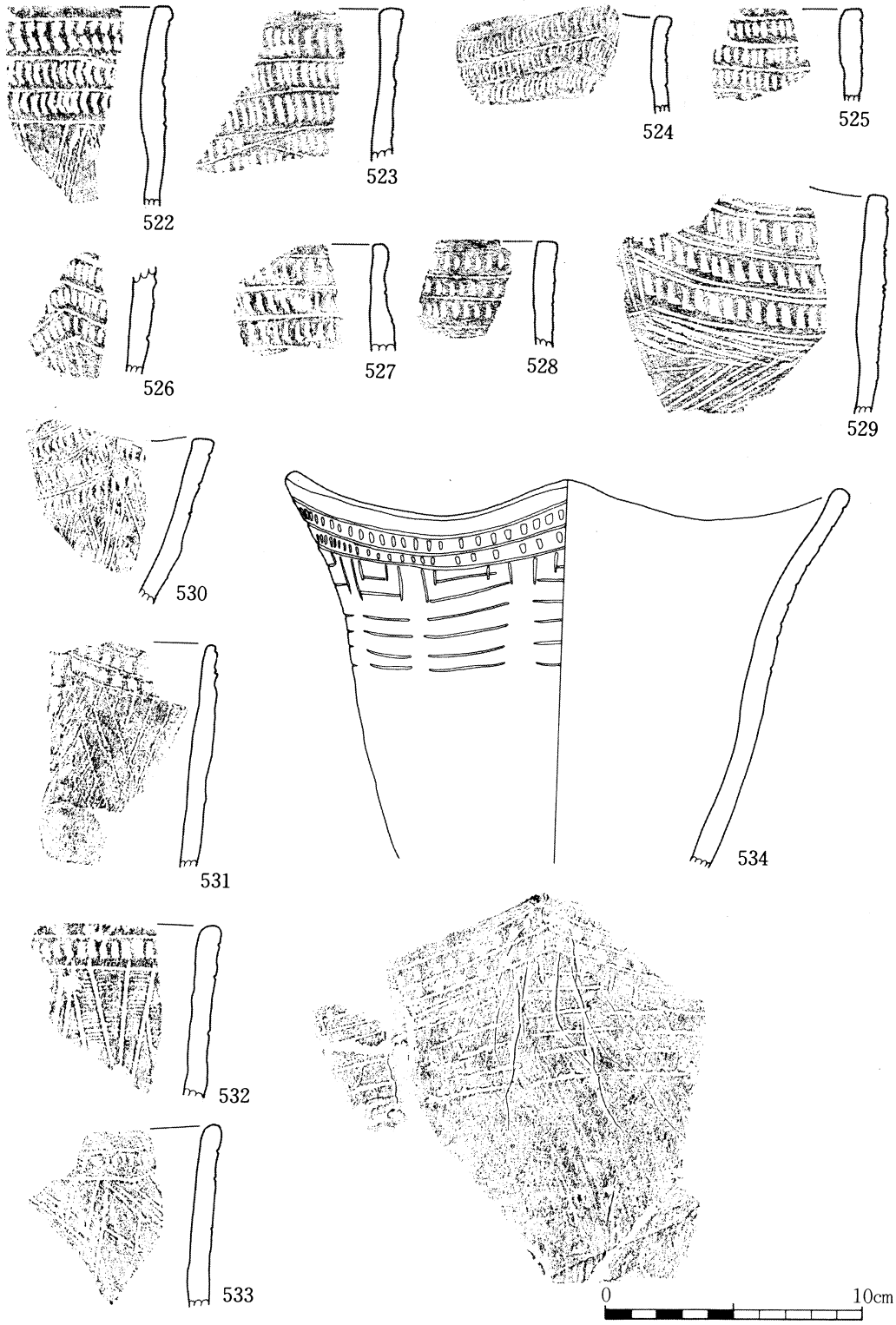
第75図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(4)　Ⅱ類ｂ (468～483)



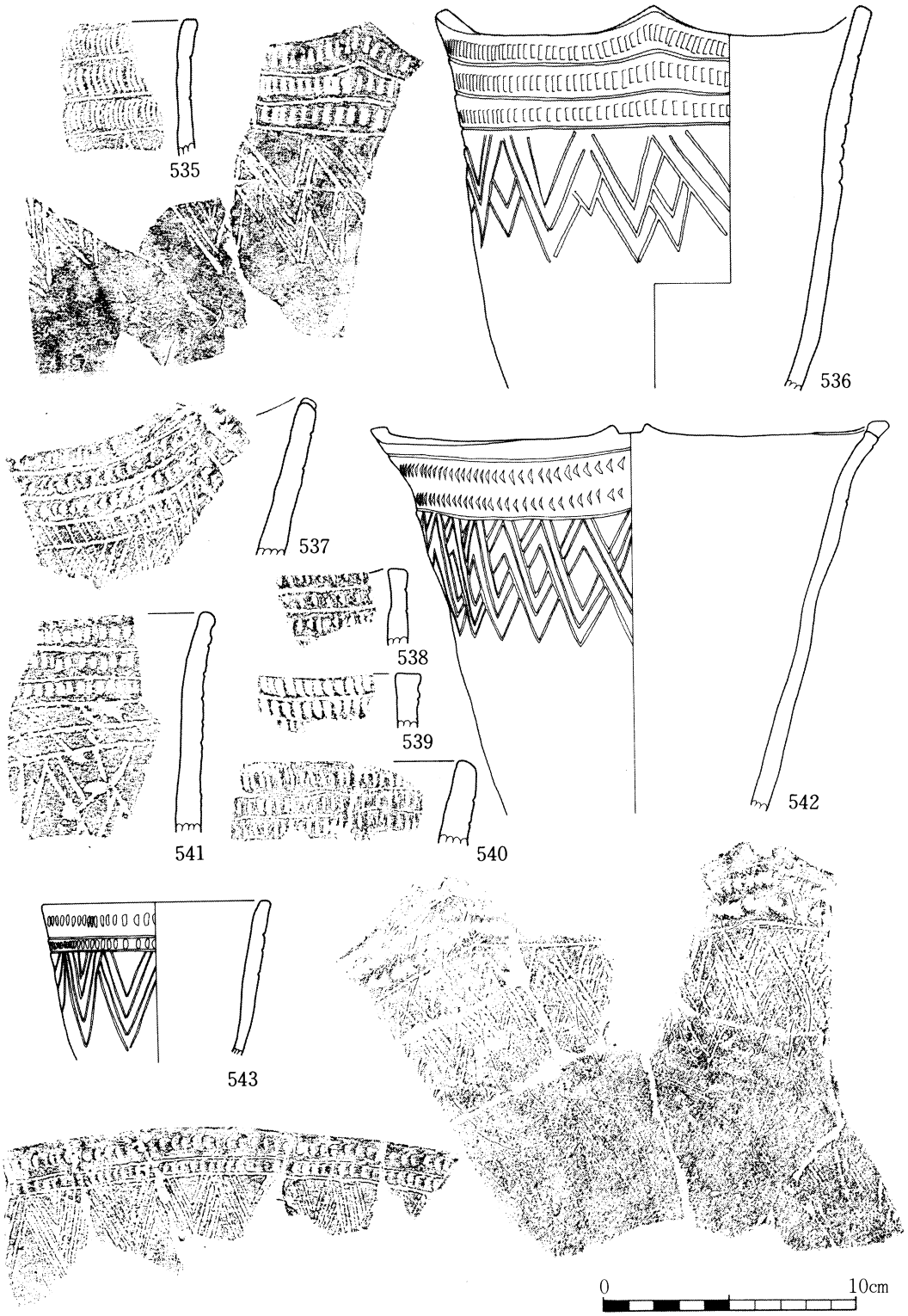
第76図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(5)　Ⅱ類ｂ（484～502）



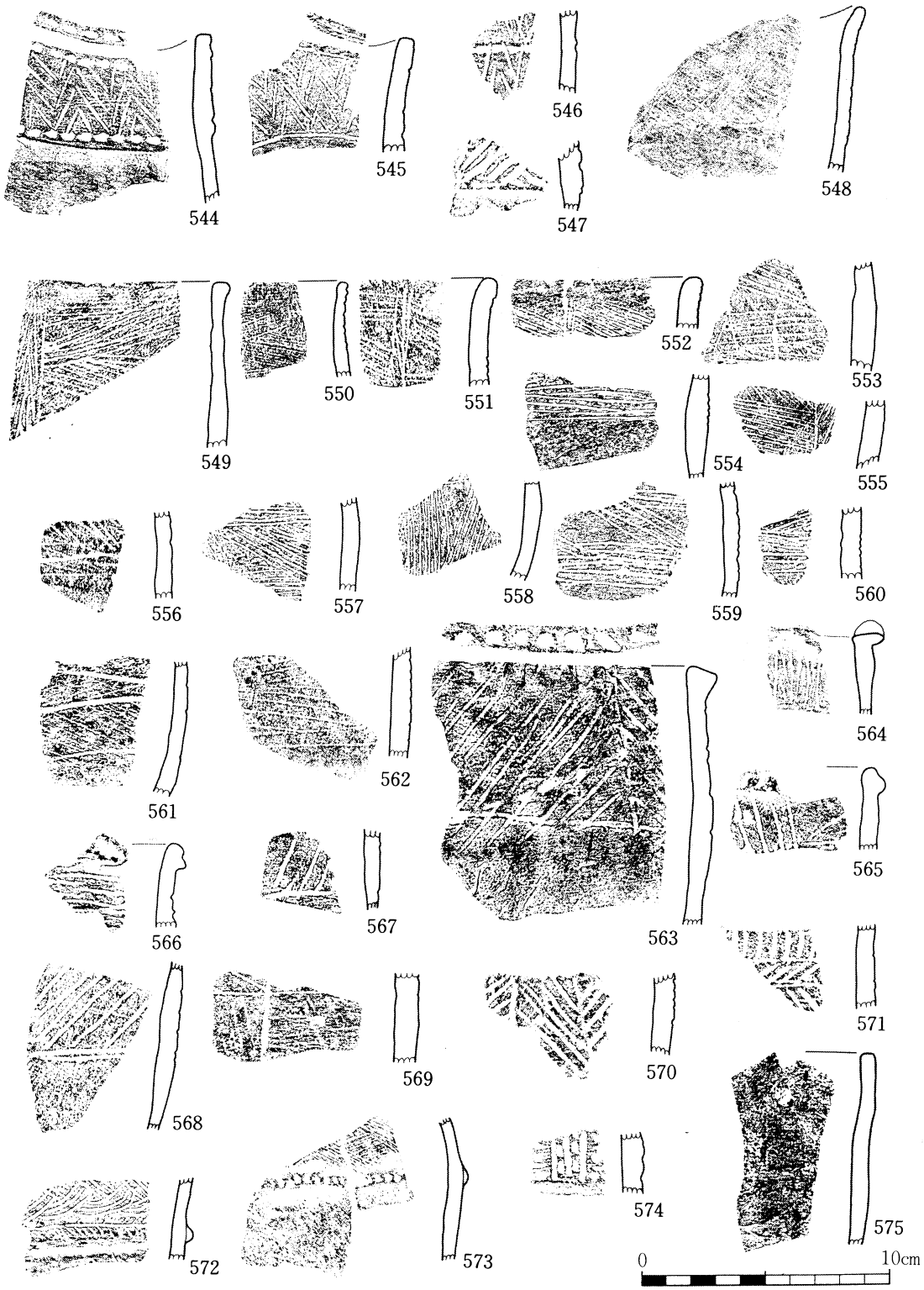
第77図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(6)　Ⅱ類ｂ（503～516）Ⅱ類ｃ（517～521）



第78図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(7)　Ⅱ類ｄ (522～534)

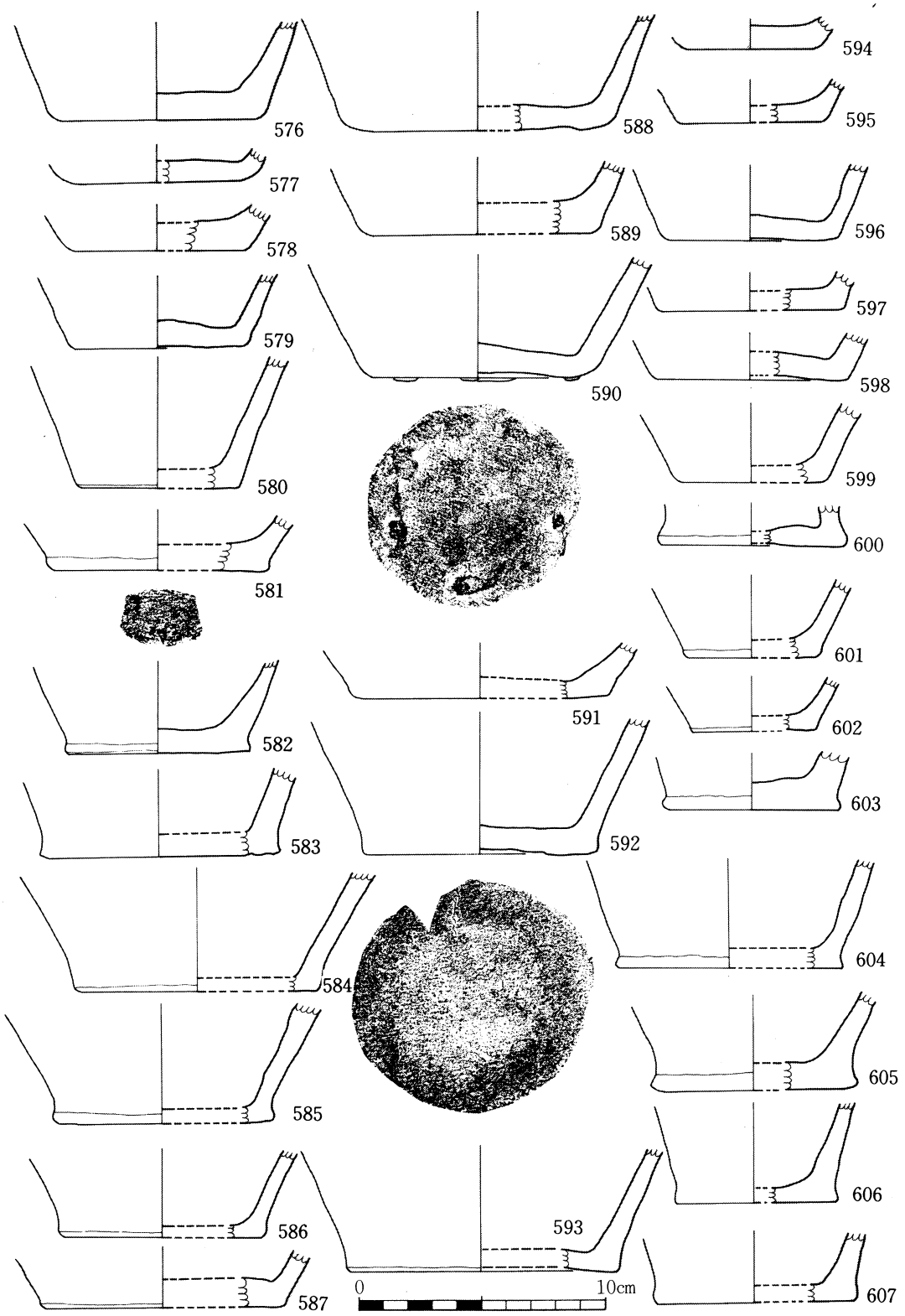


第79図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(8)　Ⅱ類d 類(535～543)



第80図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(9)

Ⅲ類(544～547) Ⅳ類(548) Ⅴ類(549～562) Ⅵ類(563～569)
Ⅶ類(570・571) Ⅷ類(572・573) Ⅸ類(574) Ⅹ(575)



第81図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(10)　底部

2）貝製品（614～727）

1．貝輪

貝輪は114点出土した。内訳はオオツタノハ製貝輪が113点，ゴホウラ製貝輪が1点である。すべて破損品で4組が接合した。その中の2組が完形になった（533～535・539）。大体は研磨され，白地に赤褐色の文様を出している。また，内縁・外縁も角を研磨されている。完形になった貝輪532は外周径が7.2×5.8cm，内周径5.8×4cmで，533は外周径が7.5×5.7cm，内周径が5.9×4.2cmである。他は復元して7.5×6.0cm位の大きさが多い。

第28表　貝輪諸訳（1）

番号	出土区	層	縦 縦 外周径	縦 縦 内周径	横 外周径	横 内周径	備考	番号	出土区	層	縦 外周径	縦 内周径	横 外周径	横 内周径	備考
614	A-6	4	7.2	5.8	5.8	4.0		640	B-6	4	長さ7.0				径不明
615	D-7	4	7.5	5.7	5.9	4.2		641		4	5.5	3.5	2.4+α	1.7+α	
616	B-7	4	7.2+α	5.2+α	5.7	4.0		642		4	7.1	5.8			
617	一般	4	5.9+α	5.2+α	6.2	4.7		562	A-4	4	7.8+α	6.0+α	2.9+α	2.2+α	
618	B-3	4	7.3+α	5.9+α	5.8	4.2		644		4	6.1+α	5.3+α	2.2+α	1.7+α	
619	A-4	4	7.0	5.3	4.3+α	3.3+α		645		4	5.6+α	4.0+α	2.8+α	2.1+α	
620	B-6	4	6.9+α	5.1+α	6.6	5.0		646	B-9	4	4.6+α	3.7+α	2.4+α	1.7+α	
621	A-6	4	7.4	6.5	2.3+α	3.0+α		647		4	5.6+α	3.8+α	2.7+α	2.0+α	
622	B-5	4	8.0	6.8	5.1+α	4.3+α		648		4	6.0+α	4.4+α	2.6α α	1.9+α	
623	B-5	4	7.2	5.6	4.2+α	3.6+α		649		4	長さ7.0				径不明
624	B-6	4	長さ5.3		3.0+α	2.3+α		650	A-7	4	長さ7.0				径不明
625	一般	4	長さ4.8		3.1+α	2.3+α		651	A-4	4	5.8+α	4.5+α	2.9+α	2.1+α	
626	A-4	4	4.6+α	4.2+α	3.7+α	3.0+α		652	A-5	4	長さ4.8				径不明
627	一般	4	長さ5.0				径不明	653		4	4.9+α	3.7+α	1.9+α	1.4+α	
628	A-4	4	5.0+α	4.3+α	2.5+α	1.7+α		654		4	7.5+α	6.2+α	3.5+α	2.7+α	
629	一般	4	長さ5.2	6.0+α			径不明	655	A-6	4	6.9+α	5.6+α	2.9+α	2.0+α	
630	G-6	4	長さ7.2	5.5+α	3.3+α	2.6+α		656		4	長さ3.5				
631	A-6	4	長さ6 3				径不明	657		4	7.6+α	6.4+α	3.4+α	2.6+α	
632	一般	4	長さ6.3				〃	658		4	8.2+α	6.7+α	3.9+α	3.9+α	
633	A-7	4	7.6+α	7.1+α	3.3+α	2.7+α		659		4	長さ5.8				径不明
634	B-7	4	6.6+α	6.0+α	3.1+α	2.6+α		660		4	4.8+α	3.7+α	3.2+α	2.4+ α	
635	B-6	4	長さ6.0				径不明	661	B-7	4	5.3+α	5.6+α	2.6+α	1.7+α	
636	一般	4	長さ5.7				径不明	662		4	4.2+α	3.0+α	2.7+α	2.0+α	
637	A-4	4	長さ6.0				〃	663		4	長さ5.7				径不明
638	B-7	4	長さ6.3				〃	664	B-6	4	長さ5.5				径不明
639	B-5	4	6.8+α	6.5+α	2.6+α	1.9+α		665	A-2	4	長さ5.5				径不明

第24表　貝輪諸訳 (2)

番号	出土区	層	縦		横		備考	番号	出土区	層	縦		横		備考
			外周径	内周径	外周径	内周径					外周径	内周径	外周径	内周径	
666	B-6	4	5.8+α	4.6+α	2.3+α	1.8+α	径不明	697	一般	4	長さ4.2				径不明
667	一般	4	長さ6.0				〃	698	〃	4	長さ5.4				〃
668	B-6	4	長さ6.1				〃	699	〃	4	長さ4.4				〃
669	B-7	4	長さ6.0				〃	700	〃	4	長さ4.2				〃
670	A-6	4	長さ5.1				〃	701	〃	4	長さ5.2				〃
671	A-6	4	長さ5.2				〃	702	〃	4	長さ4.7				〃
591	一般	4	長さ5.1				〃	703	A-6	4	長さ5.0				〃
673	〃	4	長さ7.3				〃	704	B-7	4	長さ5.1				〃
674	〃	4	長さ5.5				〃	705	一般	4	長さ3.7				〃
675	〃	4	長さ4.2				〃	706	A-6	4	長さ4.1				〃
676	〃	4	長さ4.6				〃	707	B-6	4	長さ5.1				〃
677	〃	4	長さ4.5				〃	708	A-4	4	長さ4.6				〃
678	〃	4	長さ4.8				〃	709	一般	4	長さ3.6				〃
679	〃	4	長さ5.0				〃	710	〃	4	長さ2.9				〃
680	〃	4	長さ4.3				〃	711	B-6	4	長さ3.8				〃
681	〃	4	長さ5.0				〃	712	A-6	4	長さ3.8				〃
682	〃	4	長さ3.3				〃	713	一般	4	長さ3.9				〃
683	〃	4	長さ3.8				〃	714	A-6	4	長さ5.3				〃
684	〃	4	長さ4.0				〃	715	一般	4	長さ3.5				〃
685	〃	4	長さ4.4				〃	716	〃	4	長さ4.4				〃
686	〃	4	長さ3.4				〃	717	〃	4	長さ5.1				〃
687	〃	4	長さ4.1				〃	718	〃	4	長さ5.1				〃
688	〃	4	長さ2.8				〃	719	A-7	4	3.3+α	1.9+α	5.8+α	3.9+α	
689	〃	4	長さ3.2				〃	720	A-2	4	4.3+α	3.1+α	7.1+α	5.0+α	
690	〃	4	長さ3.1				〃	721	B-7	4	4.7+α	2.8+α	6.4+α	6.2+α	4.
691	〃	4	長さ4.3				〃	722	A-7	4	4.1+α	2.7+α	5.7+α	4.2+α	
692	〃	4	長さ3.3				〃	723	一般	4	3.5+α	2.6+α	4.9+α	3.4+α	
693	〃	4	長さ4.1				〃	724	B-6	4	3.6+α	2.5+α	6.3+α	4.1+α	
694	B-6	4	長さ5.1				〃	725	一般	4	3.7+α	3.1+α	4.7+α	3.1+α	
695	A-5	4	長さ4.4				〃	726	A-6	4	3.2+α	2.5+α	4.5+α	2.7+α	
696	一般	4	長さ4.1				〃	727	一般	4			長さ5.7		ゴホウラ 径不明

3．貝符状貝製品（728～729）

この貝製品は土壙Aより出土している。728は2.6×4.6cmの大きさ，厚さは 0.5cmで大半は欠損している。左右の縁は尖り，一辺は一部剝られている。裏側の研磨は粗く，表側の研磨は良い。白色を呈し，コホウラ製品と考えられる。729は4 ×5 5cmの大きさ，厚さは0.95cmで上半分は欠損している。全面研磨され一部剝られ突起状になっている。白色を呈し，ゴホウラ製品と考えられる。

これらは貝符に近い形態をしているので貝符状貝製品とした。

3．垂飾品（730～737）

730は4.9×0.9cmの大きさで，厚さは 0.2cmあり楕円形を呈し，2枚貝で作られている。731は4 ×0.5cmの大きさで，厚さは0.25cmあり，尖端部は丸味をもち上部は一部剝られている。732は2 ×0.6cmの大きさで，厚味は0.15cmである。形態は731と同一である。733はクロチョウガイで作られたもので円孔は3ヶ所みられる。大きさは3 ×7.5cmで，厚さは0.55cmある。孔は 0.3～0.2cmで両方から穿孔されている。734～736はマキガイを磨き，孔を開けている。734はシマイボボラで両面磨かれている。735はソデガイで両面磨かれている。736はフデガイで片面磨かれている。3点とも紐ずれの跡はみあたらない。737はスイジガイ製品で3ヶ所に丸味をもった突起部をつくり丁寧にしあげている。用途は不明。

4．貝鏃（738）

ヤコウガイで作られた穿孔をもつ　である。2.1×1.3cmの大きさで厚味は0.15cmである。穿孔の大きさは径0.02cmで片方から穿孔している。

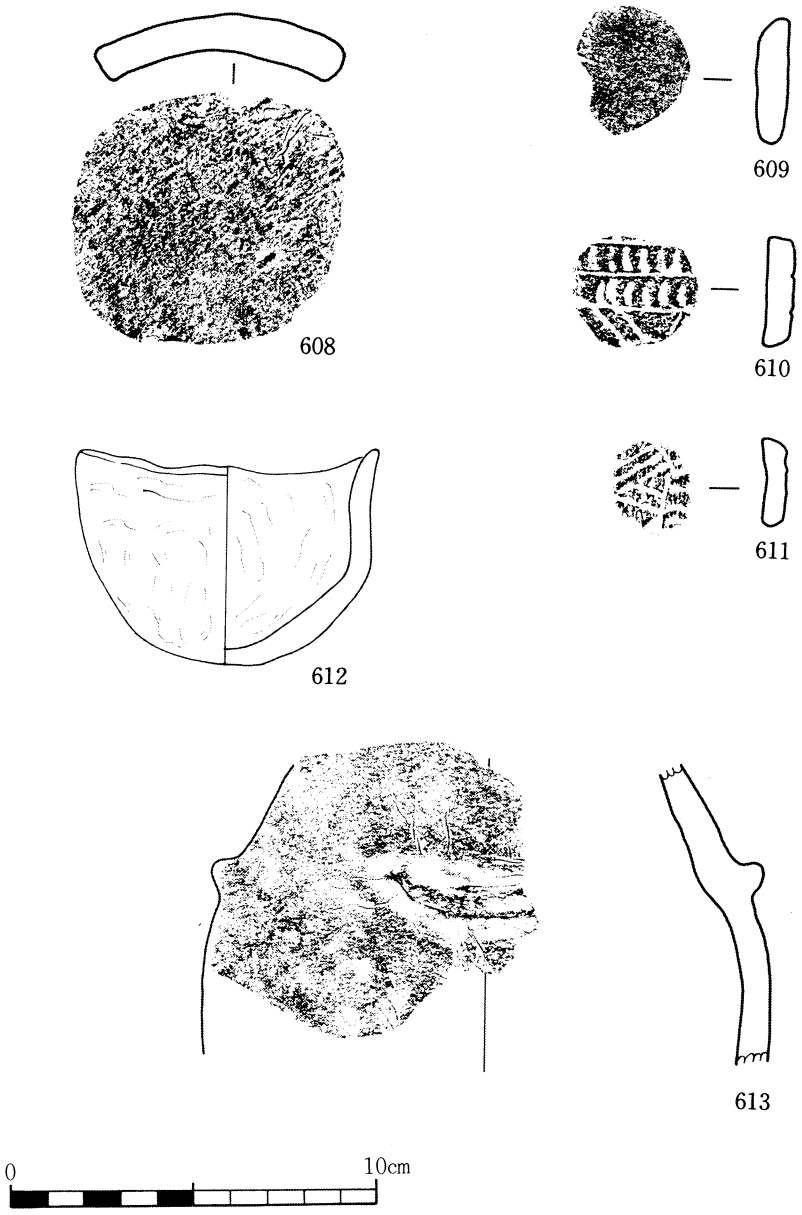
5．螺蓋利器（739・740）

これはヤコウガイの蓋である。739は 8.5×7.5cmの大きさで厚味は2cmである。下縁が孤状に剝かれている。740は角状に剝かれ，3辺の使用痕がみられる。

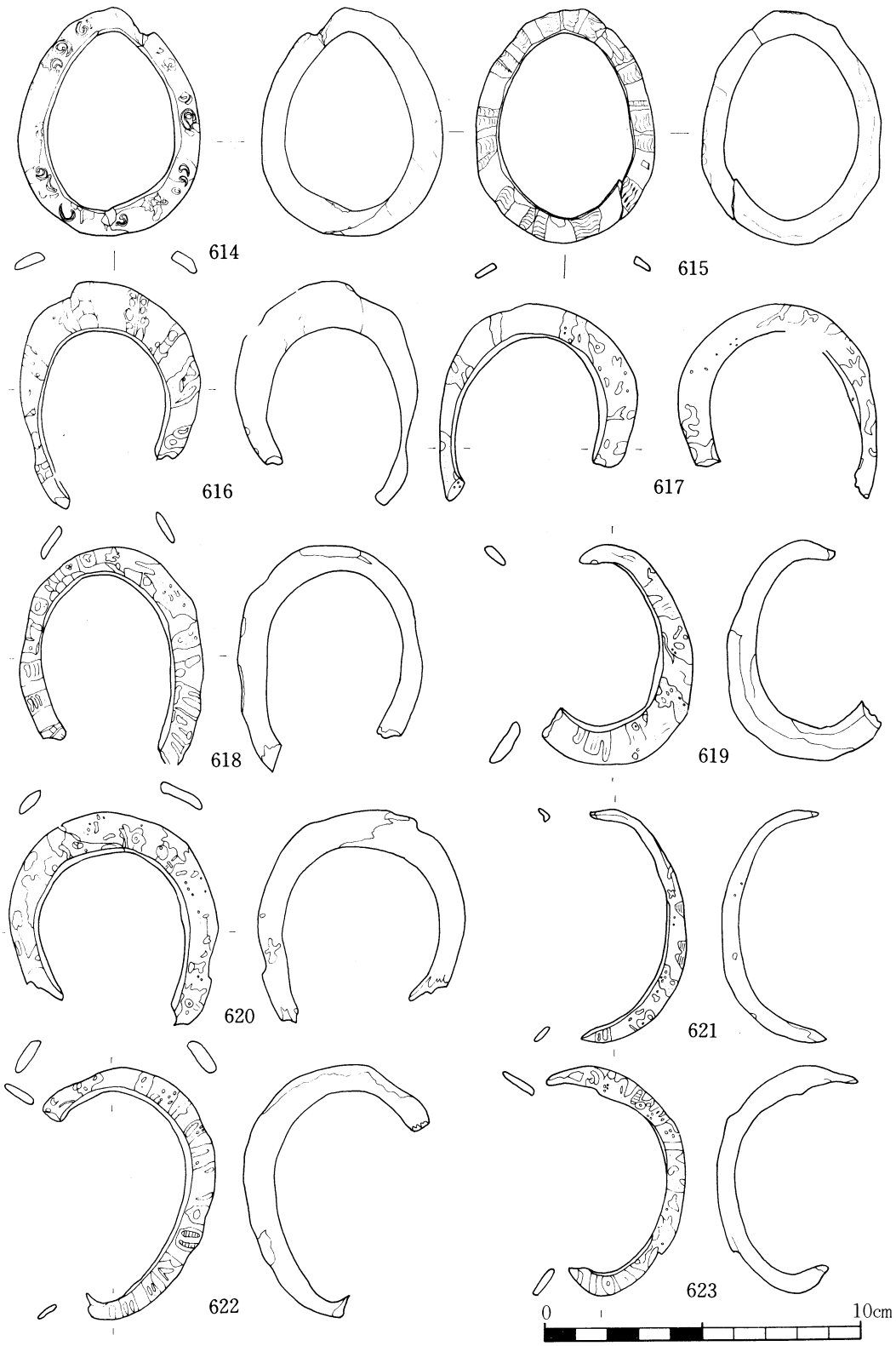
6．貝匙状貝製品（741～747）

この貝製品は貝匙と言われているものである。741～745は完成品が破損したもので真珠層のみである。746はまだ未完成品の破損部で真珠層を出しただけである。747は器形を整えただけで真珠層を出していない。741はきものの形につくり，中に穿孔しといる。大きさは 5.5cmである。742は穿孔のみで 4.7cmの大きさである。前の2つは上部で662は中部である。大きさは 6.1cmである。744・745は下部で尖端はやや尖り気味の丸の形をしている。大きさは，5.5cmと5.4cmである。746は中部で7cmの大きさである。外面に擦痕がみられる。747は9.8cmで上部は欠損している。

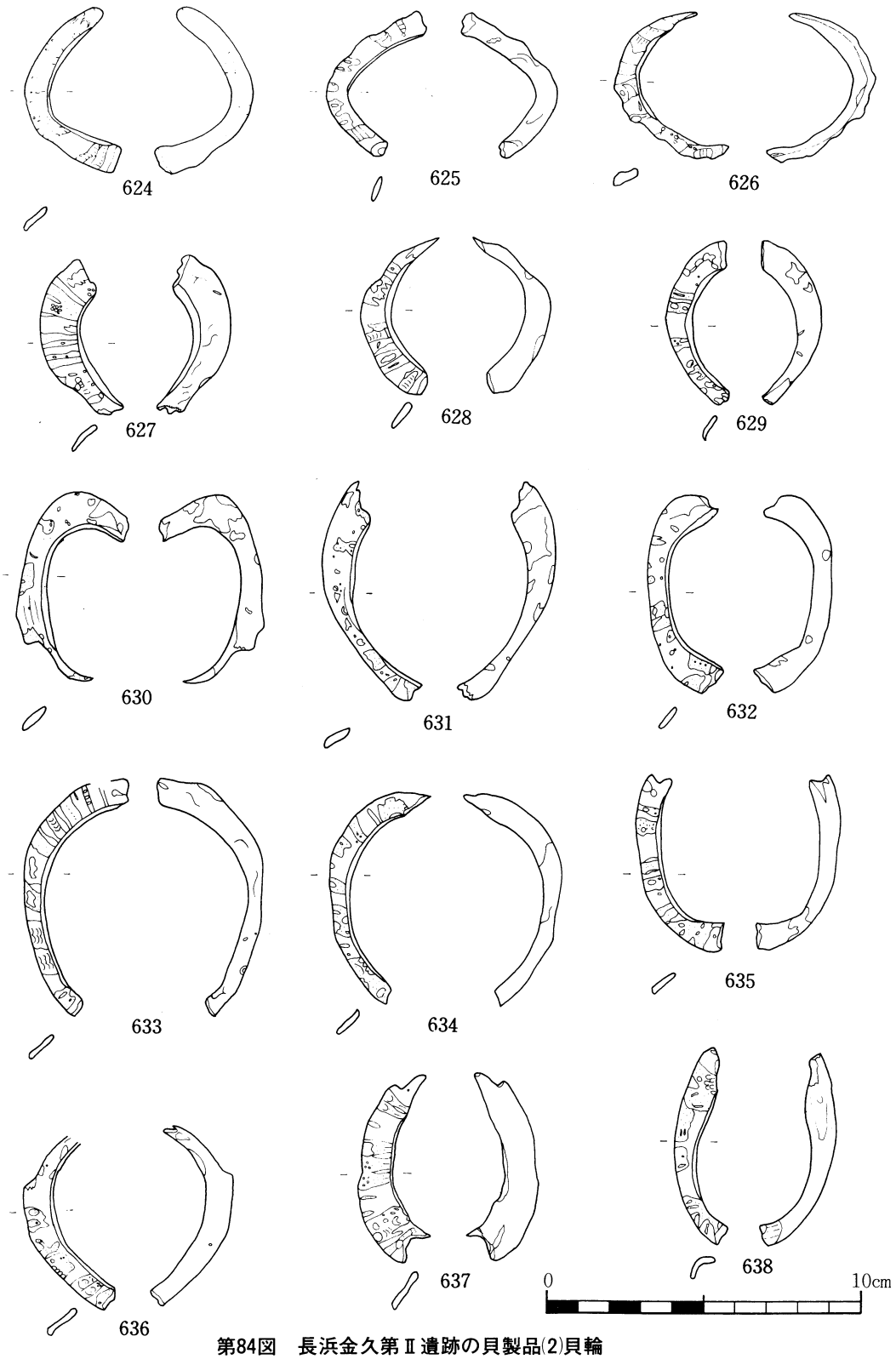
この製品は貝匙すなわちスプーンとしての用途が今まで考えられている。しかしこの製品はヤコウガイの外皮と内皮を剝ぎ真珠層のみを出して，丁寧につくられているので単なる日用食器としては丁寧すぎるのではないかと考えられる。むしろ呪術的なもので国分直一氏が考えている家文的なものの考えが強いと思われる。これは今後の研究課題の検討の一つと思われる。



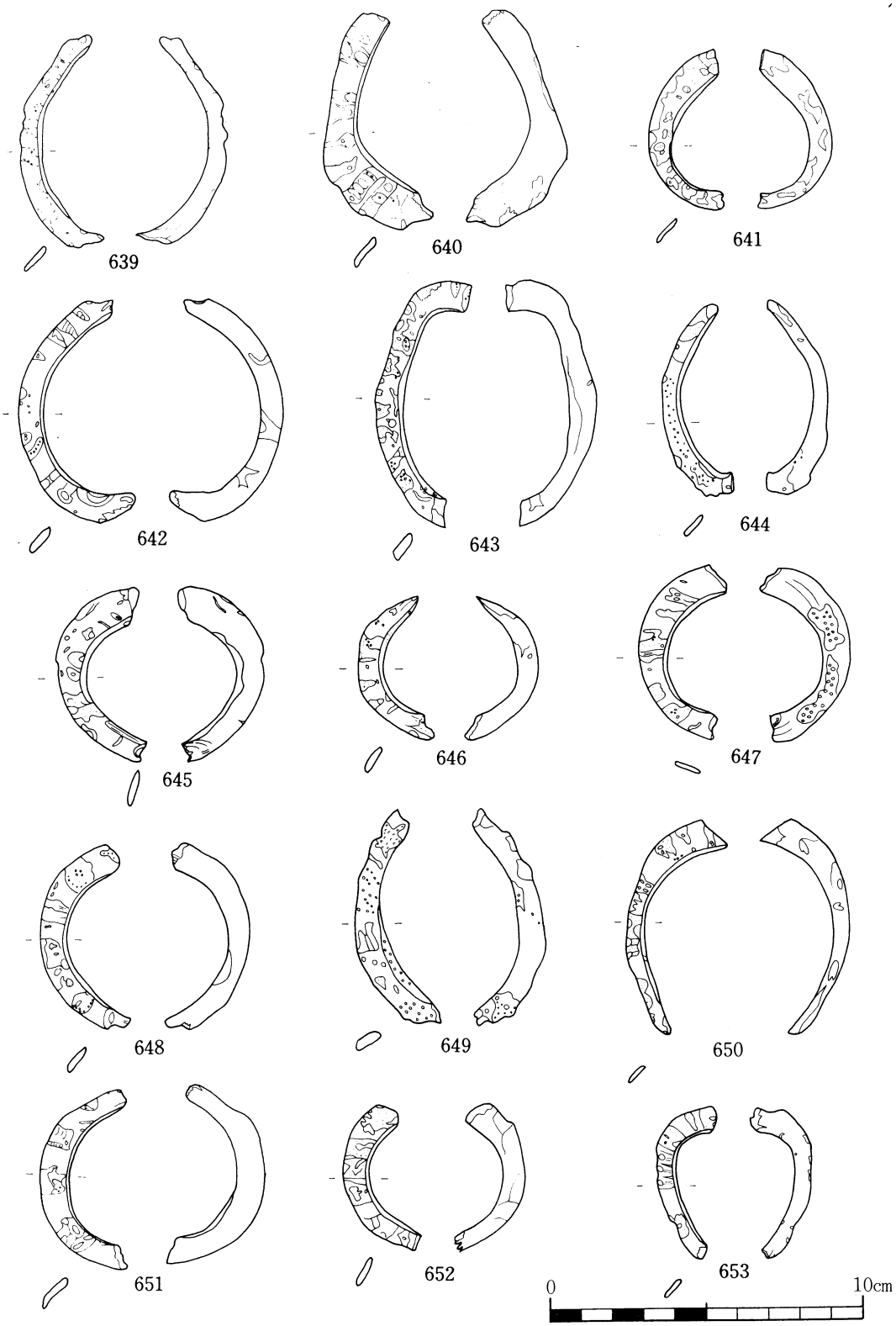
第82図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器土製円盤実測図(11)　ＸＩ類(612・613)



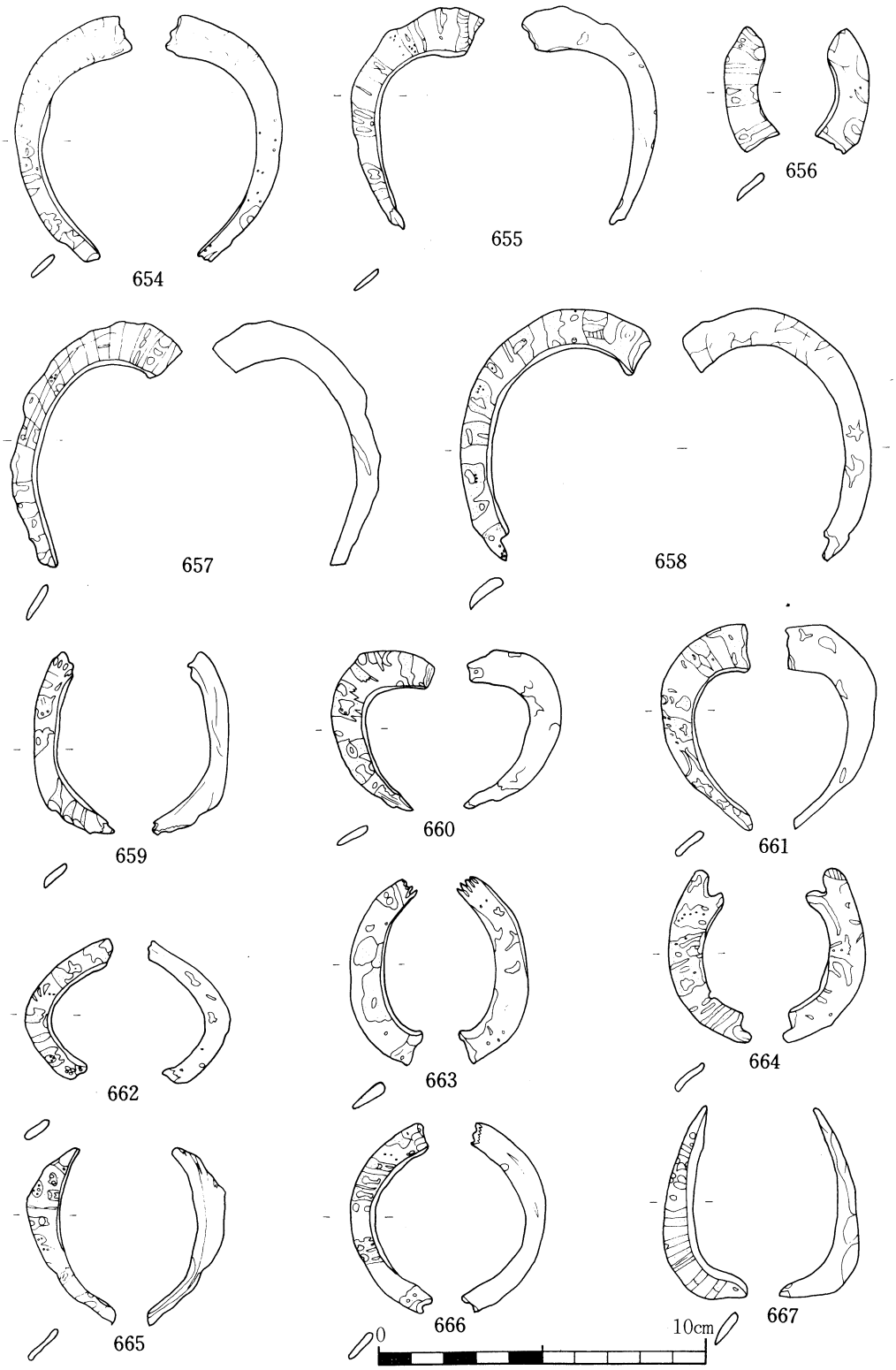
第83図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(1)貝輪



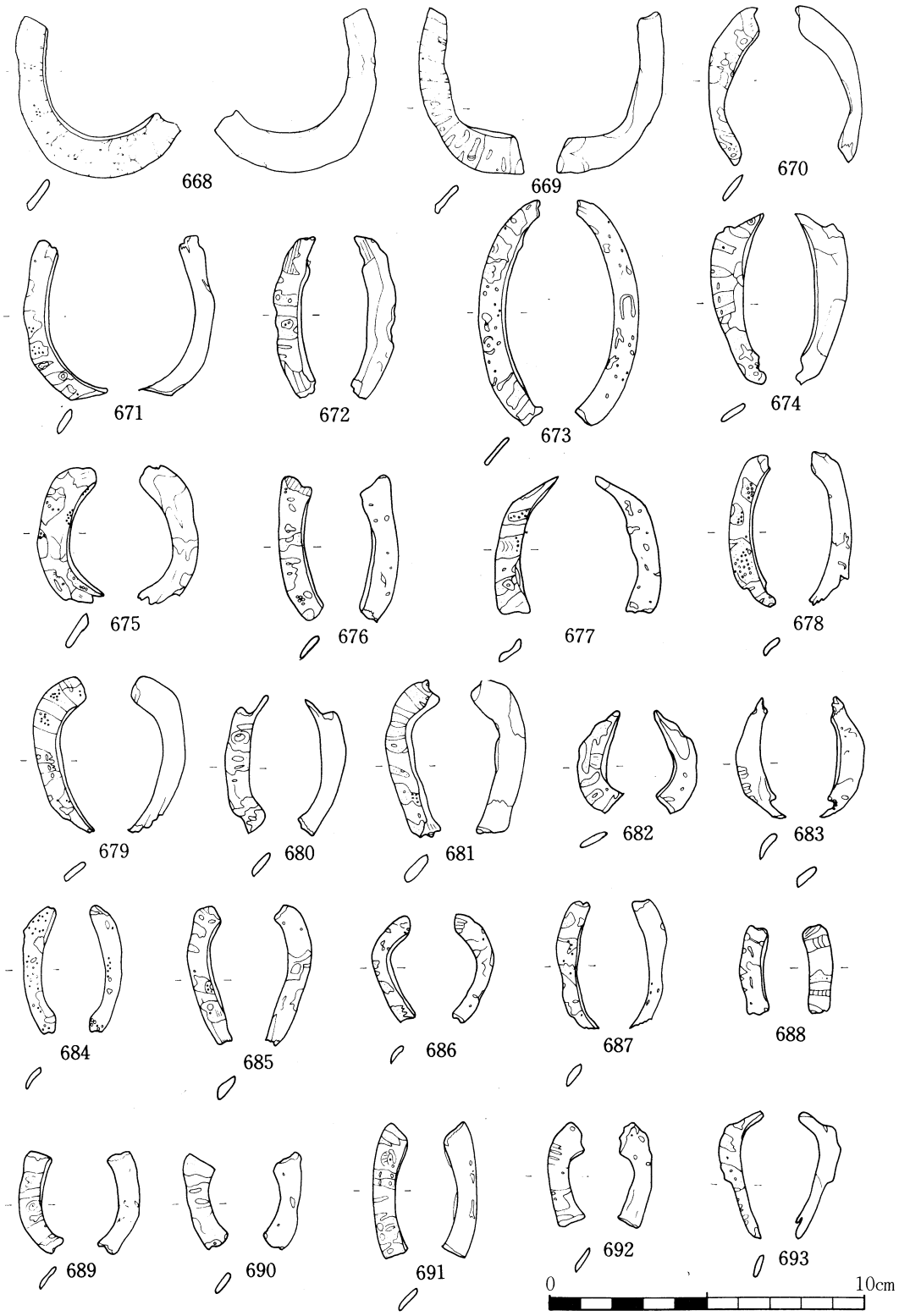
第84図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(2)貝輪



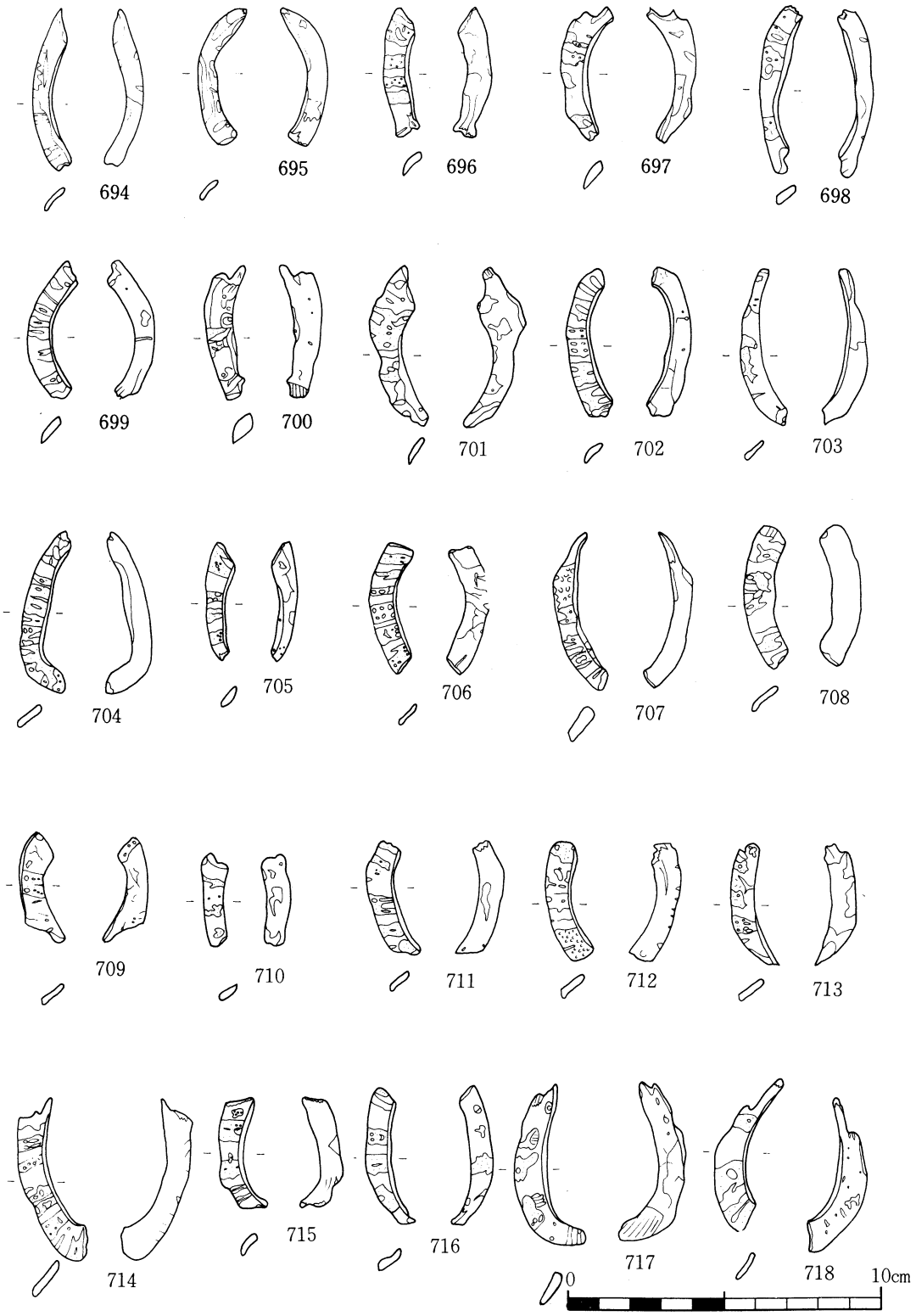
第85図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(3)貝輪



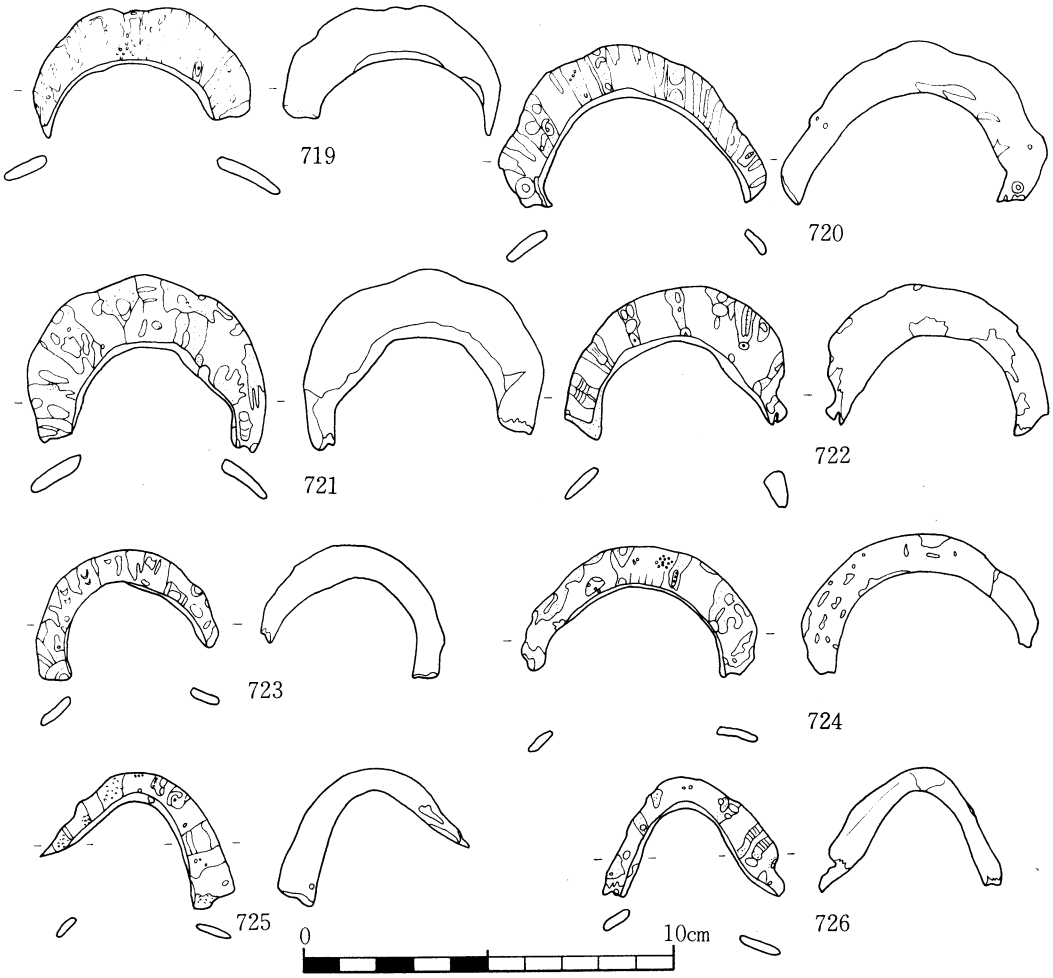
第86図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(4)貝輪



第87図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(5)貝輪



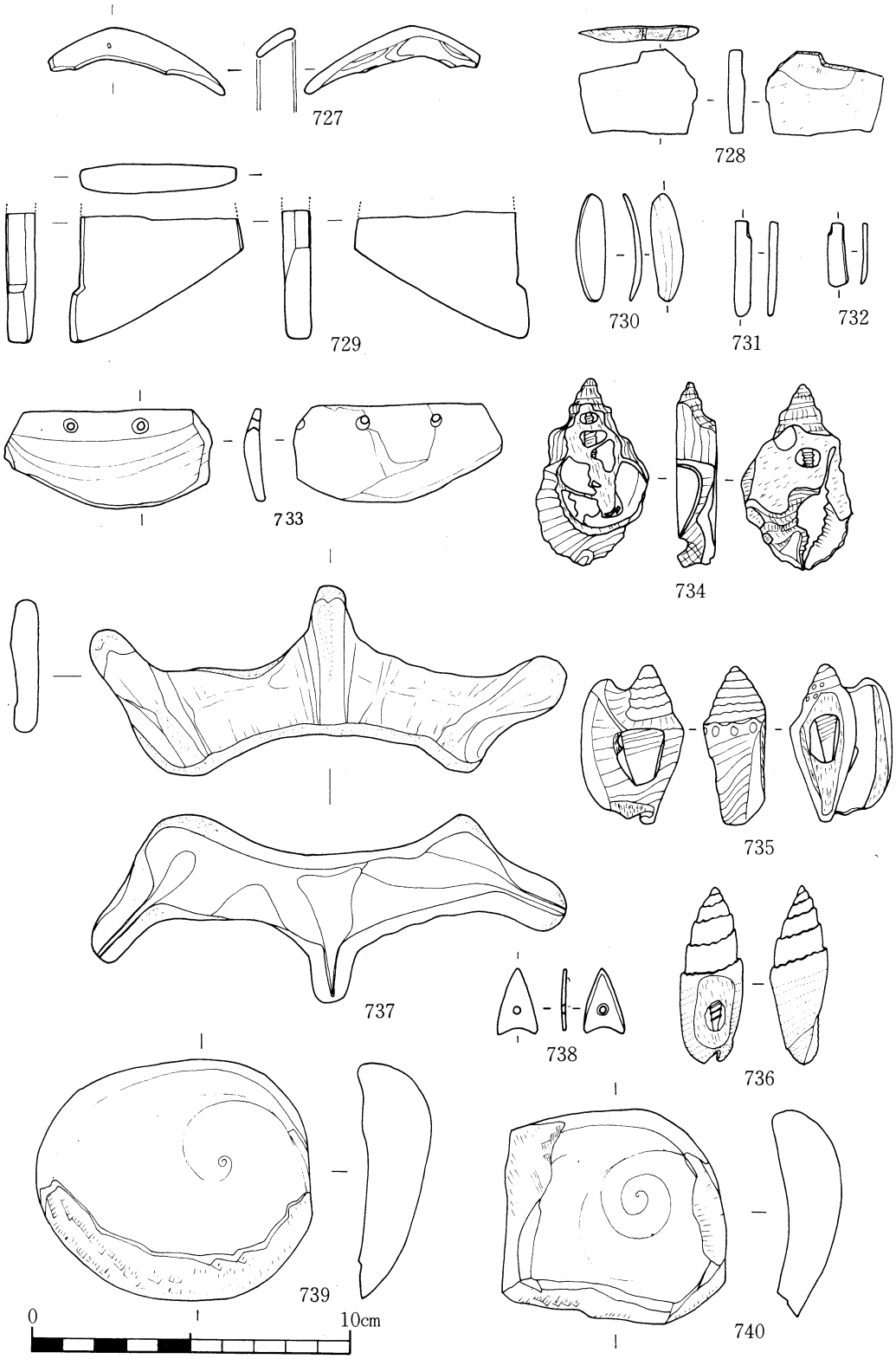
第88図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(6)貝輪



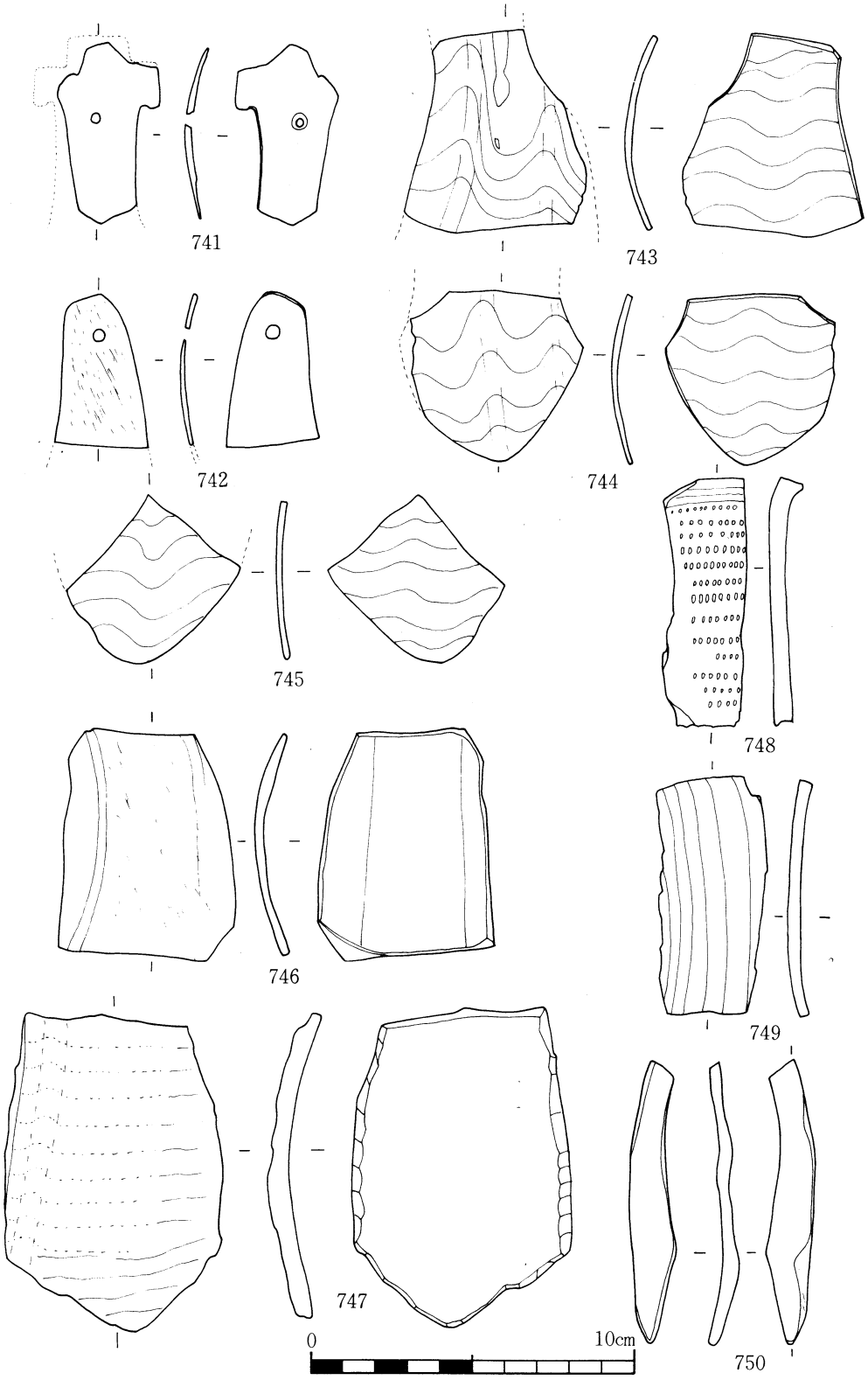
第89図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(7)貝輪

7．その他の貝製品（667～669）

667・668はイモガイを短冊形に切った状態で 7.6×2.5cm，7.4×3.2cmの大きさであり，未成品と考えられる。669 はスイジガイの一部を切ったもので 8.8×1.4cmの大きさで，一部擦痕がみられて先端部は尖る。



第90図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(8)貝輪・垂飾品・貝鏃・螺蓋利器



第91図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(9)貝匙状貝製品

3．石器（751～758）

1）研磨器

この石器は5～7cm大で，厚さ1～1.8cmの破岩質の扁平石で8点出土した。幅4～5mmの溝が片面に1～7条みられる。751・762・764・765は両面に他は片面にみられる。この石器の溝は貝殻を研磨したときに，生じたものと考えて実験を他の石で行なってみた。水を付けながら磨擦して行くと，貝殻は研磨され，砂岩は溝が少しずつ深くなって，幅は4～5mmの溝になった。

この溝は直線的にみえるが若干曲線状になっていることから，曲った物を研磨していると考えられる。すなわち，貝輪等の縁の研磨をするための石器ではないかと思われる。本遺跡では貝輪は114点出土しているので，貝輪研磨器としての用途が考えられる。

第25表　研磨器諸訳

番号	出土区	層	法　量	重量	備　考	番号	出土区	層	法　量	重量	備　考
751	B－6	4	5.0×4.5×1.0	24g	溝7本	755	一　般	4	4.2×4 4×0.9	22g	溝3本
752	一　般	4	4.4×3.1×0.7	19g	溝5本	756	A－6	4	4.7×4.0×1.8	29g	溝3本
753	一　般	4	5.3×3.2×1.2	23g	溝4本	757	B－6	4	5.1×3.4×2.0	40g	溝2本
754	B－6	4	5.0×4.0×1.1	24g	溝10本	758	B－6	4	7.1×5.1×0.8	64g	溝1本

2）タタキ石・凸石（678～679）・

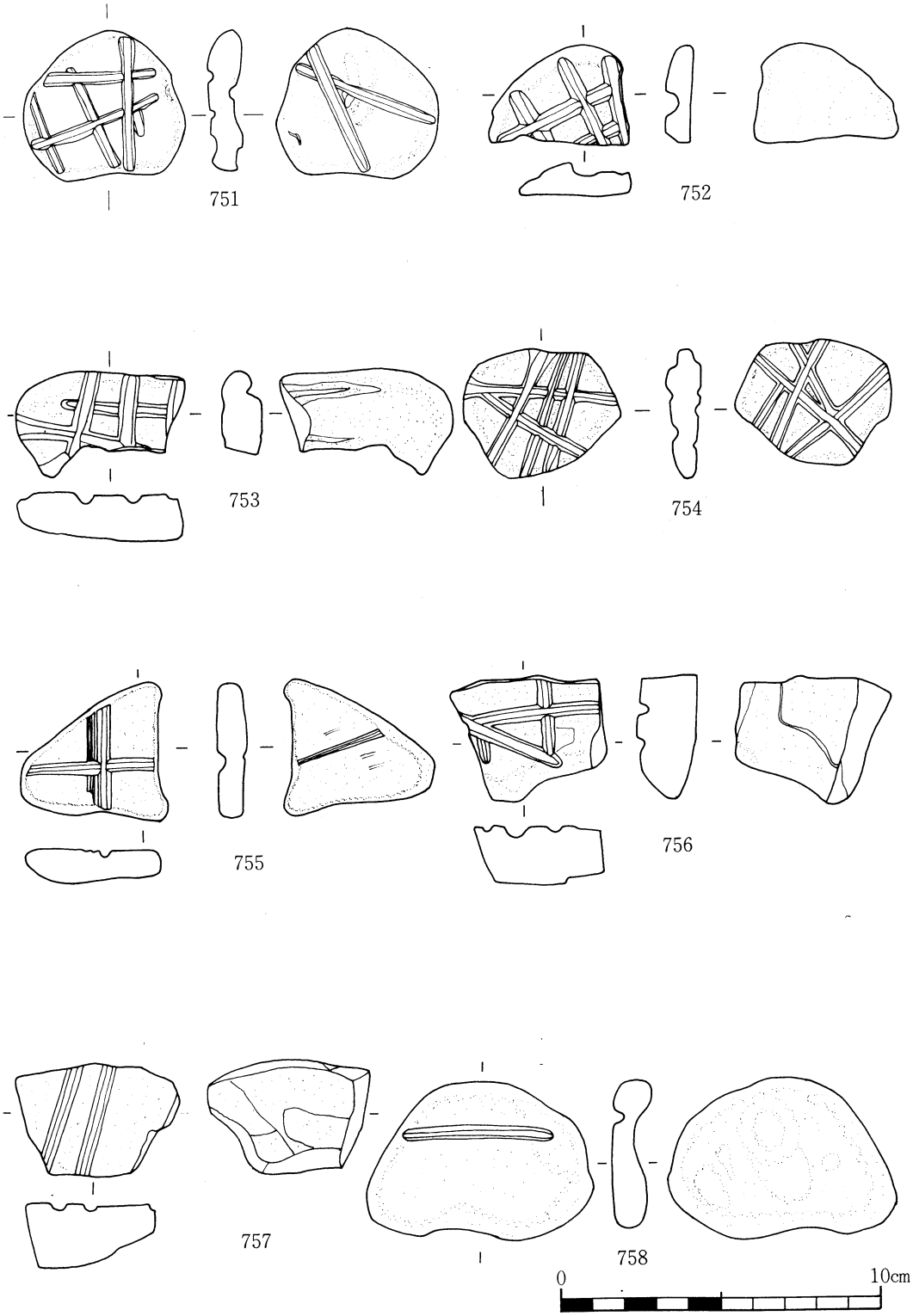
678はタタキ石と凹石の両用石器である。679はタタキ石である。

第26表　タタキ石・凹石諸訳

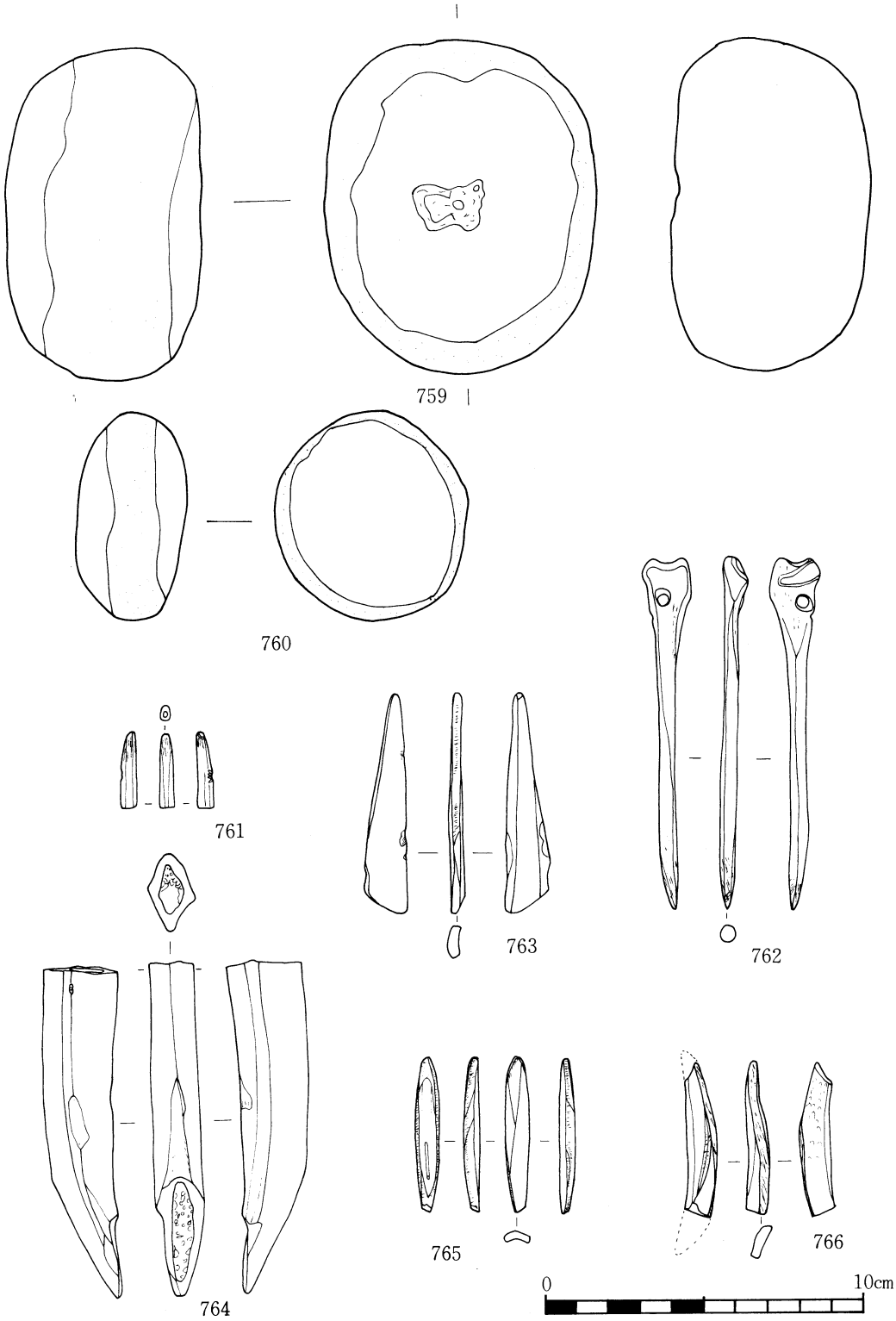
番号	出土区	層	法　量	重　量	番号	出土区	層	法　量	重　量
759	B－5		11.0×8.0×6.2	780g	760	A－5		6.7×6.0×3.5	190g

4）骨角器（680～685）

骨角器は6点出土した。761は猪の腓骨を利用したもので先端は尖らせている。762は猪の腓骨を利用したもので基部に3.5cmの穿孔を施したもので全身が11cm，径が5mmの製品である。これは針の一種で布に糸を通すために孔を開ける通孔具と思われる。穿孔は紐等をくくりつける部分で紛失防止のためと考えられる。763は長さ7.9cm，幅1.9cm，厚味4mmの三角形をしたもので刺突具と考えられる。764は長さ10.3cm，幅2.4cm，厚味1.9cmで骨の曲りを利用し，先端を尖らすようにカットしている。これは刺突具と考えられる。765・766は国分直一氏により教示された南方（台湾・華南地方）や，北欧に出土している原始的なつりばりである。763は長さ4.9cm幅8cm，厚味2.5mmで両端が尖り，直行している。一方の先端部は欠損しているが完形に近い。764は長さ4.8cm，幅9mm，厚さ4mmで，両端は欠損している。若干曲り気味である。762は足中骨が手中骨。763・764・765は大腿骨。766はケイ骨を使用している。獣はリュウキュウイノシシである。



第92図　長浜金久第Ⅱ遺跡の石器実測図



第93図　長浜金久第Ⅱ遺跡の石器，骨角器実測図

第３節　長浜金久第Ⅲ遺跡の概要

１．遺跡の概要

第Ⅲ遺跡は，第Ⅱ遺跡の南約 100m の所にある。標高は 9.9m で南北に長い砂丘の後面にあたる。後方地は小川が南北に流れ，湿地帯となっている。この遺跡は第１次調査では発見されておらず第Ⅲ次調査で確認した。

トレンチは東西に５本入れた。その結果第４トレンチで遺物を確認し，第５トレンチを入れ範囲を確認した。第94図はトレンチ配置図で，第１トレンチが２×８ｍ，第２トレンチが２×20ｍ，第３トレンチが２×10ｍ，第４トレンチが２×10ｍで，第４・５トレンチで表層の下，第Ⅱ層（深さ20cm）で土器・貝殻等を出土した。また，県道の断面にも遺物がみえ，２点の土器を断面より採集した。その結果，遺跡が道路側へ拡がることが確認された。

２．人工遺物

１）土器（767～772）

767は県道の断面より採集したもので，口径25cmの甕形土器である。口縁は「イ」字形の断面で内側が舌状になっている。765は第４トレンチより出土したもので，口径23.7cmで「く」字状に外反し，上下に孤状の連続文様を施している。769～771は５トレンチで出土したものである。769･771は厚味のある脚台で，770は厚味のない脚台であり，甕形土器の底部である。底径は769が 5.5cm，771は 5.6cm，770は10.5cmである。772は県道の断面より採集したもので壺形土器の底部である。若干丸底気味の平底である。焼成は良くない。これらの土器は茶褐色を呈し，サンゴや細礫を含んでいる。

これらの土器の時期は，甕形土器の口縁や，底部から考えると本遺跡は，767・769・771の弥生時代的な器形と，768と770の古墳時代的な器形があり，弥生後期から古墳時代にかけての時期と考えられる。

２）螺蓋利器

２点出土している。１点は半円状に剝がれ，１点は部分的に剝がれている。

なお本遺跡はトレンチ調査だけのため簡単に説明した。詳細は本調査後に説明したい。

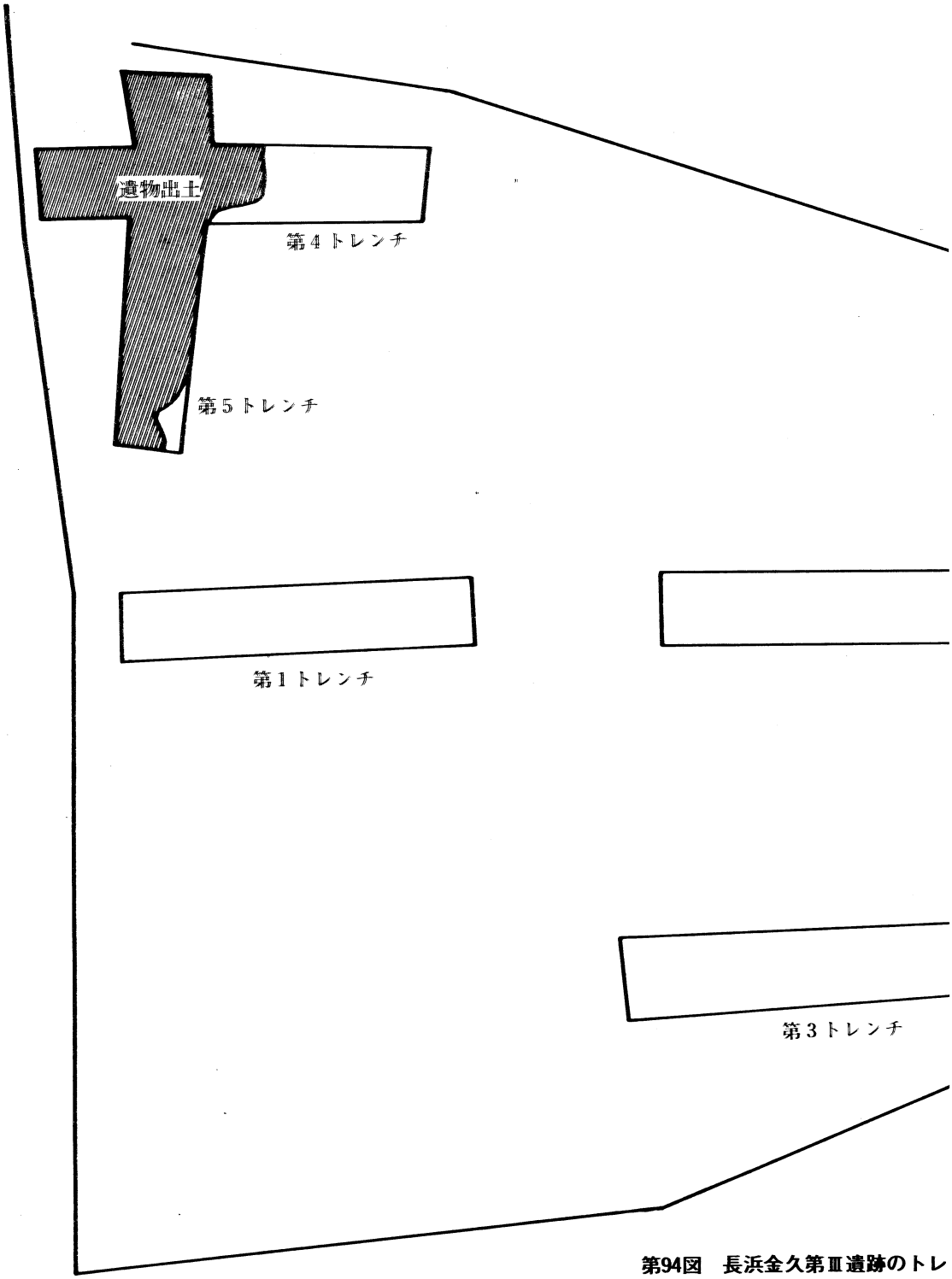
第４節　近代墓の概要

１．概要

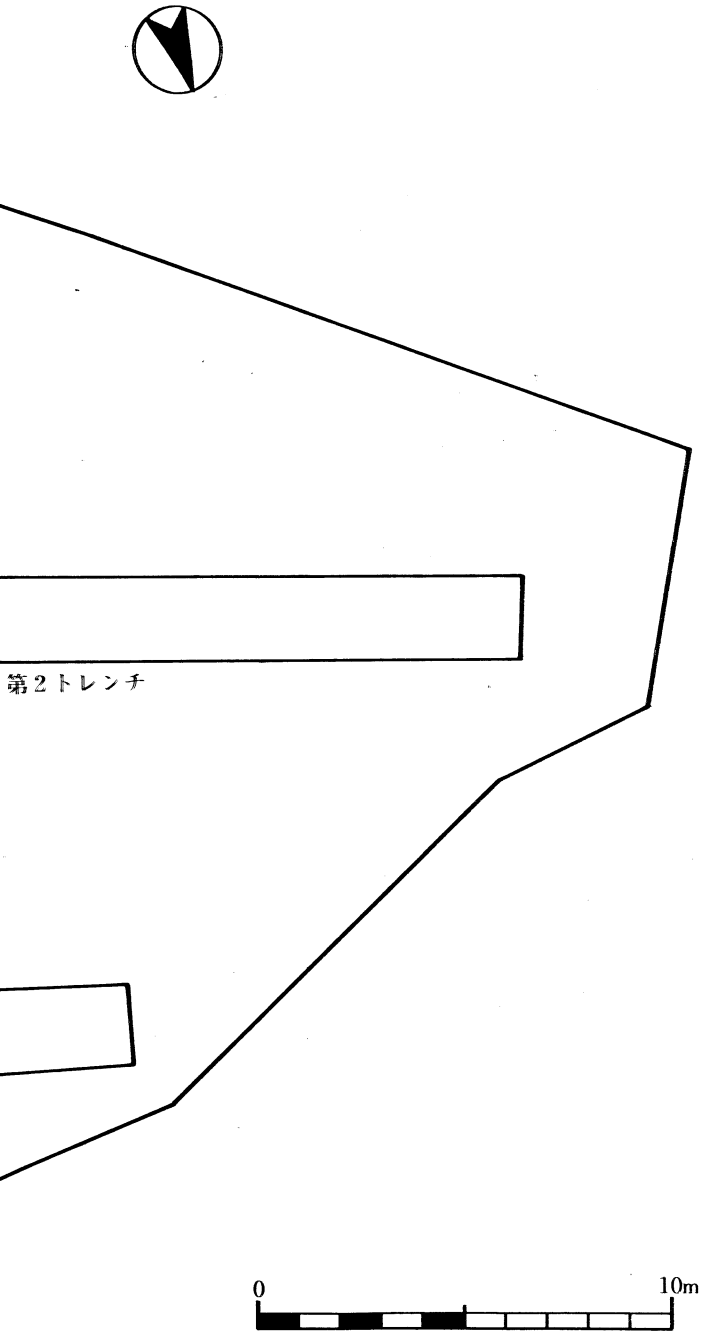
Ｇ―59区に２基近代墓が検出された。これは第Ⅱ次調査終了後，工事用道路の壁が砂丘のため風で崩れ一部露出したため発見された。発見当時は，笠利町教育委員会で応急処置をしてもらい，第Ⅲ次調査で調査した。

１号は幅50cm，長さ80cm，深さ12cm（上部はすべて剝がれていた）の土壙に埋葬されていた。供献品はギハ，クワ，ナベ，貝製のシャモジ，皿があった，人骨は女性であった。

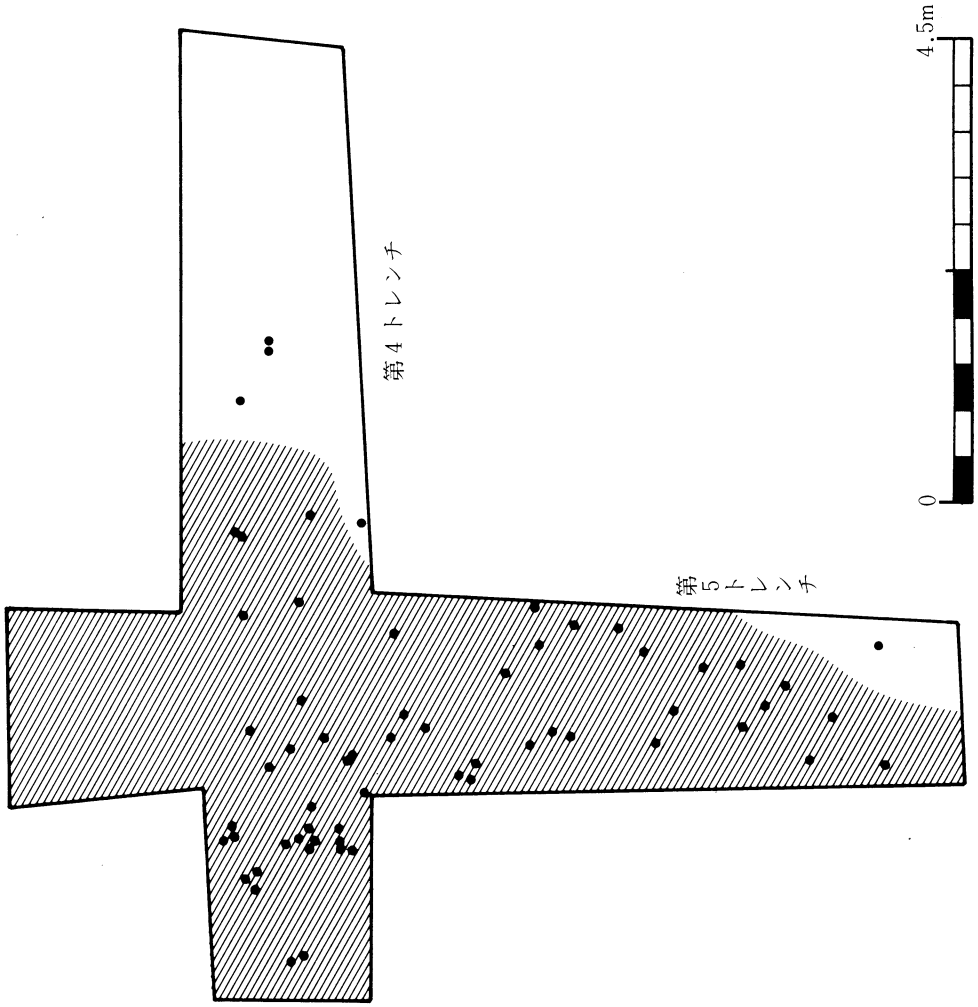
２号は幅40cm，長さ１ｍで，深さ12cm（上部はすべて剝がれていた）の土壙に埋葬され，供献品は茶碗，タバコ鉢，皿，チョコ，キセル，かやのつり金があった。また，シャツのボタン（ヤコウガイ製）や，クギが出土した。



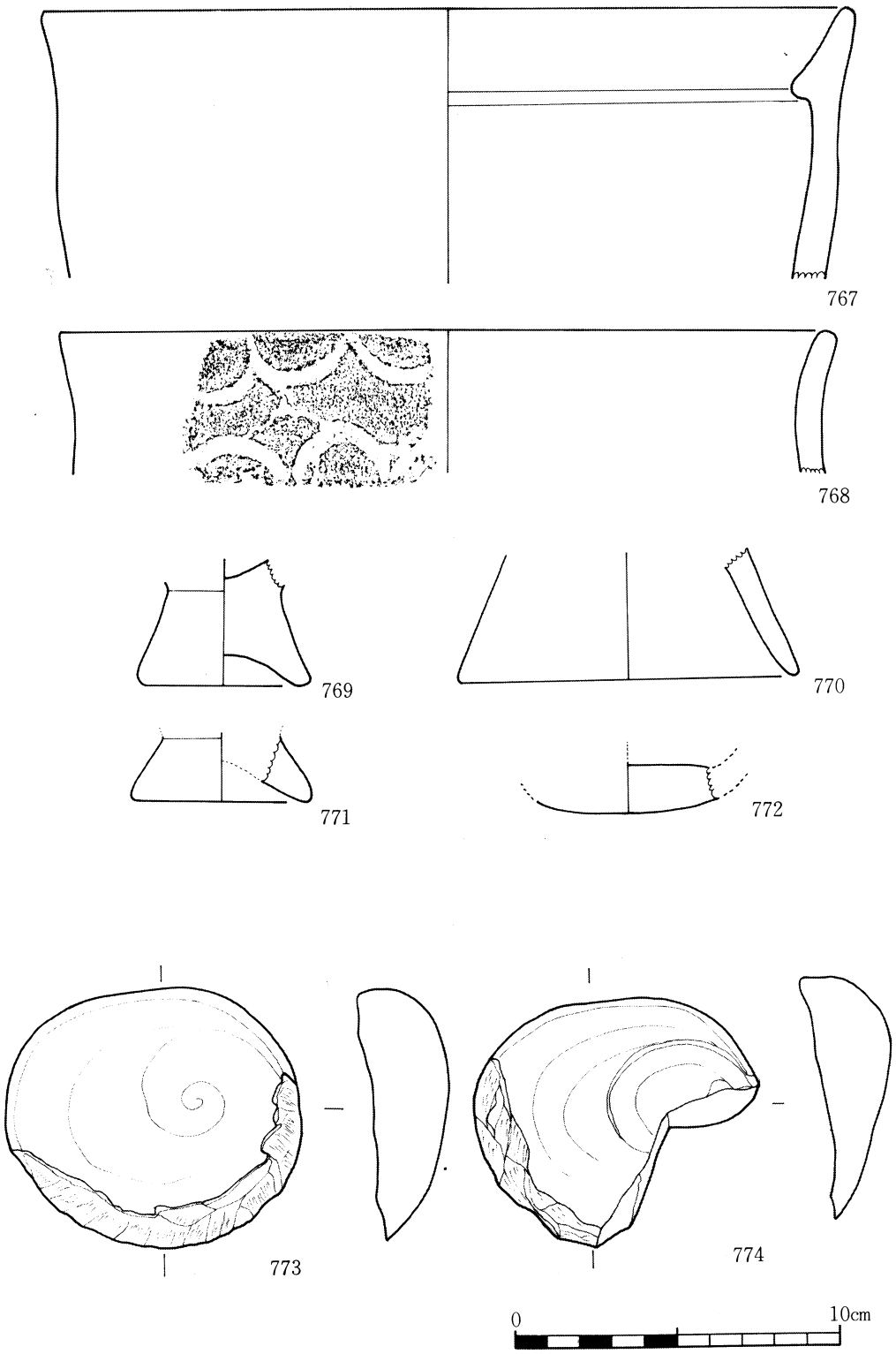
第94図　長浜金久第Ⅲ遺跡のトレ



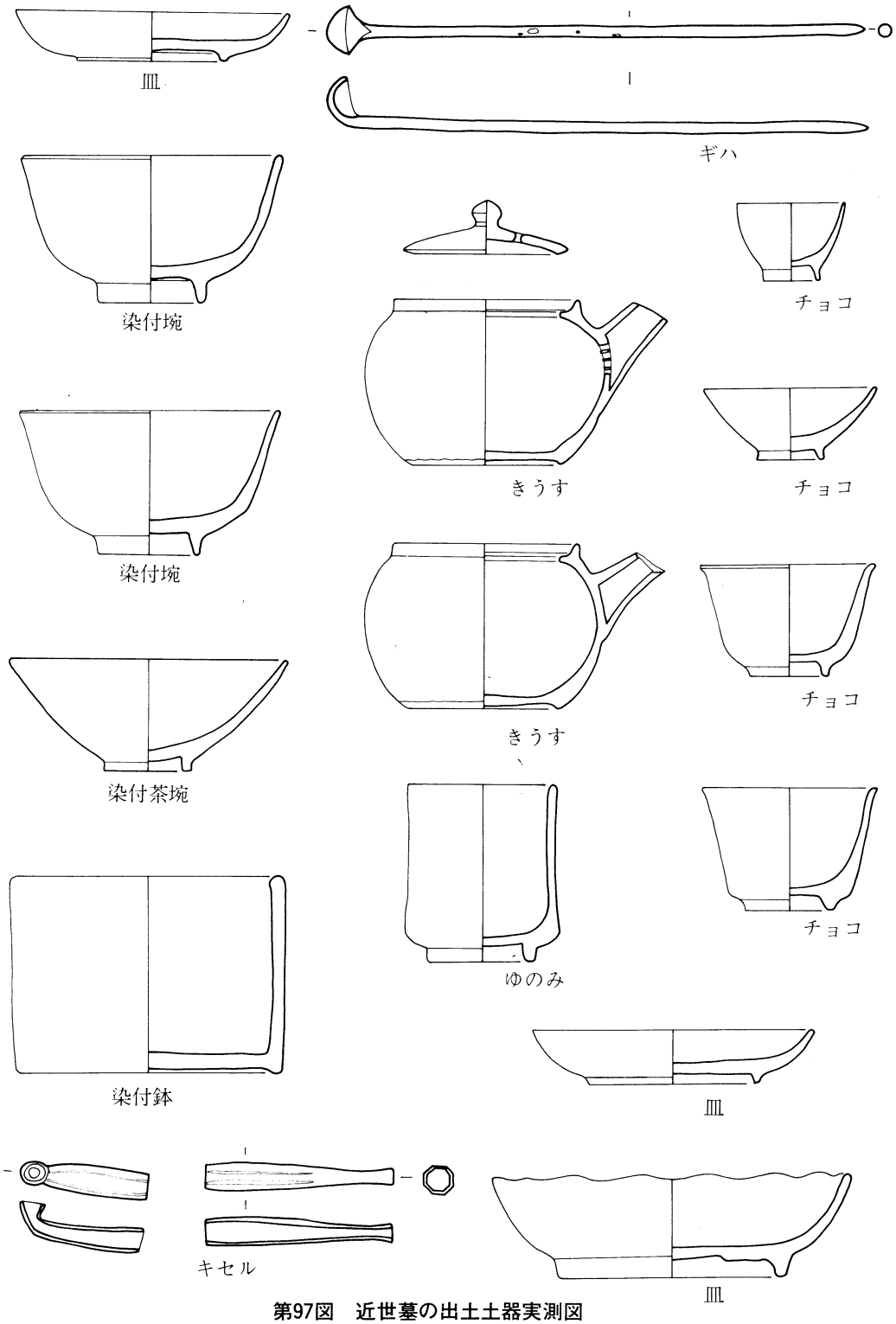
ンチ配置図



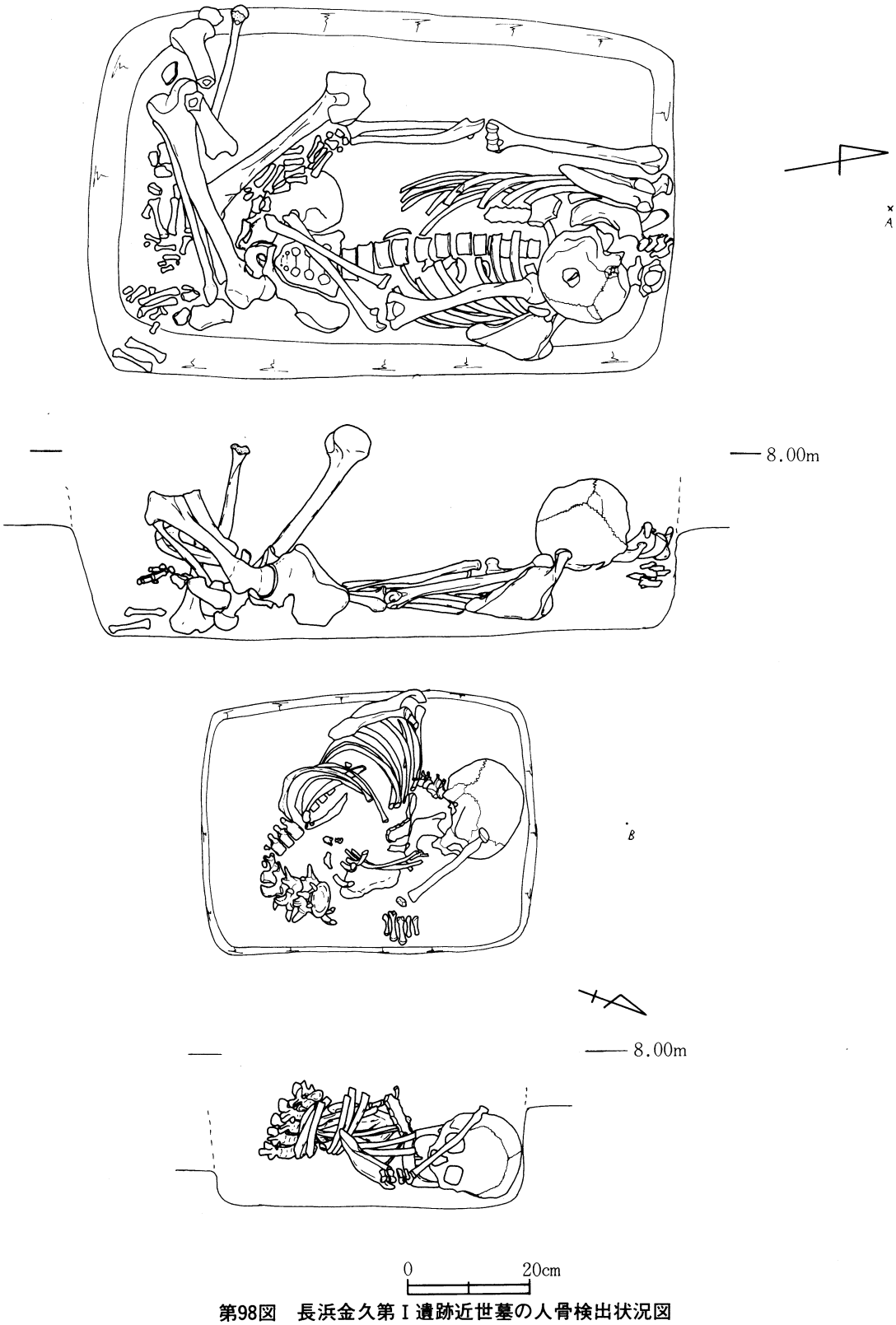
第95図　長浜金久第Ⅲ遺跡の第4・5トレンチ出土状況図



第96図　長浜金久第Ⅲ遺跡の出土遺物実測図（土器・貝器）



第97図　近世墓の出土土器実測図



第98図　長浜金久第Ⅰ遺跡近世墓の人骨検出状況図

第Ⅳ章　まとめ

長浜金久遺跡は，第Ⅰ遺跡・第Ⅱ遺跡・第Ⅲ遺跡，それに近世墓からなる砂丘遺跡である。

調査の結果，これらの遺跡は山手側より海側へ砂丘形成が，発達につれて生活地域が移り変る状況が把握され，第Ⅰ遺跡は最も海側の砂丘で，古墳時代末期より平安時代前期にかけての遺跡で，第Ⅱ遺跡は最も山手側の砂丘にあたり，縄文時代後期の遺跡であることが判明され，最後に，第Ⅰ遺跡と第Ⅱ遺跡の中間に位置する第Ⅲ遺跡が弥生後期より古墳時代相当の遺跡であることが確認された。

なお遺跡は他にケジ遺跡・下山田遺跡・和野トフル墓・泉川遺跡等も遺跡の存在が再確認された。

長浜金久第Ⅰ遺跡

長浜金久第Ⅰ遺跡は現在残っていた3,600㎡を全面記録保存調査を行った。その結果大量の貝殻と土器・石器・鉄器等が出土し，包含層が3枚確認された。3枚の包含層は放射性炭素測定を行った結果上部から第9層の 690±20 B.P.Y.(絶対年代ＡＤ1240～1290)，第13層の 930±20 B.P.Y.(絶対年代ＡＤ1020～1050)，第19層の1120±20 B.P.Y.（ＡＤ830～890）の年代が測定された。

各層の内，間層が認められる部分においては第9層には土器片は出土せず，第13・19層に土器片が出土した。しかし，第13層は土器片2点(細片で器形不明)と鉄器片1点だけであった。

貝殻の出土状況としては，第9層・第13層においてはブロック状に貝殻集中箇所がみられ，第19層には貝殻集中箇所と散乱箇所がみられた。貝殻集中箇所の附近には，ヤコウガイ製の貝製容器や，シャコガイが検出されている所が目に付き，貝殻集中箇所の中央部附近には焼貝，ならびに[註1]炭粉の拡がっていた。これらの様相から貝製容器は調理器としての可能性が高い況状を得た。

また，有孔貝は紐通しがあった状況に出土し，紐を通して使用したことが伺えられた。そして，貝刃とか，螺貝製貝斧と呼ばれている貝器は本遺跡の分析の結果，敲打器の類に属するものが妥当である見解を得[註2]て螺蓋利器とした。

土器は弥生時代後期に設定されていた兼久式土器が主に出土した。しかし本遺跡で放射性炭素測定の結果第19層[註3]1120±20 B.P.Y.(絶対年代ＡＤ830～890)[註4]が測定され，9世紀まで下ることが考えられた。しかし，他に面縄第Ⅰ貝塚Ⅳ層では1355±60 B.P.Y.(絶対年代ＡＤ650)，第2アヤマル貝塚では1100±130 B.P.Y.(絶対年代ＡＤ910)[註5]が測定されている。

本遺跡の兼久式土器の甕形土器は第Ⅰ類から，第Ⅴ類[註6]まで分けられ，第Ⅰ類・第Ⅱ類は面縄第Ⅰ貝塚の第Ⅳ層出土の類と同じで沈線文ならびに沈線文＋刻目突帯が付く土器である。この類は兼久式土器の初期の段階で7世紀の所産と考えられる。第Ⅳ類は本遺跡の放射性炭素測定値に属すると思われる。9世紀の所産と考えられ，突帯文に荒い大きな刻目と指圧で突帯をつぶした土器類がみられる。第Ⅴ類は突帯のみのもので器形的に口縁部が内傾している。アヤマ

ル第Ⅱ貝塚で10世紀の放射性炭素測定値が得られ，この土器の一部が第Ⅴ類に類似している。この第Ⅴ類の土器は突帯に刻目が施されていない。

また無文土器も多く出土している。無文土器は面縄第Ⅰ貝塚では第Ⅳ層出土の土器は口縁部が外向し，第Ⅱ層出土のものは内向し，肩部が下がっている。本遺跡では口縁部が外向・直向内向の３類がみとめられ，面縄第Ⅰ貝塚の傾向によって無文土器の分類を行った。[註7]

壺形土器も甕形土器と同様な分類を行った。ただ口縁部の傾向は第Ⅴ類において口径が広くなり，頸部が短い。

土師器においては甕形土器が10点出土している。９世紀から10世紀にかけての土器で内側にヘラケズリの痕がみられる。

黒色をした土器は，器形としては白磁の器形をしている。両面が研磨され，胎土も黒色である。時期不明である。

鉄器としてはヘラ状鉄製品が出土している。石器としては凹石・タタキ石・クガニイシが出土している。

第100図はこれらを分類を行ったものである。兼久式土器の前段階として，第21層より出土した土器をあてた。この土器は沈線文土器で器形も異なっている。また第Ⅲ遺跡の遺物は地形上それ以前の土器と思われる。

長浜金久第Ⅱ遺跡

この遺跡は最も山手側の砂丘遺跡で，新砂丘と旧砂丘に分けられている。縄文期と弥生期の遺跡である。遺構としては，住居跡・炉跡・集石・土壙が旧砂丘にあり，埋葬人骨・土壙が新砂丘に検出した。遺物出土状況としては旧砂丘上にあり急に傾斜し，最も低い標高６ｍラインでは海岸にみられるサンゴや貝殻が磨耗した状態で出土した。

住居跡は2.3×2m，深さ20～30cmの堅穴住居址で一部石囲いがみられた。炉跡は住居跡の西に検出された。

また，埋葬人骨の時期推定は，新砂丘内にあり，この砂丘の層より外耳土器や小形の鉢が出土したため弥生期の可能性が強い。[註8]

土器としては，本遺跡ではⅠ類からⅪ類まで出土した。これらは層位的に分けられない状態で混貝土層の包含層に出土した。そのため器形・文様で分類し，今後の検討資料として本遺跡の分類を試みた。第101はその図でⅠ期からⅥ期にわたり各類の流れが考えられた。

第Ⅰ期

この土器は第Ⅲ・Ⅸ類にあたり，口縁部が山形肥厚するタイプである。文様は押し引き類似の連点や沈線で施されている。胴部には文様は施されていない。これは面縄東洞式より一時期古いタイプと思われる。[註9]

第Ⅱ期

この土器は第Ⅰ類の土器である。胴部は不明であるが口縁部に押し引き文と折れ線文ならびに折れ線区画文を施している。これは嘉徳Ⅰ式にあたりその中でもＡタイプに属すと思われる[註10]

が，面縄東洞式の籠目文の延長上にあるもので折れ線区画があるため長浜金久Ⅱタイプに含めた。

次の土器類が本遺跡の主体をなす時期である。文様としては押し引きではなく，刺突連続文と鋸歯文を重ねた重鋸歯文を施すのが特徴である。第Ⅱ類のａ～ｅのバリエーションをもつ，長浜金久タイプの土器である。これには嘉徳工式Ｂも含まれる。

Ⅰ類からの流れとしてはａ類が考えられる。[註11]この類は口縁部に折れ線区画文とその区画内のすべてに刺突連続文を施し，胴部に重鋸歯文がある土器である。ａ類のあとにくるのがｂ類で折れ線区画文内に刺突連続文を施さないものである。口縁部と胴部の文様構成はａ類と同じである。ｂ類のあとにくるのがｃ・ｄ類で，ｄ類の折れ線区画文かなくなり，沈線と刺突連続文と重鋸歯文の文様構成の土器類である。器形的には山形口縁部の高さが低くなっている。ｃｄ類のあとにくるのがｅ類で，c-d 類の沈線が消えて刺突連続文と重鋸歯文の組み合せである。カーボン測定結果の3100±20 B.P.Y. はこの第Ⅱ期が妥当であろう。

第Ⅲ期

この土器はｅ類のあとにくる重鋸歯文のみの土器である。（第Ⅳ類）

第Ⅳ期

この第Ⅳ期の土器は第Ⅲ期の第Ⅳ類の重鋸歯文が変化したと考えられる文様をもつ。文様の沈線は細く，７～８本の沈線を縦・横・斜に施している。口縁部は平坦である。

第Ⅴ期

この第Ⅴ期の土器は第Ⅳ類で沈線がやや太く荒い。そして口縁部に突帯が付き，文様は第Ⅳ類の影響が考えられる。

第Ⅵ期

この第Ⅵ期の土器は第Ⅷ類で下に突帯が付き口縁部には沈線を施す。この土器は面縄西洞式に属すると思われる。

以上が土器類の変化である。なおこの中で第Ⅱ期にみられる本遺跡の第Ⅱ類土器はバリェーションが豊富であるため，これまで言われてきた嘉徳Ⅰ式Ｂをここでは，長浜金久タイプとして取り扱った。

出土土器の長浜金久タイプ（嘉徳Ⅰ式Ｂを含む）は時期としては縄文時代後期と設定され放射性炭素測定結果では，3100±20B.P.Y. で後期後半の時期が考えられる。

また本遺跡では面縄西洞式も出土している。この土器は犬田布貝塚(大島郡伊仙町)では3170±200B.P.Y, 2820±110 B.P.Y. の結果がでている。ここでは炭素[註12]使用量が前項0.938gに対し，後項の1.77g となっており，後項を使用したい。

第101図は長浜金久Ⅱタイプ（嘉徳Ⅰ式Ｂを含む）を中心として分類を試みた図である。

面縄東洞式の押し引き連続文は本遺跡に出土していない。

第Ⅱ期を本遺跡の長浜金久Ⅱ[註13]タイプとした。これは折れ線区画文と重鋸歯文の組み合せ，ならびに刺突連続文を施したものと，刺突連続文と重鋸歯文の組み合せをもつバリェーションの

土器である。図では面縄東洞式からの流として，Ⅰ・Ⅱａ～ｅ類の分類を行った。

貝製品としては貝符状貝製品が出土している。これは面縄第２貝塚[註14]や，犬田布貝塚でも出土している。考えかたとしては国分直一氏教示の「家文」的な取り方が良いと考えられる。

またソデガイや，フデガイの貝製品は紐づれ等が無く，垂飾品としても，どの様な形態のものか不明である。ただ埋葬の中に１点タケノコガイが出土しているため，貴重なものと考えられる。考えかたとしては垂飾品の内でも「笛」的なものも考えられるが，今後の研究を待ちたい。

他の垂飾品としては貝輪が 113本出土している。すべて破損品であり，112 本がオオツタノム，１本がコホウラ製である。破損品の内，２本が接合により完形になった。これだけの破損品があることから本遺跡は貝輪の工房も考えられる。

石器としては研磨器が８点出土し，貝輪工房としても十分考えられる。

骨角器の中ではつりばり[註16]が注目される。本遺跡では2点であるが今後資料が増えると思われる。

埋葬人骨は弥生期のもので[註17]同層に外耳土器が出土したので中期以後のものと考えられる。

長浜金久第Ⅲ遺跡

第Ⅲ遺跡は古墳時代が中心と考えられる遺跡であるが試掘にとどまった。

近世墓

近世人骨は２葬出土し，昭和初期としてあつかった。

以上，長浜金久遺跡の要点を上げた。詳細は本文中に記載した。

参 参考文献

註１．木下尚子　「貝製容器小考」南島考古№７　1981

２．三島　格　「螺蓋製貝　について」賀　　夫還暦記念論文集　19

３．河口貞徳他「サウチ遺跡」笠利町教育委員会　1978

４．河口貞徳　「奄美における土器文化の編年について」鹿児島考古９号　1974

５．牛ノ浜修他「面縄第１．第２貝塚」伊仙町教育委員会　1983

６．池畑耕一他　「あやまる第２貝塚」笠利町教育委員会　1984

７．５と同じ

８．３と同じ

９．４と同じ

10．４と同じ

11．４と同じ

12．吉永正史他　「犬田布貝塚」伊仙町教育委員会

13．４と同じ

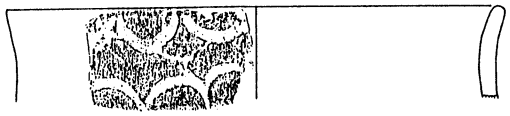
14．５と同じ

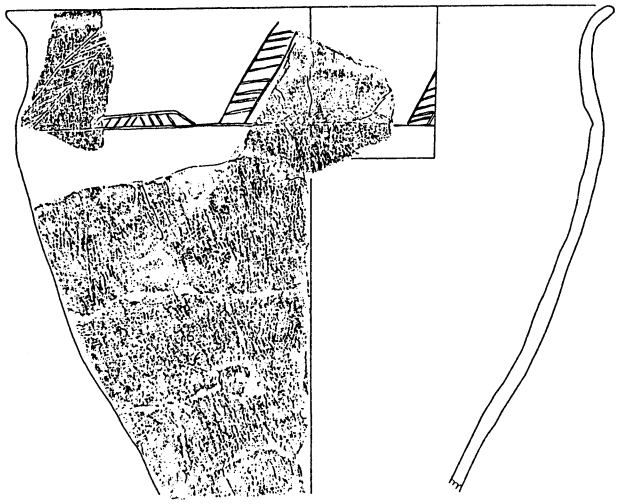
15．12と同じ

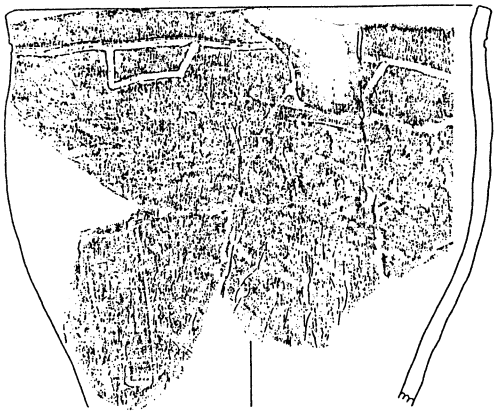
16．出口　浩他「宇宿貝塚」笠利町教育委員会　1979

17．国分直一教示

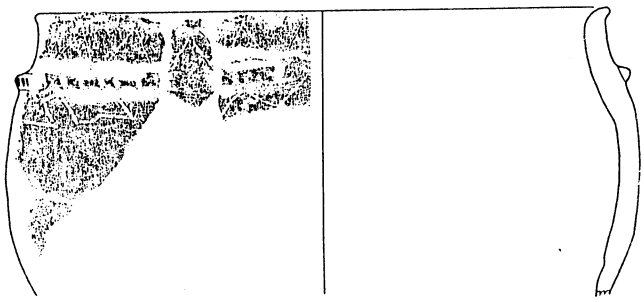
6 世紀頃

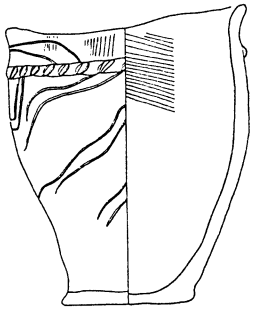


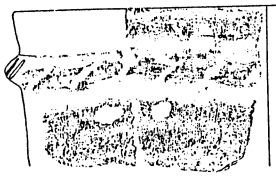


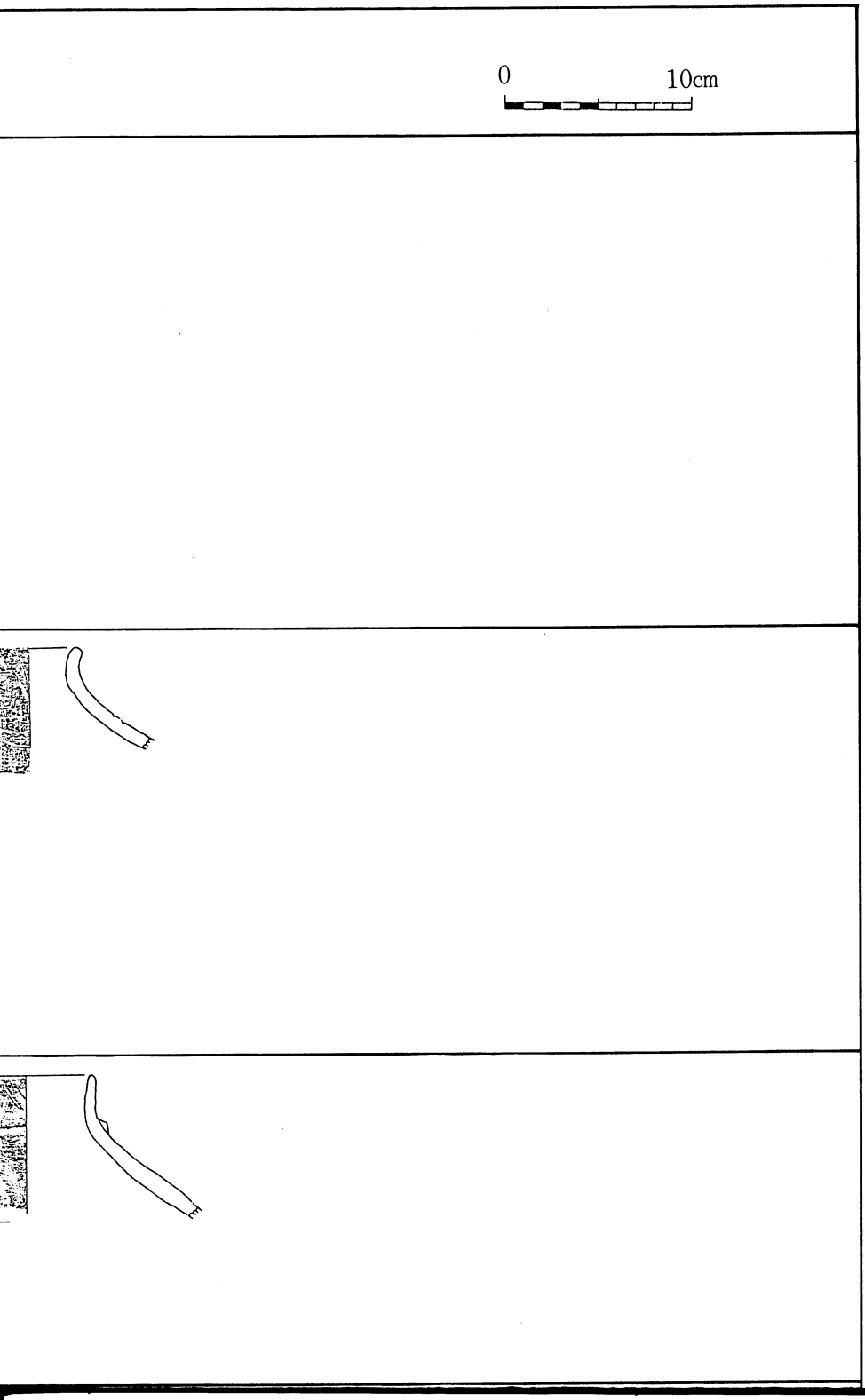


7 世紀
面縄第Ⅰ貝塚Ⅳ層
1355±60 B.P.Y.
A D 650

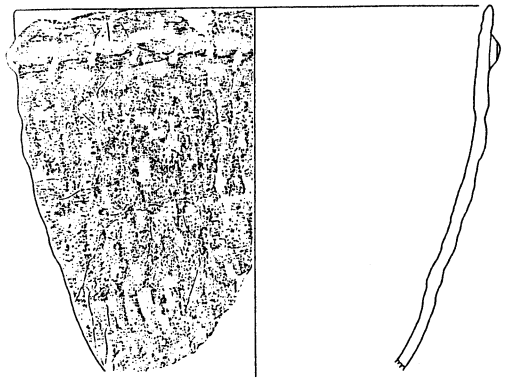


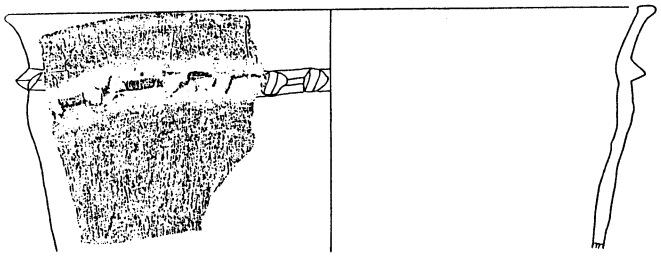





0
10cm

8 世紀頃

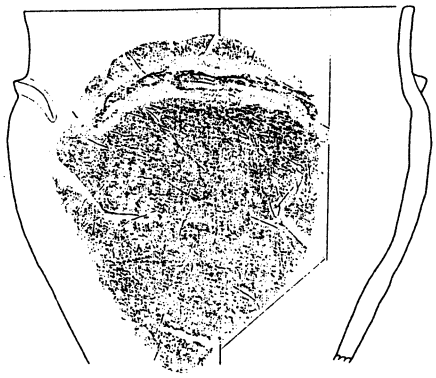


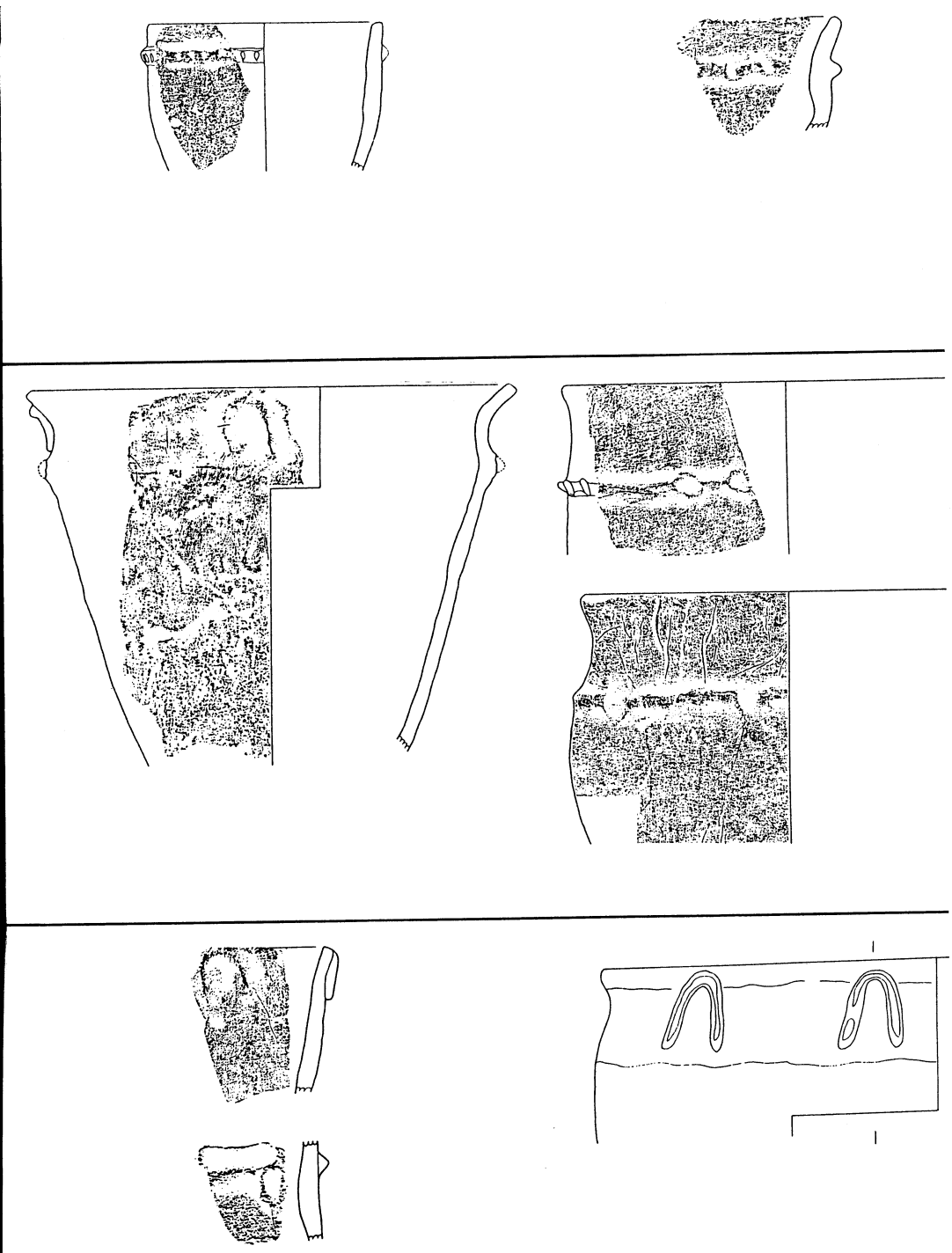


9 世紀
長浜金久第Ⅰ遺跡
第19層
1120±20B.P.Y.
ＡＤ 830～890

第２あやまる遺跡
第６層
1100± 130B.P.Y.
ＡＤ910

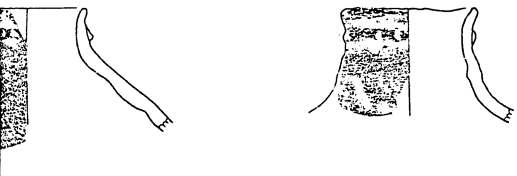
10世紀

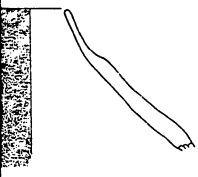


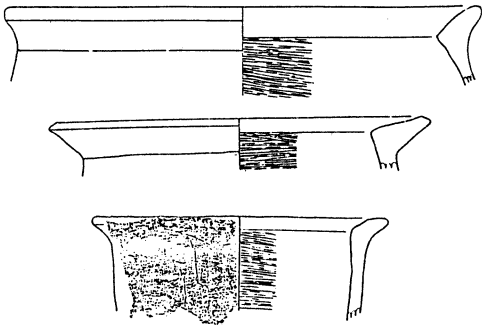


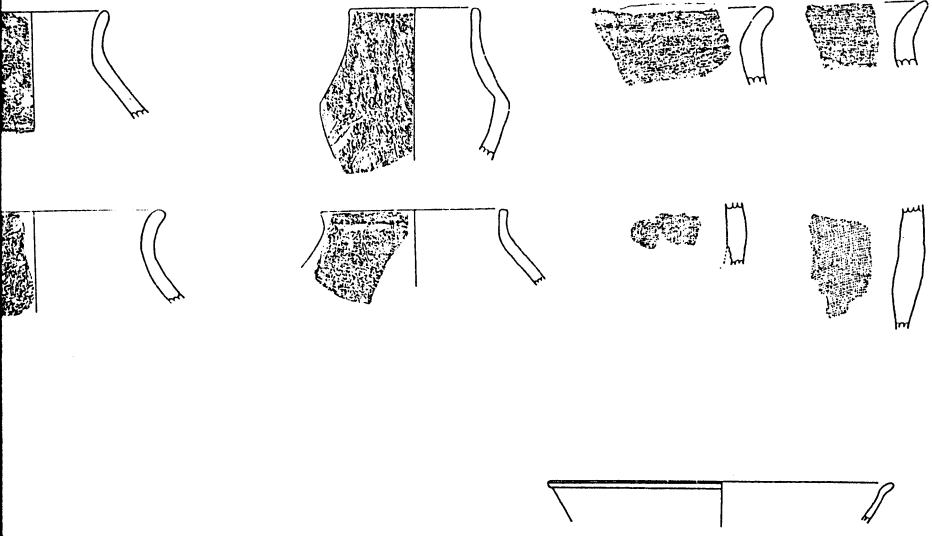
第100図　長浜金久第

Ⅰ遺跡の分類図

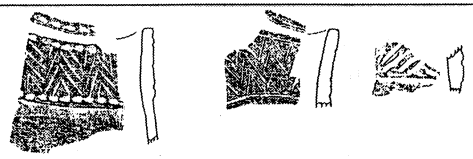








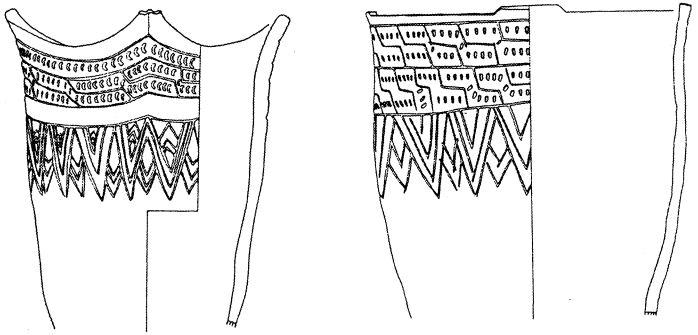
Ⅰ期



（Ⅲ類・Ⅸ類）

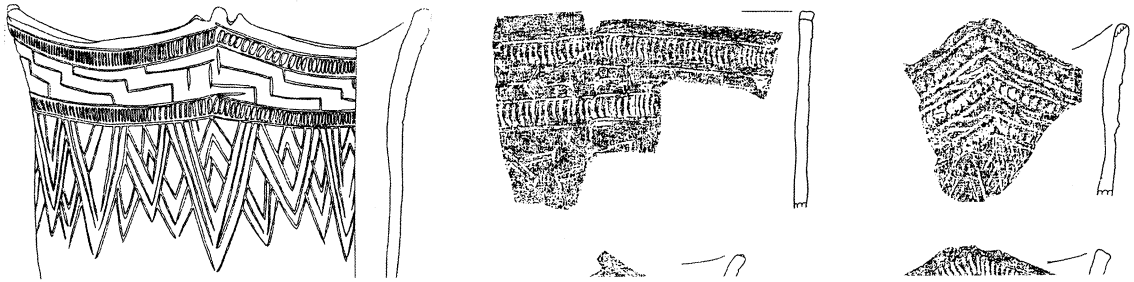
面縄東洞式　嘉徳Ⅰ式A（折れ線文のない土器）

（Ⅰ類）



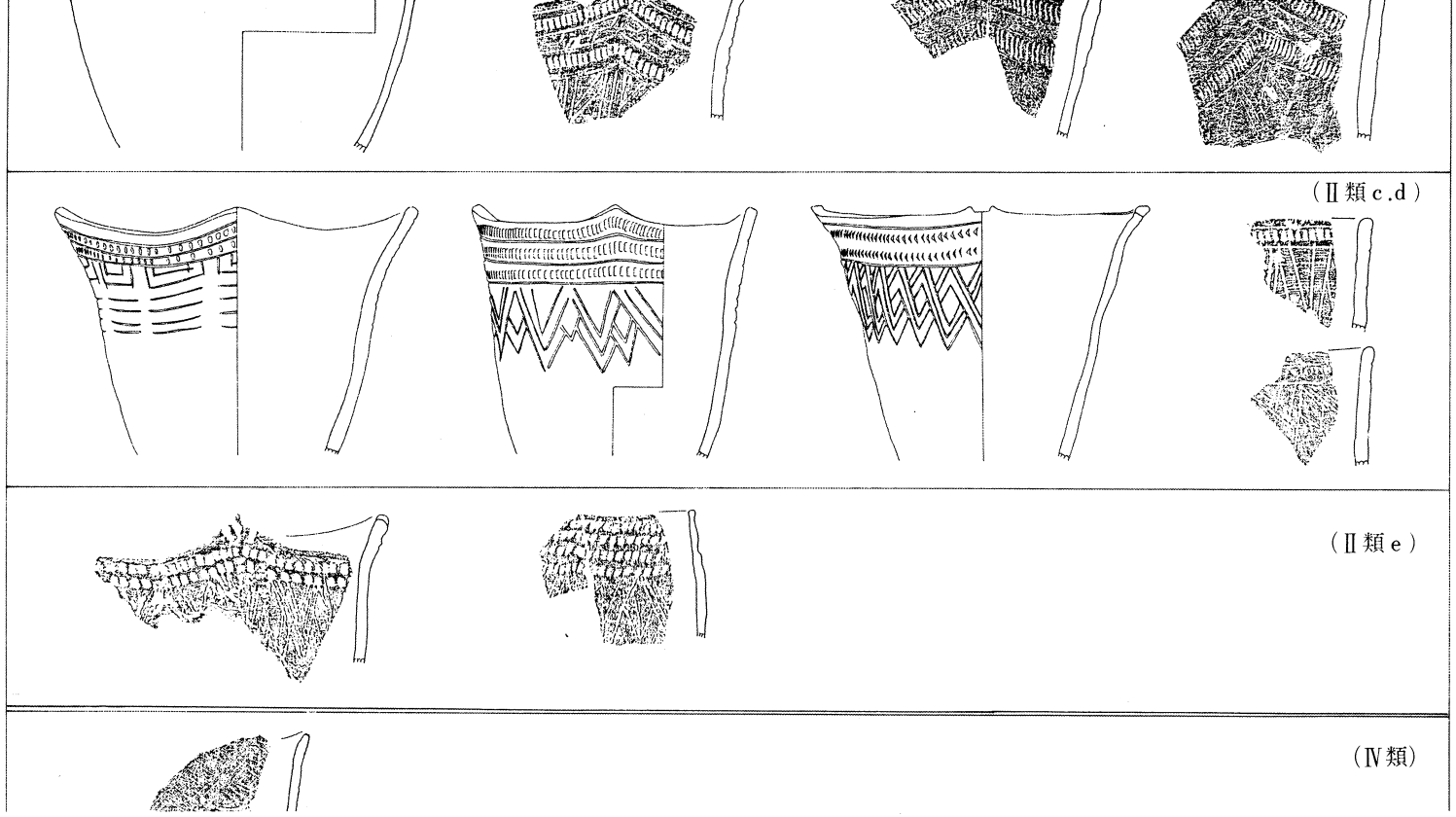
（Ⅱ類a）

Ⅱ期（長浜金久タイプ）

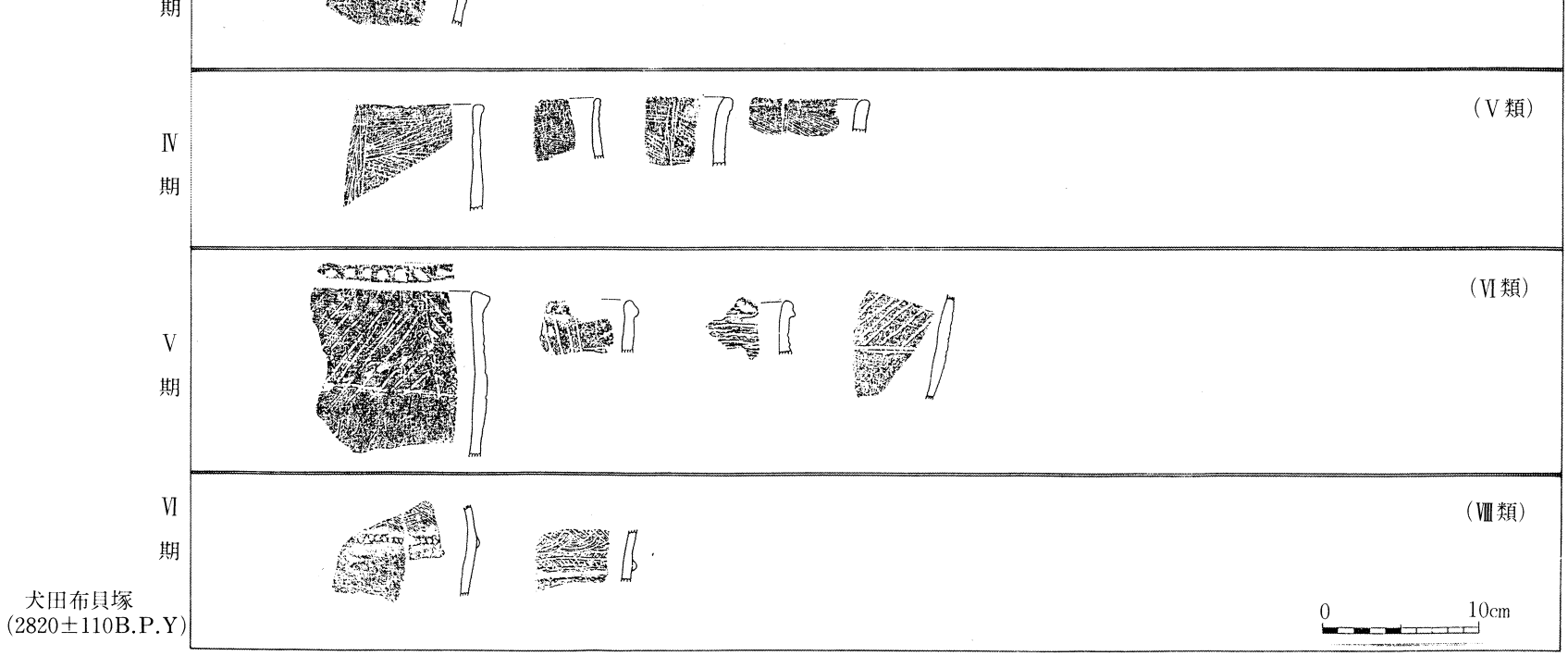


（Ⅱ類b）

(長浜金久第Ⅱ
3100±20B.P.Y)



Ⅲ



第101図　長浜金久第Ⅱ遺跡の分類図

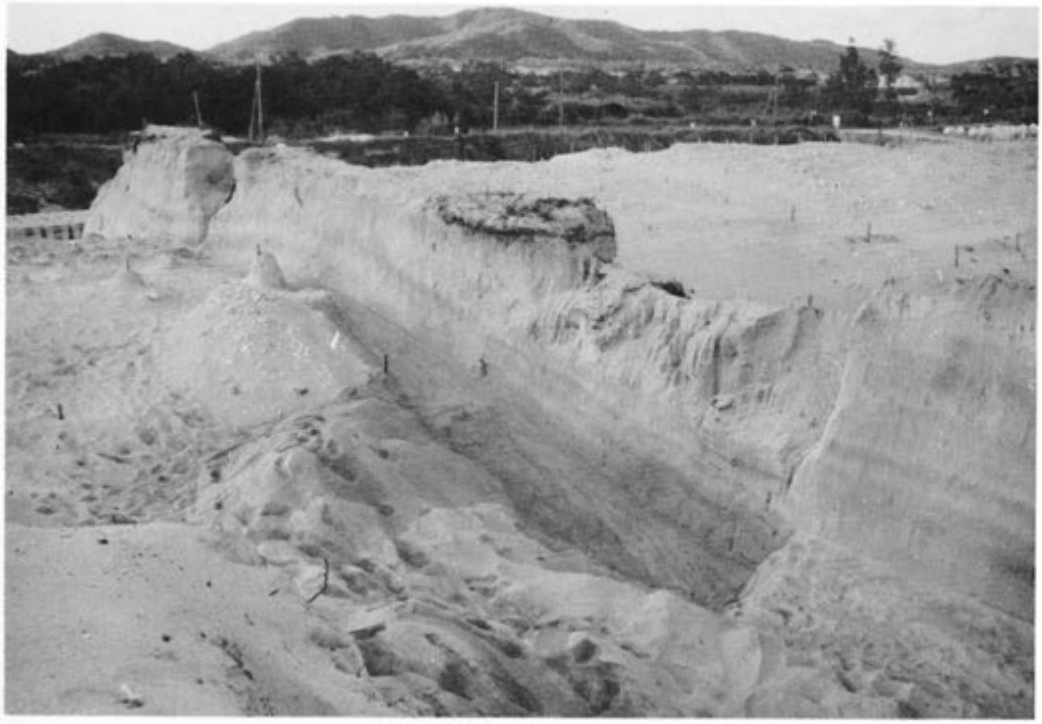
長浜金久遺跡全景

長浜金久第Ⅰ遺跡近景

図版 2

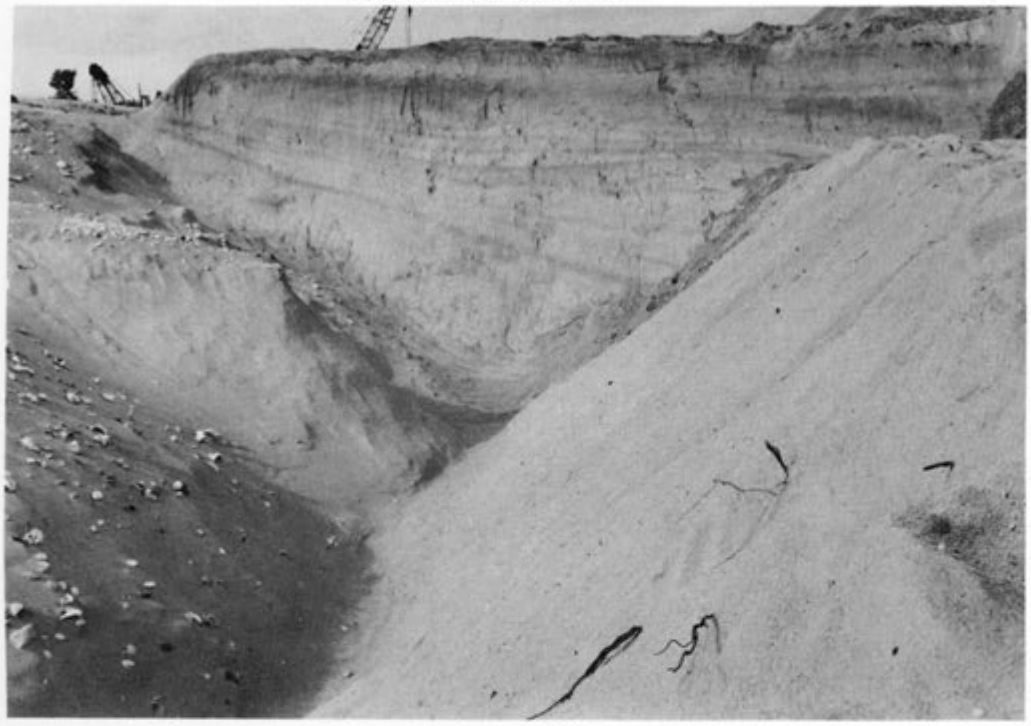
長浜金久第Ⅰ遺跡調査風景

長浜金久第Ⅰ遺跡調査風景



長浜金久第Ⅰ遺跡地層断面

長浜金久第Ⅰ遺跡地層断面



図版 4

長浜金久第Ⅰ遺跡第19層出土状況

長浜金久第Ⅰ遺跡第19層出土状況

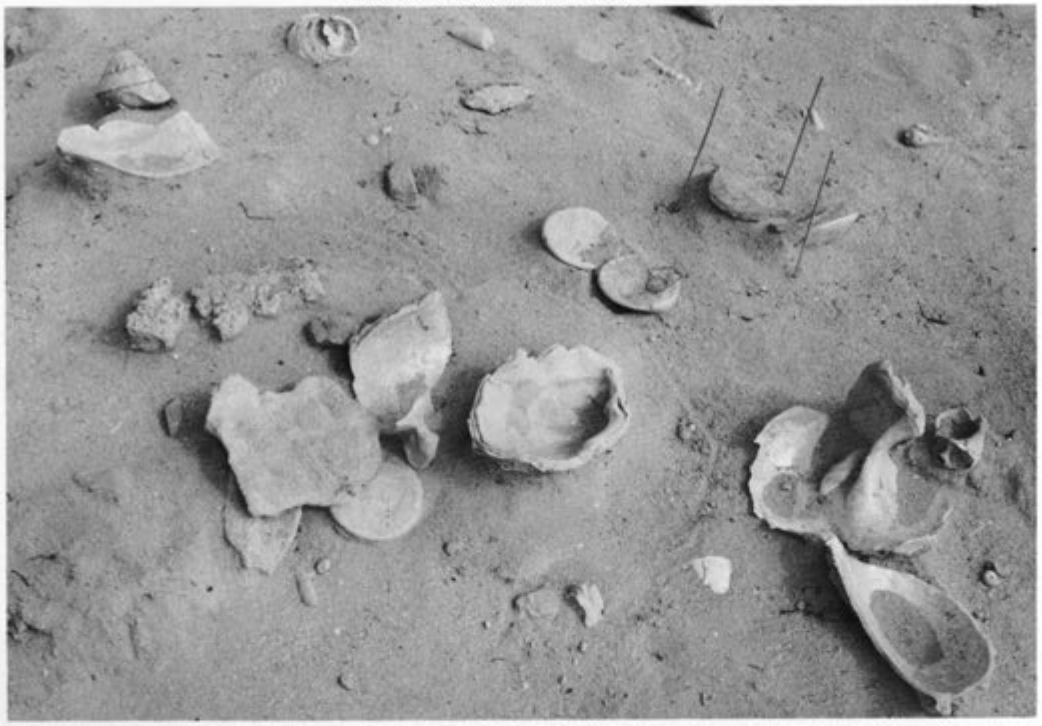
長浜金久第Ⅰ遺跡出土状況（頂上部）

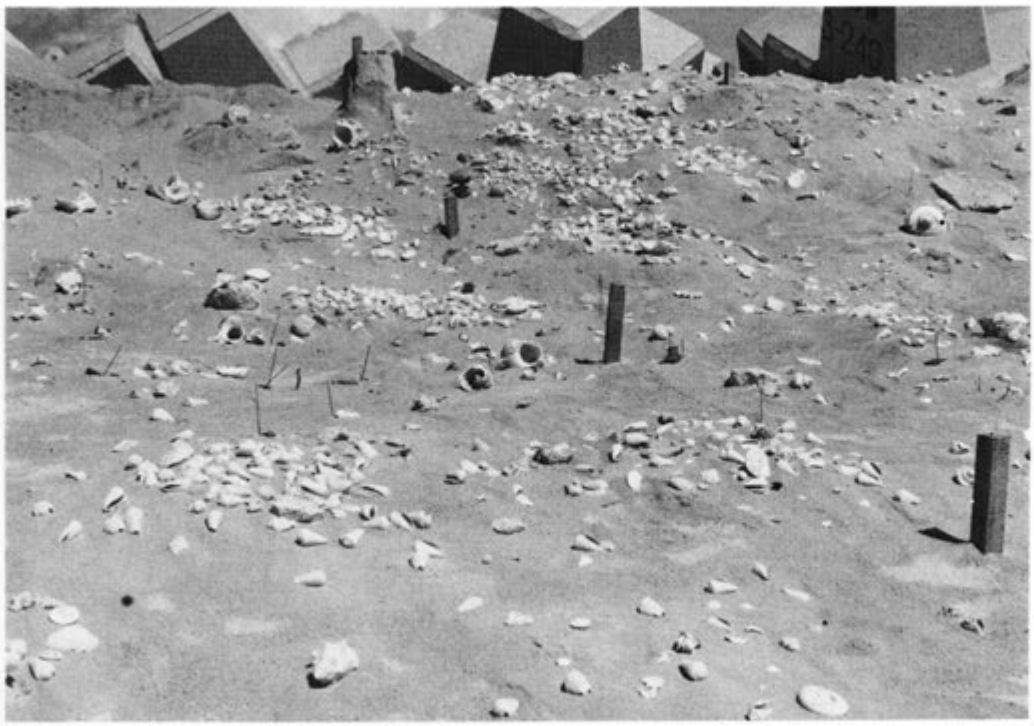
長浜金久第Ⅰ遺跡出土状況（頂上部）

図版 6

長浜金久第Ⅰ遺跡出土状況

長浜金久第Ⅰ遺跡出土状況





長浜金久第Ⅰ遺跡出土状況（第19層）

長浜金久第Ⅰ遺跡出土状況（第13層）

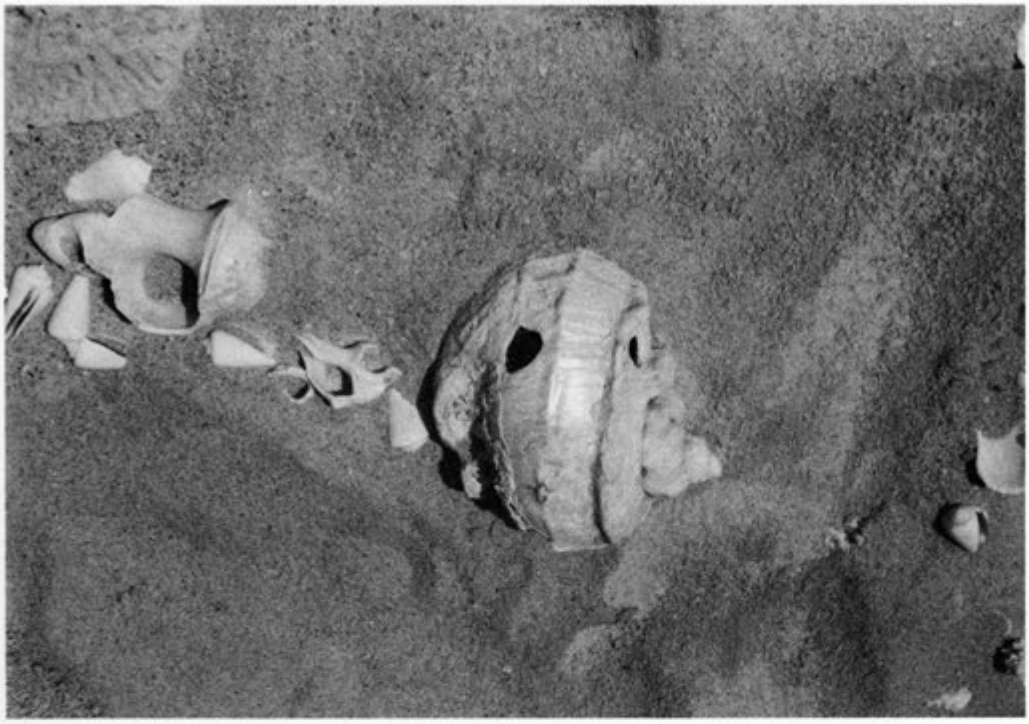
図版 8

長浜金久第Ⅰ遺跡出土状況（第13層，第19層）

長浜金久第Ⅰ遺跡出土状況（第19層）

長浜金久第Ⅰ遺跡有孔貝出土状況

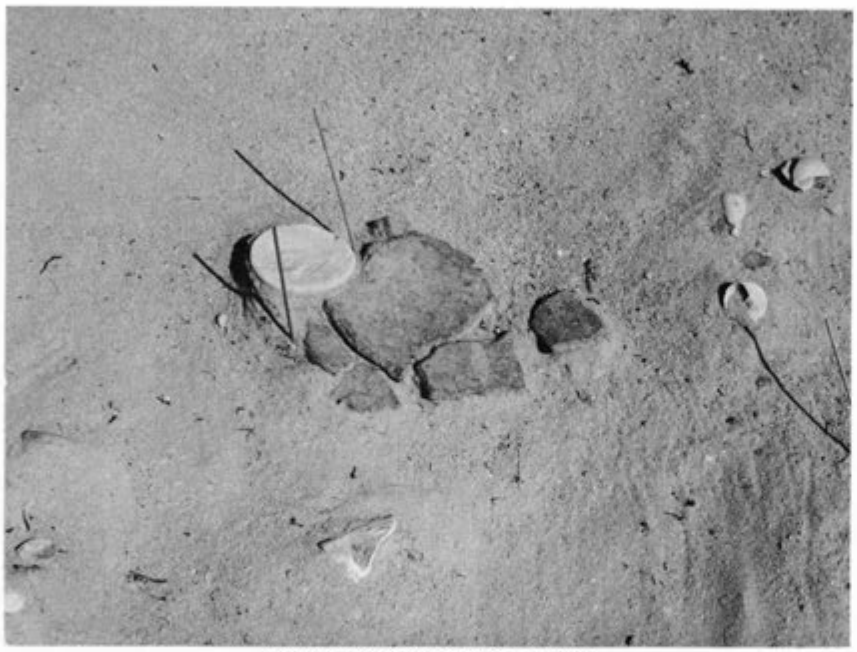
長浜金久第Ⅰ遺跡穿孔貝出土状況



図版10

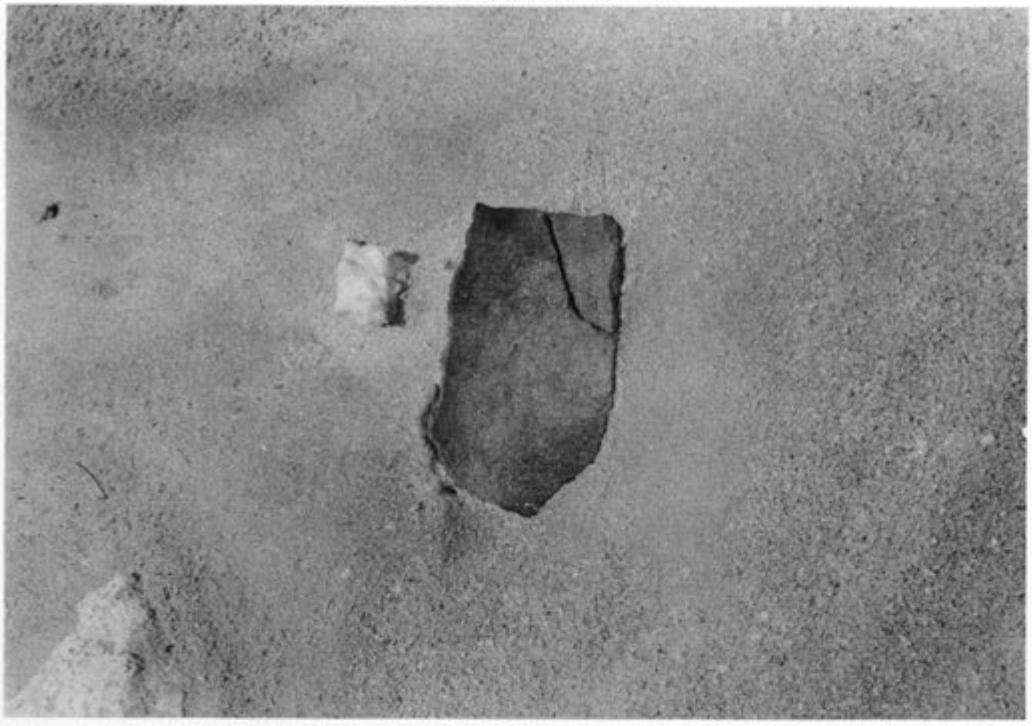
長浜金久第Ⅰ遺跡螺蓋利器出土状況

長浜金久第Ⅰ遺跡焼跡

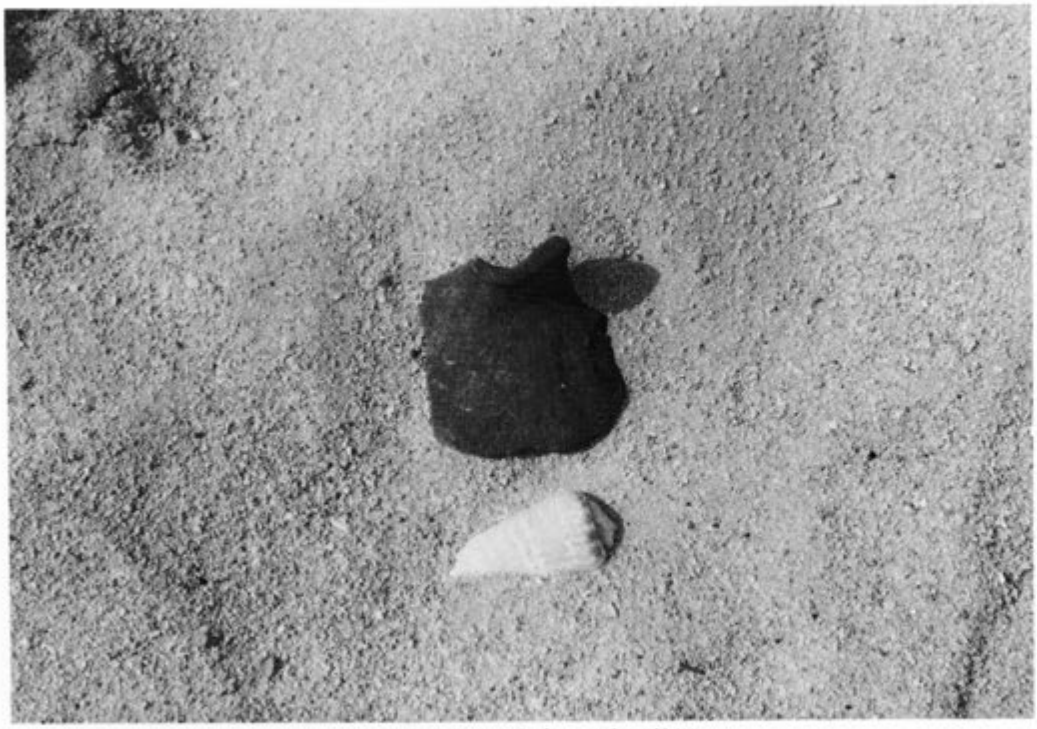


長浜金久第Ⅰ遺跡土器出土状況

長浜金久第Ⅰ遺跡土器出土状況

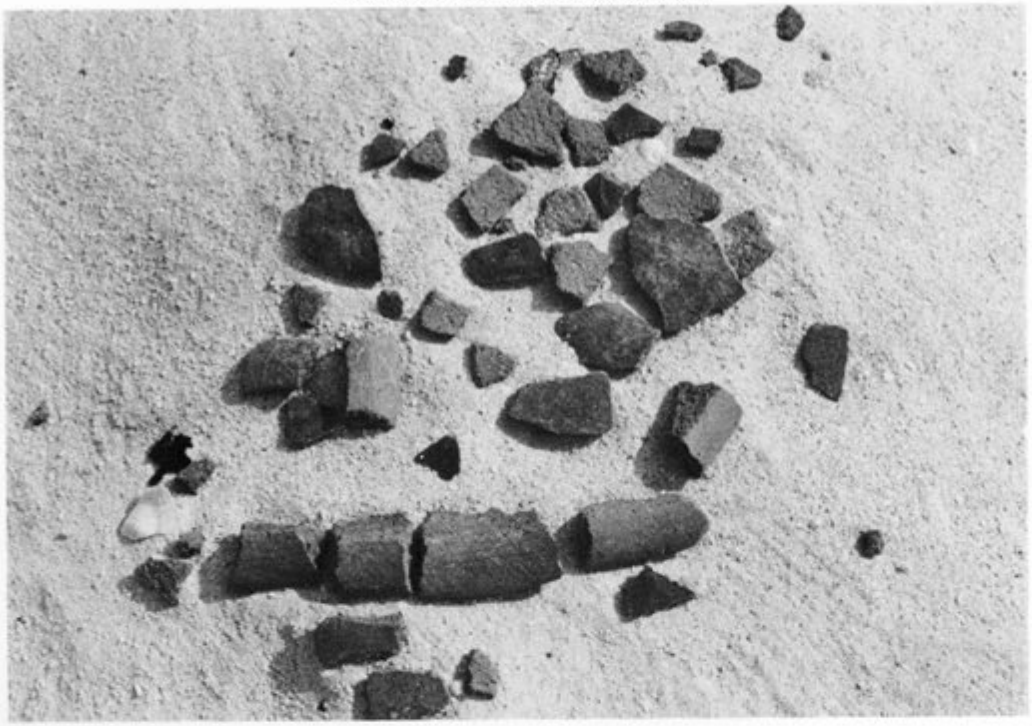


図版12



長浜金久第Ⅰ遺跡土器出土状況

長浜金久第Ⅰ遺跡土師器出土状況



長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況（第13層，第19層）

長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況（第13層，第19層）

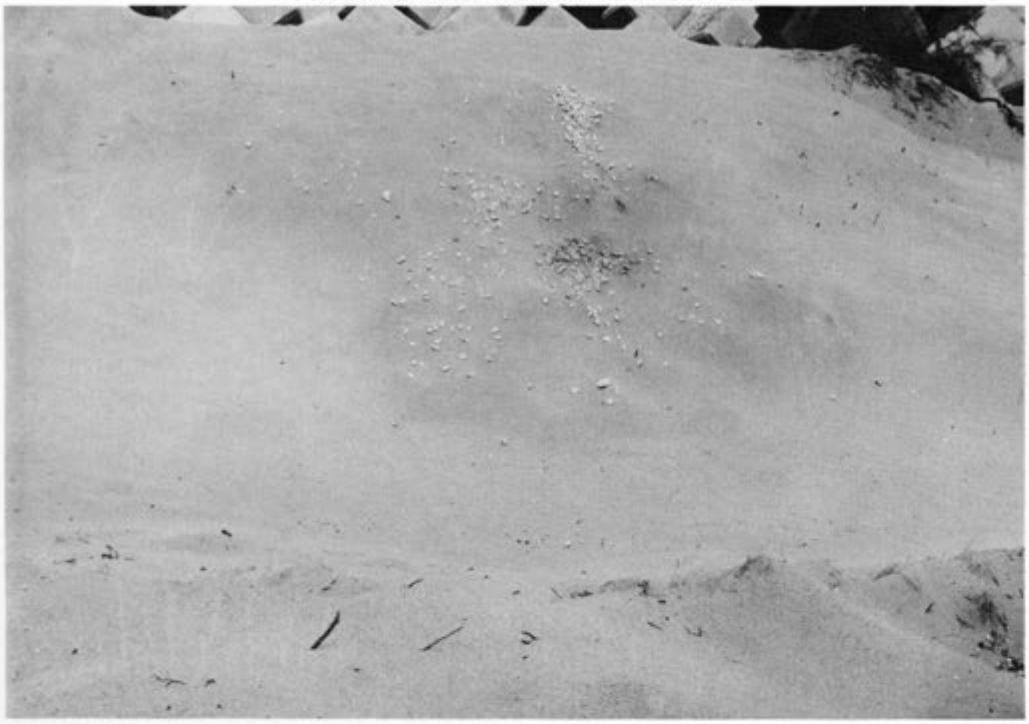
図版14

長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況（第13層）

長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況（第13層）

長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況（第13層）

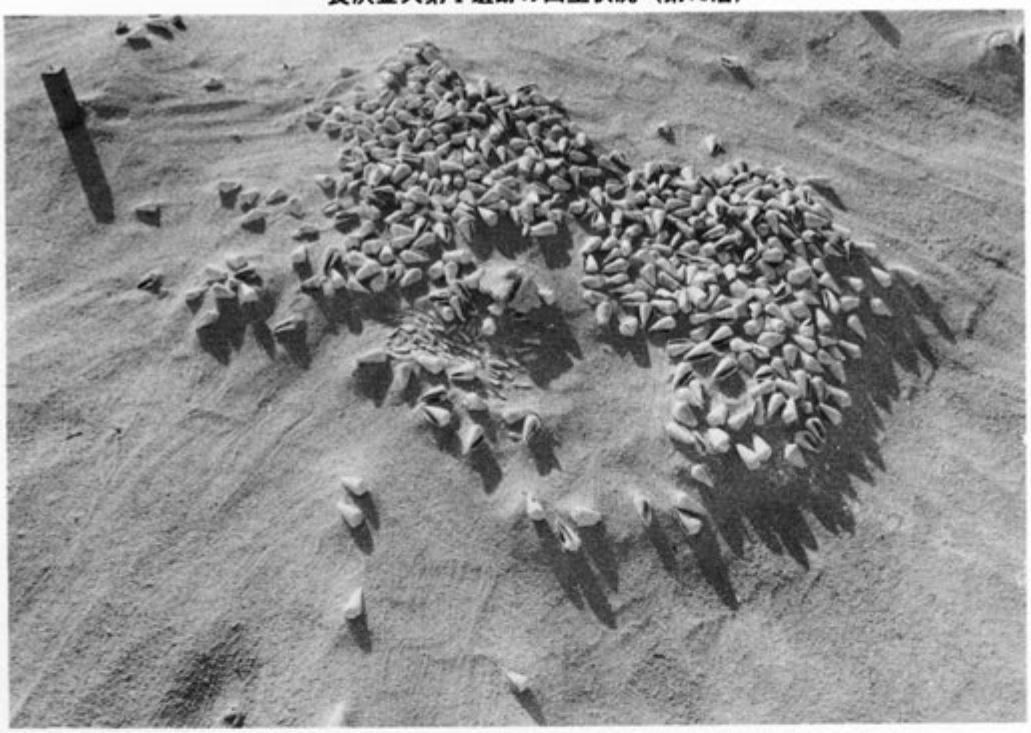
長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況（第13層）

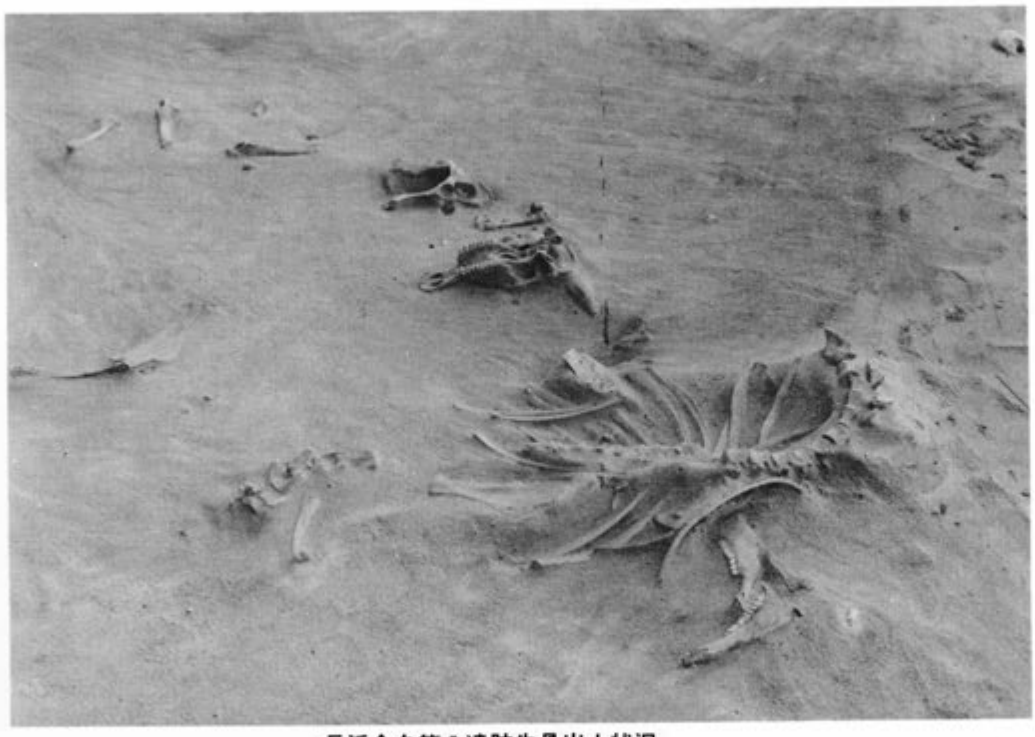


図版16

長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況（第13層）

長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況（第13層）





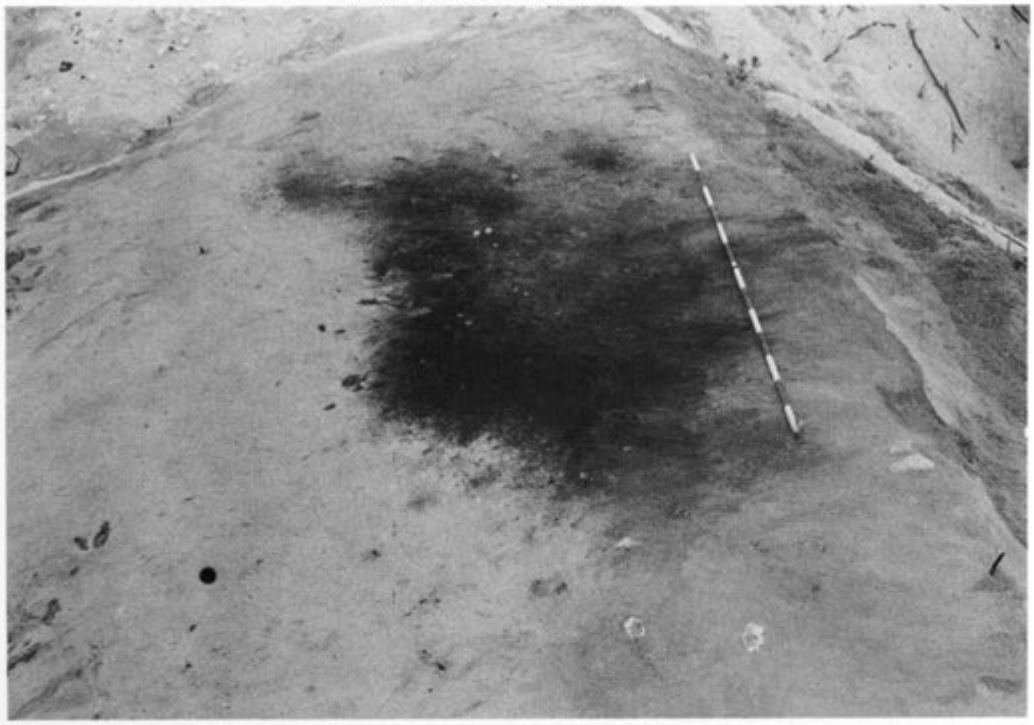
長浜金久第Ⅰ遺跡牛骨出土状況

長浜金久第Ⅰ遺跡牛骨出土状況

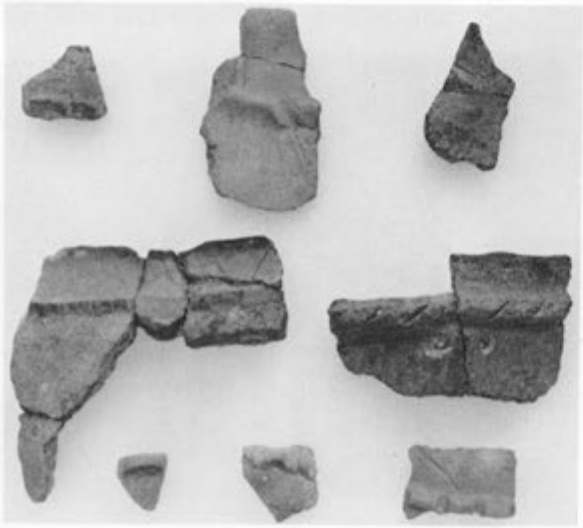
図版18

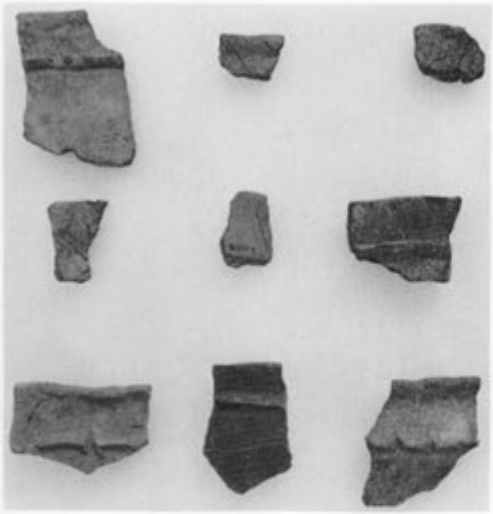
長浜金久第Ⅰ遺跡の黒色土

長浜金久第Ⅰ遺跡の黒色土



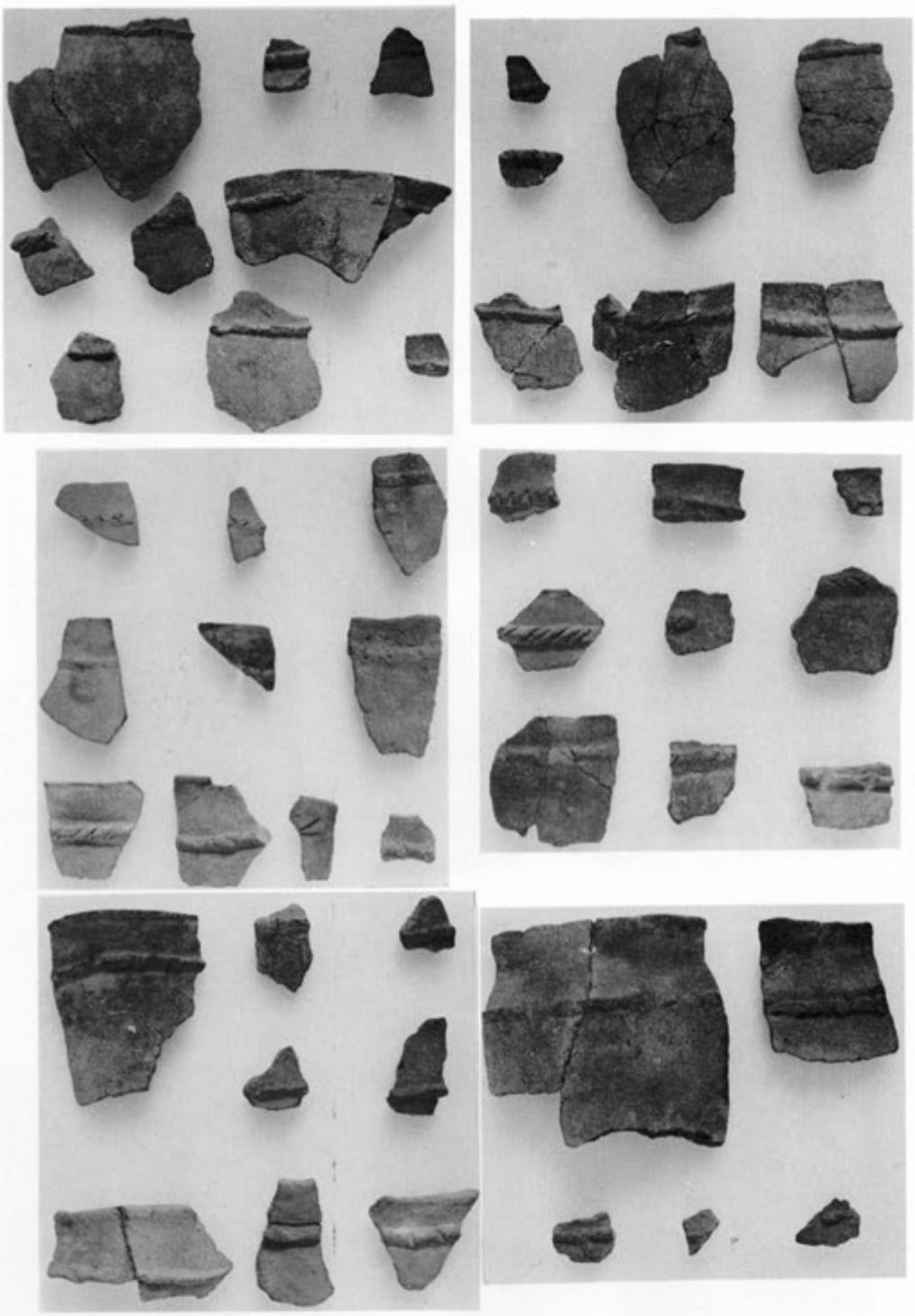
長浜金久第Ⅰ・Ⅱ類甕形土器



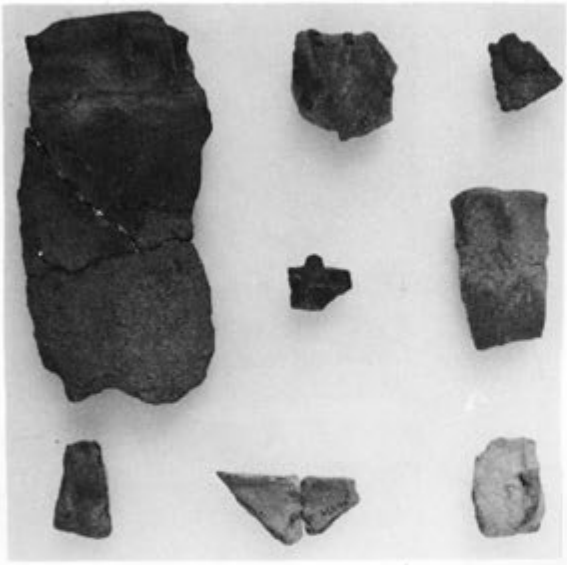


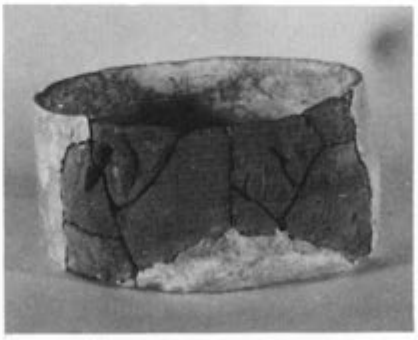
図版20

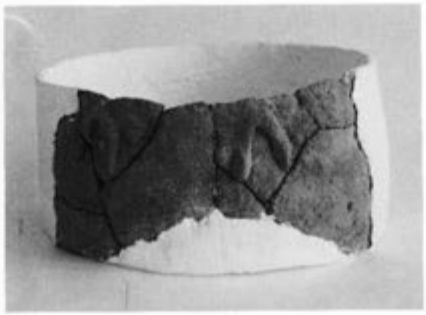
長浜金久第Ⅰ遺跡の第Ⅱ・Ⅲ類甕形土器

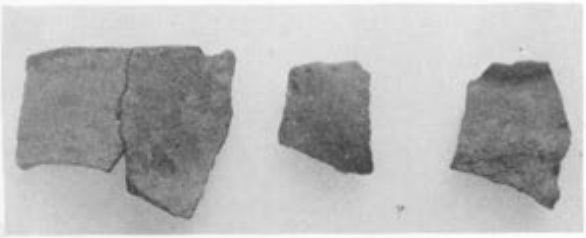


長浜金久第Ⅰ遺跡の第Ⅳ・Ⅴ類礫形土器



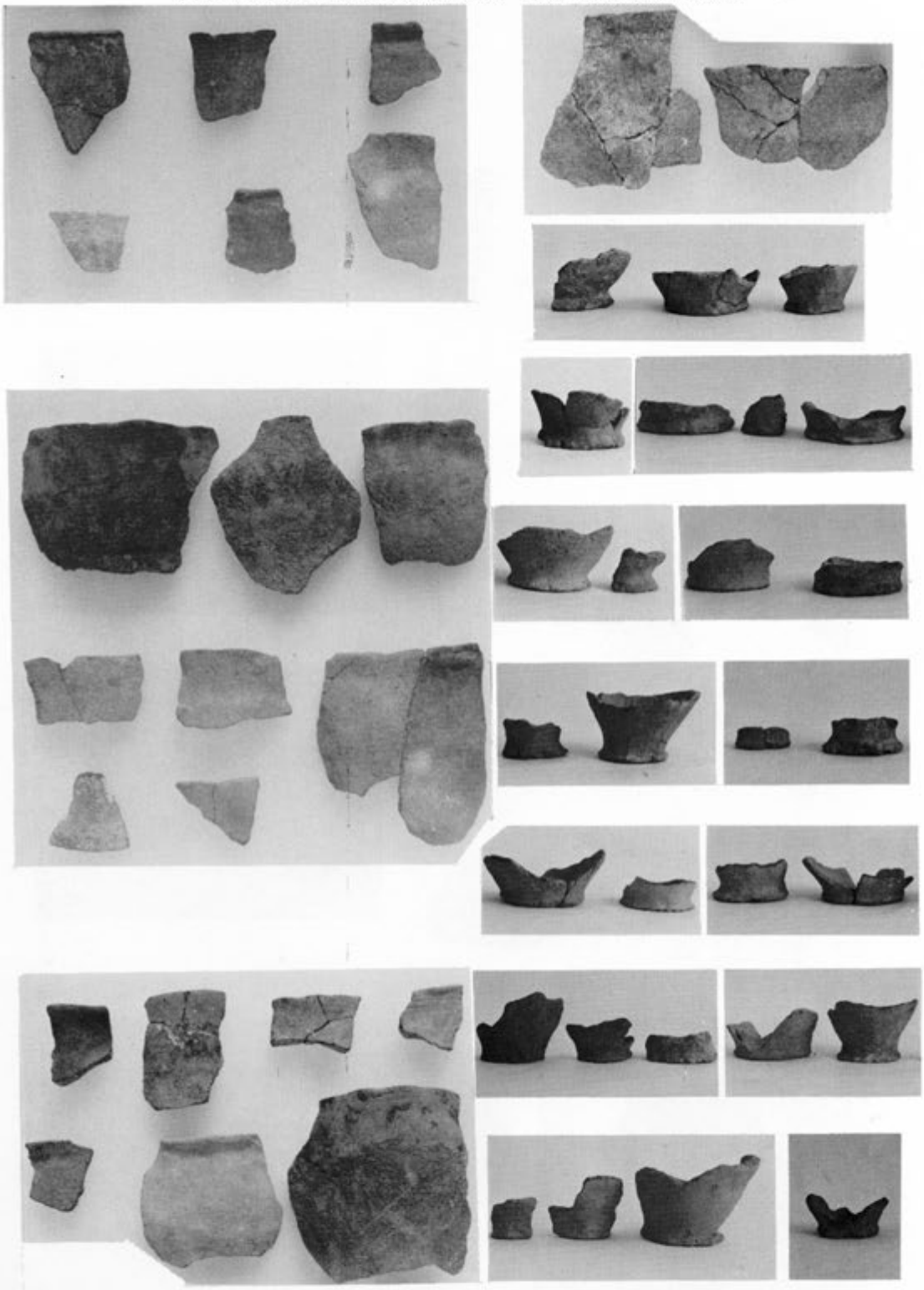




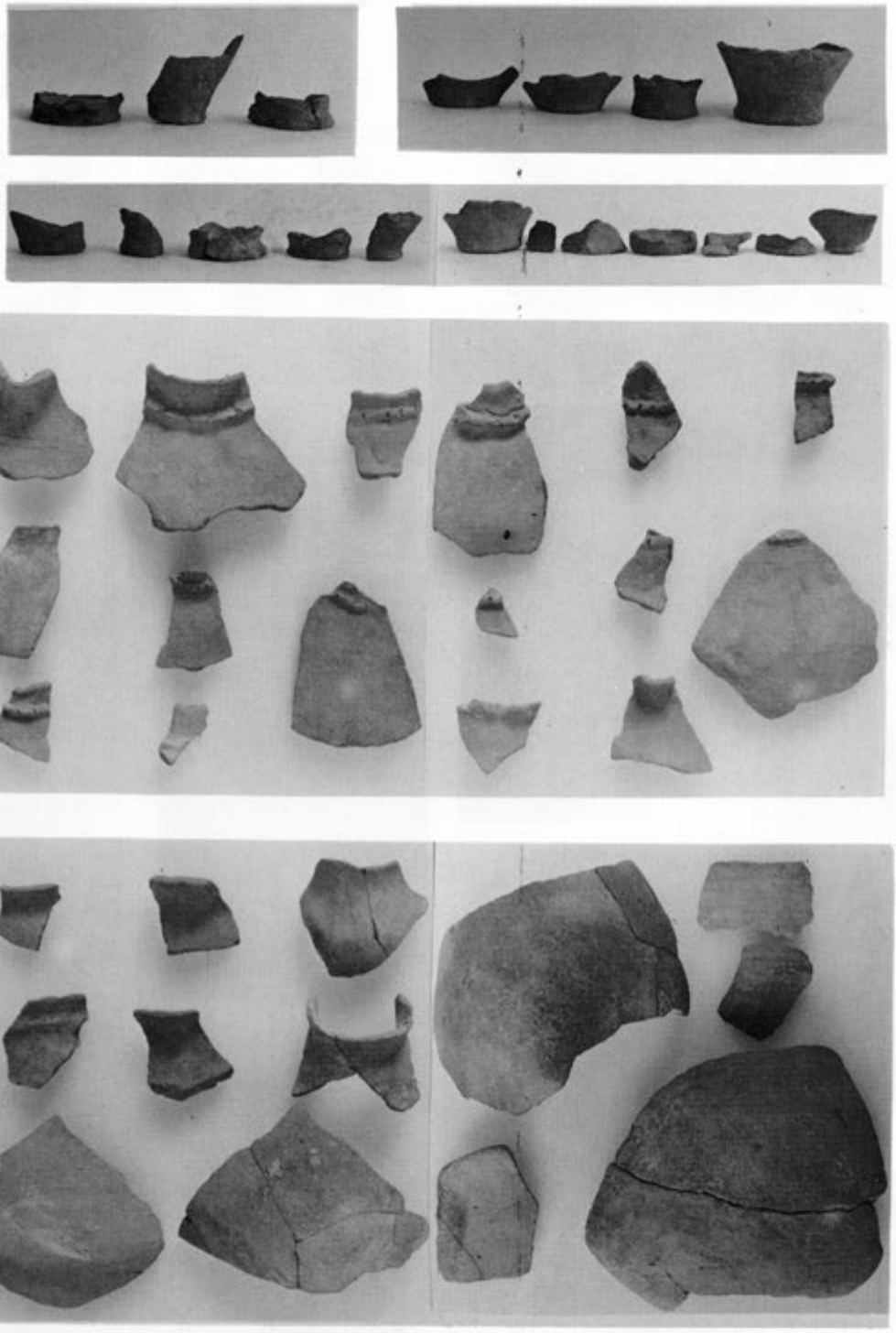


図版22

長浜金久第Ⅰ遺跡の第Ⅴ類甕形土器，鉢形土器，甕形土器底部

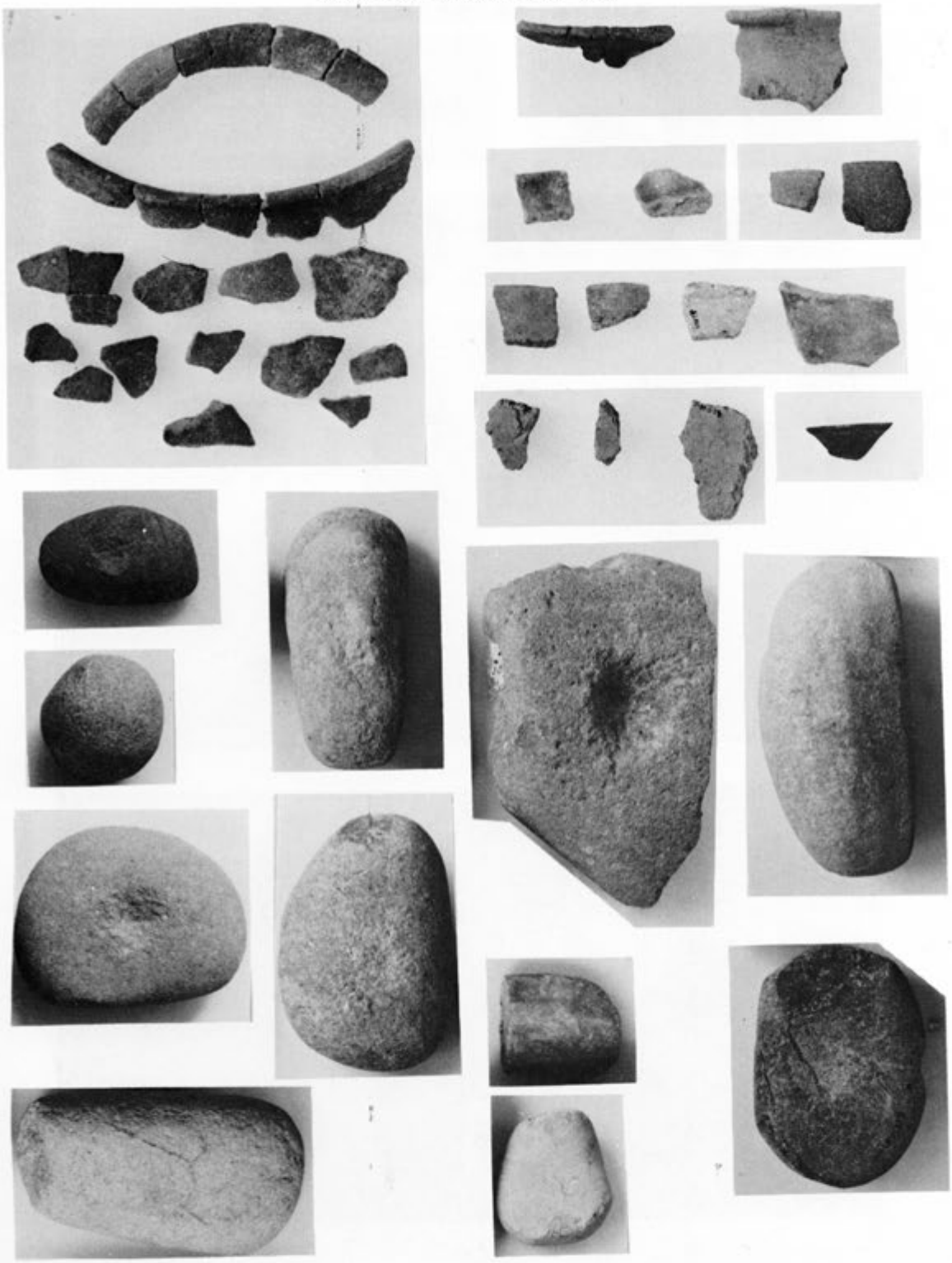


長浜金久第Ⅰ遺跡の甕形土器底部と壺形土器

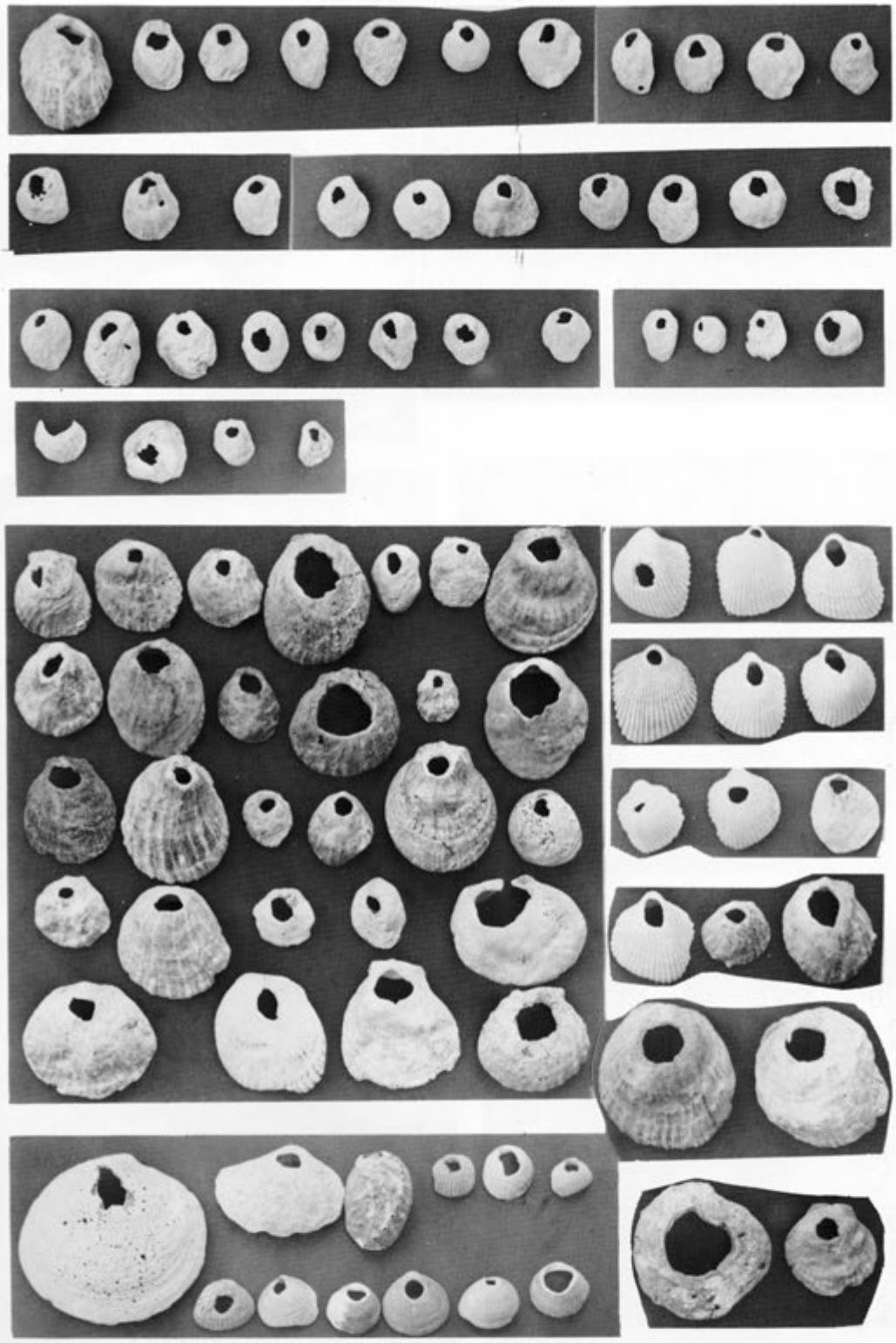


図版24

長浜金久第Ⅰ遺跡の土師器，石器

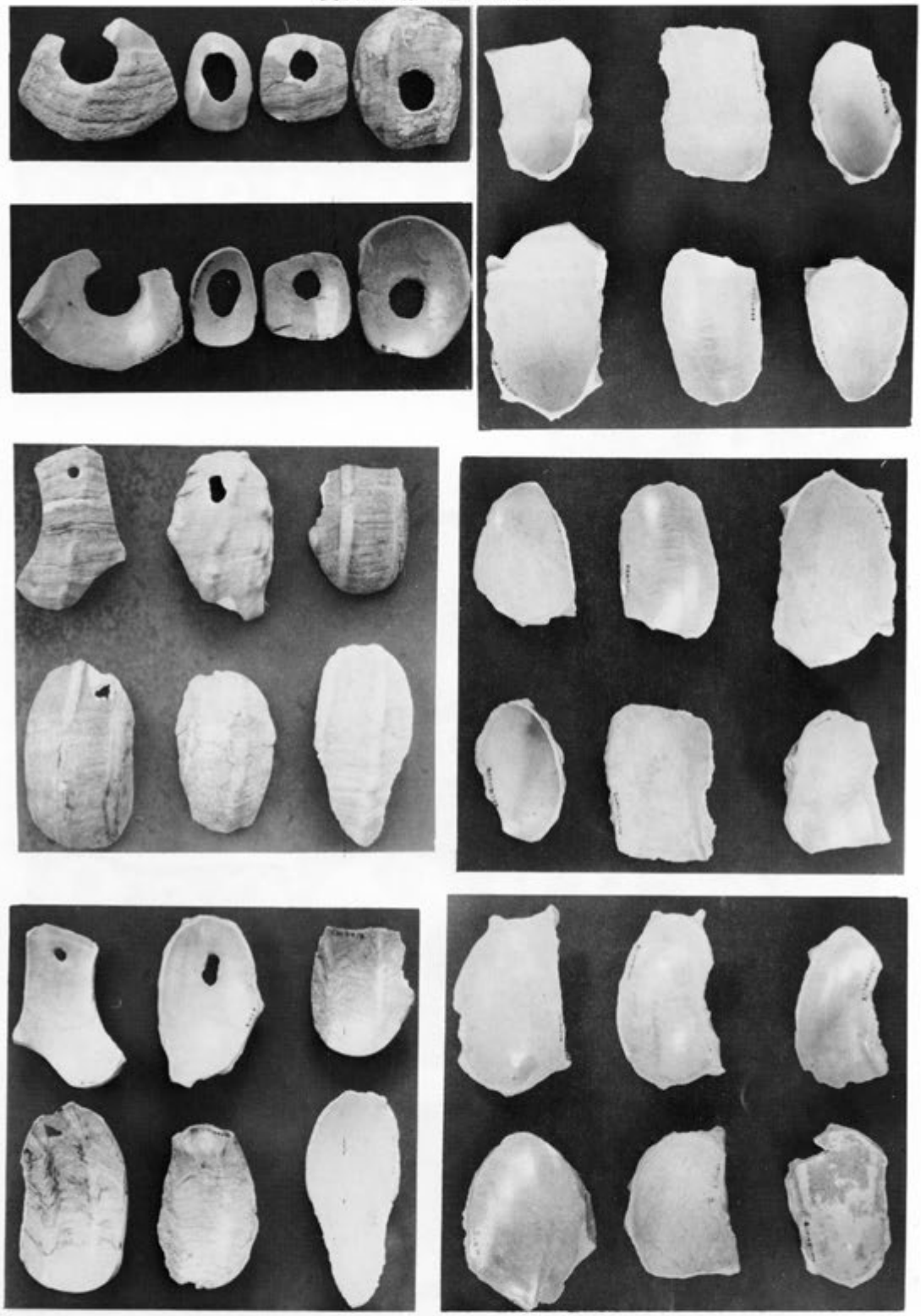


長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品

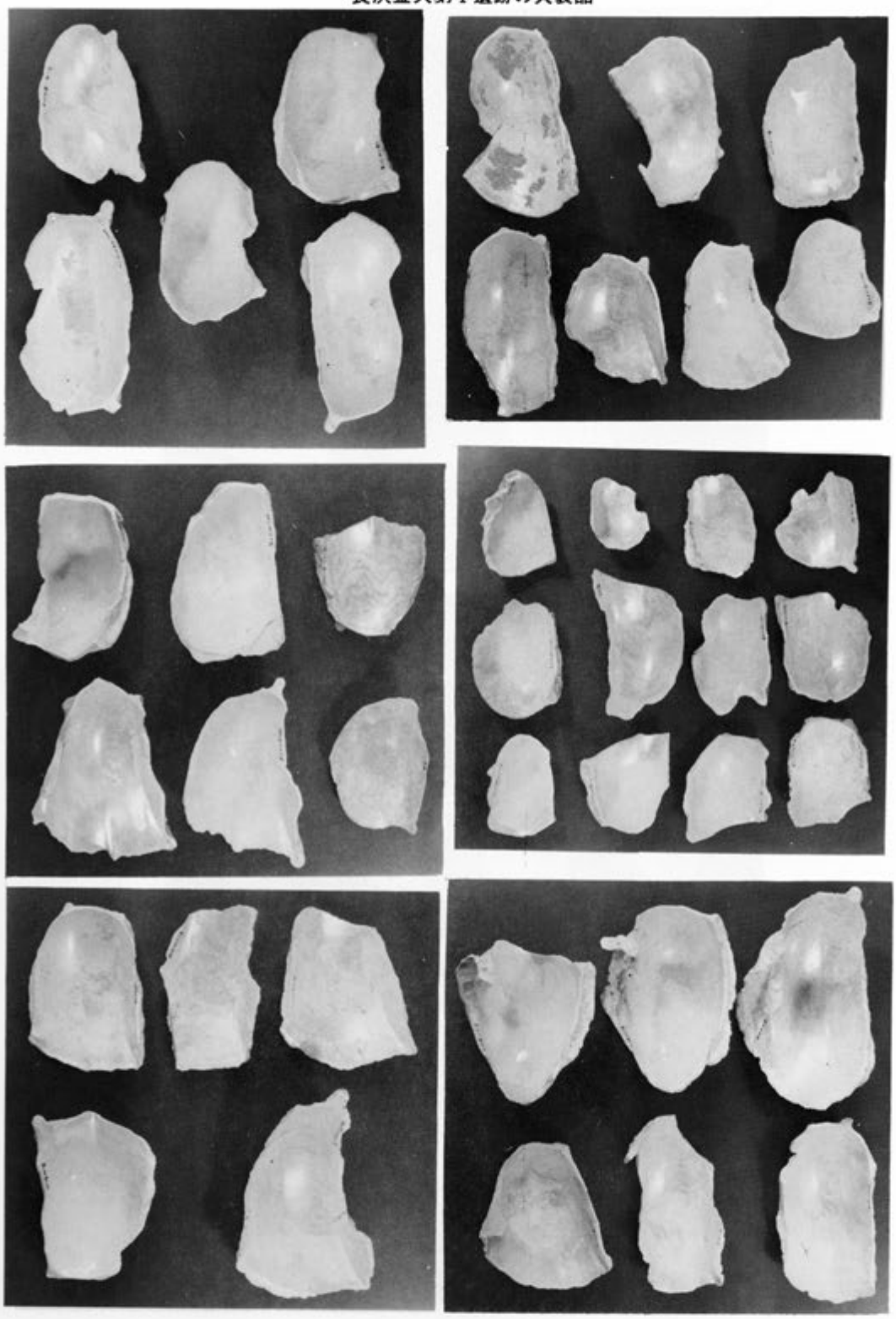


図版26

長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品

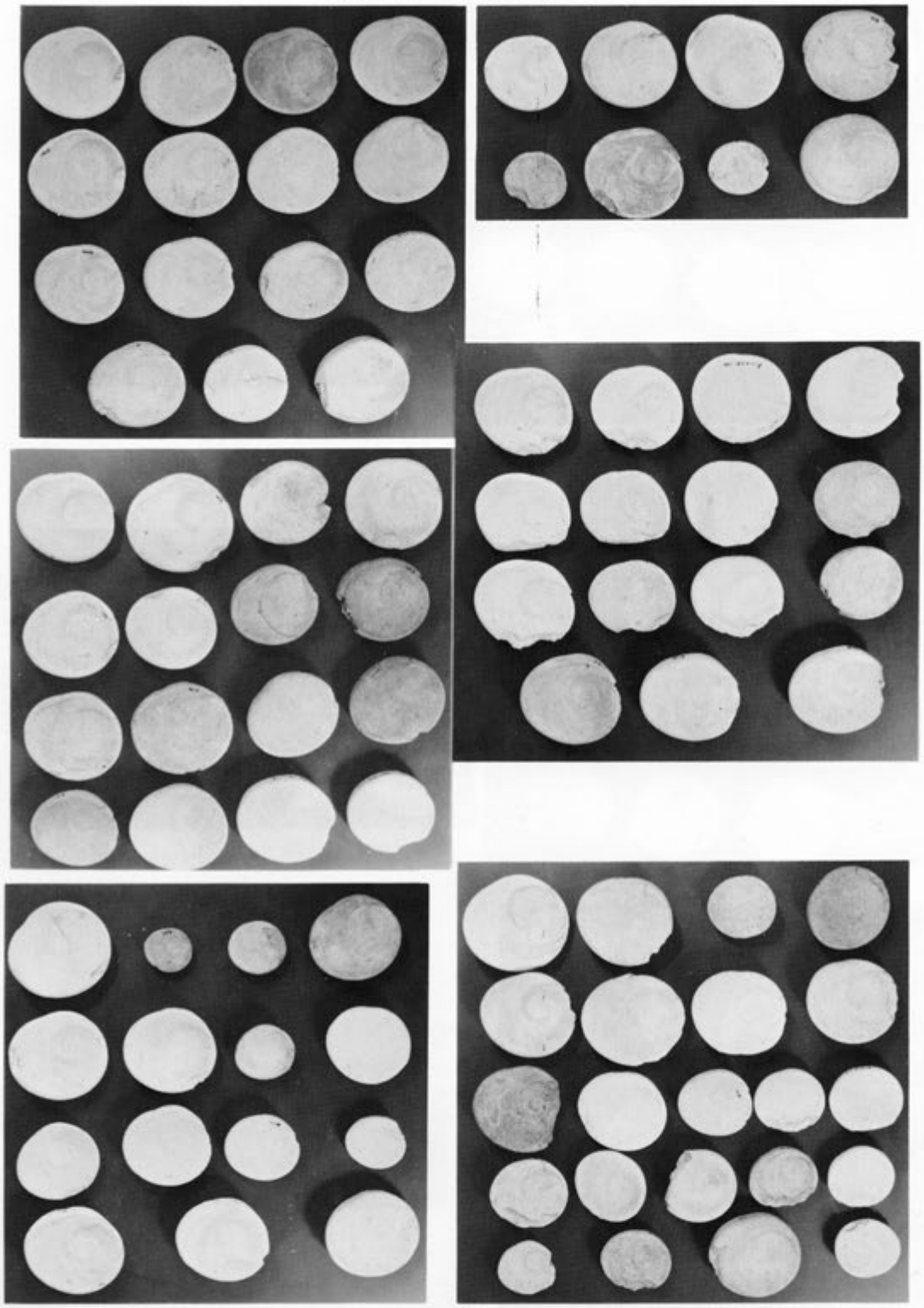


長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品



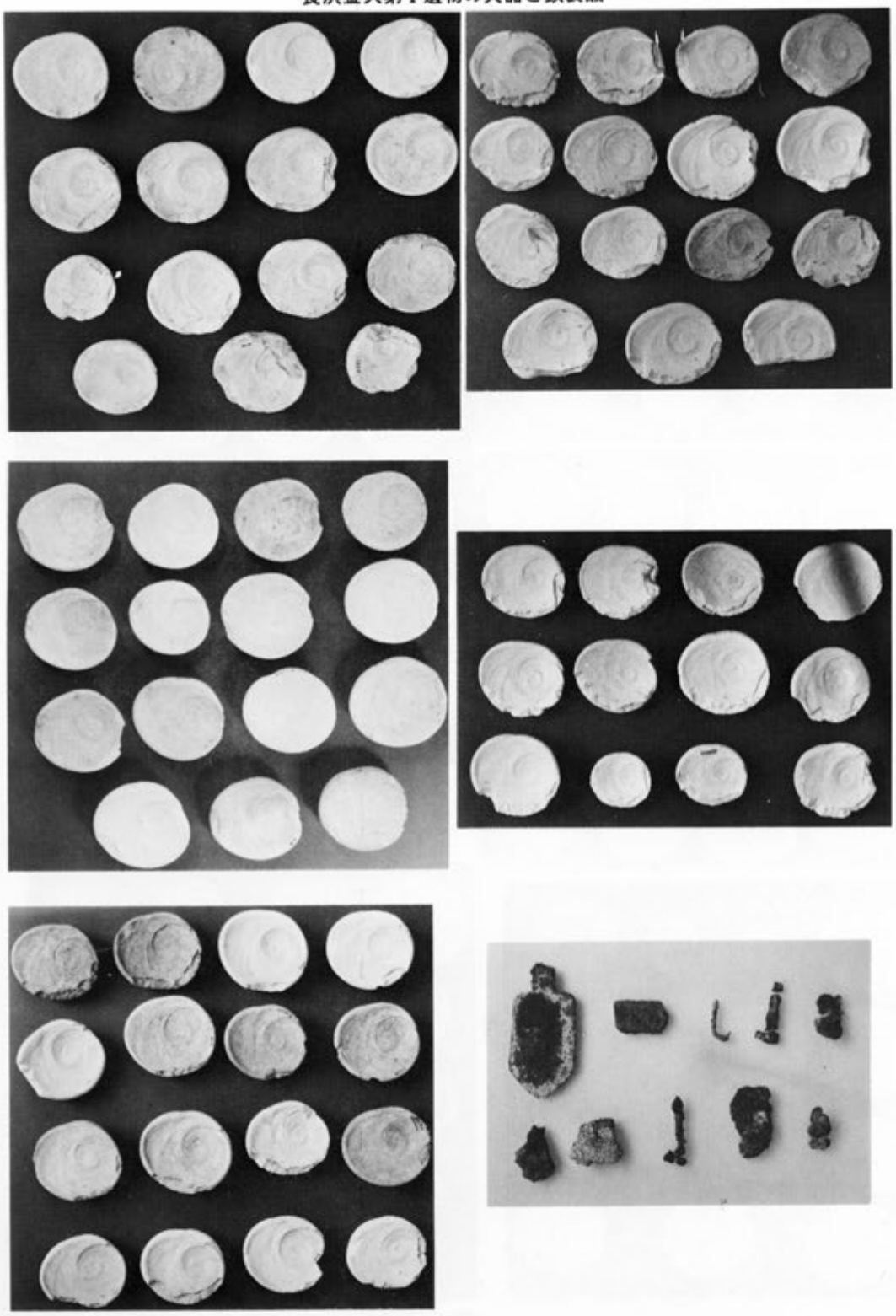
長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品

長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器



図版30

長浜金久第Ⅰ遺物の貝器と鉄製品



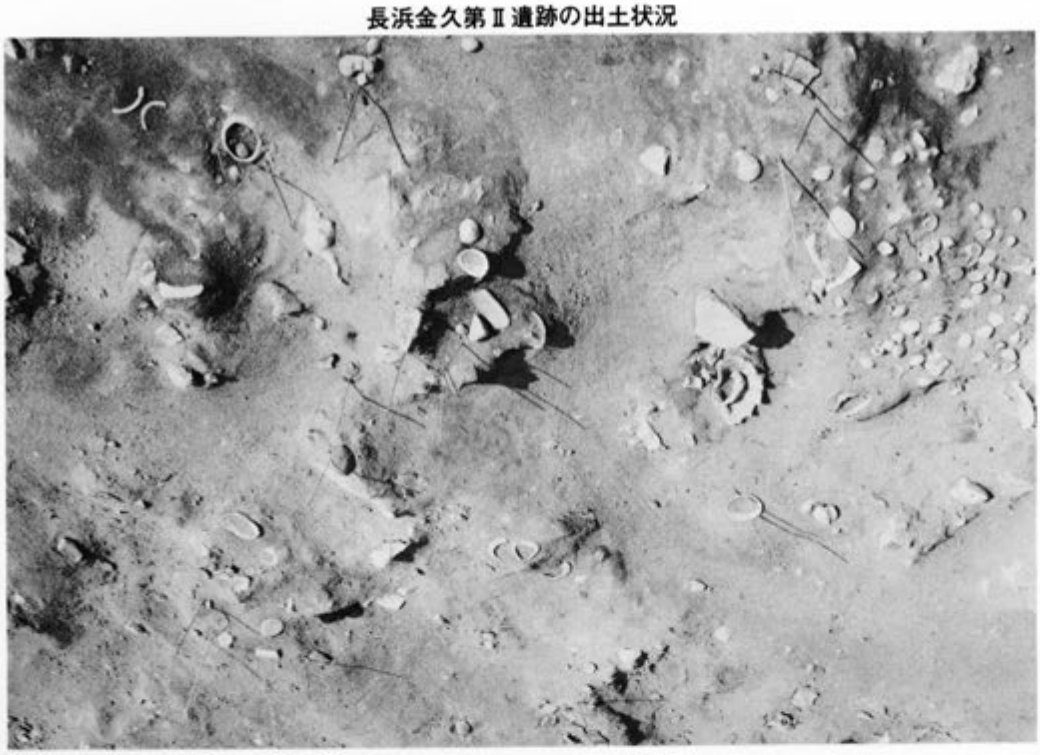
長浜金久第Ⅱ遺跡の近景

長浜金久第Ⅱ遺跡の出土状況

図版32

長浜金久第Ⅱ遺跡の出土状況

長浜金久第Ⅱ遺跡の出土状況



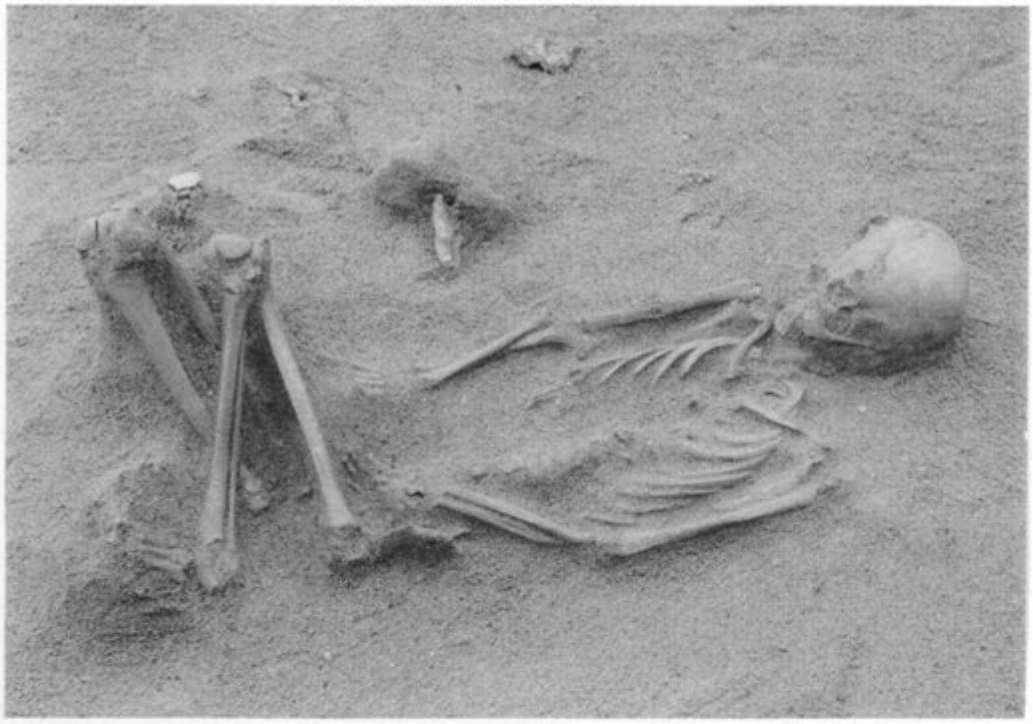
長浜金久第Ⅱ遺跡の住居址

長浜金久第Ⅱ遺跡の集石

図版34

長浜金久第Ⅱ遺跡の出土状況

長浜金久第Ⅱ遺跡の埋葬人骨

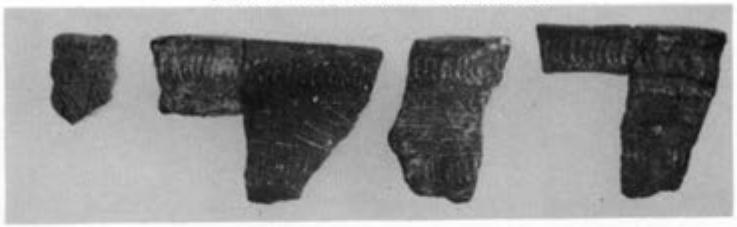


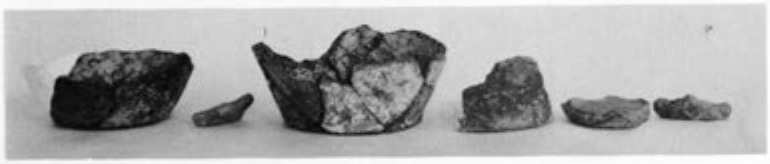
長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品出土状況

長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物(1)

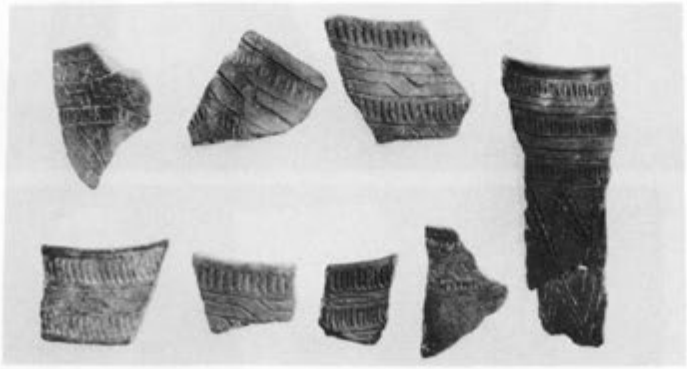
図版36

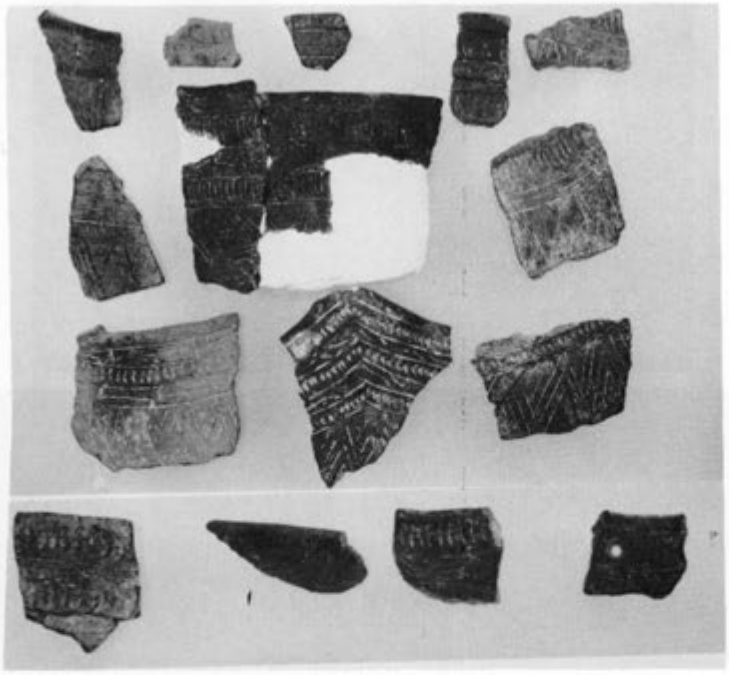
長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物(2)





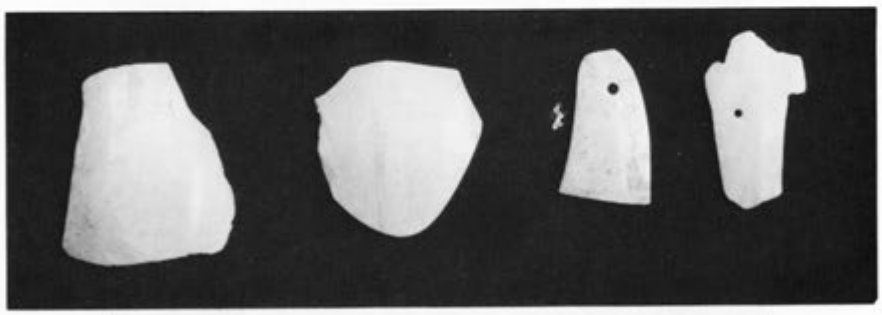
長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物(3)



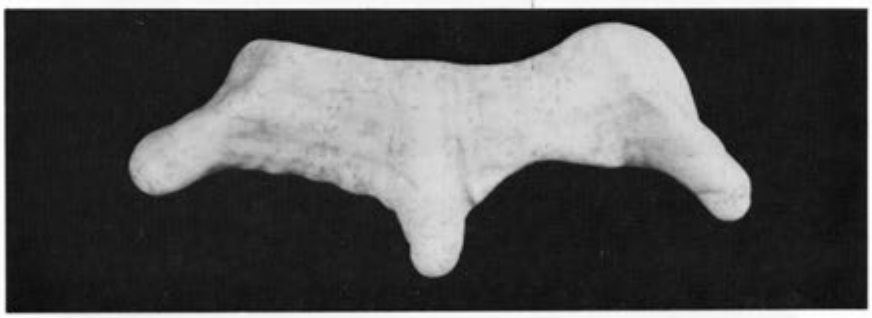


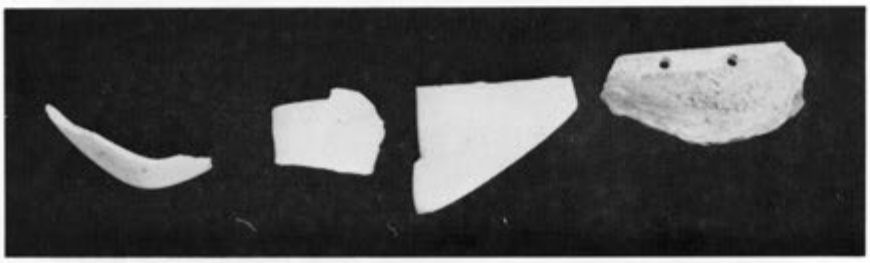
図版38

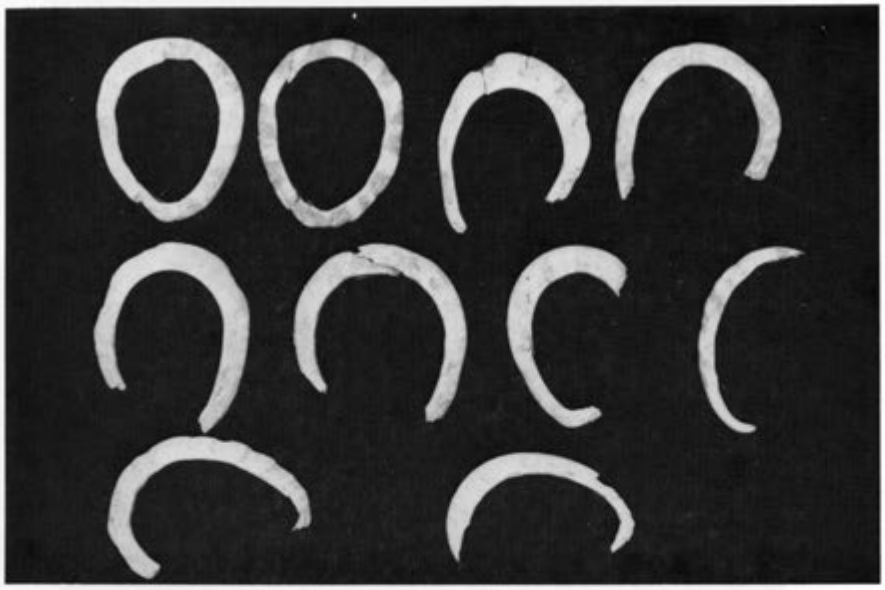
長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物(4)



長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物(5)

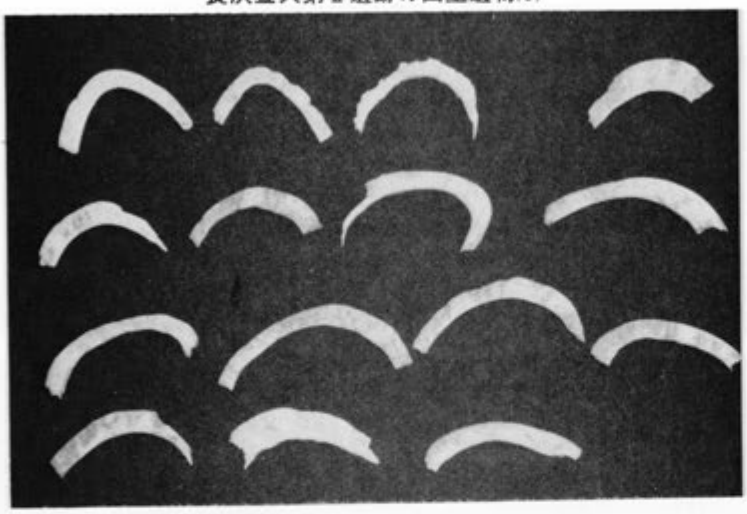


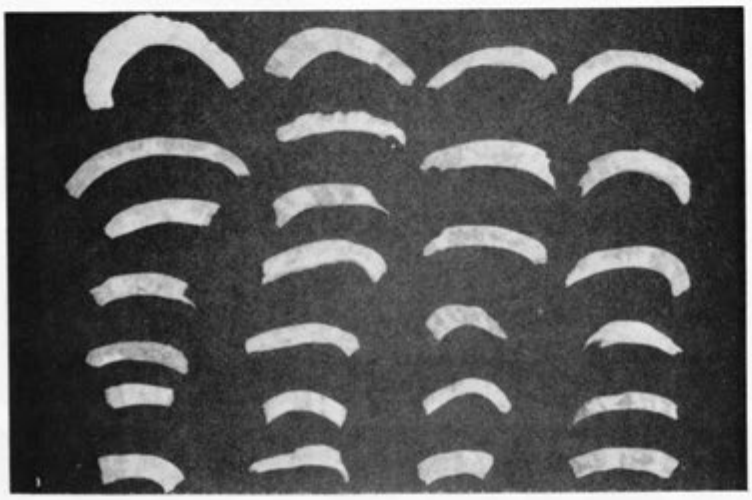


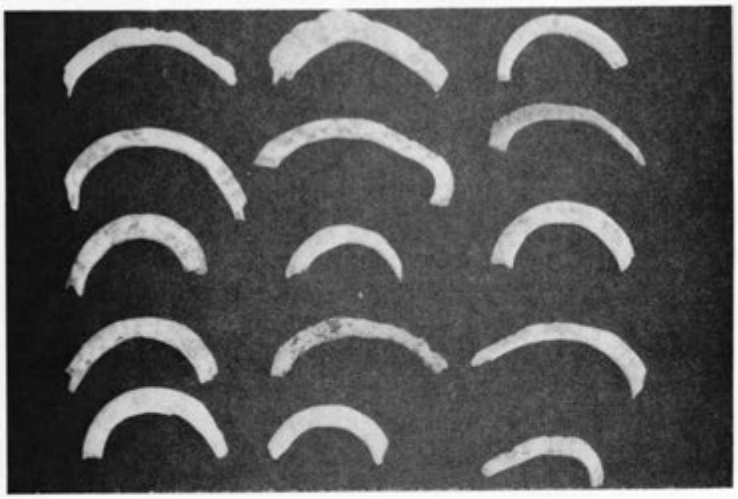


図版40

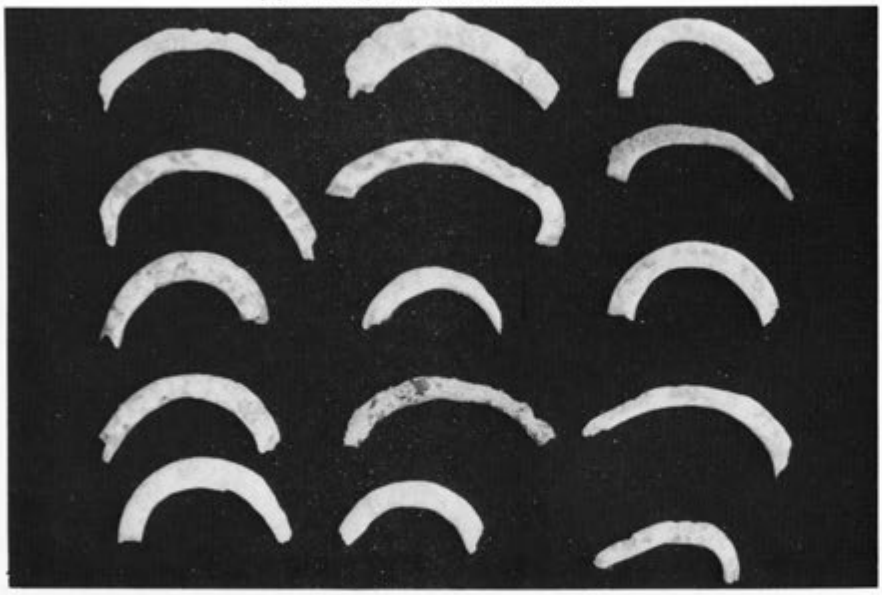
長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物(6)

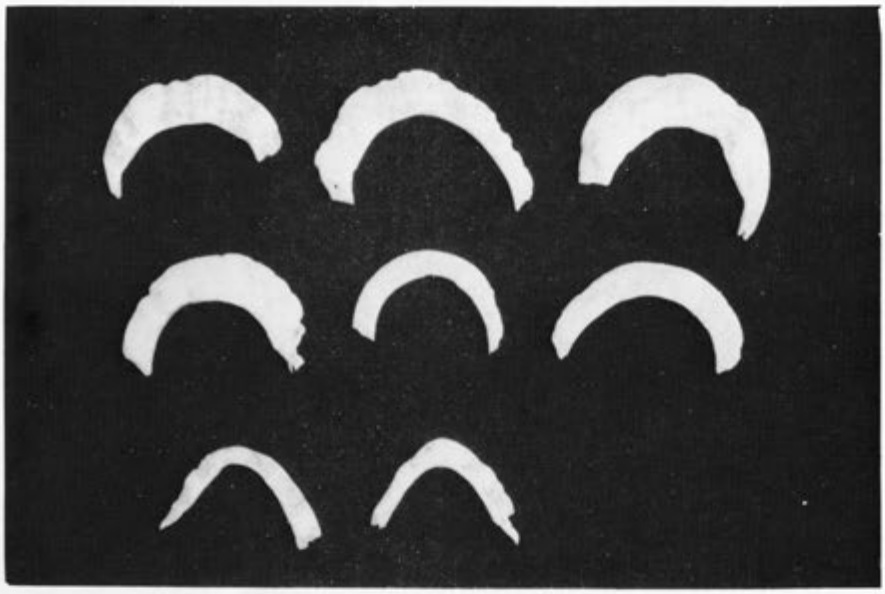


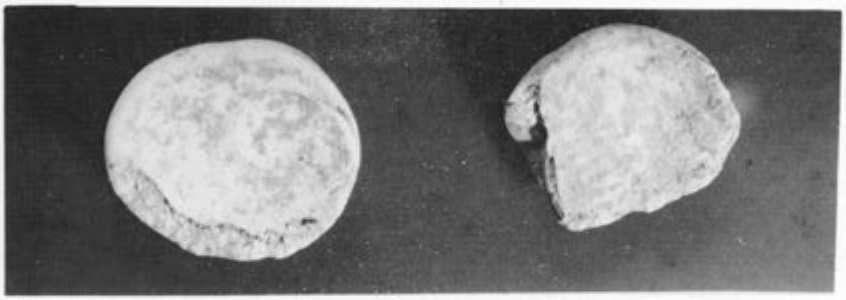




長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物(7)



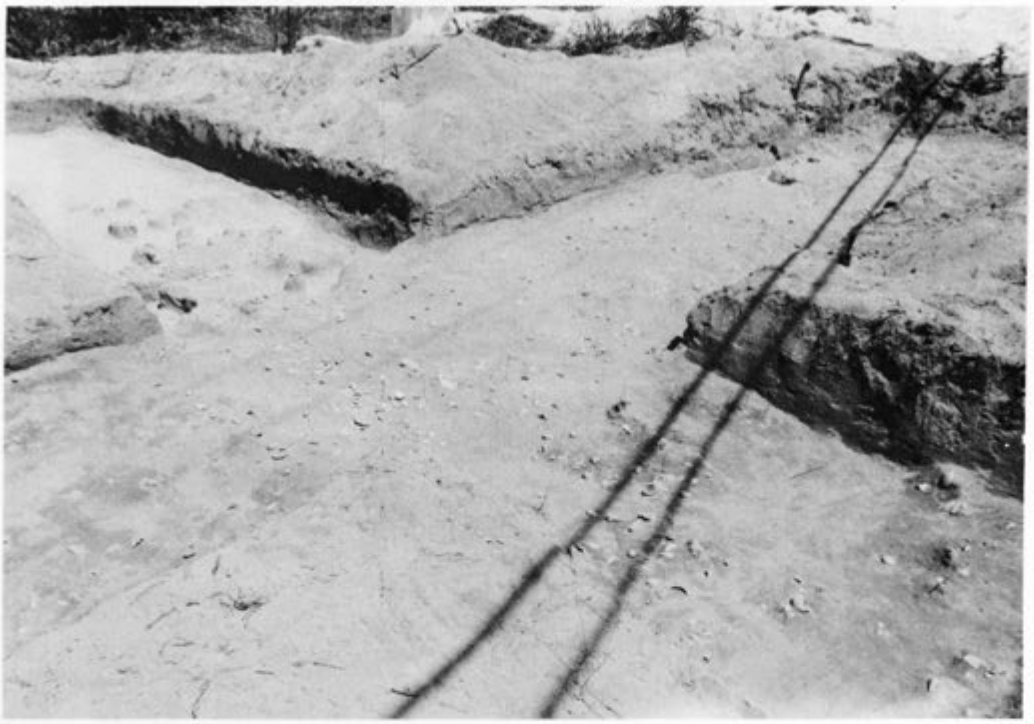


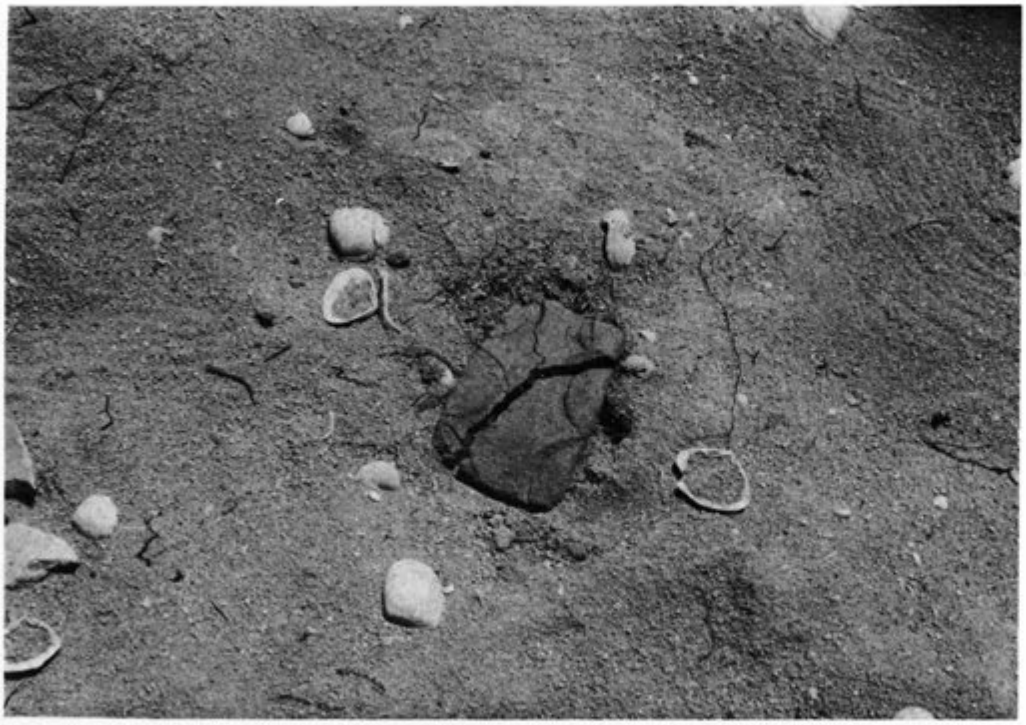


図版42

長浜金久第Ⅲ遺跡の近景

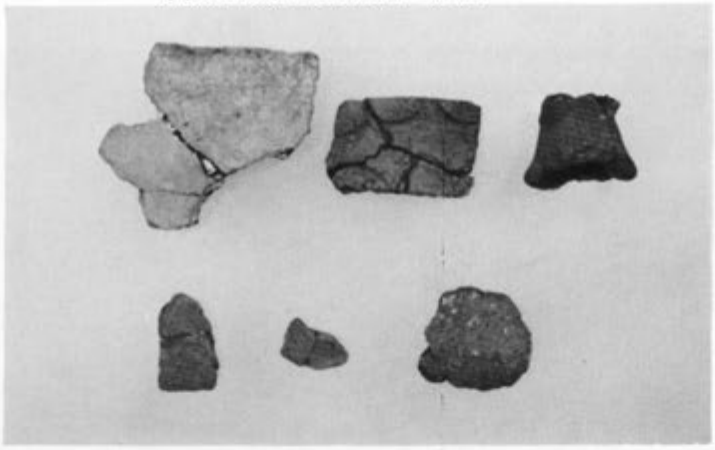
長浜金久第Ⅲ遺跡の出土状況

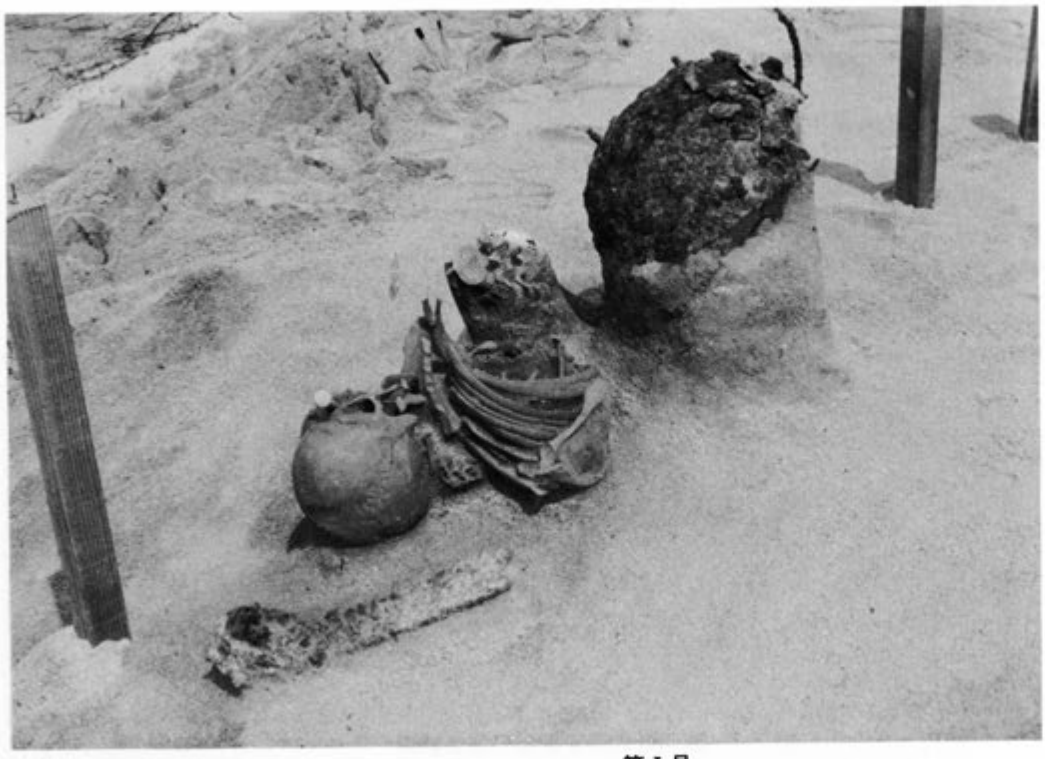




長浜金久第Ⅲ遺跡の出土状況

長浜金久第Ⅲ遺跡の出土遺物





第Ⅰ号

近世人骨出土状況

第Ⅱ号

近世墓の副葬品

第 Ⅵ 章　自然遺物の同定について

1．放射性炭素測定について

京都産業大学　山田　治

長浜金久遺跡の液体シンチレーション^{14}C年代測定結果報告

KSU—878 → 930±20 B.P.Y. No.1　H—12区第13層出土（層）
KSU—879 →1120±20 B.P.Y. No.2　F—12区第19層出土（下層）　第Ⅰ遺跡
KSU—880 → 690±20 B.P.Y. No.3　G—21区第 9層出土（上層）
KSU—881 →3100±20 B.P.Y. No.4　縄文後期（嘉徳式土器の貝殻）第Ⅲ遺跡

Comnent

KSU—878　730±20 B.P.Y.……絶対年代換算　AD1020～1050　平安時代
KSU—879　1120±20 B.P.Y.……絶対年代換算　AD 830～ 890　平安時代
KSU—880　690±20 B.P.Y.……絶体年代換算　AD1240～1290　鎌倉時代

2．鹿児島県長浜金久第Ⅰ遺跡出土の人骨

小片丘彦・川路則友・岡元満子・峰　和治・山本美代子
（鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座Ⅱ）

はじめに

奄美新空港建設に先立ち，鹿児島県教育委員会が昭和58・59年度にわたって発掘調査を行った鹿児島県大島郡笠利町長浜金久遺跡から，昭和59年５月に２体，９月に１体の人骨が出土した。現場は砂丘地で，前２体はほぼ全身が残っており，副葬品から判断して昭和初期に埋葬されたものと思われる。２体は南北に接近して出土し，北側の１体を現代人骨１号，南側のものを同２号とした。また９月に出土した１体は左上腕骨の骨体部分のみであるが，長浜金久第Ⅰ遺跡第19層（８～９世紀）から出土したので，古代人骨とした。これら３体の人骨について計測および観察を行ったので報告する。なお人骨調査の機会を与えて下さった鹿児島県文化課に深く感謝する次第である。計測は Martin & Saller (1957), Howells (1973), 鈴木 (1963), Woo & Morant (1934) および Woo (1937) に従った。

所　見

古代人骨（女性・成人）

成人の左上腕骨骨体部のみである。骨質はよく保存され，かつ漂白されている。上・下端を欠くので正確な全体像を知ることができないが，全長は非常に短く260 mmを超えていないと推定される。可能な計測値は中央最大幅22mm，中央最小幅13.5mm，骨体最小周58mm，中央周61mmで骨体断面示数は61.4である。すなわち，短く細く中央部が扁平な上腕骨であり，女性のものである可能性が強い。特徴的なことは筋付着部がよく発達していることである。ことに大結節稜が堤防状に長く強く隆起するほか，三角筋粗面も著しく発達し外側へ強く張り出している。内・外側縁は鋭い。以上の所見から本人骨は小柄な成人女性で，上腕を著しく使用する生活を営んでいたものと推定される。

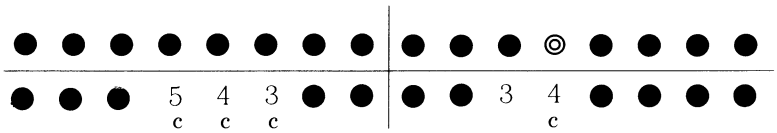
現代人骨１号（女性・熟年）

本人骨は工事により下半身を撹乱され，主として上半身だけが埋葬体位を保っていた。頭位はほぼ北であり，頭部を下に，下肢帯を上にする形の屈位で埋葬されていたと思われるが，詳細は不明である。年齢および性別は熟年期の女性である。

１．頭　蓋

頭蓋に関する計測値を表１に示す。脳頭蓋では長幅示数が77.8で中頭型，長高示数が75.3で高頭型，幅高示数は96.8で中頭型を示す。顔面頭蓋では上顎骨歯槽突起の萎縮が著しく，顔高や上顔高などの計測は不能であるが，眼窩示数は80.0で中眼窩型，鼻示数は59.6で過広鼻型に

属する。鼻根部および顔面平坦度の計測値は表２の通りである。鼻根弯曲示数（89.5），前頭突起水平傾斜角（97°）はともに大きく，鼻根部が扁平であることを示している。また前頭骨は平坦で（前頭骨平坦示数14.9），頬骨の弯曲度は強くない（水平弯曲示数20.4）。三主縫合は内・外板ともに閉鎖は認められず，矢状縫合ではまだ鋸歯状を呈している。左右頭頂骨の矢状縁中央付近が前後に隆起しており，そのために矢状縫合の中央付近が溝状に凹んでいる。乳様突起は大きいが粗雑でなく，外側への張り出しも少ない。下顎角の外反もない。外耳道骨瘤は認められない。歯列は次の通りである。



●：生前脱落，歯槽完全閉鎖
◎：生前脱落，歯槽不完全閉鎖
c：齲蝕

上顎歯はすべて生前脱落している。歯槽萎縮が著しく，萎縮は歯槽突起基部にまで及んでいる。下顎においても歯槽部の萎縮は顕著で，ほとんどの歯が歯根を半分以上露出させている。咬耗は$\overline{3|3}$がMartinの２度で，$\overline{|4}$が同３度である。なお$\overline{|4}$は近心側へ約45°捻転している。齲蝕は$\overline{5\,4\,3|4}$に認められ，ことに$\overline{5\,4|}$は歯冠を失うまでに進行している。

２．体幹骨

椎骨，胸骨および肋骨のすべてが残っている。下位腰椎（L_3～L_5）の椎体縁に骨棘形成が見られ，上・下関節突起に凹凸不平な骨増殖が認められる。胸骨柄と体の癒合は完了している。

３．体肢骨

ほぼ完全な形で残っている。計測値を表３に示す。全般にかなり長いが，骨体は細く，骨頭や関節面が小さい。寛骨の大坐骨切痕は広く，恥骨結合面には平行隆線は見られず，骨表面が幾分陥凹しており，ところどころに小孔がある。大腿骨骨体上部は扁平で（上骨体断面示数　右77.6，左79.4），粗線の発達が良く，骨体に柱状形成の傾向が見られる（骨体中央断面示数　右106.3，左112.8）。右大腿骨最大長から算出した推定身長は 154.0cm（Pearson）である。上肢骨および大腿骨には病的変化は見られないが，脛・腓骨には左右とも広範な骨増殖が認められる。骨増殖は左右ほぼ対称的に起こっており，脛骨ではヒラメ筋線付近，骨間縁，腓骨切痕周辺に著しく，腓骨では骨間縁に沿う部位および外果関節面上方部に強く現れている。いずれも表面粗雑な骨肥厚もしくは顆粒状の突起の集合である。膝・足関節の関節面には変化は認められない。足骨は取り上げの際に欠けた部分が多いが，残っている左第４・右第３・右第４中足

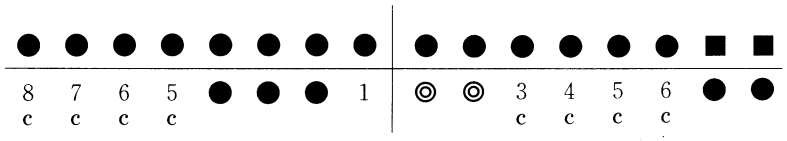
骨の骨頭に著しい萎縮が見られる。脛・腓骨の骨増殖と中足骨の萎縮とは関連するものと思われ，慢性炎症に起因する一連の骨変化が想定される。

現代人骨２号（男性・壮年）

頭を北へ向けた仰臥伸展位をとり下肢を幾分曲げて埋葬されたほぼ完全な１体で，壮年期の男性である。

１．頭　蓋

頭蓋に関する計測値を表１に示す。脳頭蓋では長幅示数75.4で長頭に近い中頭型，長高示数77.1で高頭型，幅高示数 102.2で尖頭型を示す。顔面頭蓋では１号と同様に上顎骨歯槽突起の萎縮が著しいために顔高や上顔高などの計測が不能であるが，眼窩示数は73.8で低眼窩型を，鼻示数は49.0で中鼻型を示している。鼻根部および顔面平坦度の計測値を表２に示したが，鼻根弯曲示数90.9，前頭突起水平傾斜角94.5°で鼻根部は扁平であり，前頭骨は平坦で（前頭骨平坦示数15.8)，頬骨の弯曲度は幾分強い（水平弯曲示数23.3)。乳様突起は大きく表面粗雑であるが，側方への張り出しはない。三主縫合は内・外板ともに閉鎖は認められず，ほとんどが鋸歯状を呈している。床状突起間骨橋の存在が認められる。外耳道骨瘤はない。梨状口縁は全周にわたって骨萎縮があり，鈍縁化している。下顎骨は歯槽部の萎縮が顕著で，植立する歯はいずれも歯根の 2/3 が露出している。下顎角はやや外反する。歯列は次の通りである。



■：歯槽とともに欠損

残存歯の咬耗は $\overline{8\ 7\ |\ 4\ 5}$ が Martin の１度であるほかはすべて同２度である。大部分の残存歯に齲蝕が見られ，歯石の沈着が著しい。

２．体幹骨

椎骨，胸骨および肋骨のすべてが残っている。第３・第４腰椎に脊椎分離症が見られ，第4・第５腰椎の椎体縁には顕著な骨棘形成が認められる。仙骨には脊椎披裂がある。

３．体肢骨

計測値を表３に示す。全般に１号に比べて，やや短いがかなり太く，骨頭および関節面が大きい。寛骨の大坐骨切痕は狭く，恥骨結合面には平行隆線が少し残っており，表面はかなり粗雑である。大腿骨骨体上部はわずかに扁平で（上骨体断面示数　右84.4，左83.9)，骨体に柱状形成は認められない。脛骨は軽度の扁平性を示す（脛示数　右64.7，左64.7)。右大腿骨最大長から算出した推定身長は 157.1cm（Pearson）である。左右尺骨の下部 1/3 に対称的な骨

病変がある。炎症に起因すると思われる骨肥厚で，左尺骨では肥厚部中央に多孔性の陥凹が認められる。他の体肢骨には同様の病変は見られない。前記梨状口縁の変化と尺骨の病変とは一連の疾患の可能性もあるが，明白ではない。

考　察

南西諸島における近世～現代人骨の頭蓋計測の資料には喜界島(中野，1958)，与路島(菊池，1959)，徳之島（岩井，1959），与論島（大山，1965）および宮古島（池田，1974）各島の風葬人骨を対象にしたものがある。今回出土した現代人骨２体についての主要頭蓋計測値および示数を近隣諸島のそれらと比較したのが表４(女性)と表５(男性)である。

まず，１号（女性）の最大長は喜界島，徳之島および与論島に類似して長く，最大幅も

表２　鼻根部および顔面平坦度計測値

	計測項目	現代１号 女性	現代２号 男性
a	前頭骨弦	94	95
b	垂線高	14	15
c	頬骨水平弧	60	68
d	頬骨水平弦	54	60
e	水平弧高	11	14
f	頬骨垂直弧	48	51
g	頬骨垂直弦	47	48
h	前眼窩間幅	17	20
i	鼻根横弧長	19	22
j	鼻骨最小幅	8	8
k	前頭突起水平傾斜角	97°	94.5°
l	前頭突起上幅(左)	8	9
b / a	前頭骨平坦示数	14.9	15.8
e / d	水平弯曲示数	20.4	23.3
h / i	鼻根弯曲示数	89.5	90.9

表１　頭蓋計測値

Martin's No.	計測項目	現代１号 (女・熟)	現代２号 (男・壮)
1	頭蓋最大長	178	183
5	頭蓋基底長	97	105
8	頭蓋最大幅	138.5	138
9	最小前頭幅	96	92
11	両耳幅	130.5	124
17	Ba－Br高	134	141
25	正中矢状弧長	365.5	377
26	正中矢状前頭弧長	133	132
27	正中矢状頭頂弧長	126	133
28	正中矢状後頭弧長	106.5	112
29	正中矢状前頭弦長	115	116
30	正中矢状頭頂弦長	114	118
31	正中矢状後頭弦長	94	96
45	頬骨弓幅	129	129
46	中顔幅	97	—
51	眼窩幅Ⅰ	42.5	42
51a	眼窩幅Ⅱ	39	40
52	眼窩高	34	31
54	鼻幅	28	(25)
55	鼻高	47	51
H	Vertex Rad.	125	104
H	Nasion Rad.	89	69
65	下顎頭間幅	121	116
66	下顎角幅	88	98
68(1)	下顎骨長	100	110
69	オトガイ高	—	(28)
69(3)	下顎体厚	10	11
70a	下顎頭高	47.5	56
71a	最小下顎枝幅	29.5	32
8/1	長幅示数	77.8	75.4
17/1	長高示数	75.3	77.1
17/8	幅高示数	96.8	102.2
52/51	眼窩示数	80.0	73.8
54/55	鼻示数	59.6	49.0

表 3　四肢骨計測値

Martin's No.	計測項目	現代1号(女・熟) 右	現代1号(女・熟) 左	現代2号(男・壮) 右	現代2号(男・壮) 左
鎖骨					
1	最大長	143	149	157	158
4	垂直径	8	8	11	10
5	矢状径	10	11.5	12.5	12
6	中央周	36	33	37	38
上腕骨					
1	最大長	303	297	291	287
2	全長	299	294	284	280
3	上端幅	42	41	47	47
3(1)	横上径	46	44	50	50
4	下端幅	55	55	56	56
5	中央最大幅	18.5	18	23	22
6	中央最小幅	16	15	17.5	17
6b	骨体中央横径	17.5	18	22	21
6c	骨体中央矢状径	17	17	20	20
7	骨体最小周	55	54	61	59
7a	中央周	56	56	65	64
8	頭周	(120)	115	132	133
9	頭最大横径	—	36	41	42
10	頭最大矢状径	39	37	45	45
11	滑車幅	21	20.5	26	26
12	小頭幅	15	15	18	17
6/5	骨体断面示数	86.5	83.3	76.1	77.3
橈骨					
1	最大長	228	223	228	225
1a	頭粗面間距離	30	28	30	29
2	生理的長	217	213	211	209
3	最小周	36	36	41	40
4	骨体横径	15	15	16	16
4a	骨体中央横径	13	13	11	12
4(1)	頭横径	20	19.5	24	24
4(2)	頸横径	11.5	11.5	14	15
5	骨体矢状径	10	10	12	12
5a	骨体矢状径	10	10	12	12
5(1)	頭矢状径	20	20	(26)	26
5(2)	頸矢状径	12	12	15	14
5(3)	頭周	62	61	(79)	80
5(4)	頸周	39	39	46	47
5(5)	骨体中央周	38	37	41	40
5(6)	下端幅	31	30	34	33
5/4	骨体断面示数	66.7	66.7	75.0	75.0

表 3（つづき）

Martin's No.	計測項目	現代1号(女・熟) 右	現代1号(女・熟) 左	現代2号(男・壮) 右	現代2号(男・壮) 左
尺骨					
1	最大長	243	240	242	240
2	生理的長	219	215	213	214
2(1)	肘頭尺骨頭長	241	238	237	238
3	尺骨周	33	34	38	39
5	肘頭頂高	(1.5)	(1.5)	(2)	(2)
5(1)	上関節面高	33	34	35	37
5(2)	上腕関節面高	25	25	27	28
6	肘頭幅	24	24	24	25
6(1)	上尺骨幅	26	24.5	32	(33)
7	肘頭深	21	21	23	22
7(1)	肘頭鈎状突起間距離	21	21	25	25
8	肘頭高	18	18	20	21
9	鈎状突起橈骨側関節半面の前幅	8	8	6	6
10	鈎状突起橈骨側関節半面の後幅	10	11	11	11
11	尺骨前後径	13	13	12	12
12	尺骨横径	15.5	14.5	17	17
13	尺骨上横径	16	17	23	23
14	尺骨上前後径	24	24	25	25
11/12	骨体断面示数	83.9	89.7	70.6	70.6
13/14	扁平示数	66.7	70.8	92.0	92.0
大腿骨					
1	最大長	417	418	403	402
2	自然位の大腿骨全長	410	413	401	400
3	最大転子長	409	408	391	391
4	自然位の転子長	392	394	383	382
5	骨幹長	342	341	323	333
6	骨体中央矢状径	25.5	26.5	25	26
7	骨体中央横径	24	23.5	26	27
8	骨体中央周	78	79	81	83
9	骨体上横径	33.5	34	32	31
10	骨体上矢状径	26	27	27	26
13	大腿骨上幅	87	89	89	89
15	頸垂直径	26	28	32	32
16	頸矢状径	20	20.5	26	25
17	頸周	84	85	100	99
18	頭垂直径	39	40	43	45
19	頭横径	40	40.5	46	45
20	頭周	126	127	144	142

表3（つづき）

Martin's No.	計測項目	現代1号(女・熟) 右	現代1号(女・熟) 左	現代2号(男・壮) 右	現代2号(男・壮) 左
21	上顆幅	71	71	81	80
22	外顆厚	57	57	60	61
23	外顆最大長	57	57	61	61
24	内顆最大長	55	56	64	65
24a	内顆投影的深	52	54	60	61
25	外顆後高	31.5	31	35	34
26	内顆後高	33.5	31	36	35
6/7	骨体中央断面示数	106.3	112.8	96.2	96.3
10/9	上骨体断面示数	77.6	79.4	84.4	83.9
膝蓋骨					
1	最大長	36	38	40	39
2	最大幅	38	40	41	41
3	最大厚	18	18.5	19	19
4	関節面高	30	30	31	31
5	内側関節面幅	19	20	19	18
6	外側関節面幅	24.5	25	27	27
脛骨					
1	脛骨全長	334	338	340	340
1a	最大長	340	343	347	347
1b	脛骨長	332	334	337	337
3	最大上端幅	68	69	77	77
6	最大下端幅	47	49	49	48
7	下端矢状径	31	32	37	37
8	中央最大径	25.5	25	29	29
8a	栄養孔位最大径	—	—	34	34
9	中央横径	24	22	20	20
9a	栄養孔位横径	—	—	22	22
10	骨体周	78	75	78	78
10a	栄養孔位周	—	—	89	89
10b	骨体最小周	—	—	72	72
9a/8a	脛示数	—	—	64.7	64.7
腓骨					
1	最大長	331	333	331	332
2	中央最大径	—	—	17	16
3	中央最小径	—	—	13	10
4	中央周	—	—	47	44
4(1)	上端幅	27	27	24	23
4(2)	下端幅	25	25	24	24

南西諸島人骨の中では大きいほうである。Ba—Br 高は他島人と変わらない。長幅示数，長高示数，幅高示数，眼窩示数はいずれも他島人とそれほど異なってはおらず，わずかに，鼻幅が広いために鼻示数で広鼻の傾向が他島人よりも顕著になっていることが特徴として挙げられる。2号（男性）の最大長は他島人に類似するが，最大幅は喜界島とともに南西諸島人の中では比較的小さい。またBa—Br 高は他島人よりも大きい。長幅示数と幅高示数は喜界島に，長高示数は与路島に最も近い値が得られているが，その他の比較群との相違もそれほど顕著ではない。眼窩示数は他島人（中眼窩型）とやや異なり，典型的な低眼窩型を示している。

試みに主要頭蓋計測値を用いて，長浜金久現代人骨と他の南西諸島人骨および現代鹿児島県本土人骨（小片・川路，未発表）との間での Penrose の形態距離（Constandse-Westermann, 1972）を算出したのが，表6(女性，18項目）と表7（男性，17項目）である。1号（女性）では徳之島に最も近く，与路島および鹿児島とはやや離れているが，数値としてはどの比較群ともそれほど大きな差があると思えない。2号（男性）についても同様と思われる。

鼻根部および顔面平坦度の計測値を徳之島風葬人骨（川路・小片，1984）と比較したのが表8（女性）と表9（男性）である。1号（女性）では徳之島より前頭骨が平坦で，頬骨の弯曲度も弱いが，鼻根部は徳之島と同様に広くて扁平である。2号（男性）では前頭骨はより平坦で，頬骨の弯曲度は徳之島より強い。また鼻根部は徳之島より広くて扁平である。

南西諸島現代人の身長に関する資料は，古くから生体計測調査により数多く得られている（金関他，1957，1958；岩井，1959；豊島，1959；富沢，1969；内藤，1973など）。そのうち奄美大島現代人では男性で 158～161cm，女性で 147～152cmといわれている（片平他，1959；欠田・小浜，1967；欠田他，1973）。従って今回出土の現代人骨の右大腿骨最大長から算出した推定身長（1号 154.0cm，2号 157.1cm）から，1号は当地の女性としてはかなりの高身長であり，2号は男性としてやや低身長であったと推定される。

以上のことから今回出土の現代人骨2体の形質は当時の南西諸島人に大略類似するといえる。しかし資料数が2体と少ないので，今後当地域での人骨資料が増加した段階でより詳細な検討を加えたい。

表 4　南西諸島人骨頭蓋計測値比較（女性）

Martin's No.	計測項目	現代1号	喜界島 (n)	喜界島 mean	与路島 (n)	与路島 mean	徳之島 (n)	徳之島 mean	与論島 (n)	与論島 mean	宮古島 (n)	宮古島 mean
1	頭蓋最大長	178	(9)	179.1	(18)	173.7	(34)	177.2	(42)	177.9	(38)	173.9
8	頭蓋最大幅	138.5	(9)	136.4	(19)	135.5	(34)	135.6	(42)	138.7	(40)	138.2
17	Ba-Br 高	134	(9)	133.2	(9)	132.0	(33)	133.5	(38)	132.1	(21)	133.4
51	眼窩幅 I	42.5	(8)	41.9	(17)	39.7	(34)	42.5	(42)	41.1	(37)	40.7
52	眼窩高	34	(8)	33.2	(17)	32.4	(34)	33.0	(42)	32.9	(37)	32.8
54	鼻　幅	28	(8)	26.5	(17)	26.0	(33)	25.3	(42)	25.7	(33)	26.2
55	鼻　高	47	(9)	48.3	(16)	47.9	(34)	46.0	(42)	47.9	(34)	48.8
8/1	長幅示数	77.8	(8)	76.8	(17)	78.2	(34)	76.5	(42)	78.0	(36)	79.2
17/1	長高示数	75.3	(8)	74.4	(9)	73.4	(33)	75.4	(38)	74.4	(21)	76.6
17/8	幅高示数	96.8	(8)	97.3	(10)	95.6	(33)	98.7	(38)	95.2	(20)	96.8
52/51	眼窩示数	80.0	(8)	79.2	(17)	81.8	(34)	77.6	(42)	80.4	(37)	80.6
54/55	鼻示数	59.6	(8)	54.8	(16)	54.5	(33)	55.2	(42)	53.7	(33)	53.5

表 5　南西諸島人骨頭蓋計測値比較（男性）

Martin's No.	計測項目	現代2号	喜界島 (n)	喜界島 mean	与路島 (n)	与路島 mean	徳之島 (n)	徳之島 mean	与論島 (n)	与論島 mean	宮古島 (n)	宮古島 mean
1	頭蓋最大長	183	(17)	184.0	(24)	180.5	(57)	182.4	(37)	185.3	(70)	182.4
8	頭蓋最大幅	138	(16)	138.0	(24)	141.5	(57)	139.1	(38)	142.8	(68)	141.1
17	Ba-Br 高	141	(13)	139.9	(17)	137.7	(53)	139.9	(33)	136.5	(34)	136.8
51	眼窩幅 I	42	(16)	42.5	(23)	40.7	(57)	44.5	(37)	42.6	(69)	43.2
52	眼窩高	31	(16)	33.8	(23)	33.6	(57)	34.2	(37)	34.0	(69)	34.0
54	鼻　幅	(25)	(16)	26.9	(22)	27.2	(57)	25.5	(37)	27.3	(70)	26.9
55	鼻　高	51	(16)	50.5	(22)	51.3	(57)	49.7	(37)	51.4	(69)	52.1
8/1	長幅示数	75.4	(16)	74.8	(23)	78.7	(57)	76.3	(37)	77.3	(65)	77.4
17/1	長高示数	77.1	(13)	75.1	(15)	76.8	(53)	76.7	(33)	73.8	(35)	74.8
17/8	幅高示数	102.2	(13)	101.7	(15)	96.0	(53)	100.7	(33)	96.0	(33)	97.0
52/51	眼窩示数	73.8	(16)	79.6	(22)	82.5	(57)	76.9	(37)	79.8	(68)	78.7
54/55	鼻示数	49.0	(16)	53.6	(21)	53.2	(52)	51.4	(37)	53.2	(66)	51.3

表6　南西諸島人骨間形態距離（女性、18項目）

	喜界島	与路島	徳之島	与論島	宮古島	鹿児島
長浜金久現代1号	0.846	1.318	0.782	0.825	1.009	1.317

表7　南西諸島人骨間形態距離（男性、17項目）

	喜界島	与路島	徳之島	与論島	宮古島	鹿児島
長浜金久現代2号	0.612	0.882	0.701	0.800	0.688	1.248

表8　鼻根部および顔面平坦度計測値比較（女性）

	計測項目	現代1号	徳之島 (n) mean
a	前頭骨弦	94	(28) 93.2
b	垂線高	14	(28) 15.9
c	頬骨水平弧	60	(22) 57.1
d	頬骨水平弦	54	(22) 50.3
e	水平弧高	11	(22) 10.8
f	頬骨垂直弧	48	(27) 46.6
g	頬骨垂直弦	47	(27) 44.6
h	前眼窩間幅	17	(29) 17.4
i	鼻根横弧長	19	(29) 19.5
j	鼻骨最小幅	8	(29) 8.8
k	前頭突起水平傾斜角	97°	(29) 86.8°
l	前頭突起上幅（左）	8	(29) 9.1
b/a	前頭骨平坦示数	14.9	(28) 17.1
e/d	水平弯曲示数	20.4	(22) 21.3
h/i	鼻根弯曲示数	89.5	(29) 89.2

表9　鼻根部および顔面平坦度計測値比較（男性）

	計測項目	現代2号	徳之島 (n) mean
a	前頭骨弦	95	(51) 97.5
b	垂線高	15	(51) 16.8
c	頬骨水平弧	68	(44) 62.3
d	頬骨水平弦	60	(44) 54.3
e	水平弧高	14	(44) 11.4
f	頬骨垂直弧	51	(49) 49.7
g	頬骨垂直弦	48	(49) 47.9
h	前眼窩間幅	20	(43) 17.4
i	鼻根横弧長	22	(43) 20.2
j	鼻骨最小幅	8	(43) 8.9
k	前頭突起水平傾斜角	94.5°	(43) 79.3°
l	前頭突起上幅（左）	9	(43) 9.2
b/a	前頭骨平坦示数	15.8	(51) 17.0
e/d	水平弯曲示数	23.3	(44) 21.0
h/i	鼻根弯曲示数	90.9	(43) 86.1

総　括

1．鹿児島県大島郡笠利町長浜金久遺跡から，古代人骨1体，現代人骨2体，計3体の人骨が出土した。古代人骨は成人女性のものと思われる左上腕骨骨体部のみであり，短く細いが，筋付着部が著しく発達し，恐らく上腕をかなり使用する生活を営んでいたと考えられる。現代人骨のうち1体（現代人骨1号）は熟年期の女性で，もう1体（同2号）は壮年期の男性である。

2．現代人骨1号の脳頭蓋は中頭・高頭・中頭型を示し，顔面頭蓋は上顎骨歯槽突起の著しい萎縮のため形態を示数で表すことが不能である。眼窩示数は中眼窩型で，鼻示数は過広鼻型を示す。2号の脳頭蓋は中頭・高頭・尖頭型で，顔面頭蓋は1号と同様に一部の計測が不能である。眼窩示数は低眼窩型，鼻示数は中鼻型を示す。前頭骨は1・2号とも平坦で，鼻根部は

広くて扁平である。両者とも歯周疾患が顕著に見られるほか，残存するほとんどの歯に齲蝕が認められる。2号には床状突起間骨橋がある。

3．体肢骨は1号では全体に細く長い。大腿骨骨体上部は扁平で，骨体にわずかに柱状形成が見られる。2号の体肢骨は全般に太く短い。大腿骨骨体上部はわずかに扁平で，骨体に柱状形成は認められない。脛骨は軽度の扁平性を示す。右大腿骨最大長から算出した推定身長(Pearson) は1号で 154.0cm，2号で 157.1cmであり，前者は当地の女性としてはかなりの高身長であったと推定される。

4．病的所見としては1号の左右脛・腓骨に対称的な骨増殖と中足骨の萎縮が見られるほか，2号には頭蓋梨状口縁の鈍化と左右尺骨に病変が認められる。これらは全身的な慢性炎症に起因するものと思われる。そのほか2号には第3・第4腰椎の脊椎分離症と仙骨披裂があり，また1・2号とも下位腰椎椎体縁に骨棘が存在する。

5．頭蓋計測値を南西諸島の風葬人骨資料と比較すると，大略それらと類似している。

参考文献

Constandse-Westermann, T.S., 1972: Coefficients of biological distance. Anthrop. Publications, Oosterhout, the Netherlands.

Howells, W.W., 1973: Cranial variation in man. Pap. of Peabody Mus. Archeol. Ethnol. Vol. 67, Harvard Univ.

池田次郎，1974：沖縄・宮古島現代人頭骨の計測．人類誌　82(2)：150 -160.

岩井成功，1959：鹿児島県大島郡徳之島々民頭骨の研究．鹿児島大学医学雑誌　11(3)：1049－1089.

岩井勇作，1959：鹿児島県大島郡徳之島住民の形質人類学的研究．鹿児島大学医学雑誌　11(2)：379 - 391.

金関丈夫・永井昌文・牛島陽一，1957：奄美群島与論島住民の人類学的研究．人類科学　9：98-106.

金関丈夫・永井昌文・大山秀高，1958：喜界島民の生体計測．人類科学　10：115 - 121.

欠田早苗・小浜基次，1967：奄美群島の形質人類学的研究補遺．人類学輯報　36：127 - 133.

欠田早苗・川上則子・佐藤律子，1973：奄美群島の形質人類学的研究．人類誌　81(3)：195－202.

片平可也・山田春雄・久木原忠満・堀之内正夫，1959：奄美大島住民の形質人類学的研究．鹿児島医学会雑誌　32：80 - 88.

川路則友・小片丘彦，1984：徳之島風葬人骨の鼻根付近の形態について．人類誌(会) 92(2)：115.

菊池順正，1959：奄美大島与路島島民頭骨の人類学的研究．人類学研究　6(2)：366 - 398.

Martin, R. & K. Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1. Gustav Fischer, Stuttgart.

内藤芳篤，1973：南西諸島住民の人類学的研究．人類科学　25：163 - 194.

中野哲太郎，1958：鹿児島県大島郡喜界島島民頭骨の研究．人類学研究 5(1-4)：188 - 219.

大山秀高，1956：鹿児島県大島郡与論島島民頭骨の研究．人類学研究 3(3-4)：396 - 434.

鈴木　尚，1963：日本人の骨．岩波書店.

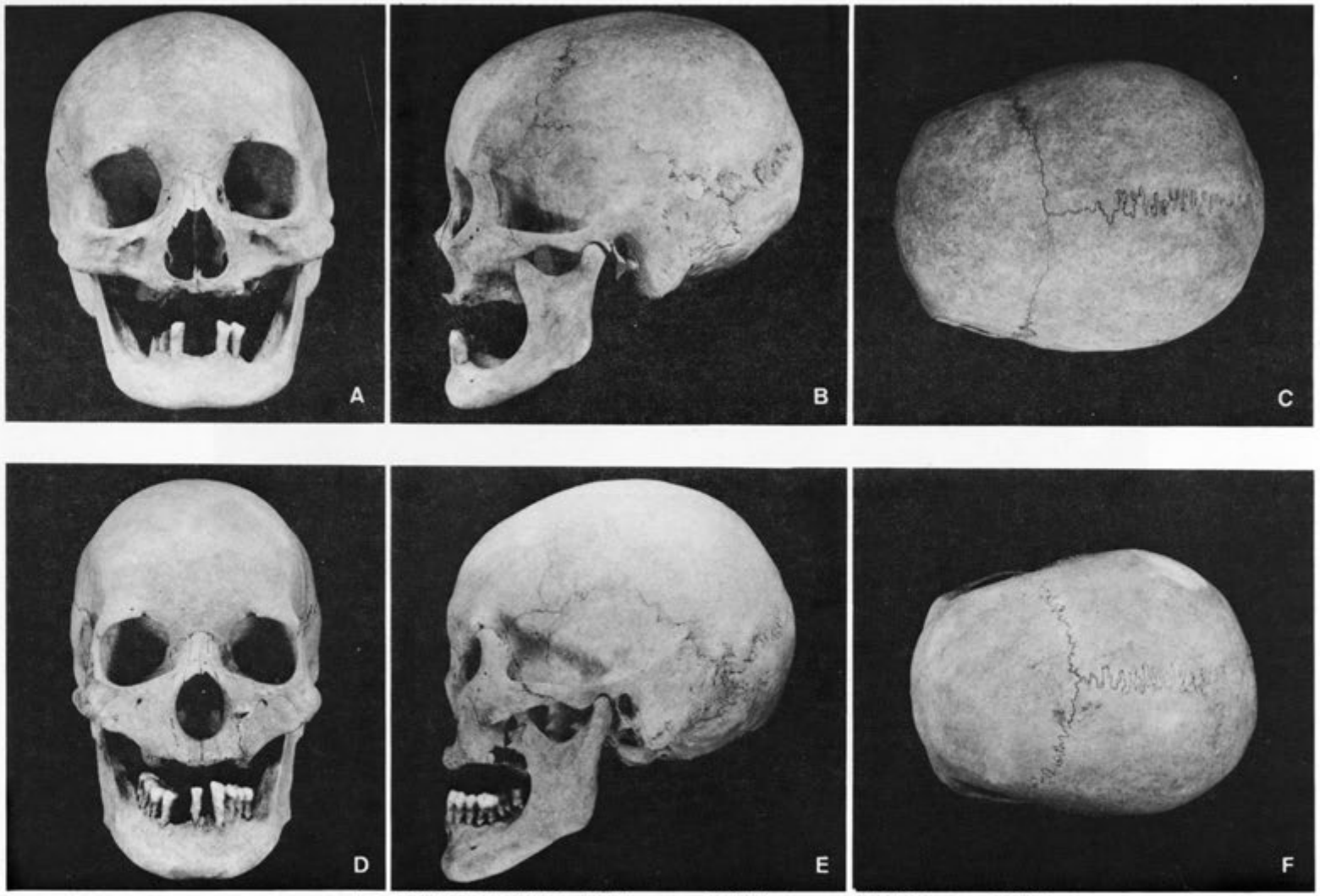
富沢忠彦，1969：奄美群島徳之島住民の形質人類学的研究．長崎医学会雑誌　44(1-2)：45 - 69.

豊島正治，1959：奄美群島沖永良部島々民の形質人類学的研究　第1編　生体計測について．長崎医学会雑誌　34(8)：981 - 992.

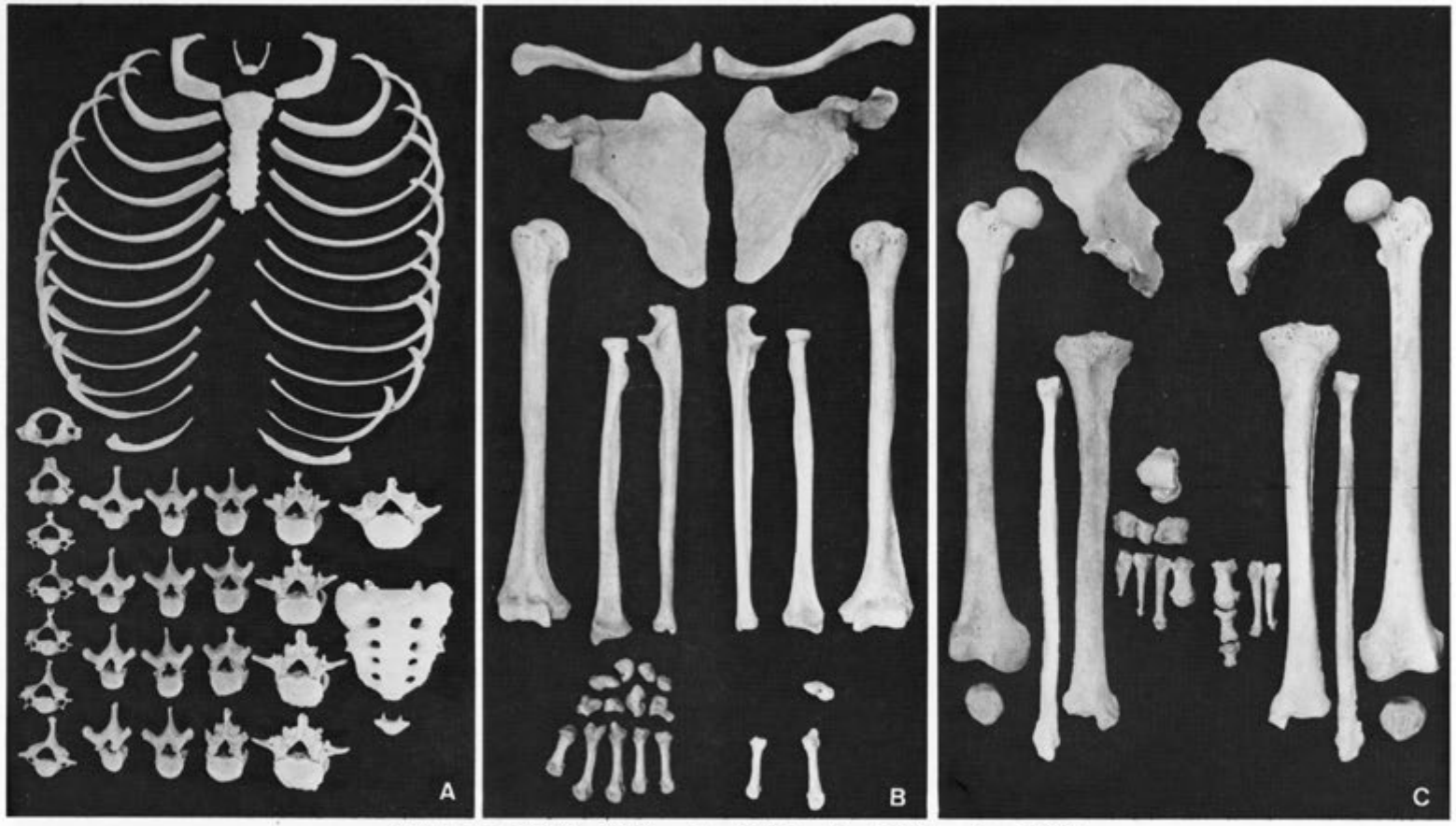
Woo, T.L., 1937: A biometric study of the human malar bone. Biometrika 29: 113 - 123.

Woo, T.L. & G.M. Morant, 1934: A biometric study of the flatness of the facial skeleton in man. Biometrika 26: 196 - 250.

古代人骨（女性・成人）　A．左上腕骨前面　B．同後面



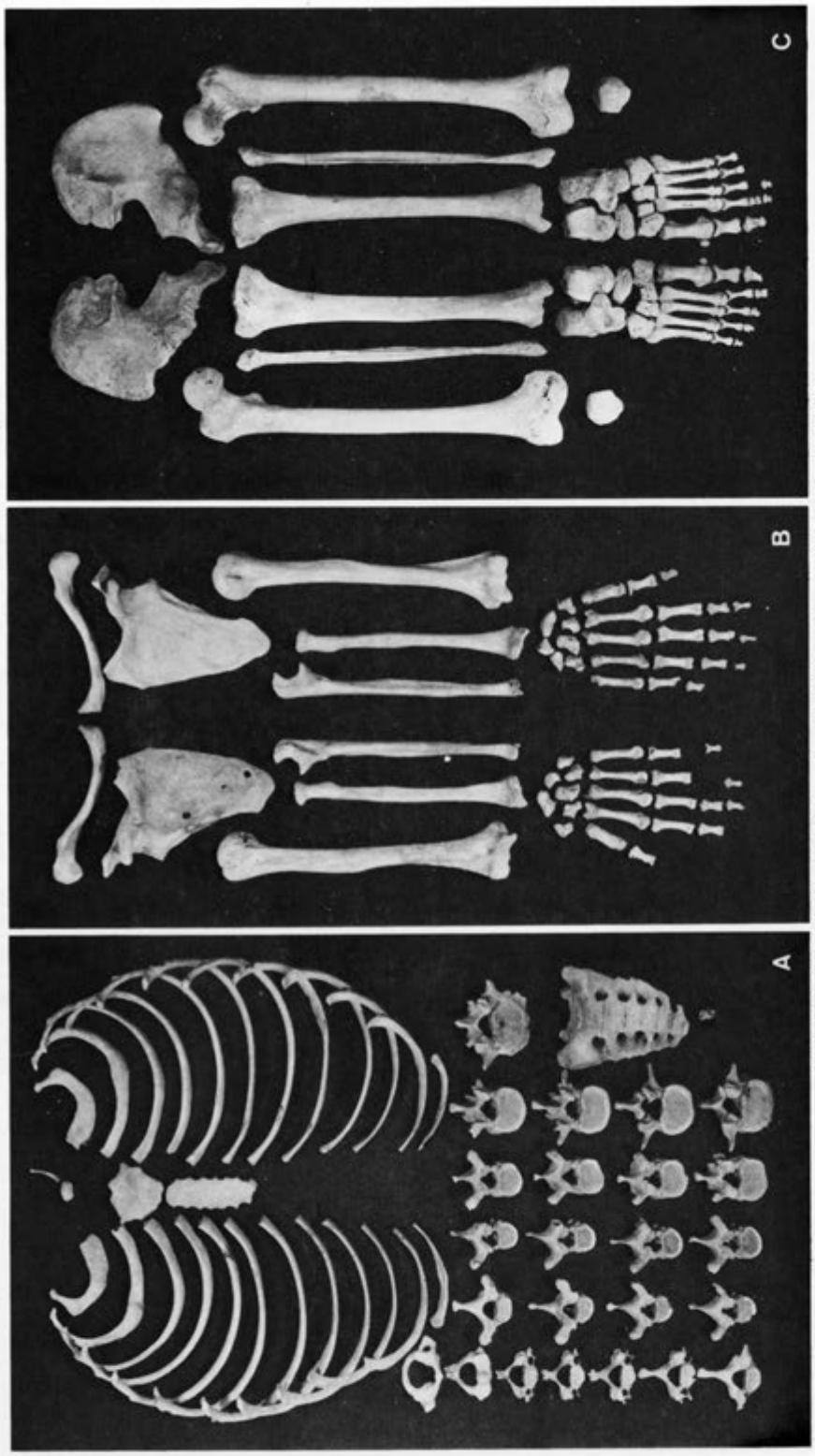
上：現代人骨１号（女性・熟年）　A．頭蓋前面　B．同左側面　C．同上面
下：現代人骨２号（男性・壮年）　D．頭蓋前面　E．同左側面　F．同上面



現代人骨1号(女性・熟年)　A．体幹骨　B．上肢骨　C．下肢骨

図版3

図版 4



現代人骨 2 号(男性・壮年)　A．体幹骨　B．上肢骨　C．下肢骨

3．鹿児島県笠利町長浜金久第Ⅱ遺跡出土の弥生時代小児骨

分　部　哲　秋*

はじめに

鹿児島県大島郡笠利町（奄美大島）大字和野字長浜金久にある長浜金久遺跡から，1983年（昭和58年）の発掘調査によって，埋葬人骨１体（１号人骨）が出土した。この埋葬人骨は別稿で述べられているように，弥生時代前期に属する人骨である。

今回出土した小児骨は，保存状態が比較的良好なもので，この地域における弥生時代幼小児骨の形質を考察する上で貴重な資料と考えられるので，詳細な観察および計測を行った。その結果について報告したい。

資料・方法

この人骨の年令および年令区分は，所見で述べているように，約15才で，小児（Ⅱ）期と推定される。ただし，年令については藤田(1965)による現代人の歯の萌出時期と金田(1957)による現代人の歯根形成時期を用いて，現代と弥生時代におけるそれらが大差ないと仮定したうえで推定したものである。また，幼小児骨の性差に関しては，種々の研究がなされているが，現状では性別を同定することがむずかしく，本例についても不明である。

計測は Martin-Saller(1957) の方法で行ったが，脛骨の横径については森本(1971)にならい，オリビエの方法に従った。ただし，幼小児骨の四肢骨は骨端軟骨部で分離し，欠如する例が多いために，両骨端を除いた骨体での計測も行い，表名を骨体計測値とした。

比較資料としては，同年令の例として大友弥生小児骨(分部，1981)を用いた。また，成人骨の資料としては，大友弥生人(松下，1981)，奄美大島出土の宇宿弥生人(松下，1979)および徳之島出土の面縄弥生人(松下，1983)を用いた。

所見

各骨の計測値は表６～13に示すとおりである。

(1) 頭蓋

１．脳頭蓋

脳頭蓋は，前頭骨の右眼窩上縁の一部および頭頂縁の一部を欠くほかはほぼ完全である。前頭結節は良く膨隆しているが，外後頭隆起の発達は悪く，乳様突起も小さい。

脳頭蓋の主要計測値は，頭蓋最大長が172mm，頭蓋最大幅が145mm，バジオン・ブレグマ高は129mmである。頭蓋長幅示数は84.30，頭蓋長高示数は75.00，頭蓋幅高示数は88.97となり，頭

* Tetsuaki Wakebe, Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University
（長崎大学医学部解剖学第二教室）

型はそれぞれ，brachy-,hypsi-,tapeinokran(短・高・低頭)に属している。また頭蓋水平周は，505mm，横弧長は317mm，正中矢状弧長は370mmである。

次いで，脳頭蓋の主要計測値について，同年令の大友Yd-22号と比較してみた(表1)。頭蓋最大長は大友Yd-22号よりも小さく，頭蓋最大幅は大きい。従って，頭蓋長幅示数はかなり大きく，大友Yd-22号の頭型が中頭型に属しているのに対して，長浜金久のそれは短頭型の上限に位置している。成人女性骨においても，近隣地域から出土した宇宿・面縄両弥生人は大友弥生人よりも短頭性が強く，小児骨にみられる傾向と一致している。また，周径については，頭蓋水平周は大友Yd-22号よりやや大きく，横弧長および正中矢状弧長はかなり大きい。

表1　脳頭蓋計測値　(mm)

		小児骨（15才）		成人骨（女性）					
		長浜金久1号	大友Yd-22号（分部）	宇宿弥生人（松下）		面縄弥生人（松下）		大友弥生人（松下）	
				n	M	n	M	n	M
1.	頭蓋最大長	172	177	1	170	1	165	18	178.11
8.	頭蓋最大幅	145	137	1	149	1	136	17	141.18
17.	バジオン・ブレグマ高	129	—	1	130	1	130	13	128.31
8/1	頭蓋長幅示数	84.30	77.40	1	87.65	1	82.42	13	80.30
17/1	頭蓋長高示数	75.00	—	1	76.47	1	78.79	13	72.92
17/8	頭蓋幅高示数	88.97	—	1	87.25	1	95.59	13	91.39
23.	頭蓋水平周	505	498	1	506	1	486	18	515.44
24.	横弧長	317	281	1	317	1	304	18	306.00
25.	正中矢状弧長	370	351	1	368	1	352	10	362.90

2．顔面頭蓋

顔面頭蓋は鼻骨と上顎骨の左側前頭突起を欠く他は，ほぼ完全である。眉間はやや隆起しているものの，眉上弓の隆起は全く認められない。

主要計画値は，頬骨弓幅が 121mm，中顔幅は93mm，顔高は93mm，上顔高は54mmで，したがって，顔示数は76.86(K)，100.00(V)，上顔示数は44.63(K)，58.06(V) となり，低顔の傾向が強い。

眼窩は欠損のため，一部のみが計測可能で，眼窩幅は39mm(左)，眼窩高は31mm(右)である。眼窩示数は算出できないが，観察によれば顔面が低い割には，眼窩の形態は低眼窩ではないと推測される。鼻幅は計測できないが，鼻高は42mmで低い。　測

下顎骨は，左側下顎頭の外側部を欠く他は完全である。諸径は小さく，特に高径が低く，筋付着部の発達も悪い。また，下顎枝角は小さく，後方への傾きは弱い。

次に，脳頭蓋と同様に，大友Yd-22号の成績と比較してみると(表2)，幅径である上顔幅および中顔幅はほぼ同じ値を示しているが，顔高および上顔高は大友Yd-22号よりも小さい。したがって，ウイルヒョウーの顔示数，上顔示数も小さく，大友Yd-22号も低顔を特徴とする小児骨

であるが，本例はこれよりも一層低顔の傾向を強くそなえている。成人女性骨においても，宇宿弥生人ウイルヒョウーの顔示数(V)を除けば，宇宿・面縄両弥生人の顔示数および上顔示数は大友弥生人よりも小さく，より低・広顔の傾向が強く認められる。

表 2　顔面頭蓋計測値　(mm)

		小児骨（15才）		成人骨（女性）					
		長浜金久１号	大友Yd-22号（分部）	宇宿弥生人（松下）		面縄弥生人（松下）		大友弥生人（松下）	
				n	M	n	M	n	M
43.	上顔幅	99	98		—	1	101	13	102.62
45.	頬骨弓幅	121	—	1	135		—	1	125
46.	中顔幅	93	92	1	99	1	98	10	94.90
47.	顔高	93	101	1	112	1	96	5	110.60
48.	上顔高	54	59	1	63	1	61	6	62.17
47／45	顔示数(K)	76.86	—	1	82.96		—		—
48／45	上顔示数(K)	44.63	—	1	46.67		—		—
47／46	顔示数(V)	100.00	109.78	1	113.13	1	97.96	4	111.82
48／46	上顔示数(V)	58.06	64.13	1	63.64	1	62.24	5	64.88

３．歯

歯は，上下両顎ともに，すべての歯が釘植しており，風習的抜歯は認められない。残存した歯を歯式で示すとおりである。

$M_2\ M_1\ P_2\ P_1\ C\ \ I_2\ I_1$	$I_1\ I_2\ C\ \ P_1\ P_2\ M_1\ M_2$
$(M_3)\ M_2\ M_1\ P_2\ P_1\ C\ \ I_2\ I_1$	$I_1\ I_2\ C\ \ P_1\ P_2\ M_1\ M_2$

〔(　)：歯槽内埋伏〕

歯の萌出状態は上下両顎とも，M_2 まで萌出している。咬耗はすべての歯に認められ，その程度は Brocaの１～２度である。歯根は上下両顎のM_2以外はすべて完成している。M_2についても先端部のみが未形成である。

(2) 四肢骨

１）上肢骨

１．上腕骨

右側は骨体が残存しているが，破損がひどく，計測は不可能である。左側は骨頭の外側部を欠如しているが，その他は完全である。骨体は長さの割に細く，三角筋粗面の発達も悪い。

計測値は，上腕骨最大長が239mm(左)，骨体最小周は44.0mm(左)）中央周は48.0mm(左）で，長厚示数は18.41(左）となる。中央最大径は16.7mm(左)，中央最小径は11.5mm(左)で，骨体断面示数は68.86(左)となり，骨体は扁平である。

次に，大友Yd-22号と比較してみると(表３)，上腕骨最大長は大友Yd-22号より小さく，また，最小周も小さいが，長厚示数はほぼ同じ値である。中央最大径はやや大きく，中央最小径

はやや小さいため，骨体断面示数は小さく，大友Yd-22号に比べると骨体はかなり扁平である。成人女性骨との比較では，短くて細い点では宇宿弥生人により近いが，骨体に扁平性が認められる点ではやや異なっている。

表3　上腕骨(右)　(mm)

		小児骨(15才)				成人骨(女性)					
		長浜金久1号		大友Yd-22号(分部)		宇宿弥生人(松下)		面縄弥生人(松下)		大友弥生人(松下)	
						n	M	n	M	n	M
1.	上腕骨最大長	239	(1)	250	(1)	1	263	1	271	5	270.20
2.	上腕骨全長	237	(1)	246	(1)	1	259	1	266	5	265.40
5.	中央最大径	16.7	(1)	15.8	(1)	1	18	1	21	25	21.68
6.	中央最小径	11.5	(1)	13.3	(1)	1	15	1	16	25	15.48
7.	骨体最小周	44.0	(1)	46.0	(1)	1	50	1	57	20	57.65
7(a).	中央周	48.0	(1)	47.5	(1)	1	54	1	63	23	61.96
6/5	骨体断面示数	68.86	(1)	84.18	(1)	1	83.33	1	76.19	25	71.53
7/1	長厚示数	18.41	(1)	18.40	(1)	1	19.01	1	21.03	5	21.18

2．橈骨

左右ともに骨体が残存しているが，両端を欠損している。長さは短く骨体は細い。

3．尺骨

左右ともに両端を欠く骨体が残存している。橈骨と同様に長さは短く，骨体は細い。また，骨間縁の発達も悪い。

2）下肢骨

1．大腿骨

右側は骨体の遠位端を欠き，左側は骨頭，内側顆および外側顆の一部を欠損している。長径は短くて，骨体は細い。粗線はこの年令にしては外側唇がやや発達しているが，骨体の断面形は円に近い。

計測値は，最大長は354mm(左)，自然位全長は351mm(左)，骨体中央周は58.0mm(右)，57.0mm(左)で，長厚示数は16.24(左)となり，示数値は小さく，骨体はきゃしゃである。骨体中央矢状径は19.3mm(右)，18.6mm(左)，骨体中央横径は18.2mm(右)，18.1mm(左)で，骨体中央断面示数は106.04(右)，102.76(左)である。また上骨体断面示数は80.63(右)，77.88(左)となり，骨体上部には弱い扁平性が認められる。

次いで，大友Yd-22号と比較してみると(表4)，骨体中央周は大友Yd-22号よりもかなり小さく，大友小児骨の骨体も細いものであるが，それ以上に，本例の骨体は細い。骨体中央矢状径は大友Yd-22号より小さく，骨体中央横径はほぼ同じであるため，骨体中央断面示数は小さい値を示している。上骨体断面示数は大友Yd-22号よりもかなり小さい。以上のように，大友Yd-22号と対比した場合の本例の特徴は，成人女性骨における宇宿および面縄両弥生人の傾向

と良く一致している。

表4　大腿骨計測値(右)　(mm)

		小児骨(15才)		成人骨(女性)					
		長浜金久1号	大友Yd-22号(分部)	宇宿弥生人(松下)		面縄弥生人(松下)		大友弥生人(松下)	
				n	M	n	M	n	M
1.	最大長	354 (1)	—	1	370	1	372	5	386.80(1)
2.	自然位全長	351 (1)	—	1	368	1	370	4	378.25(1)
6.	骨体中央矢状径	19.3	21.4	1	22	1	23	30	26.00
7.	骨体中央横径	18.2	18.0	1	24	1	23	30	25.03
8.	骨体中央周	58.0	63.0	1	71	1	73	28	80.32
8/2	長厚示数	16.24 (1)	—	1	19.29	1	19.73	4	20.30(1)
6/7	骨体中央断面示数	106.04	118.89	1	91.67	1	100.00	30	104.05
10/9	上骨体断面示数	80.63	96.41	1	75.00	1	71.43	32	78.42

2．脛骨

右側は骨体の両端を欠損しているが，左側は近位端の一部を欠くのみで，ほぼ完全である。骨体は細く，ヒラメ筋線の発達は悪い。

計測値は，脛骨全長が276mm(左)，脛骨最大長は283mm(左)，骨体周は56.0mm(右，左)，最小周は53.0mm(右，左)で，長厚示数は19.20(左)となり，示数値は小さく，骨体は細くきゃしゃである。中央最大径は20.2mm(右，左)，中央横径は15.4mm(右)，15.3mm(左) で，中央断面示数は76.24(右)，75.74(左)となり，扁平性は認められない。

次いで，大友Yd-22号と比較してみると(表5)，骨体周および最小周は大友Yd-22号よりもかなり小さく，骨体は細い。中央最大径および中央横径も小さく，中央断面示数は大きい。すなわち，脛骨の骨体は細く，扁平性が認められず，この特徴は大腿骨と同様に，宇宿および面縄両弥生人の傾向に似ている。

表5　脛骨計測値(右)　(mm)

		小児骨(15才)		成人骨(女性)					
		長浜金久1号	大友Yd-22号(分部)	宇宿弥生人(松下)		面縄弥生人(松下)		大友弥生人(松下)	
				n	M	n	M	n	M
1.	脛骨全長	276 (1)	—	1	309	1	312	2	311.50
1a.	脛骨最大長	283 (1)	—	1	316	1	319	3	323.00
8.	中央最大径	20.2	22.4	1	23	1	24	27	27.00
9.	中央横径	15.4	16.3	1	18	1	19	29	19.48
10.	骨体周	56.0	61.5	1	65	1	68	27	74.74
10b.	最小周	53.0	58.0	1	61	1	65	23	68.17
9/8	中央断面示数	76.24	72.77	1	78.26	1	79.17	27	71.79
10b/1	長厚示数	19.20(1)	—	1	19.74	1	20.83	2	21.86

3．腓　骨

左右ともに腓骨頭を欠いているが，その他はほぼ完全である。骨体は細く，稜の発達も悪い。

(3) 化　骨

化骨の進行状態については，橈骨および尺骨の遠近両端が欠損しているために観察不能であったが，その他の部位は観察することができた。

頭蓋では，前および後後頭骨内軟骨結合はすでに化骨しているが，蝶後頭軟骨結合は未癒合である。四肢骨では上腕骨の滑車および小頭はすでに骨癒合を完了しているが，それ以外はすべて未癒合である。

(4) 年　令

歯の萌出状態は上下両顎ともに，M_2まで萌出し，咬耗も認められる。藤田(1965)によれば，現代人の上顎M_2は男性平均11才11ヶ月，女性平均12才で萌出する。したがって，萌出状態からは，年令は少なくとも12才以上と推定される。歯根は上下両顎ともに，M_2が未完成あでる。金田(1957)の現代人の歯根形成時期によれば，歯根が完成している歯の中では，上顎P_2最も遅く，14才で完成する。また，未完成のM_2歯根形成程度は，金田の現代人15才に相当するものである。従って，現代人と弥生時代における歯の萌出時期，歯根形成時期が大差ないと仮定すれば，本人骨の年令はほぼ15才と推定される。

総　　括

鹿児島県大島郡笠利町(奄美大島)にある長浜金久遺跡から，弥生時代に属する小児骨1体が出土した。保存状態は比較的良好で，幼小児骨の人類学的研究を進めるうえで，貴重な資料となるものと考えられるので，詳細な観察および計測を行った。その結果を要約すると次のとおりである。

1．年令は，歯の萌出状態および歯根の形成程度から約15才と推定される。

2．頭蓋最大長は 172mm，頭蓋最大幅は 145mm，バジオン・ブレグマ高は 129mmで，頭蓋長幅示数は84.30，頭蓋長高示数は75.00，頭蓋幅高示数は88.97となり，頭型はそれぞれ，brachy-，hypsi-，tapeinokran(短・高・低頭)に属している。

3．頬骨弓幅は121mm，中顔幅は93mm，顔高は93mm，上顔高は54mmで，顔示数は76.86(K)，100.00(V)，上顔示数は44.63(K)，58.06(V)となり，顔面頭蓋には強い低顔の傾向が認められる。

4．風習的抜歯は認められない。

5．上腕骨，大腿骨および脛骨はみじかくて骨体も細く，きゃしゃである。また，筋付着部の発達も悪いが，上腕骨の骨体および大腿骨の骨体上部には弱い扁平性が認められる。

6．以上のように，本例の頭蓋は短頭で，低顔の傾向が強く，四肢骨は短くて，細くきゃしゃなものであった。このような特徴は，同一地域から出土した宇宿弥生人(1979)，および面縄弥生人の傾向に近いことから，すでに小児期から成人にみられる特徴が表れているものと推

測される。しかしながら，小児骨の例数はわずかに1例であり，また，この地域から出土した成人骨の資料も少なく，形質については，必ずしも明らかにはされていないので，この点に関しては，今後さらにこの地域での古人骨の収集に努め，研究を進めて行きたい。

《擱筆するにあたり，本研究と発表の機会を与えていただいた，笠利町教育委員会，鹿児島県教育庁文化課の諸先生方ならびに人骨研究に関してご指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。》

表6　脳頭蓋計測値　(mm)

1.	頭蓋最大長	172
8.	頭蓋最大幅	145
17.	バジオン・ブレグマ高	129
8/1	頭蓋長幅示数	84.30
17/1	頭蓋長高示数	75.00
17/8	頭蓋幅高示数	88.97
9.	最小前頭幅	95
10.	最大前頭幅	120
5.	頭蓋底長	94
11.	両耳幅	121
12.	最大後頭幅	109
13.	乳突幅	97
7.	大後頭孔長	28
16.	大後頭孔幅	28
16/7	大後頭孔示数	100.00
23.	頭蓋水平周	505
24.	横弧長	317
25.	正中矢状弧長	370

表7　顔面頭蓋計測値　(mm)

40.	顔長	84
41.	側顔長	64
42.	下顔長	90
43.	上顔幅	99
45.	頬骨弓幅	121
46.	中顔幅	93
47.	顔高	93
48.	上顔高	54
47/45	顔示数(K)	76.86
48/45	上顔示数(K)	44.63
47/46	顔示数(K)	100.00
48/46	上顔示数(K)	58.06
44.	両眼窩幅	91
51.	眼窩幅(右)	39
52.	眼窩高(左)	31
55.	鼻高	42

表8　上腕骨計測値

		左
1.	上腕骨最大長	239 (226)
2.	上腕骨全長	237
4.	下端幅	— (46)
5.	中央最大径	16.7 (16.3)
6.	中央最小径	11.5 (11.5)
7.	骨体最小周	44.0
7(a)	中央周	48.0 (47.5)
6/5	骨体断面示数	68.86(70.55)
7/1	長厚示数	18.41(19.47)

(　　)は，骨体計測値

表9　橈骨骨体計測値　(mm)

		右	左
3.	最小周	32.0	31.0
4.	骨体横径	12.5	12.0
4a.	骨体中央横径	12.5	11.8
5.	骨体矢状径	8.4	8.2
5a.	骨体中央矢状径	8.4	8.3
5(5).	骨体中央周	33.0	32.5
5/4	骨体体面示数	67.20	68.33
5a/4a	中央断面示数	67.20	70.34

表10　尺骨骨体計測値　(mm)

		右	左
3.	最小周	27.0	27.0
11.	尺骨矢状径	9.8	10.2
12.	尺骨横径	10.5	11.0
S.	中央最小径	9.2	9.0
L.	中央最大径	10.2	11.0
C.	中央周	32.0	33.0
11／12	骨体断面示数	93.33	92.73
S／L	中央断面示数	90.20	81.82

表11　大腿骨計測値　(mm)

		右		左	
1.	最大長	—	—	354	318
2.	自然位全長	—	—	351	—
6.	骨体中央矢状径	19.3	(19.4)	18.6	(18.7)
7.	骨体中央横径	18.2	(18.2)	18.1	(18.1)
8.	骨体中央周	58.0	(58.0)	57.0	(57.0)
9.	骨体上横径	22.2		22.6	
10.	骨体上矢状径	17.9		17.6	
8／2	長厚示数	—	—	16.24	—
6／7	骨体中央断面示数	106.04	(106.59)	102.76	(103.31)
10／9	上骨体断面示数	80.63		77.88	

(　　) は骨体計測値

表12　脛骨計測値　(mm)

		右		左	
1.	脛骨全長	—		276	
1a.	脛骨最大長	—	—	283	(256)
2.	顆距長	—		263	
8.	中央最大径	20.2	(20.1)	20.2	(20.2)
8a.	栄養孔位最大径	22.5		22.4	
9.	中央横径	15.4	(15.4)	15.3	(15.3)
9a.	栄養孔位横径	16.0		16.8	
10.	骨体周	56.0	(56.0)	56.0	(56.0)
10a.	栄養孔位周	61.0		61.0	
10b.	最小周	53.0		53.0	
9／8	中央断面示数	76.24	(76.62)	75.74	(75.74)
9a／8a	栄養孔位断面示数	71.11		75.00	
10b／1	長厚示数	—		19.20	

(　　) は，骨体計測値

表13　腓骨骨体計測値　(mm)

		右	左
1.	最大長	251	—
2.	中央最大径	10.4	9.7
3.	中央最小径	8.7	8.1
4.	中央周	31.0	29.0
4a.	最小周	22.5	21.0
3／2	中央断面示数	83.65	83.51
4a／1	長厚示数	8.96	—

参考文献

1．藤田恒太郎，1965：歯の話．岩波書店．東京：57—98．

2．金田義夫，1957：日本人の永久歯における歯根完成時期の研究．歯科月報，30：165—172．

3．金関丈夫，1955：弥生人種の問題．日本考古学講座，4：238—252．

4．金関丈夫，1959：弥生時代の日本人．日本の医学—第15回日本医学会総会学術集会記録—．1：167—174．

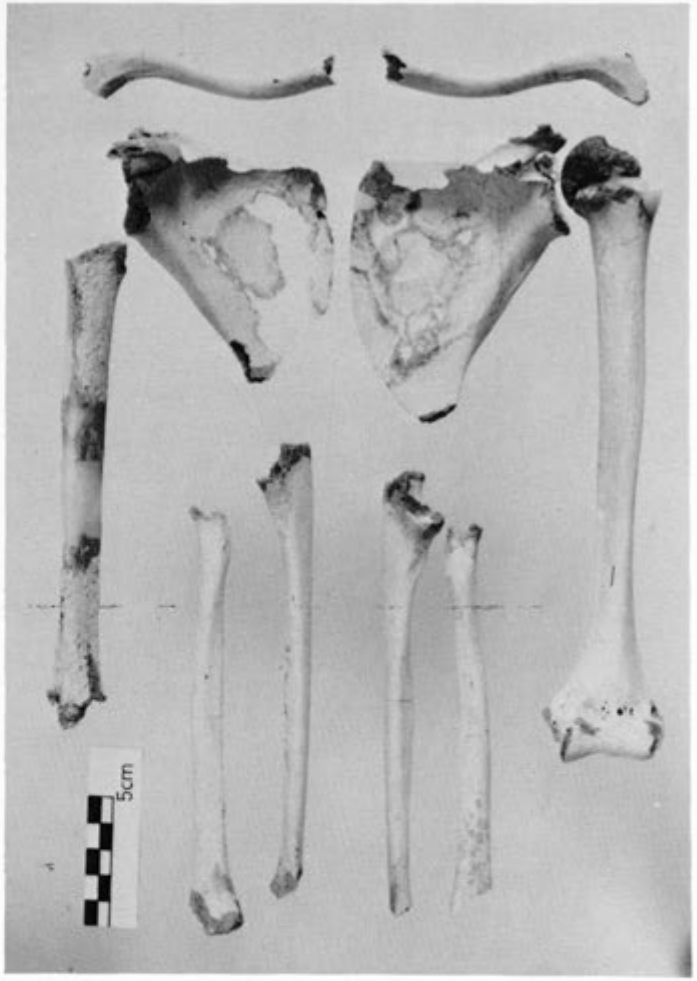
5．金関丈夫，1966：弥生時代人．日本の考古学，3：460—471．

6．Martin-Saller,1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd.l.Gustav Fisher Verlag. Stuttugart:429-597.

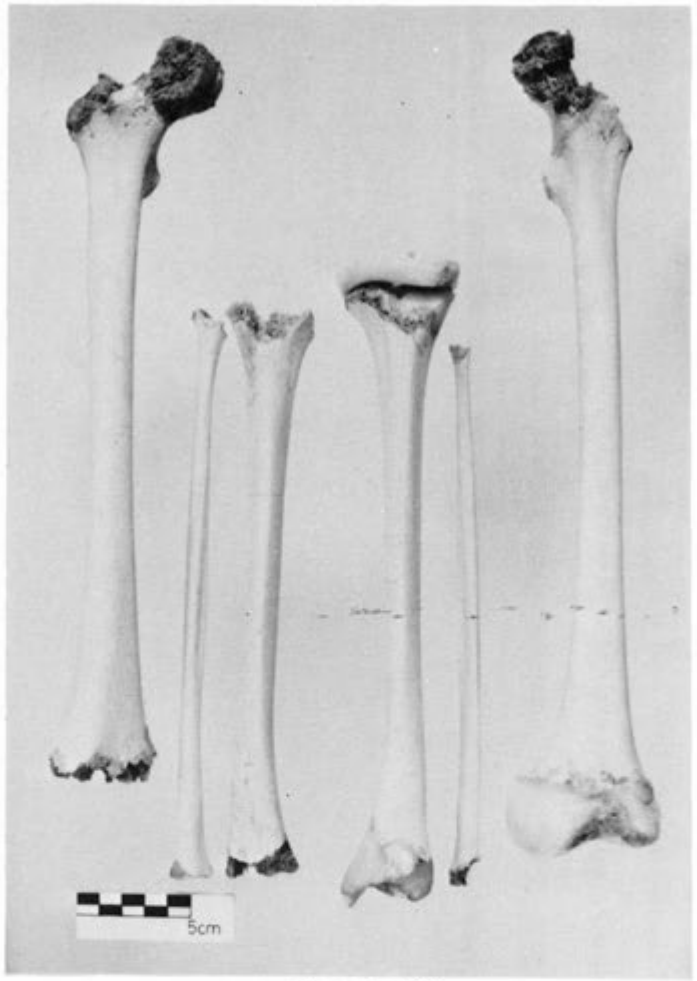
7．松下孝幸，1979：宇宿貝塚出土の人骨．宇宿貝塚，鹿児島考古，13：210—220．

8．松下孝幸：佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨．大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調化財調

査報告書第１集）：223—253.
9．松下孝幸，石田肇，1983：鹿児島県伊仙町面縄第１貝塚出土の弥生時代人骨．面縄第１・第２貝塚（伊仙町埋蔵文化財調査報告書１）：51—64.
10．内藤芳篤，1981：弥生時代人骨．人類学講座５（日本人１），雄山閣，東京：57—99.
11．内藤芳篤，松下孝幸，1981：弥生時代人骨．季刊人類学，12(1)：27—37.
12．鈴木重一，1943：四肢化骨核発育に関するレ線学的研究．千葉医学会雑誌，21：349—417.
13．分部哲秋，1981：佐賀県大友遺跡出土の幼小児骨．大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調査報告書１）：254—264.
14．分部哲秋，1983：長崎県宇久松原遺跡出土の弥生時代児骨．長崎県埋蔵文化財調査集幼小報Ⅵ（長崎県文化財調査報告66）：124—134.
15．分部哲秋，1984：長崎県浜郷遺跡出土の弥生時代幼小児骨(会)。解剖学雑誌，59：410.



1号人骨(小児)上肢骨



1号人骨(小児)下肢骨

4．鹿児島県笠利町長浜金久遺跡出土の人骨

松下孝幸*

はじめに

鹿児島県大島郡笠利町（奄美大島）大字和野字長浜金久に所在する長浜金久遺跡の発掘調査が1983年(昭和58年)に行なわれ，この調査で人骨が発掘，採集された。人骨は3体であったが，このうちの1体が埋葬人骨（1号人骨）で，あとの残りは散乱骨や表面採集した人骨である。

長崎大学医学部解剖学第二教室では，日本人の成り立ちや日本人の形質変化を解明するために，西日本各地から出土する古人骨の蒐集とその形質人類学的研究を続けている。南西諸島群の古人骨に関しては，この地域の各時代ごとの特徴を明らかにするとともに，このような特徴が九州本土の形質の特徴とどのような関係にあるのかを解明するための研究を続けているが，資料数が少なすぎて，このような課題に明快な解答を出せるところまでは至っておらず，資料の蒐集に力を注ぎ，これらの人骨を報告記載し，資料化を続けているのが現状である。

本例は残存量は少ないが，上記のような我々の研究観点から人骨の特徴などを報告しておきたい。

資　　料

今回の調査で発掘あるいは採集した人骨は3体分の人骨で，このうち1体（1号人骨）は埋葬された状態で出土し，所属時代も考古学的所見から弥生時代前期のものと推定されている。残りの2体のうち1体（2号人骨）は散乱状態で出土したもので，保存状態は良好であるが，残存量は著しく少ない。この人骨は，縄文時代に属すると推定されている。また，残りの1体（3号人骨）は表面採集したもので，所属時代を明確にすることはできなかったが，人骨の表面にげっし類の歯でできたものと考えられる傷が多数認められることから，この人骨は長く地表近くにあったものと考えられ，また，まわりに風葬（トフル墓）の跡があることから，この人骨はおそらく風葬骨の一部であろう。各人骨の性別・年令などは表1に示すとおりである。

表1　資料

人骨番号	性別	年令	時代
1号人骨	—	小児(15才)	弥生時代前期
2号人骨	不明	壮年	縄文時代，女性の可能性あり
3号人骨	男性	不明	不明

なお，小児骨（1号人骨）については，分部が別稿で詳述しているので本稿では成人骨についてのみ報告する。

人骨の計測方法は，Martin-Saller (1957)の方法で計測した。また，歯の計測は藤田(1949)の方法で行い。1／20mm副尺付のノギスで計測した。

* 長崎大学医学部解剖学第二教室

所　　見

2号人骨（壮年）

残存していたのは図2に示しているとおり，頭蓋のごく一部と下顎骨の右側半分である。

(1) 頭蓋骨

右側頭頂骨の一部が残存していたにすぎない。その骨壁はあまり厚いものではない。

(2) 下顎骨

下顎骨もそれほど大きいものではなく，下顎切痕はやや深く，また角前切痕も認められるが，下顎角は強く外反している。下顎枝の後方への傾斜はやや大きい。下顎骨の計測値は表2に示すとおりである。

表2　下顎骨計測値（右，mm）

69(1)	下顎体高	32
69(2)	下顎体高	27
70(1)	前 枝 高	63
70(2)	最小枝高	52
71.	枝　　幅	32
71 a.	最小枝幅	31

表4　歯の計測値（右，m）

	頬(唇)舌径	近遠心径
下顎P_2	8.80	7.10
下顎M_1	10.90	12.00
下顎M_2	11.00	11.90

次に，性別を推定するために，この下顎骨の計測値を同じ奄美大島の弥生人女性骨である宇宿弥生人（松下，1979），徳之島の弥生人女性骨である面縄弥生人（松下・他，1983）および沖永良部島の女性の縄文人骨と推定されている中甫縄文人（松下，1984）と比較してみた(表3)。

表3　下顎骨計測値（右，mm）

		長浜金久2号	宇宿 女性	面縄1号 女性	中甫1号 女性	浜郷 男性 n	浜郷 男性 M	浜郷 女性 n	浜郷 女性 M
69(1)	下顎体高	32	29	27	30	16	31.75	10	29.00
69(2)	下顎体高	27	27	—	24	13	27.62	7	26.00
70(1)	前 枝 高	63	63	60	53	15	64.80	13	57.77
70(2)	最小枝高	52	55	50	43	17	53.12	12	47.67
71.	枝　　幅	32	33	30	33	18	35.50	12	33.92
71 a.	最小枝幅	31	33	29	33	17	35.00	12	33.75

大部分の項目は面縄弥生人や中甫縄文人よりも大きく，同じ奄美大島の宇宿弥生人に最も近い。本地域の男性例としては，奄美大島の宇宿港遺跡(永井，1981)および西之表市馬毛島の椎ノ木遺跡(中橋・他，1980)出土の弥生人骨例があるが，いずれも下顎骨の計測値が公表されていないので，これらの人骨とは比較ができない。そこで地理的には遠くなるが，長崎県の五島列島の浜郷弥生人の成績(未発表)と比較してみた(表3)。本例の枝幅は浜郷弥生人男性骨より

も小さく，下顎枝や下顎体の高径についてもわずかに小さいもののほとんど大差ない。ところで，浜郷弥生人の値をみてみると，ここにあげた項目については男性の計測値は女性よりも大きく，また，女性の計測値を薩南諸島例と比較してみると，浜郷弥生人の女性の下顎骨は高さが低く，幅広いものであるが，宇宿・面縄弥生人のそれは高さが高く，幅もそれほど広くないことが分かる。すなわち，薩南諸島の弥生人女性の下顎枝は高さが高いという特徴が認められるようである。従って，宇宿弥生人女性下顎骨も浜郷弥生人男性下顎骨に近いわけで，本下顎骨の下顎枝の高径が高く，浜郷弥生人男性骨に近いからといって，本例は男性であるというわけにはいかない。やはり，本地域の男性骨の特徴が明らかにならない限り，性別を高い信頼度では推定できないが，現状で性別を推定するとすれば，宇宿弥生人女性骨に最も近いことを重視し，女性の可能性が強いと推定せざるを得ない。また，確かに下顎骨の計測値は宇宿弥生人に近いが，形態的にはどうか問題が残る。しかし，我々の手許にこの人骨がないので，このような点についても不明であり，研究をこれ以上進展させることができない。

次いで，この人骨の時代について検討しておきたい。この下顎骨には，下顎切痕がやや深いこと，角前切痕が存在し，しかもそれがやや深いこと，第三大臼歯が萌出する余地が全くないこと，また，頭蓋の骨壁がそれほど厚くないことなど縄文人骨の特徴が認められない。ただ下顎角は著しく外反しており，この点を当教室で保管している面縄弥生人，中甫縄文人と比較してみたが，いずれもこれほど外反してはいない。計測値的には最も近い，宇宿弥生人はどうか興味ある点であるが，上述しているとおり，手許に人骨がないので検討ができない。下顎角が外反しているということは，そしゃく筋との関係が強く，時代が新しくなっても下顎角が外反するものも存在する。従って，この下顎角の著しい外反のみで，時代の古さを決めることはできない。しかも，計測値は中甫縄文人よりもむしろ宇宿弥生人に近い。このようなことを考慮すると，この人骨は縄文時代人骨というよりは，むしろ弥生時代以降の人骨である可能性が強いようである。もとより，時代や時期は人骨から決められるものではなく，考古学的に決定されなければならないが，出土状況が明確でないような時は，今日までの形質人類学の成果を踏まえた人骨所見は，ある程度時代を決定する際の参考になるものではないかと考えている。

(3) 歯

下顎骨には歯が釘植していた。その残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと次のとおりである。

／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／	／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／
M_2 M_1 P_2 ○ ／ ／ ／	／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／

（／：不明（破損）
○：歯槽開存）

咬耗度はBrocaの2度である。なお，M_3は未萌出であるが，M_3が萌出するスペースが存在しないので，おそらく先天的欠損と考えられる。

歯の計測値は表4に示すとおりである。

(4) 性別・年令

性別については，下顎骨の項でも検討したが，今のところは高い信頼度で決定できないが，あえて推定するとすれば，女性の可能性の方が強いと考えている。年令は歯の咬耗が弱いことから壮年と推定した。

3号人骨（男性、年令不明）

右側上腕骨と両側の大腿骨を表面採集した。いずれの表面もげっし類の咬跡と思われる傷が無数についている。各骨の残存部分は図2に示しているとおりである。

1．上腕骨

右側骨体はやや太く，三角筋粗面の発達も比較的良好である。計測値は表5に示すように，中央最大径は23mm(右)，中央最小径は18mm(右)で，骨体断面示数は78.26(右)となり，骨体の扁平性は強くない。また，骨体最小周は68mm(右)である。

2．大腿骨

両側とも骨体は残存していた。骨体の径はそれほど大きいものではない。計測値は表6に示すように，骨体中央矢状径は26mm(右，左)，骨体中央横径は27mm(右)，26mm(左)で，骨体中央断面示数は96.30(右)，100.00(左)となり，骨体の後面には柱状性は認められない。中央周は83mm(右)である。また，上骨体断面示数は86.21(右)，83.33(左)となり，骨体上部には扁平性はほとんど認められない。

表5　上腕骨計測値 (mm)

5.	中央最大径　(右)	23
6.	中央最小径　(右)	18
7.	骨体最小径　(右)	68
6／5	骨体断面示数(右)	78.26

表6　大腿骨計測値 (mm)

		右	左
6.	骨体中央矢状径	26	26
7.	骨体中央横径	27	26
8.	骨体中央周	83	—
9.	骨体上横径	29	30
10.	骨体上矢状径	25	25
6／7	骨体中央断面示数	96.30	100.00
10／9	上骨体断面示数	86.21	83.33

3．性別・年令

性別は，四肢骨の径がやや大きいことと筋付着部の発達が良いことから，男性と推定したが，年令は不明である。

総　　括

鹿児島県大島郡笠利町（奄美大島）大字和野字長浜金久にある長浜金久遺跡の1983年（昭和88年)に行われた発掘調査で，3体の人骨が発掘，採集された。このうちの2体が成人骨で，こ

の２体は散乱人骨，表面採集人骨である。人骨の残存量は少なかったが，人類学的観察や計測を行った。その結果を要約すれば，次のとおりである。

1．２号人骨（散乱骨）は，頭蓋片および下顎骨の右半分が，３号人骨（表面採集骨）は右側上腕骨骨体および左右の大腿骨骨体が残存していた。

2．２号人骨は縄文時代に属するものと推定されており，３号人骨は風葬骨の一部と考えられる。

3．２号人骨は，どちらかといえば女性の可能性が強い，壮年骨であり，３号人骨は男性骨であるが，性別は不明である。

4．２号人骨の下顎骨の計測値は宇宿弥生人女性下顎骨に近いものであった。

5．九州における古人骨の研究は，その北部地域での研究が比較的進んでいるが，この地域の特徴をより明確にし，日本人の形質変化の中に正しく位置づけていくためには，この地域以外での研究も合せて進めていくことが必要である。とりわけ南西諸島を含めた南九州地域の形質は九州人の起原とも深くかかわっているものと考えられ，特に研究を重視しなければならない地域である。にもかかわらず，資料はあまり豊富とはいえない。２号人骨の下顎骨を検討していく過程で，薩南諸島の弥生人女性の下顎骨は西北九州弥生人女性に比べると下顎枝や下顎体の高径が高く，下顎枝の幅もそれほど広いものではないことが明らかになった。２号人骨にもこのような傾向が認められ，しかも同じ奄美大島の宇宿弥生人の下顎骨の計測値に最も近いようである。また２号人骨の下顎骨は，下顎切痕が深く，角前切痕は明瞭で，しかもそれがやや深く，第三大臼歯が萌出する余地も全くない。また，頭蓋の骨壁がそれほど厚くないことなど縄文人骨の特徴が認められない。ただ下顎角が著しく外反しているが，これはそしゃく筋との関係が強いのでこれだけで時代の新旧を決めるわけにはいかない。以上の点を踏まえて，この人骨は弥生時代以降の人骨である可能性があることを形質人類学の立場から指摘しておきたい。また地理的に最も近く，保存状態も良好な宇宿弥生人骨が研究者の手許にないことは，研究の進展を防げており，下顎骨の形態や下顎角の様態あるいは筋付着部の様子などの検討を行うことができず，これ以上の考察は不可能であることも指摘しておきたい。

私は，以前古人骨に対する考え方や古人骨のおかれている問題点などについての考えを公けにしたことがある（松下，1982）。今回原稿を書くにあたってまた，同じような問題に直面したので，改めて古人骨に対する考え方を明らかにしておきたい。

まず，お願いしたいのは，古人骨（人骨）は人骨研究者のもとに保管，管理させて欲しいということである。その第１の理由は，①古人骨といえども，人体の一部であり，遺骨であるからである。「歴史民俗資料館」や「教育委員会の事務所」などに，もし現代人骨が置かれていたらどうであろうか。もっともそんなことがおりるはずはないが，そのような場所が人体の一部を置くのにふさわしい場所でないことははっきりしている。人体の一部が粗末に取り扱われていいわけがない。形質人類学は，人間（ヒト）そのものを研究資料とし，人間

（ヒト）の形態的特徴を明らかにし，正しい人間観を確立する学問である，と私は考えている。人間(ヒト)そのものを研究資料とするがゆえに，最も人間を大切にする態度が必要であるはずである。この基本的態度が人骨研究の基本的出発点と，私は考えている。それは私達の共通の祖先の遺骨に対しても全く同じである。人間を大切にする態度とは，その人骨が「自分の近親者の遺骨」という考え方をすればおのずから理解していただけるであろう。

考古学は人類が残した遺物，遺跡を研究対称とし，人類の生活全体を復元し，人類の歴史を解明するとともに，正しい歴史観を確立することを目的とするものと，私なりに解釈している。人間の歴史である。そこには，やはり人間が基本にあるはずで，そうすればやはり人間を大切にすべきである。こういう観点からは，人骨を「歴史民俗資料館」に展示したり，「倉庫」などに保管するという発想は出てこないと思う。こういう発想がおきるのは，背後に古人骨は遺物の一種であるという考えがあり，考古遺物と一緒に出土するものおよび遺跡や土中から出土するものはすべて遺物であるという考え方から生じており，その結果，古人骨を考古遺物と同列視してしまい，これらと同じように，陳列，展示するという発想が生じている。そこに人間の遺骨であるという観点は欠落してしまっている。確かに，古いという点や研究対称であるという点では考古遺物と同じ特質をもってはいるが，その属性から考古遺物と同列視するわけにはいかないし，医学教育に携わる立場から，その考え方に同意するわけにはいかない。また，第２の理由は，②古人骨は，出土例が少なく，同時に人骨研究者にとっては必要不可欠なものであるからであり，形質人類学の研究対称になる以上，それは学問的に正しく研究が続けられるべきものであるからである。考古遺物とは異なり，人骨は条件がよほど良くない限り残存しないし，その量は考古遺物とは比べものにならない。人骨がなければ，人骨研究は一歩も進展しないのである。わずか１体でも，骨片でも貴重で大切な資料である。古人骨が「歴史民俗資料館」に展示されたとしても，それは「客寄せの手段」にはなるかもしれないが，その人骨の形質人類学的研究の発展はあり得ないし，倉庫などに保管された場合は「死蔵」ということにもなりかねない。学問は時とともに進歩発展していく。研究過程の中で，計測方法や研究視点を変えて再検討をおこなう必要が生じたり，新たな資料が増えれば，これとも比較検討しなければならなくなる。しかし，資料がいつでも研究できる状態にないとすれば，研究の進展は防げられ，その結果，それがたとえ貴重な資料であっても，研究資料として使えなくなり，最終的には研究史上からもその資料は消滅していくことにもなりかねない。

いうまでもなく，古人骨は人骨研究者だけのためにあるとは思ってもいない。しかし，まず研究者が研究を行い，その結果(成果)を地元へ還元していくというのが順序であろう。資料が正しく研究されてこそ，その資料は正しく地元でも生かされるはずであり，ただ展示してさえおけばいいといったものではないはずである。視覚的効果だけの問題なら，レプリカを活用すればいいし，現在の技術は本物と変らないものが作れるのである。また，報告書が刊行されれば，研究が終了したと考えられがちであるが，報告書ができ上がった時点が人骨研

究の出発点であり，それから初めて，本格的な研究を始めることができるのであり，報告書完成はその準備が整ったことを意味しているにすぎない。そして，我々は研究させていただいた研究者として，その学問的成果を地元へ還元・普及するためのいかなる努力も惜しむつもりはない。また，研究させてもらう以上，それからおこるどのような責任も義務もいささかも回避するつもりはないことを言明しておきたい。第3の理由は，③人骨はこわれやすく，常に手入れが必要だからである。そして，その管理維持には専門的知識が必要であるからである。

以上のような理由から，私は，人骨は人骨研究者の手元で保管・管理していた方がよいと考えている。研究を真剣に行なおうとすればする程，このような困難に直面し焦りを感じる。私はこれからも人骨研究を続けていきたいと思っている。だから，誤解を恐れず，考えていることを書いてみた。考古学と人類学のお互いの発展と進歩のために議論すべきは議論し，そして理解し合っていきたいと思うし，またそれはお互いの叡智を出し合えば必ず可能なことだと信じている。

今後ともこれまで以上に，人骨研究に対して，深いご理解とご協力を賜りたいと心から熱望している。

《擱筆するにあたり，本研究と発表の機会を与えていただいた，笠利町教育委員会，鹿児島県教育庁文化課の諸先生方ならびに人骨研究に関してご指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。》

参 考 文 献

1．藤田恒太郎，1949：歯の計測規準について，人類学雑誌，61：27—32.

2．Martin-Saller, 1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd.l.Gustav Fisher Verlag, Stuttugart：429-597.

3．松下孝幸，1979：宇宿貝塚出土の人骨。鹿児島考古，13：210—220.

4．松下孝幸，1982：九州・山口地域における古人骨研究の課題と問題点。考古学ジャーナル，212：18—21.

5．松下孝幸，石田肇，1983：鹿児島県伊仙町面縄第1貝塚出土の弥生時代人骨。面縄第1・第2貝塚（伊仙町埋蔵文化財調査報告書1）：51—64.

5．松下孝幸，1984：鹿児島県知名町（沖永良部島）中甫洞穴出土の人骨。中甫洞穴（鹿児島県知名町埋蔵文化財調査報告書）：33—58.

6．中橋孝博，永井昌文，1980：椎ノ木遺跡出土人骨について。馬毛島埋葬址：24—34.

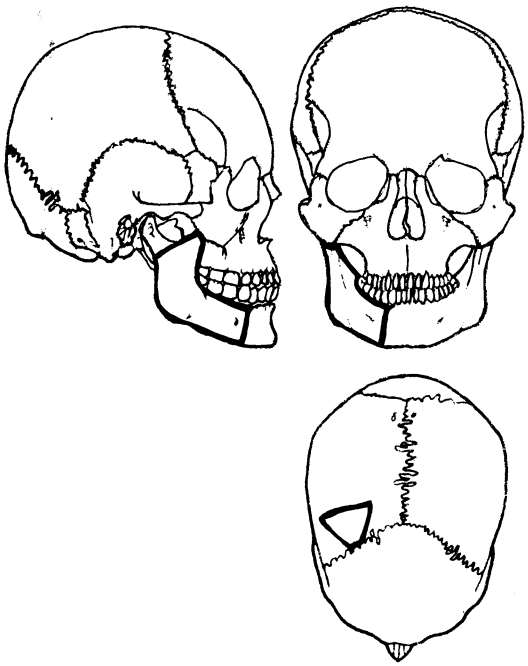
7．永井昌文，1981：宇宿港遺跡出土の人骨について。宇宿港遺跡：30—32.

Human Skeletal Remains excavted from Nagahamakaneku Site,Amamiōsima Island, Kagosima Prefecture.

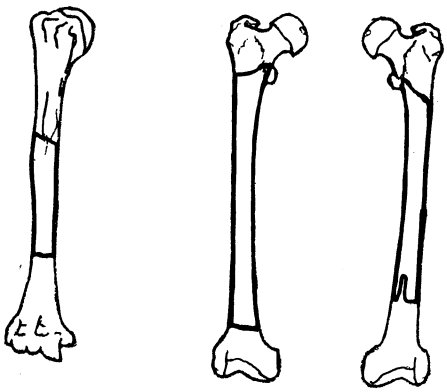
Takayuki MATSUSHITA
(Department of Anatomy,Faculty of Medicine,Nagasaki University)

In 1983, Human skeleons excavated from Nagahamakaneku site,Kasari-chō (Amamiōsima), Kagosima Prefecture, are 3 individuals. No 1 is a child, 15 years old, belongs to the early phase of Yayoi period. No 2, a fragment of the parietal bone and the right side of of the mandibule, belongs to Jomon period. No 3 ,male skeleton, the right humerus, the both femur,was gathered at the surface of the site.The measurements of No 2 is close to to that of Usyuku.

図2　人骨の残存状態



2号人骨残存状態



3号人骨残存状態

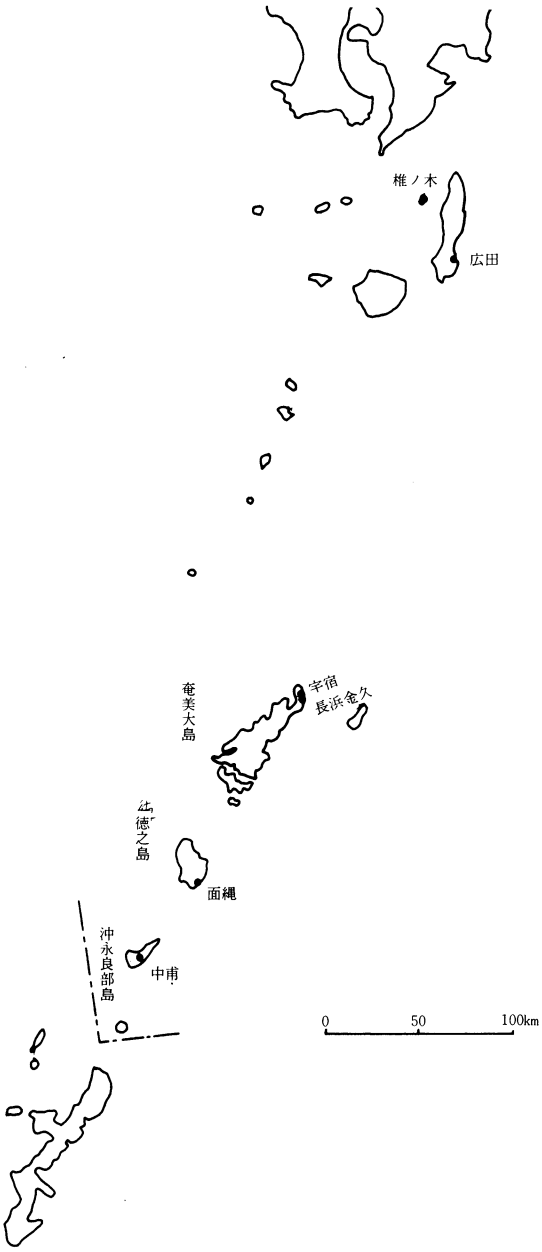


図1　遺　跡

2号人骨(性別不明・壮年)

5．長浜金久遺跡出土の動物骨

松元　光春・西中川　駿
（鹿児島大学農学部）

1．はじめに

長浜金久遺跡[2]は，鹿児島県大島郡笠利町万屋長浜金久にあり，新奄美空港の建設に伴い鹿児島県教育委員会により調査発掘され，海岸側の第Ⅰ貝塚（奈良～平安）と山手側の第Ⅱ貝塚（縄文後期）の二ヶ所からなる。今回，出土した自然遺物のうち，貝類を除く動物骨について同定を依頼されたので，その結果の概要をここに報告する。

2．出土骨の概要と考察

自然遺物の動物別および区画別出土骨量は表１に，そのうち哺乳類の骨格別および動物別出土骨片数は表２に，それぞれ第Ⅰ，第Ⅱ貝塚まとめて示した。なお，後述するように埋葬されたと推定されるウシ１頭分の骨格については表に含まれていない。

第Ⅰ貝塚の自然遺物の総重量は 2,118.2g あり，そのうち哺乳類 448.0g，爬虫類（ウミガメ類)1,678.9g，魚類54.3g である。哺乳類のうち，動物種と骨の種類を同定できたものは39骨片，441.7g で，動物種はイノシシ，ウシ，イヌの２目３種である。第Ⅱ貝塚では，総重量633.1g で，そのうち，哺乳類 273.2g，爬虫類（ウミガメ類）318.3g，魚類41.6g である。哺乳類のうち，動物種と骨の種類を同定できたものは19骨片，268.8g で，動物種はイノシシ，クジラ類の２目２種である。以下，各動物別に述べる。

イノシシの出土骨(図版Ⅰ，１～９，27～34)は第Ⅰ貝塚から31，第Ⅱ貝塚から18骨片がそれぞれ出土し，最小推定個体数は各々３，２体である。長骨や頭蓋は割断されており，また，焼けている骨や幼獣の骨もみられる。各骨の形状は現生のリュウキュウイノシシに類似し，県本土に生息するイノシシより小さい。さらに，下顎骨の形態的特徴[1]から，リュウキュウイノシシと同定できよう。ウシ（図版Ⅰ，15）は中足骨が１個出土しており，口之島野生牛の雄と同程度の大きさであるが，刀傷がみられる。イヌ(図版Ⅰ，10～14)は上顎骨，尺骨など７個の出土で２個体と推定され，大きさは柴犬より大きく，ビーグル犬程度の大きさである。橈骨は焼かれている。クジラ類(図版Ⅰ，35)は胸椎１個で，骨端線が完全に消失していることから成獣のもので，その保存長×幅×高は48.5×74.1×49.5(mm)である。

爬虫類はウミガメ類(図版Ⅰ，16～24，36～37)で，第Ⅰ，第Ⅱ貝塚とも哺乳類の出土量を上回っており，背甲，腹甲の骨板が多く，歯骨，上腕骨，腸骨，坐骨などもみられる。また，焼けている骨もみられる。

魚類(図版Ⅰ，25～26)はベラ，ブダイなどの咽頭骨，歯骨などがみられる。詳細は専門家に委ねたい。

第Ⅰ貝塚のJ-24, K-25, 26, L-25, 26区から出土した132個のウシの骨は，1頭分の全身骨格がほぼ揃って出土しており，また，骨の保存状態も壊れやすい頭蓋が完形であるなど良好である（図版Ⅱ参照）。このウシは頭蓋や寛骨の形態から雄で，歯の磨耗度から約6才と推定される。頭蓋の最大長 501.0mm，基底長 430.2mm，頬骨間幅 201.5mmで現代黒毛和牛の雄より小さく，日本在来牛である口之島野生牛の雄よりわずかに大きい。なお，右角突起は生前に断角されているが，それ以外に骨には刀傷などの痕跡は全くみられない。以上の点や出土状況などから，このウシは比較的新しい時期に何らかの原因で斃死後埋葬されたと考えた方が妥当であろう。

以上，長浜金久遺跡出土の動物骨，とくに哺乳類の骨を中心に述べたが，これまでの奄美大島の遺跡[3-5]と同様に，第Ⅰ，Ⅱ貝塚とも哺乳類では量的には少ないがイノシシが多くみられ，シカは全くみられない。また，第Ⅰ貝塚は奈良・平安期に当り，この地方の動物相の時代的変遷を知る上で貴重である。

3．要　　約

長浜金久第Ⅰ，Ⅱ貝塚出土の自然遺物のうち，貝類を除く動物骨の調査を行った。

(1) 第Ⅰ貝塚の動物骨の総重量は 2,118.2g で，それらは哺乳類（イノシシ，ウシ，イヌ），爬虫類（ウミガメ類），魚類（ベラ，ブダイ）などのものである。

(2) 第Ⅱ貝塚では総重量 633.1g で，それらは哺乳類（イノシシ，クジラ類），爬虫類（ウミガメ類），魚類（ベラなど）のものである。

(3) 第Ⅰ貝塚出土の雄牛の骨は，比較的新しい時期に埋葬された可能性が高い。

参考文献

1．今泉吉典：琉球列島産イノシシの分類学的考察，国立科博専報，6，P.113—129(1973)

2．鹿児島県教育委員会：長浜金久遺跡，P．1—45（1984）

3．笠利町教育委員会：サウチ遺跡，P．65—66（1978）

4．　　：宇宿貝塚，P．95—96（1979）

5．　　：あやまる第2貝塚，P．62—65（1984）

図版の説明

図版Ⅰ　1～26：長浜金久第Ⅰ貝塚，1～9：イノシシ，10～14：イヌ，15：ウシ，16～24：ウミガメ類，25～26：魚類(ベラ)，

1．頭蓋(側頭骨，左)，2．下顎骨(雌)，3．下顎骨(幼獣)，4．上腕骨(幼獣)，5．第四指中節骨(右)，6．寛骨(右)，7．大腿骨(幼獣，左)，8．踵骨(左)，9．距骨(右)，10．上顎骨(左)，11．下顎骨(左)，12．軸椎，13．橈骨(左)，14．尺骨(右)，15．中足骨(左)，16．歯骨，17．前烏口骨・肩甲骨(右)，18．上腕骨(右)，19．腸骨(左)，20．坐骨(左)，21．恥骨(右)，22．大腿骨(右)，23．24．背甲骨板，25．上咽頭骨，26．下咽頭骨。

27～36：長浜金久第Ⅱ貝塚　27～34：イノシシ，35：クジラ類，36～37：ウミガメ類，

27．下顎骨(雄，右)，28．肩甲骨(右)，29．上腕骨(右)，30．尺骨(右)，31．寛骨(右)，32．大腿骨(右)，33．距骨(右)，34．第三中足骨(左)，35．胸椎，36．烏口骨(左)，37．腹甲骨板

図版Ⅱ　長浜金久第Ⅰ貝塚出土のウシ

1．頭蓋(背面)，2．同(底面)，3．同(右側面)，4．下顎骨(左)，5．頸椎，6．胸椎，7．腰椎および仙骨，8．肋骨(左)および胸骨柄，9．前肢骨(左)，10．後肢骨(左)

表1　動物別および区画別出土骨量

(g)

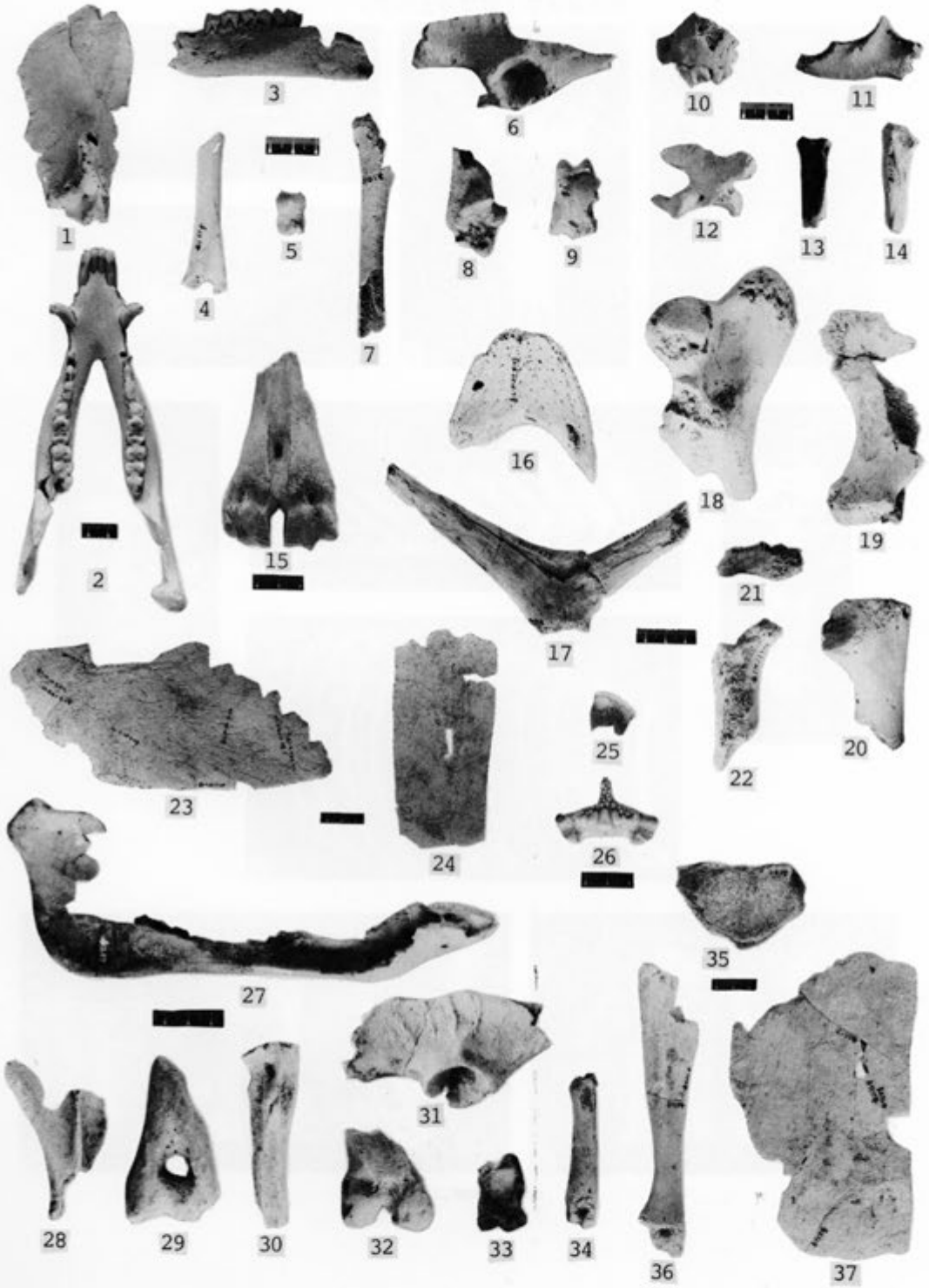
	区画	層	イノシシ	ウシ	イヌ	クジラ類	カメ類	魚類	不明骨	区画別出土骨量
Ⅰ	B	?	18.5 (3)		12.3 (3)		41.9 (6)	0.8 (1)		73.5 (13)
	C	?			2.3 (1)		17.7 (3)	0.8 (1)	1.9 (1)	22.7 (6)
	ABC	?	3.4 (1)				9.7 (1)			13.1 (2)
	D	?	6.2 (1)				3.5 (1)			9.7 (2)
	F	最下	9.4 (1)					6.5 (3)		15.9 (4)
	G	?	128.6 (11)		9.8 (3)		22.3 (11)	3.4 (2)		164.1 (27)
	I	最下						6.8 (2)		6.8 (2)
	J	?	3.3 (1)							3.3 (1)
	〃	V	37.4 (7)				14.2 (3)	18.8 (23)		70.4 (33)
	K	?					16.1 (6)	1.0 (1)		67.1 (7)
	〃	下					1,417.5 (79)	1.0 (2)		1,418.5 (81)
	〃	最下	6.9 (1)						3.1 (1)	10.0 (2)
	L	最下	133.0 (1)							133.0 (1)
	?	?	2.9 (4)	67.7 (1)			86.0 (20)	15.2 (11)	1.3 (1)	173.1 (37)
	動物別出土骨量		349.6 (31)	67.7 (1)	24.4 (7)	0	1,678.9 (130)	54.3 (46)	6.3 (3)	2,181.2 (218)
Ⅱ	A	?	80.1 (10)				251.9 (23)	1.3 (1)	3.1 (3)	336.4 (37)
	B	?	57.4 (5)			91.2 (1)	13.0 (3)			161.6 (9)
	?	表					1.3 (1)			1.3 (1)
	?	住居趾外	12.3 (2)				52.1 (14)	27.7 (8)	1.3 (1)	93.4 (25)
	?	?	27.8 (1)						12.6 (1)	40.4 (2)
	動物別出土骨量		177.6 (18)	0	0	91.2 (1)	318.3 (41)	41.6 (10)	4.4 (4)	633.1 (74)

(　　)は骨片数を示す

表2　骨格別および動物別出土骨片数

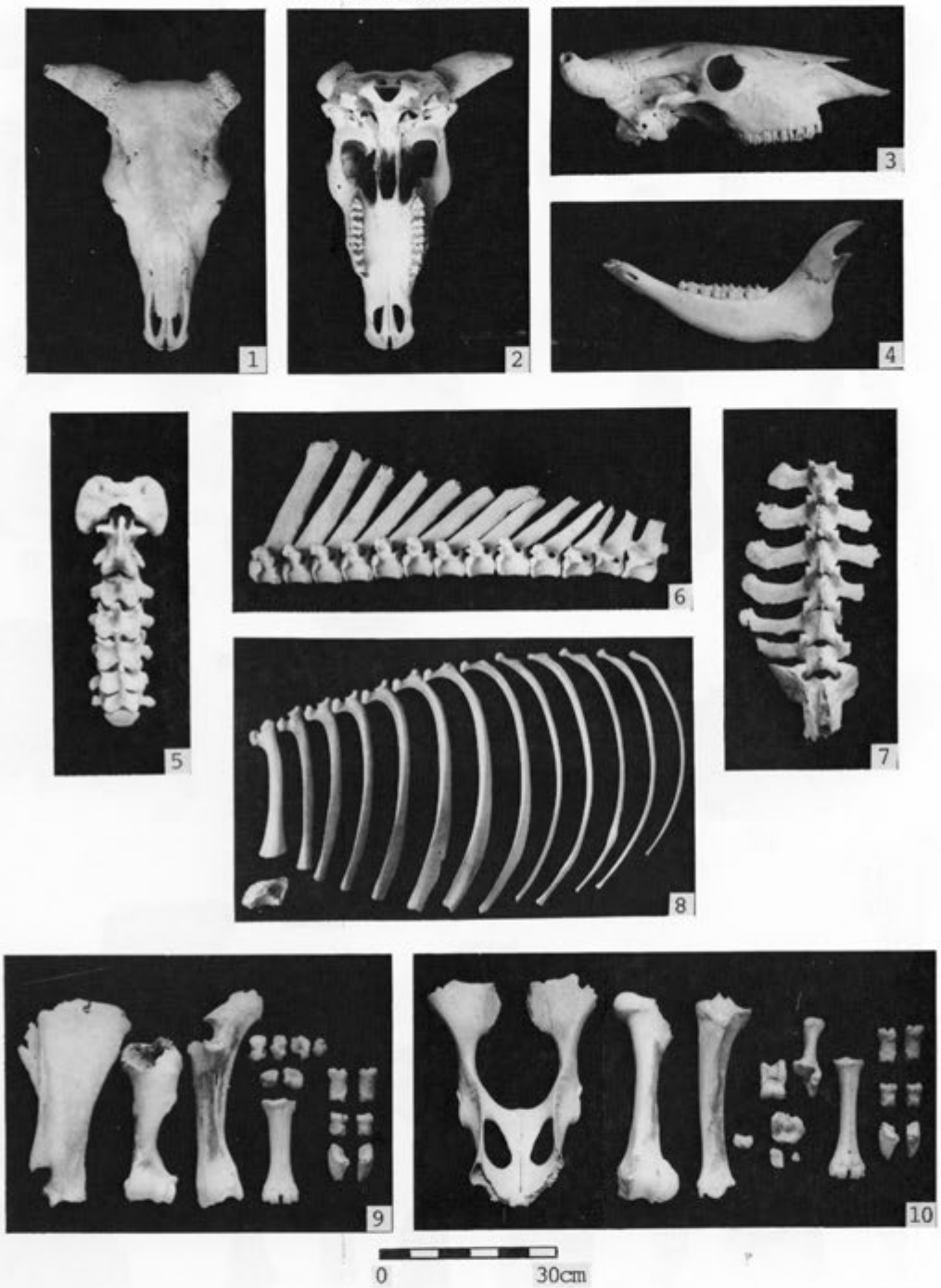
	骨名 / 動物名	頭蓋			胴骨						前肢骨						後肢骨						動物別出土骨片数
		頭蓋骨	下顎骨	歯	頸椎	胸椎	腰椎	仙椎	尾椎	肋骨	胸骨	肩甲骨	上腕骨	橈骨	尺骨	手根骨	中手骨	指骨	寛骨	大腿骨	脛骨	腓骨	膝蓋骨	足根骨	中足骨	趾骨	
I	イノシシ	4	6	1		1			1	2		2	3	1				1	4	2				3			31
	ウシ																								1		1
	イヌ	2	1		1									1	2												7
	骨格別出土骨片数	14			5							10							10								39
II	イノシシ	1				1						2	1	1	2		1		2	2	2			1	2		18
	クジラ類					1																					1
	骨格別出土骨片数	1			2							7							9								19

長浜金久第Ⅰ・Ⅱ貝塚出土動物骨



図版Ⅱ

長浜金久第Ⅰ貝塚出土のウシ



6．長浜金久遺跡出土魚骨および甲殻類鉗脚について

四宮明彦・鈴木広志・久保田裕一
（鹿児島大学水産学部）

今回，鹿児島県教育文化課より，同定依頼を受けた「長浜金久遺跡」出土の魚骨および甲殻類鉗脚について，第１～３表のように鑑定した。

Ⅰ　魚　骨

魚骨とみなされる 200個以上の標本のうち，科・属または種のレベルまで同定できたものは以下の通りであった。

1．タイ科 Sparidae のうちクロダイ属 *Acanthopagrus* とみられるものの顎骨。

2．ベラ科 Labridae の多くの種を含む顎骨および咽頭骨。

3．ブダイ科 Scaridae のうちキツネブダイ属 *Scarus* の多くの種を含む咽頭骨。これらには種まで同定のできたナガブダイ，ナンヨウブダイ，イチモンジブダイが含まれる。

4．フエフキダイ科 Lethrinidae の顎骨。

5．ハリセンボン科 Diodontidae の顎骨。

およびイシガキフグ属 *Chilomycterus* の棘状鱗。

以上に述べた魚類は，現在も浅海のサンゴ礁域に普通に見られる種である。

Ⅱ　甲殻類鉗脚

今回同定依頼を受けた出土標本中には，約40個の甲殻類鉗脚（はさみ脚）の不動指先端が含まれていた。これらのうち，比較的に良く原形を留めていたものについて，科または種のレベルまで同定し，以下に示した。

1．ワタリガニ科 Portunidae のノコギリガザミ，および同科不明種タイプＡおよびＢ。

2．オウギガニ科 Xanthidae のイワオウギガニ，および同科不明種タイプＡ。

ノコギリガザミ，イワオウギガニは現在もサンゴ礁域にみられる大型種であり，特に前者は，食用種として知られる。

Ⅲ　その他の海産生物

ナガウニの殻板（１個体完全標本）とウニ類不明種の殻板（かなり大型種），およびウニ類不明種の大棘（約20本）が含まれていた。ウニ類不明種は食用に供されたと考えられるが，ナガウニのこの個体に限っては，むしろ食べなかったために，殻板が完全な形態で出土する結果となったようである。

表1．長浜金久Ⅰ出土魚骨

	ブダイ科				ベラ科				ハリセンボン科		フエフキダイ科		タイ科				スズキ亜目					
	pm	d	up	lp	pm	d	up	lp	pm(d)	ss	pm	d	pm	m	d	ar	pm	m	d	ar	pop	d
長Ⅰ－B－15－12	3	3	3	1																		
－G－5－7	3	3	3	1									2		2				1			2
－D－16－7			1																			
－C－15－14																						
－G－2－6								1														
－G－3－9																	1			2	1	
－C－14－14																					1	
－B－8－13															1							
－B－5－3												1										
－B－13－8															1							1
－C－14－15									3	1												2
－B－7－11																						
－C－14－8																						1
－B－14－4			1	2																		1
－ABC一般			1	2	1	1		1	7		1						2		1			1
－G－5－6				1																		
－D－13－7				1																		
－C－11－2																						
－D－13																						
－B－6－5																						
－D－13－3																						
－G－4																						
－C－11－7																						
－D－13－5																						1
－B－7－8																						
－C－11－12																						1
－1									2													
－2	1								2	1												
－C－14－2					1																	
－L－$\frac{29}{30}$－51				1																		
－J－24										8												
－K－27																						
－B－8－14		1																				
－G－4－12				1				1														
－C－16－16				2																		
－C－15－16				1					1													
－B－6－8									1													
－E－15－6									1													
－C－11－6									1													
－B－7－15									1													
－B－15－14									1													
合　計	4	4	5	10	2	1	0	3	19	10	1	1	2		4		3		2	2	2	1

不					明				種				
pm	m	ar	ps	ceh	v	sr	ceb	g	u	lae	bab	te	hym
	3				7	1	2	1					
	2			3					1	1	1		
1					2								
		1			2	2	2						
			1										
								1					
	5												
					9	2	4	2	1	2		1	
					2								
					1								
					2								
					2								
					1								
	1												
									1				
					1								
												1	
		1			3								
					1								
						1							
							1						
0	1	11	2	1	3	33	6	9	4	3	3	1	2

pm: 前上顎骨, d: 歯骨, up: 上咽頭骨
lp: 下咽頭骨, ss: 棘状鱗, ar: 関接骨,
pop: 前鰓蓋骨, ps: 副楔骨, ceh: 角舌骨
v: 脊椎骨, sr:鰭棘, ceb: 角鰓骨, q: 方骨
u: 尾舌骨, lae: 側篩骨, bab: 基鰓骨,
te:歯, hym: 舌顎骨

第2表　長浜金久Ⅱ出土魚骨

	ブダイ科				ベラ科				ハリセンボン科		フエフキダイ科		タイ科				
	pm	d	up	lp	pm	d	up	lp	pm(d)	ss	pm	d	pm	m	d	ar	pr
長Ⅱ－A－4																	
－A－7			1					1							1		
－B－5								1									
－B－6	2											1					
－B－7		3		1	2				1								
長Ⅱ一　般		1															
合　計	2	4	1	1	2	0	0	2	1	0	0	1	0	0	1	0	0

第3表　長浜金久遺跡出土甲殻類鉗脚

	ワタリガニ科			オウギガニ科	
	ノコギリガザミ	不明種タイプA	不明種タイプB	イワオウギガニ	不明種タイプA
長ⅠABC一般		1			1
C－12－16		1			
C－14－15		2			1
E－15－12		1			1
G－5－7		1		4	2
C－14－12				2	
C－14－8				1	1
B－14－4				1	
B－14－7					1
C－16－11					1
C－11－12					1
A－15－14					1
長Ⅰ　一　般				1	
長Ⅱ－A－5		1	1		
A－7	6	1			
長Ⅱ　一　般				2	
合　計	6	8	1	11	10

不明種															
d	pm	m	ar	ps	ceh	v	s r	ceb	q	u	lae	bab	te	hym	
						1									記号は第1表に同じ
1	2				1	7	3							2	
2		1				1	1							1	
	1					1	1								
3	3	1	0	0	1	10	5	0	0	0	0	0	0	3	

不明種
1
1
1
3

7．長浜金久遺跡出土貝類について

行田義三
（宮之城中学校教諭）

長浜金久第Ⅰ・第Ⅱ遺跡から出土した貝類は，第１表，第２表の通り49科126種（腹足綱30科95種，斧足綱19科31種）である。

出土したこれらの貝類の中で，マングローブシジミ以外はすべて遺跡付近に現生している。マングローブシジミは，これまでレンナシジミとされていたが，昭和52年（1977）発行，波部忠重著『日本軟体動物分類学，二枚貝綱／堀足綱』Ｐ.238においてシレナシジミの学名がGeloina papua (Lesson) から Geloina coaxans (Gmelin) に変更となり，同時に和名もマングローブシジミに改称された。マングローブシジミはマングローブ（ヒルギ等の群生林）地帯に分布し，奄美大島では住用村山間の役勝川河口に生息地があるのみである。

これまでリュウキュウヒバリ Modiola pulmescens Dunker と称せられた貝は，シレナシジミ同様，波部（1977）によってヒバリガイ Modiola (Modiola) auriculatus (Krauss) のシノニム（同物異名）とされた。

出土した貝類の多くは食用とされたがハシナガツノブエ，ホウシュノタマ，ホソスジウズラタマキビ，ノシガイ，陸産のオオシマヤマタニシ，オオシマケマイマイ，オキナワウスカワマイマイ，パンダナマイマイ，淡水産のトウガタカワニナ等は貝が小さく食用にされたとは考えられない。

第Ⅱ遺跡出土の貝の表面の砂は固着しておりそのまま写真撮影をした。

図版の写真番号は第１表，第２表の和名番号と一致している。

第１表　長浜金久第Ⅰ遺跡出土貝類一覧

番号	和　名（科　名）	分　布	番号	和　名（科　名名）	分　布
	腹足綱（巻　貝）		6	ニシキウズ	紀伊以南
			7	ムラサキウズ	紀伊以南
	※ツタノハ科		8	ダルマサラサバティ	奄美以南
1	ツタノハ	房総以南	9	サラサバティ	奄美以南
2	オオベッコウガサ	奄美以南	10	ギンタカハマ	房総以南
	※ミミガイ科			**※リュウテン科**	
3	ミミガイ	四国以南	11	チョウセンサザエ	奄美以南
4	イボアナゴ	紀伊以南	12	コシタカサザエ	房総以南
			13	ヤコウガイ	奄美以南
	※ニシキウズ科		14	リュウテン	奄美以南
5	オキワイシダタミ（第Ⅱにも出土）	奄美以南	15	タツマキサザエ	紀伊以南

番号	和　　名（科　名）	分　布
16	カンギク	奄美以南
	※アマガイモドキ科	
17	アマガイモドキ	四国以南
	※アマオブネ科	
18	イシダミアマオブネ	九州南部以南
19	キバアマガイ	四国以南
20	アマオブネ	房総以南
21	ニシキアマオブネ	四国以南
	※タマキビ科	
22	ホソスジウズラタマキビ	紀伊以南
	※ムカデガイ科	
23	リュウキュウヘビガイ	国国以南
	※オニノツノガイ科	
24	カヤノミカニモリ	房総以南
25	オニノツノガイ	紀伊以南
	※スイショウガイ科	
26	マガキガイ	房総以南
27	クモガイ	紀伊以南
28	ラクダガイ	奄美以南
29	スイジガイ	紀伊以南
	※タカラガイ科	
30	ハナビラダカラ	房総以南
31	ハナマルユキ	房総以南
32	ヤクジマダカラ	房総以南
33	ホシダカラ	紀伊以南

番号	和　　名（科　名）	分　布
	※タマガイ科	
34	ホウシュノタマ	房総以南
35	リスガイ	紀伊以南
	※フジツガイ科	
36	シロシノマキ	奄美以南
37	シノマキ	紀伊以南
38	ミツカドボラ	紀伊以南
39	シオボラ	紀伊以南
40	ホラガイ	紀伊以南
	※トウカムリ科	
41	カンコガイ	房総以南
	※オキニシ科	
42	オキニシ	房総以南
43	オオナルトボラ	房総以南
	※ヤッシロガイ科	
44	ウズラガイ	房総以南
	※アクキガイ科	
45	ガンゼキボラ	房総以南
46	ウネレイシダマシ	房総以南
47	イイシダマシレ	四国以南
48	アカイガレイシ	紀伊以南
49	ツノレイシ	紀伊以南
50	シラクモガイ	九州南部以南
51	テツレイシ	紀伊以南
52	コイワニシ	四国以南
53	テツレイシモドキ	四国以南

番号	和　　名（科　名）	分　布
	※カブラガイ科	
54	カブトサンゴヤドリ	紀伊以南
	※	
	※イトマキボラ科	
55	イトマキボラ	四国以南
56	ツノキガイ	紀伊以南
57	リュウキュウツノマタ	紀伊以南
	※マクラガイ科	
58	ホソコモンマクラ	奄美以南
	※オニコブシ科	
59	オニコブシ	奄美以南
60	コオニコブシ	紀伊以南
	※イモガイ科	
61	サラサミナシ	紀伊以南
62	アカシマミナシ	四国以南
63	ゴマフイモ	四国以南
64	イボシママイモ	房総以南
65	クロフモドキ	奄美以南
66	ヤナギシボリイモ	紀伊以南
67	クロザメモドキ	四国以南
68	ジュズカケサヤガタイモ	紀伊以南
69	マダライモ	紀伊以南
	※カラマツガイ科	
70	コウダカカラマツ	四国以南
	陸　　産	
	※ヤマタニシ科	
71	オオシマヤマタニシ	奄美大島 徳之島

番号	和　　名（科　名）	分　布
	※オナジマイマイ科	
72	オキナワウスカワマイマイ	奄美以南
73	パンダナマイマイ	奄美以南
	淡　水　産	
	※トウガタカワニナ科	
74	トウガタカワニナ	奄美以南
	腹足綱26科74科	
	斧足綱（二枚貝）	
	※フネガイ科	
75	エガイ	房総以南
76	ベニエガイ	房総以南
77	リュウキュウサルボウ	奄美以南
	※イガイ科	
78	ヒバリガイ	紀伊以南
	※マクガイ科	
79	シロアオリ	房総以南
	※ウミギク科	
80	ミヒカリメンガイ	四国以南
	※ツキガイ科	
81	ツキガイ	紀伊以南
	※カゴガイ科	
82	カゴガイ	奄美以南
	※キクザル科	
83	ケイトウガイ	房総以南

番号	和　　名（科　名）	分　布	番号	和　　名（科　名）	分　布
	※トマヤガイ科			**※　チドリマスオ科**	
84	クロフトマヤ	紀伊以南	91	イソハマグリ	房総以南
	※イタボガキ科			**※　※ニッコウガイ科**	
85	カキの１種		92	サメザラ	九州南部以南
			93	モチヅキザラ	奄美以南
	※ザルガイ科			**※シオサザナミ科**	
86	カワラガイ	四国以南	94	リュウキュウマスオ	紀伊以南
	※シャコガイ科			**※マルスダレ科**	
87	ヒメジャコ	紀伊以南	95	ヌノメガイ	奄美以南
88	ヒレジャコ	奄美以南	96	アラヌノメ	紀伊以南
89	シラナミ	紀伊以南	97	マルオミナエシ	紀伊以南
	※バカガイ科		98	ホソスジイナミガイ	紀伊以南
90	リュウキュウバカガイ	紀伊以南	99	アラスジケマンガイ	奄美以南
				斧足綱　16種　25種　科	

第２表　長浜金久第Ⅱ遺跡出土貝類一覧

番号	和　　名（科　名）	分　布	番号	和　　名（科　名）	分　布
	腹足綱（巻貝）			**※ニシキウズ科**	
			106	ニシキウズ	紀伊以南
	※ユキノカサ科		107	ギンタカハマ	房総以南
100	リュウキュウウノアシ	奄美以南	108	ダルマサラサバティ	奄美以南
			109	サラサバティ	奄美以南
	※ツタノハ科			**※アマオブネ科**	
101	オオツタノハ	紀伊以南	110	イシダタミアマオブネ	九州南部以南
102	オオベッコウガサ	奄美以南	111	アマオブネ	房総以南
	※ミミガイ科			**※タマキビ科**	
103	トコブシ	北海道南部以南	112	ホソスジウズラタマキビ	紀伊以南
104	フクトコブシ	四国以南			
105	イボアナゴ	紀伊以南		**※オニノツノ科**	
			113	ハシナガツノブエ	房総以南

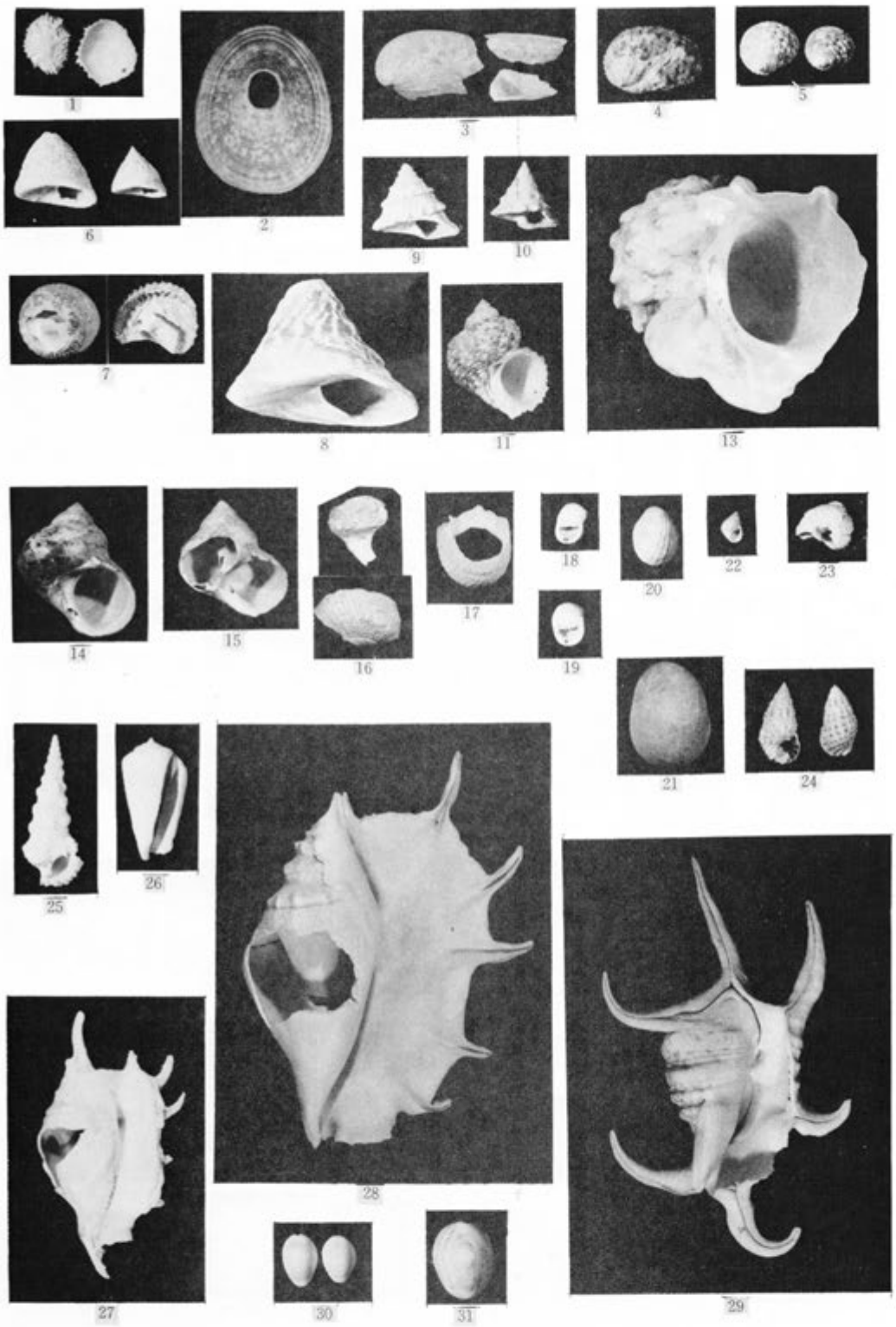
番号	和　　名（科　名）	分　布
114	カヤノミカニモリ	房総以南
115	オニノツノ	紀伊以南
	※スイショウガイ科	
116	マガキガイ	房総以南
	ヒダトリガイ	紀伊以南
117	スイショウガイ	房総以南
118	スイジガイ	紀伊以南
119	マイノソデ	四国以南
120	クモガイ	紀伊以南
	※タカラガイ科	
121	ハナビラダカラ	房総以南
122	ヤクジマダカラ	房総以南
123	ホシダカラ	紀伊以南
124	ホシキヌタ	房総以南
	※タマガイ科	
125	ホウシュノタマ	房総以南
	ユキネズミ	紀伊以南
	※フジツガイ科	
126	シマイボボラ	四国以南
127	ホラガイ	紀伊以南
	※オキニシ科	
128	オキニシ	房総以南
	※ヤツシロガイ科	
129	ウズラガイ	房総以南
	※アクキガイ科	
130	ホソスジテツボラ	四国以南
131	シラクモガイ	九州南部以南
132	コイワニシ	四国以南

番号	和　　名（科　名）	分　布
	※カブラガイ科	
133	ヒトハサンゴヤドリ	紀伊以南
	※エゾバイ科	
134	ノシガイ	紀伊以南
135	シマベッコウバイ	紀伊以南
	※イトマキボラ科	
136	イトマキボラ	四国以南
137	チトセボラ	伊豆以南
	※フデガイ科	
138	ニシキノキバフデ	紀伊以南
	※マクラガイ科	
139	ホソコモンマクラ	種子島以南
	※イモガイ科	
140	ニシキミナシ	四国以南
141	ハナイモ	奄美以南
142	ヤナギシボリイモ	紀伊以南
	キヌカツギイモ	紀伊以南
143	サヤガタイモ	房総以南
144	マダライモ	紀伊以南
145	クロモドキ	奄美以南
	※タケノコガイ科	
146	カエンタケ	奄美以南
147	キバタケ	奄美以南
	※カラマツガイ科	
148	コウダカカラマツ	四国以南
	陸　　産	
	※ヤマタニシ科	
149	オオシマヤマタニシ	奄美大島 徳之島

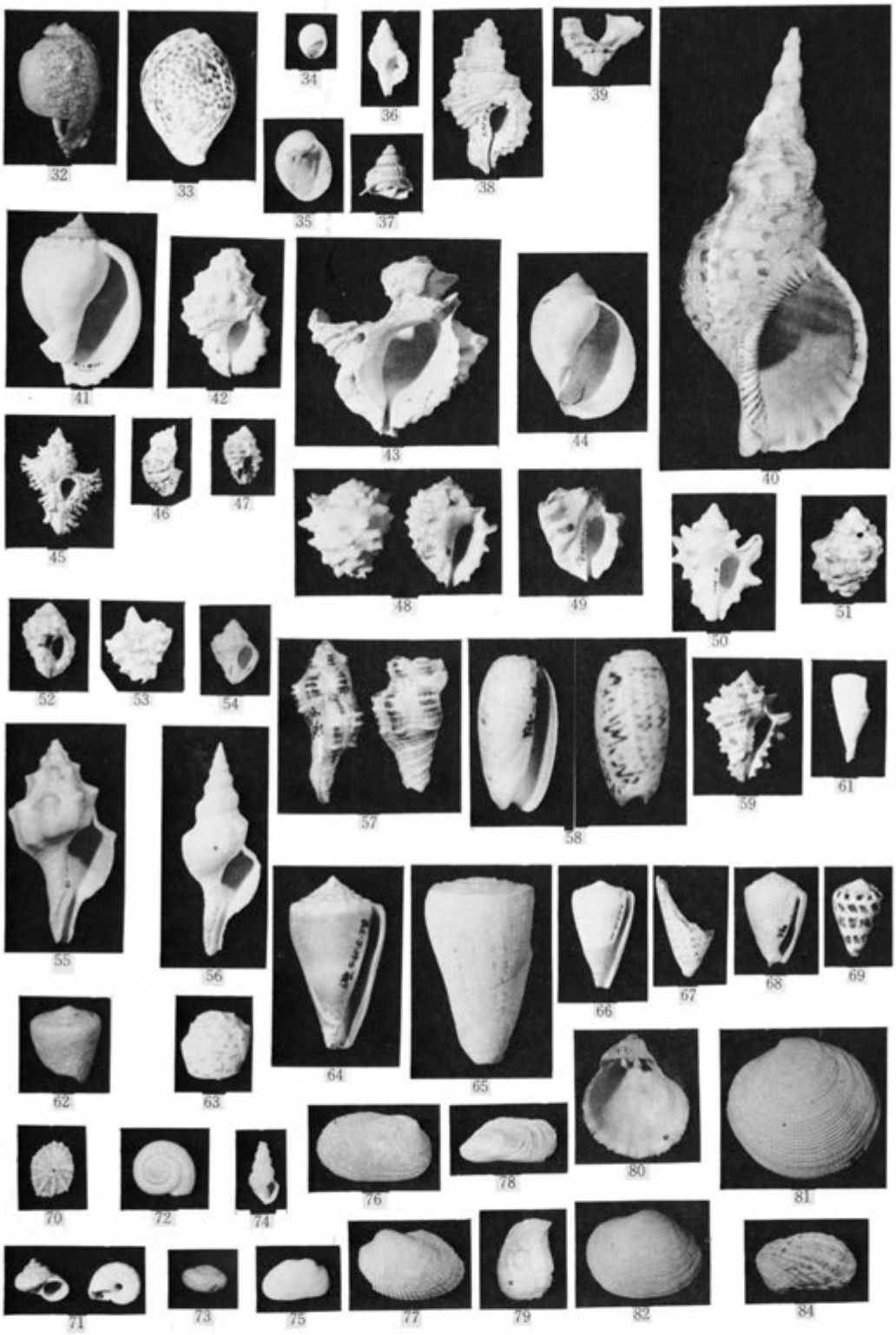
番号	和　　名（科　名）	分　布
	※オナジマイマイ科	
150	オキナワウスカワマイマイ	奄美以南
151	オオシマケマイマイ	奄美大島
	腹足綱　25科　57種	
	斧足綱（二枚貝）	
	※フネガイ科	
152	オオタカノハ	紀伊以南
153	エガイ	房総以南
	ベニエガイ	房総以南
155	リュウキュウサルボウ	奄美以南
	※タマキガイ科	
156	ソメワケグリ	九州南部以南
157	ウチワガイ	奄美以南
	※イガイ科	
158	ヒバリガイ	紀伊以南
	※ウミギク科	
159	ミヒカリメンガイ	四国以南
	※イタボガキ科	
160	オハグロガキ	紀伊以南
	※ツキガイ科	
161	ツキガイ	紀伊以南
	※キクザル科	
162	ケイトウガイ	房総以南
163	キクザル	津軽以南
	※ザルガイ科	
164	カワラガイ	四国以南

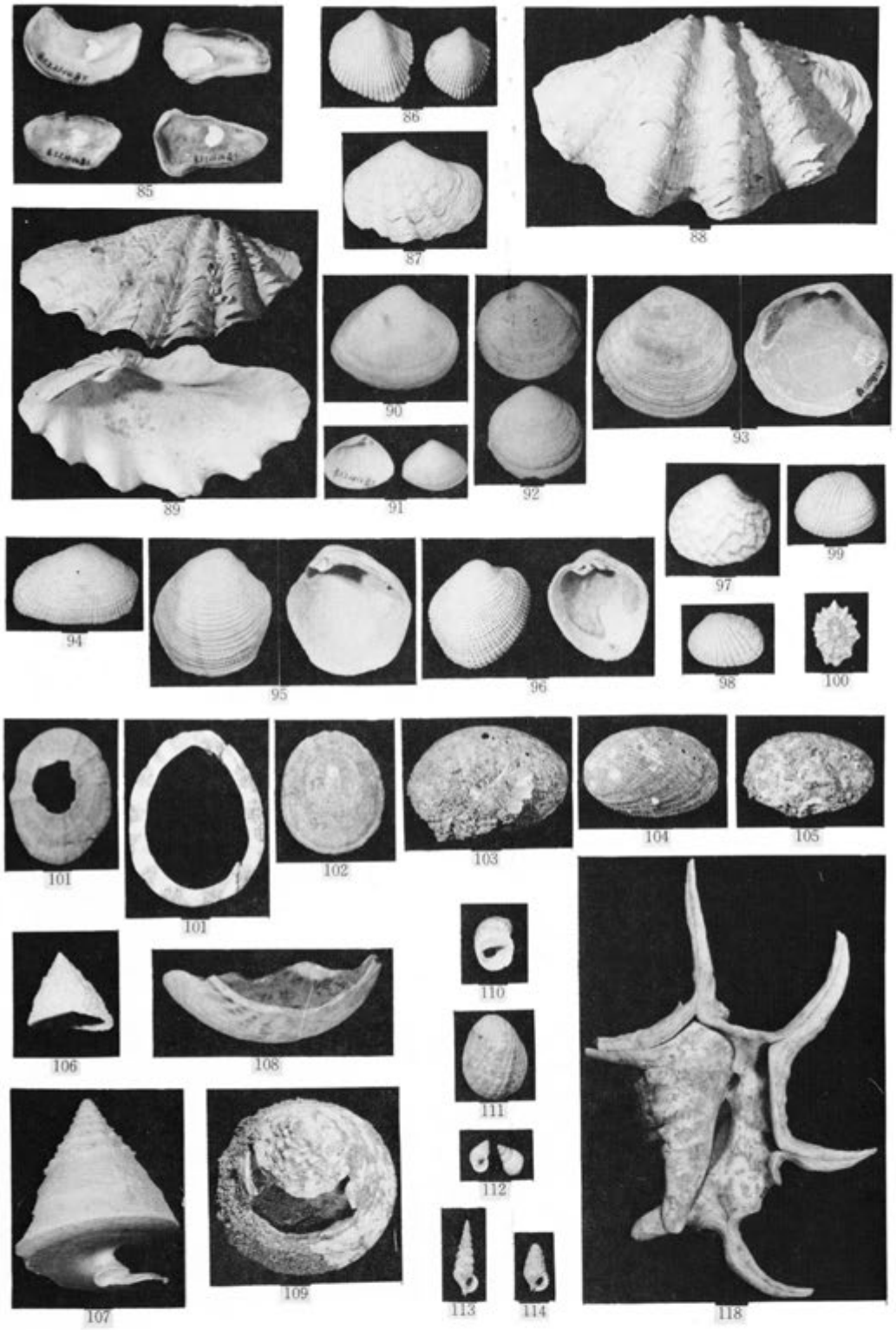
番号	和　　名（科　名）	分　布
	※シャコガイ科	
165	ヒレジャコ	奄美以南
166	シラナミ	紀伊以南
	※バカガイ科	
167	リュウキュウバカガイ	紀伊以南
	※チドリマスオ科	
168	イソハマグリ	房総以南
	※シオサザナミ科	
169	リュウキュウマスオ	紀伊以南
	マスオガイ	奄美以南
	※マルスダレ科	
170	ホソスジイナミガイ	紀伊以南
171	アラスジケマンガイ	奄美以南
	ウラジロチャイロサラサガイ	奄美以南
172	オイノカガミ	房総以南
	汽　水　産	
	※ジジミ科	
173	マングローブシジミ	奄美以南
	斧足綱　14科　23種	
	第Ⅰ・第Ⅱ遺跡出土貝合計 （腹足綱　30科　95種 斧足綱　19科　31種）	
	※クダマキガイ科	
	シャジククダマキ	紀伊以南

図版 1

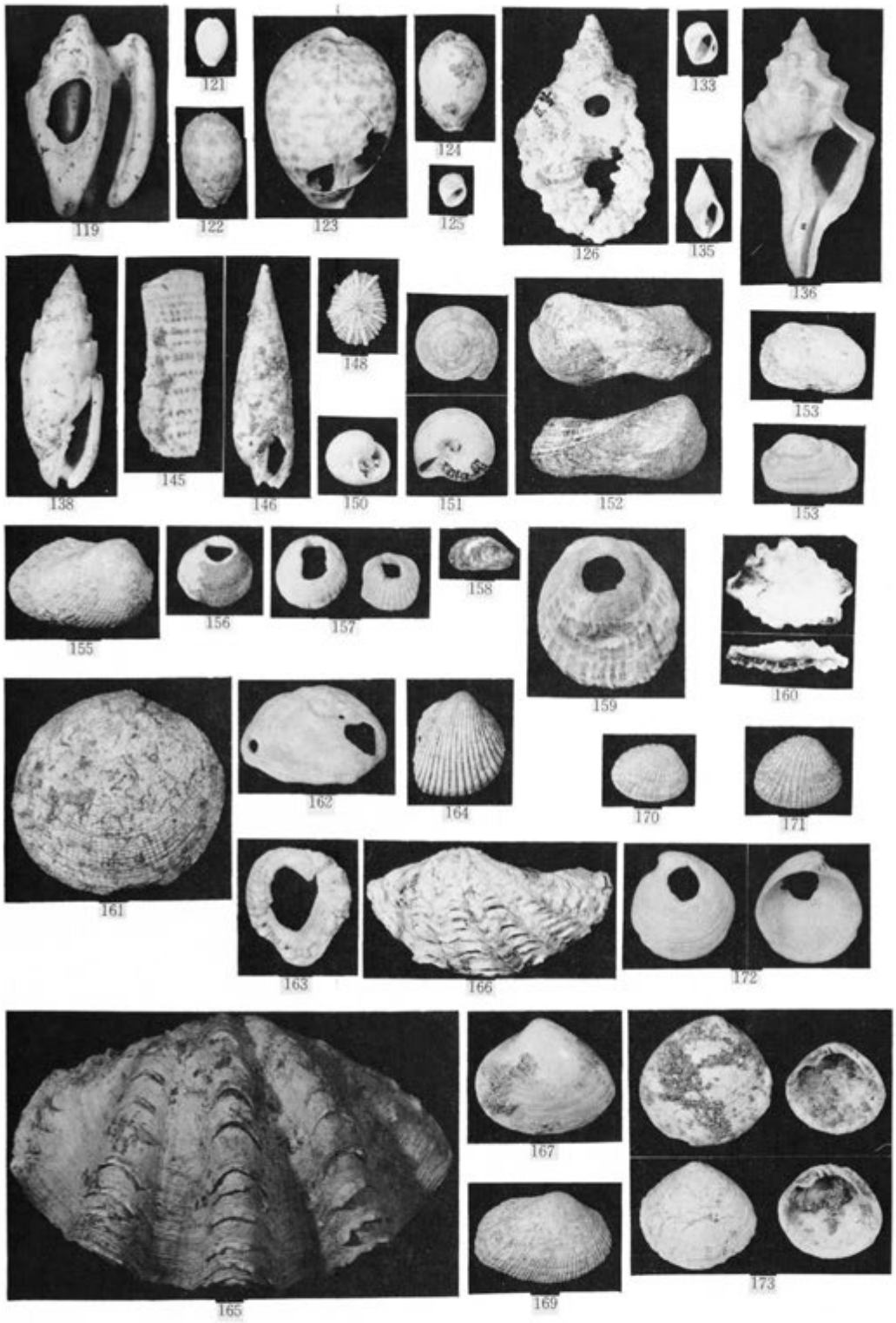

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

図版 2


32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
84


85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
118

図版 4


119
121
122
123
124
125
126
133
135
136
138
145
146
148
150
151
152
153
153
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
169
170
171
172
173

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(32)

新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

長　浜　金　久　遺　跡

発行日　昭和60年３月
発　行　鹿児島県教育委員会　〒892 鹿児島市山下町14番50号
印刷所　中央印刷株式会社　〒892 鹿児島市春日町12番16号

長浜金久遺跡正誤表

P	行	誤　正
5	1，38	編年図→分類図
6	3，4，5	影→景
	2～5	諸→諸訳
	20	諸訳類→諸訳
	33	諸訳（Ⅰ類）→諸訳
7	15	教育庁→教育長
13		0，1，2m→0，100，200m
14	25，26	B.P.→Y.B.P.
	26，34	第7層→第9層
15	1	第7層→第9層
75	15	後→跡
95	1	第54図第61図→第64図第71図
	8	第61図→第71図
133 134		第Ⅱ→第Ⅲ
135 136		第Ⅱ→第Ⅰ
139		嘉徳工式→嘉徳Ⅰ式
141 142 188		B.P.Y.→Y.B.P.